四　長期五年未滿ノ懲役若クハ禁錮又ハ罰金ニ該ル罪ニ付テハ三年

五　刑法第百八十五條ノ罪ニ付テハ一年

六　拘留又ハ科料ニ該ル罪ニ付テハ六月

第三十九條　刑事訴訟法第六十二條第三號ヲ左ノ如ク改ム

第三　區裁判所ノ管轄ニ屬スル罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ區裁判所檢事ニ送致ス可シ

第四十條　刑事訴訟法第百二十五條第二號ヲ左ノ如ク改ム

第二　醫師、藥劑師、藥種商、產婆、辯護士、辯護人、公證人又ハ此等ノ職ニアリシ者及ヒ宗教若クハ祭祀ノ職ニ在ル者又ハ此等ノ職ニ在リシ者其業務上取扱ヒタルコトニ付キ知得タル事實ニシテ默祕ス可キモノニ關スルトキ

第四十一條　刑事訴訟法第百二十六條第一項中「刑法第百八十條ニ從ヒ罰金」ヲ「四十圓以下ノ罰金又ハ科料」ニ改メ同條第二項中「罰金」ヲ「罰金又ハ科料」ニ改ム

同法第百三十八條中「刑法第百七十九條ニ從ヒ罰金」ヲ「四十圓以下ノ罰金又ハ科料」ニ改ム

同法第百四十四條第一項中「罰金」ヲ「罰金又ハ科料」ニ改ム

第四十二條　刑事訴訟法第百六十七條第一項ヲ左ノ如ク改メ第三項ヲ削ル

被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬スルモノト思料シタルトキハ公判ニ付スル言渡ヲ爲ス可シ

第四十三條　刑事訴訟法第百七十二條ヲ左ノ如ク改ム

第百七十二條　檢事ハ免訴又ハ管轄違ノ決定ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得

第四十四條　刑事訴訟法第二百三十六條中「輕罪、重罪ノ」ヲ削ル

第四十五條　刑事訴訟法第二百四十一條ヲ左ノ如ク改ム

第二百四十一條　裁判所ニ於テ輕罪トシテ受理シタル事件ヲ重罪ナリトスルトキハ其事件ヲ豫審判事ニ送付スル決定ヲ爲ス可シ檢事ノ請求アルトキ亦同シ

被告事件豫審ヲ經タルトキハ公判ヲ止メ受命判事ヲシテ其事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシムヘシ

受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

第四十六條　刑事訴訟法第二百六十四條中「更ニ重罪事件トシテ裁判ス可キ旨ノ決定ヲ爲シ」ヲ削ル

第四十七條　刑事訴訟法第三百十七條ニ左ノ一項ヲ加フ

監獄ニ於テ執行ス可キ二個以上ノ主刑ノ執行ハ其重キモノヲ先ニス但特別ノ事由アルトキハ檢事ハ重キ刑ノ執行ヲ停止シ他ノ刑ノ執行ヲ爲サシムルコトヲ得

第四十八條　刑事訴訟法第三百十八條ノ次ニ左ノ二條ヲ加フ

第三百十八條ノ二　死刑ノ執行ハ檢事及ヒ裁判所書記ノ立會ニテ之ヲ爲ス可シ

死刑ノ執行ニ關スル者ノ外刑場ニ入ルコトヲ得ス但檢事又ハ監獄ノ長ノ許可ヲ得タル者ハ此限ニ在ラス

第三百十八條ノ三　死刑ノ言渡ヲ受ケタル者心神喪失シタルトキハ司法大臣ノ命令ニ因リ其痊癒ニ至ルマテ執行ヲ停止ス

死刑ノ言渡ヲ受ケタル婦女懷胎ナルトキハ分娩後司法大臣ノ命令アルニ非サレハ執行ヲ爲スコトヲ得ス

第四十九條　刑事訴訟法第三百十九條第一項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

懲役、禁錮又ハ拘留ノ言渡ヲ受ケタル者左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其事故ノ止ムマテ刑ノ執行ヲ停止スルコトヲ得

一　心神喪失ノ狀態ニ在ルトキ

二　刑ノ執行ニ因リ生命ヲ保ツコト能ハサル虞アルトキ

三　受胎後七月以上ナルトキ

四　分娩後一月ヲ經過セサルトキ

第五十條　刑事訴訟法第三百二十條中「之ヲ爲ス可シ」ノ下ニ「刑ノ執行ノ停止ニ付キ亦同シ」ヲ加ヘ第二項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

前項ノ徵收ニ付テハ非訟事件手續法第二百八條ノ規定ヲ準用ス

第五十一條　刑事訴訟法第二十四條、第六十三條、第百六十八條、第百七十三條及ヒ第百七十四條但書ハ之ヲ削ル

第五十二條　刑事訴訟法中復權及ヒ特赦ニ關スル規定ハ之ヲ削ル

第五十三條　刑法第五十二條又ハ第五十八條ノ規定ニ依リ刑ヲ定ム可キ場合ニ於テハ其犯罪事實ニ付キ最終ノ判決ヲ爲シタル裁判所ノ檢事其裁判所ニ請求ヲ爲ス可シ

前項ノ請求アリタルトキハ裁判所ハ被告人又ハ其代理人ノ意見ヲ聽キ決定ヲ爲ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第五十四條　刑ノ執行猶豫ハ裁判所ニ於テ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ刑ノ言渡ト同時ニ判決ヲ以テ之ヲ言渡ス可シ

第五十五條　刑ノ執行猶豫ノ言渡ハ上訴ニ因リ其效力ヲ失フコトナシ但原判決ヲ取消シ又ハ破毀シタル場合ハ此限ニ在ラス

上訴裁判所ハ新ニ執行猶豫ノ言渡ヲ爲スコトヲ得

第五十六條　刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ取消ス可キ場合ニ於テハ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ所在地又ハ最後ノ住所地ヲ管轄スル地方裁判所ノ檢事其裁判所ニ請求ヲ爲ス可シ

前項ノ請求アリタルトキハ裁判所ハ被告人又ハ其代理人ノ意見ヲ聽キ決定ヲ爲ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第五十七條　第五十三條及ヒ前條ノ裁判及ヒ抗告ニ付テハ刑事訴訟法ノ規定ヲ準用ス

第五十八條　明治三十八年法律第七十號ニ依リ刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ受ケ仍ホ猶豫ノ期間ヲ經過セサル者ハ刑法ニ依リ刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ受ケタルモノト看做ス

第五十九條　明治三十九年法律第五十四號ハ之ヲ廢止ス

第六十條　私訴ハ公訴ニ附帶スルトキハ民事訴訟ノ方式ニ依ラス書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第六十一條　贓物犯人ノ手ニ在ルトキハ被害者ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スル言渡ヲ爲ス可シ

第六十二條　左ニ記載シタルモノヲ以テ公訴ニ關スル訴訟費用トス

一　豫審、公判ニ付キ呼出シタル證人、鑑定人及ヒ通事ニ給與ス可キ日當、旅費及ヒ止宿料

二　第六十六條ニ記載シタル費用

第六十三條　證人、鑑定人及ヒ通事ノ日當ハ左ノ範圍内ニ於テ豫審判事、受託判事又ハ裁判所之ヲ定ム

一　證人ノ日當ハ出頭一度ニ付金二十錢乃至金五十錢但止宿料ヲ給與スル場合ニ於テハ日當ヲ給與セス

二　鑑定人及ヒ通事ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金三十錢乃至金五圓

第六十四條　證人、鑑定人及ヒ通事ノ旅費ハ海陸路一里ニ付キ金五錢乃至金二十錢ノ範圍内ニ於テ豫審判事、受託判事又ハ裁判所之ヲ定ム但通路兩線以上アルトキハ最近ノ通路ヲ以テ旅費ヲ算定ス

前項ニ揭ケタル者ノ止宿料ハ一日ニ付キ金二十錢乃至金一圓ノ範圍内ニ於テ豫審判事、受託判事又ハ裁判所之ヲ定ム但八里以上ノ地ヨリ來リ滯在スルトキニ非サレハ之ヲ給與セス

第六十五條　證人、鑑定人及ヒ通事ノ日當、旅費及ヒ止宿料ハ豫審ニ於テハ其終結前、公判ニ於テハ其判決前ニ本人ヨリ請求スルニ非サレハ之ヲ給與セス

第六十六條　鑑定、通譯ニ附キ數多ノ時間又ハ特別ノ技能若クハ費用ヲ要スルトキハ日當ノ外別ニ相當ノ金額ヲ給與スルコトヲ得

第六十七條　共犯ノ訴訟費用ハ共犯人ノ連帶負擔トス

附　則

本法ハ刑法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

刑法附則其他舊刑法施行ノ爲メ公布シタル法令ハ之ヲ廢止ス

●勾引狀ヲ以テ引致セシ者夜間留置方（明治十四年十月第五十九號布告）

治罪法中豫審判事勾引狀ヲ發シ勾引セシメタル被告人ハ時宜ニ依リ其訊問期限四十八時間ニ在ル夜間ニ限リ裁判所又ハ最寄警察署留置場ニ入置クヘシ此旨布告候事（明治二十三年法律第九十六號刑事訴訟法第七十三條參看）

●保釋責付中ノ被告人取締法心得（明治十六年十一月司法省丙第八號達）

警視廳　府縣

保釋責付中ノ被告人取締方心得ノ儀ニ付左ノ通各裁判所ヘ相達候條此旨爲心得相達候事

保釋責付ヲ得タル被告人ハ左ノ取締條件ニ服從セシム可キ儀ニ付キ保釋責付ヲ爲スノ際其旨ヲ被告人ニ豫知セシム可シ但其言渡書ノ紙尾ニ記載印刷スルモ妨ケナシ

第一條　治罪法第二十一條ニ從ヒ假住所ヲ定メ屆置ク可キコトハ言ヲ待タス其裁判所ノ管轄地外ニ旅行スルコトヲ得ス若シ已ムヲ得サル事由アルトキハ其旨ヲ檢事ニ申立テ許可ヲ受ク可シ

第二條　裁判所ノ管轄地内ト雖モ住所外ニ於テ一泊以上滯在スルトキハ滯在ノ場所ヲ其家族又ハ同居人ニ通知シ置ク可シ

若シ同居人アラサルトキハ其住所ノ地ノ戶長ニ屆置ク可シ

第三條　代言人辯護人又ハ代人トシテ法廷ニ出頭シ其他議會集會等公然ノ場所ニ參會スルコトヲ得ス

第四條　治罪法第百二十一條ニ適當スル者及ヒ前數條ノ規則ニ背キタル者ハ治罪法第二百十六條第二項ニ從ヒ保釋ヲ取消ス可シ其責仕ヲ受ケタル者モ亦同シ

●沒收物件取扱手續（明治十九年四月大藏省訓令第三號）

北海道廳　府縣

明治十八年十一月太政官第六十三號達犯罪又ハ犯則ニヨリ沒收シタル物件ハ左ノ手續ニ據リ取扱フヘシ

第一項　裁判所ヨリ沒收物件引渡ノ通知ヲ得タルトキハ其物件受取ノ手續ヲ爲シ物件ノ性質ニ從ヒ得失ヲ量リ其廳ニ取寄セ又ハ其所在地ノ戶長ニ保管セシムヘシ

第二項　沒收ノ物件ハ裁判所ヨリ受取タル後三箇月以內ニ於テ公賣ニ付スヘシ但公賣ノ場所ハ物件所在ノ地ニ限ラス總テ適當ノ地ヲ選定スルモノトス

第三項　沒收物件中官廳ノ烙印アルモノハ公賣ニ付スル前其烙印ヲ削除スヘシ

第四項　公賣ノ方法ハ入札拂若クハ競賣ニ據ルヘシ

第五項　沒收ノ物件公賣ニ付スルモ買受人ナキカ若クハ代價相當ノ價格ニ達セサルトキハ公賣ヲ停止シ爾後三箇月以內ニ於テ更ニ公賣ニ付スヘシ

第六項　沒收物件中毀損腐敗ニ係リ若クハ物品輕微ニシテ公賣ニ付スルモ價値ナシト認ムルモノ或ハ運搬費證場敗料ヲ要シ公賣スルモ其得失相償ハサルモノ或ハ第五項期限內ニ於テ公賣ニ付スルモ買受人ナク若クハ代價不相當ニシテ公賣ヲ停止シタルモノハ適宜處分スヘシ

第七項　沒收物件中其物品取扱上特ニ成規アルモノハ各主管廳ノ指揮ニ依リ之ヲ處分スヘシ

第三條　代言人辯護人又ハ代人トシテ法廷ニ出頭シ其他議會集會等公然ノ場所ニ參會スルコトヲ得ス

第四條　治罪法第百二十一條ニ適當スル者及ヒ前數條ノ規則ニ背キタル者ハ治罪法第二百十六條第二項ニ從ヒ保釋ヲ取消ス可シ其責任ヲ受ケタル者モ亦同シ

沒收物件取扱手續（明治十九年四月六日　北海道廳府縣令第三號）

明治十八年十一月太政官第六十三號達犯罪又ハ犯則ニヨリ沒收シタル物件ハ左ノ手續ニ據リ取扱フヘシ

第一項　裁判所ヨリ沒收物件引渡ノ通知ヲ得タルトキハ其物件受取ノ手續ヲ爲シ物件ノ性質ニ從ヒ得失ヲ量リ其廳ニ取寄セ又ハ其所在地ノ戸長ニ保管セシムヘシ

第二項　沒收ノ物件ハ裁判所ヨリ受取タル後三箇月以內ニ於テ公賣ニ付スヘシ但公賣ノ場所ハ物件所在ノ地ニ限ラス總テ適當ノ地ヲ選定スルモノトス

第三項　沒收物件中官廳ノ烙印アルモノハ公賣ニ付スル前其烙印ヲ削除スヘシ

第四項　公賣ノ方法ハ入札拂若クハ競賣ニ據ルヘシ

第五項　沒收ノ物件公賣ニ付スルモ買受人ナキカ若クハ代價相當ノ價格ニ達セサルトキハ公賣ヲ停止シ爾後三箇月以內ニ於テ更ニ公賣ニ付スヘシ

第六項　沒收物件中毀損腐敗ニ係リ若クハ物品輕微ニシテ公賣ニ付スルモ價値ナシト認ムルモノ或ハ運搬費置場敷料ヲ要シ公賣スルモ其得失相償ハサルモノ或ハ第五項期限內ニ於テ公賣ニ付スルモ買受人ナク若クハ代價不相當ニシテ公賣ヲ停止シタルモノハ適宜處分スヘシ

第七項　沒收物件中其物品取扱上特ニ成規アルモノハ各主管廳ノ指揮ニ依リ之ヲ處分スヘシ

第七類　褒賞　位階

第一章　褒賞

●褒章條例……一
●褒章條例取扱手續……一
●褒章ト金銀木杯金圓賜與……二
●金銀木杯金銀賜與手續……二
●勳等勳章……四
●勳章增設ノ詔勅……四
●勳章等級製式及大勳位菊花頸飾製式……四

第二章　位階

●敍位條例……四
●敍位手續……六
●有位者改姓名死亡其他ノ異動屆出方……六

第七類　褒賞　位階

第一章　褒賞

●褒章條例（明治十四年十二月第六十三號布告）

第一條　凡ソ自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助シタル者又ハ孝子順孫節婦義僕ノ類ニシテ德行卓絶ナル者又ハ實業ニ精勵シ衆民ノ模範タルヘキ者又ハ學術技藝上ノ發明改良著述、教育衛生慈善防疫ノ事業、學校病院ノ建設、道路河渠堤防橋梁ノ修築、田野ノ墾闢、森林ノ栽培、水産ノ繁殖、農商工業ノ發達ニ關シ公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者又ハ公同ノ事務ニ勤勉シ勞效顯著ナル者ヲ表彰スル爲メ左ノ三種ノ表章ヲ定ム（二十三年勅令第七十二號ヲ以テ各種共改正同年第百二十六號ヲ以テ條中ヲ改正ス二十七年勅令第一號ヲ以テ各種共改正ス）

紅綬褒章

右自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助シタル者ニ賜フモノトス

綠綬褒章

右孝子順孫節婦義僕ノ類ニシテ德行卓絶ナル者又ハ實業ニ精勵シ衆民ノ模範タルヘキ者ニ賜フモノトス

藍綬褒章

右學術技藝上ノ發明改良著述、教育衛生慈善防疫ノ事業、學校病院ノ建設、道路河渠堤防橋梁ノ修築、田野ノ墾闢、森林ノ栽培、水産ノ繁殖、農商工業ノ發達ニ關シ公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者ニ賜フモノトス

第二條　奇特ノ實行アリト雖モ褒章ヲ賜フヘキ場合ニ至ラサルモノハ褒狀ヲ與フコトアルヘシ

第三條　已ニ褒章ヲ賜ハリタルモノ再度以上同樣ノ實行アリテ褒章ヲ賜フヘキトキハ其都度飾版一箇ヲ賜與シ其章ノ綬ニ附加セシメ以テ標識トス

第四條　褒章ハ本人ニ限リ終身之ヲ佩用シ及ヒ徽號トナスヲ得然レトモ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ之ヲ沒收シ其未タ授與セサル前同上ノ刑ニ處セラレタル者ニハ之ヲ授與セス（褒章關略ス）

佩用式

一褒章ハ左肋ノ邊ヘ佩フヘシ　但勳章及從軍記章ヲ有スル者ハ其章ノ左ヘ列シ帶ヘシ

●褒章條例取扱手續（明治二十七年一月閣令第一號）

第一條　褒章條例ニ依リ褒章ヲ賜フヘキ者アルトキハ警

視總監北海道廳長官又ハ府縣知事ヨリ主務大臣ニ具申シ主務大臣ハ其ノ當否ヲ審査シ賞勳局總裁ヘ申牒スヘシ但官吏職務上ノ勞役ニ對シテハ褒章ヲ賜フノ限ニアラス

第二條　賞勳局總裁ハ申牒書ヲ覆閱シ褒章ヲ賜フヘキモノト認ムルトキハ奏請裁可ヲ得在東京ノ者ニハ之ヲ直授シ其ノ他ノ者ニハ主務大臣ヲ經由シテ之ヲ傳達スヘシ

第三條　外國人ニ褒章ヲ賜フヘキトキハ主務大臣外務大臣ト連署シテ之ヲ申牒スヘシ授與ノトキハ外務大臣ヲ經由シテ之ヲ傳達ス其ノ公私傭ニ係ル者ハ第二條ニ依ル

第四條　褒狀ハ高等官及高等官待遇ノ者並ニ從六位以上及勳六等以上ノ者並ニ華族ノ戶主其ノ祖父母父母妻嫡長子孫及嫡長子孫ノ妻ニハ賞勳局總裁之ヲ授與スヘシ其ノ具申中牒施行ノ順序ハ第一條及第二條ニ同シ其ノ他ノ者ハ警視總監北海道廳長官又ハ府縣知事之ヲ授與スヘシ

第五條　褒狀ヲ外國人ニ授與スヘキトキハ金銀木杯金圓賜與手續第六條ニ依ル

第六條　褒章ヲ有スル者重罪ノ刑ヲ受ケタルトキハ裁判確定ノ後司法大臣又ハ陸海軍大臣宣告書寫ヲ添ヘ之ヲ賞勳局總裁ニ還付スヘシ

第七條　褒章褒狀ヲ賜フヘキ者具申後授與以前ニ於テ輕罪以上ノ罪ヲ犯シ又ハ死亡シタルトキハ警視總監北海道長官又ハ府縣知事ヨリ速ニ其ノ事由ヲ主務大臣ニ申報シ主務大臣ハ之ヲ賞勳局總裁ニ通知スヘシ

●褒章ト金銀木杯金圓賜與（明治十六年第一號布達）

明治十四年（十二月）第六十三條布告褒章條例ニ依リ褒章ヲ賜フヘキ者又ハ公益ノ爲メニ金穀財產等ヲ寄附シタルハ金銀木杯若クハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒章ト金銀木杯金圓ヲ併セ賜フコトアルヘシ

●金銀木杯金圓賜與手續（明治十六年三月太政官第十七號達）

第一條　褒章ヲ賜フヘキ者ニ金銀木杯又ハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒章ト之ヲ併セ賜フトキハ其等差左ノ加シ

定例

第一等　木杯三組（品格ヲ三等ニ分ツ）又ハ金拾圓ヨリ多カラス六圓ヨリ少カラス

第二等　木杯三組（品格ヲ三等ニ分ツ）又ハ金五圓ヨリ多カラス弐圓五拾錢ヨリ少カラス

第三等　木杯壹個（品格ヲ三等ニ分ツ）又ハ金弐圓ヨリ多カラス壹圓ヨリ少カラス

但賜杯賜金ニ及ハサルモノハ褒狀ヲ與フルコトアルヘシ

特例

第一等　金杯壹個又ハ三組又ハ金圓

第二等　銀杯壹個又ハ三組又ハ金圓

第二條　公益ノ爲メニ金穀財產等ヲ寄附シタル者ニ金銀木杯ヲ賜ヒ又ハ褒章ト之ヲ併セ賜フトキハ其等差左ノ如シ

寄附金額又ハ價格　　褒章

拾圓未滿　　但便宜ノ方ヲ以テ奉彰ヲ爲シ褒狀賜與ニ代フルコトアルヘシ（十七年太政官第二十二號ヲ以テ但書追加）（卅七年十二月閣令第三號ヲ以テ改正）（卅九年六月閣令第四號ヲ以テ改正）　　木杯壹個

拾圓以上百圓未滿　　但五拾圓未滿ハ拾圓毎ニ五拾圓以上ハ弐拾五圓毎ニ品格ニ等差アリ　　木杯三組

百圓以上五百圓未滿　　但三百圓未滿ハ五拾圓毎ニ三百圓以上ハ百圓毎ニ品格ニ等差アリ　　木杯三組

五百圓以上弐千圓未滿　　但千圓未滿ハ弐百五拾圓毎ニ千圓以上ハ五百圓毎ニ品格ニ等差アリ　　銀杯壹個

弐千圓以上五百圓未滿　　但千圓毎ニ品格ニ等差アリ　　銀杯三組

五千圓以上壹萬圓未滿　　但弐千五百圓毎ニ品格ニ等アリ　　金杯壹個

壹萬圓以上　　金杯三組

第三條　金銀杯又ハ特例金圓又ハ褒章ト金銀木杯又ハ金圓ヲ併セ賜フ事項ハ賞勳局總裁之ヲ管理スルモノトス褒狀又ハ木杯又ハ定例金圓ノミヲ賜フハ警視總監府知事縣令管理施行スルモノトス

但勅奏任官以上ノ待遇ヲ受クル者並從六位以上及勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主其祖父母父母妻嫡長子孫及其妻ニ木杯三組又ハ之ニ該當スル定額金圓ヲ賜フヘキトキハ第四條ニ準據スヘシ（二十四年閣令第一號ヲ以テ但書中追加）（卅七年十二月閣令第三號ヲ以テ改正）

第四條　金銀杯又ハ特例金圓又ハ褒章ト金銀木杯又ハ金圓ヲ併セ賜フヘキ者アルトキハ警視總監府知事縣令ヨ

リ主務大臣ニ具申シ主務大臣ハ之ヲ審査シ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ（二十七年閣令第八號改正ニ依ル）

賞勳局總裁ハ其申牒ニ據テ勳奏任官奏任官以上ノ待遇ヲ受クル者並從六位以上及勳六等以上ノ者及華族ノ戶主其祖父母父母妻嫡長子孫及其妻ニハ之ヲ直授シ其他ノ者ハ主務大臣ヲ經由シ警視總監府知事縣令ヲシテ之ヲ傳達セシム（二十四年閣令第一號ヲ以テ本條中追加）

第五條　金銀木杯又ハ金圓又ハ褒狀ヲ受クヘキ者ニシテ其未タ授與セサル前重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ之ヲ授與セス

第六條　外國人ニ金銀木杯金圓又ハ褒狀ヲ賜フヘキ者アルトキハ總テ內國人ノ例ニ準スト雖モ公使館員及帝室ノ貴賓ニ係ルトキハ外務大臣ヨリ賞勳局總裁ニ申牒シ授與ノトキハ亦同大臣ヲ經由シテ之ヲ傳達セシムヘシ（二十四年閣令第一號ヲ以テ本條追加）

●勳等勳章（明治八年四月第五十四號布告）

勳等勳章

勳等ハ勳績及功勞アル者ヲ賞スル爲メニ設クル所ノ階級ニシテ位階ト異ナル故ニ各種ノ勳章ヲ佩用セシム

勳等ヲ分ツテ八級ト爲ス

勳一等　右ニ敍スル者ハ一等勳章ヲ賜フ

勳二等　右ニ敍スル者ハ二等勳章ヲ賜フ

勳三等　右ニ敍スル者ハ三等勳章ヲ賜フ

勳四等　右ニ敍スル者ハ四等勳章ヲ賜フ

勳五等　右ニ敍スル者ハ五等勳章ヲ賜フ

勳六等　右ニ敍スル者ハ六等勳章ヲ賜フ

勳七等　右ニ敍スル者ハ七等勳章ヲ賜フ

勳八等　右ニ敍スル者ハ八等勳章ヲ賜フ

從軍記章

從軍記章ハ將卒ノ別ナク軍功ノ有無ヲ論セス凱旋ノ後從軍セシ徵ニ之ヲ賜フ

一勳章及從軍記章ハ佩用本人ニ止リ子孫之ヲ用ユルコトヲ得ス

勳章從軍記章佩用式（二十一年勅令第七十六號ニ依リ消滅ス）

●勳章增設ノ詔勅（明治二十一年一月三日）

朕曩ニ勳位ヲ定メ佩章ノ制ヲ設ク茲ニ復潤飾增設シ新舊與ニ併行シ勳功アル者ヲ賞旌シ以テ奬勵ノ道ヲ擴ム汝衆庶此旨ヲ體セヨ

●勳章等級製式及大勳位菊花頸飾製式（明治二十一年一月勅令第一號）

朕各種ノ勳章等級製式及ヒ大勳位菊花章頸飾ノ製式ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

一　寶冠章（二十九年勅令第百三十六號改正ニ依ル）

勳一等ヨリ勳八等ニ至ル婦人ノ勳勞アル者ニ賜フ

章　寶冠ト竹櫻ノ形ヲ以テ飾ル

綬　地黃色雙線紅色

一　勳一等旭日桐花大綬章

旭日大綬章ノ上級トス勳勞アル者ニ賜フ

章　旭日ト桐花ノ形ヲ以テ飾ル

綬　地紅色雙線白色

一　瑞寶章

勳一等ヨリ勳八等ニ至ル勳勞アル者ニ賜フ

章　鋭珠ノ形ヲ以テ飾ル

綬　地淡藍色雙線橙黃色

一　大勳位菊花章頸飾

頸飾ハ大勳位ニ敍セシ者ニ特別之ヲ賜フ

菊花菊葉ノ形ト明治二字古篆文ヲ以テ飾ル

第二章　位階

●敍位條例（明治二十年五月勅令第十號）

第一條　凡ソ位ハ華族勅奏任官及國家ニ勳功アル者又ハ表彰スヘキ敎績アル者ヲ敍ス

第二條　凡ソ位ハ正一位ヨリ從八位ニ至ル十六階トス

第三條　凡ソ位ハ從四位以上ハ勅授トシ宮內大臣之ヲ奉ス正五位以下ハ奏授トシ宮內大臣之ヲ宣ス

第四條　凡ソ位ハ刑法其ノ他特別ノ規定ニ於テ定メラレタル場合ヲ除クノ外終身之ヲ有セシム

特別ノ規定ニ於テ定メラレタル場合ニ該當セサルモ有位者ニシテ禁錮以上ノ刑ニ處セラレ其ノ他體面ヲ汚辱スルノ行爲ヲ爲シタルトキハ位記ヲ返上セシム（三十三年勅令第百四十七號ヲ以テ改正）

第五條　凡ソ位ハ從四位以上ハ爵ニ准シ禮遇ヲ享ク其准例左ノ如シ

公爵	侯爵	伯爵	子爵	男爵
從一位	正二位	從二位	正從三位	正從四位

第六條　爵位ヲ併有スル者ハ高キニ從テ禮遇ヲ享ク

叙位手續

（明治二十年五月内閣訓令）

勅令第十號ヲ以テ位階奉宣ノ事ハ宮内大臣ニ委セラレタル處華族及宮内官吏ノ叙位ヲ除ク外ハ從前ノ如ク内閣總理大臣ヲ經テ上奏スヘシ内閣總理大臣奏聞裁可ヲ經タル後之ヲ宮内大臣ニ移シ宮内大臣之ヲ奉宣ス

有位者改姓名死亡其他ノ異動届出方

（明治二十四年六月宮内省乙第一號達）

自今改姓名貫屬換及轉居ハ其ノ都度本人ヨリ死亡ハ相續人又ハ親屬ヨリ直ニ當省爵位局ヘ届出ヘシ

叙位手續（明治二十年五月内閣訓令）

勅令第十號ヲ以テ位階奉宣ノ事ハ宮内大臣ニ委セラレタル爲華族及宮内官吏ノ叙位ヲ除ク外ハ從前ノ如ク内閣總理大臣ヲ經テ上奏スヘシ内閣總理大臣奏聞裁可ヲ經タル後之ヲ宮内大臣ニ移シ宮内大臣之ヲ奉宣ス

有位者改姓名死亡其他ノ異動届出方（明治二十四年六月宮内省乙第一號達）

自今改姓名貫屬換及轉居ハ其ノ都度本人ヨリ死亡ハ相續人又ハ親屬ヨリ直ニ當省爵位局ヘ届出ヘシ

第八類　官制　官紀

第一章　官規

●内閣組織……一
●内閣官制……一
●賞勲局官制……二
●法制局官制……二
●樞密院官制及事務章程……五
●宮内省官制……六
●内大臣府官制……三
●皇后宮職官制……三
●東宮職官制……三
●皇族附職員官制……三
●帝室會計審査局官制……四
●各省官制通則……五
●外務省官制……七
●内務省官制……八
●大藏省官制……一〇
●陸軍省官制……一三
●海軍省官制……一七
●司法省官制……二〇
●文部省官制……二〇
●農商務省官制……二三
●遞信省官制……二四
●會計檢査院法……二六
●行政裁判所處務規程……二八
●地方官々制……二九
●北海道廳官制……四二
●臺灣總督府官制……四七
●樺太廳官制……五〇
●統監府及理事廳官制……五二
●韓國ニ統監府及理事廳ヲ置クノ件……五三

第二章　官紀

●高等官官等俸給令……五
●判任官俸給令……六一
●技術官俸給令……六二
●陸軍武官官等表……六三
●海軍武官官階……五
●北海道廳高等官俸給令……六六
●地方高等官俸給令……六六
●文官試驗規則……六六
●文官高等試驗細則……六七
●文官任用令……七一
●文官試補及見習規程……七三
●文官分限令……七四
●官吏服務規律……七六
●文官懲戒令……七八
●各廳執務時間……七九
●郵便局所執務時間……七九
●官吏恩給法……九
●官吏恩給法施行規則……八二
●官吏遺族扶助法……八五
●官吏遺族扶助法施行規則……八七
●官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則……八九
●官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則施行規則……九〇

第八類　官制　官規

第一章　官制

●内閣組織（明治十八年十二月太政官第六十九號達）

今般太政大臣左右大臣參議各省卿ノ職制ヲ廢シ更ニ内閣總理大臣及宮内外務内務大藏陸軍海軍司法文部農商務遞信ノ諸大臣ヲ設ク

内閣總理大臣及外務内務大藏陸軍海軍司法文部農商務遞信ノ諸大臣ヲ以テ内閣ヲ組織ス

●内閣官制（明治二十二年十二月勅令第百三十五號）

第一條　内閣ハ國務各大臣ヲ以テ組織ス

第二條　内閣總理大臣ハ各大臣ノ首班トシテ機務ヲ奏宣シ旨ヲ承ケテ行政各部ノ統一ヲ保持ス

第三條　内閣總理大臣ハ須要ト認ムルトキハ行政各部ノ處分又ハ命令ヲ中止セシメ勅裁ヲ待ツコトヲ得

第四條　凡ソ法律及一般ノ行政ニ係ル勅令ハ内閣總理大臣及主任大臣之ニ副署スヘシ勅令ノ各省專任ノ行政事務ニ屬スル者ハ主任ノ各省大臣之ニ副署スヘシ

第五條　左ノ各件ハ閣議ヲ經ヘシ

一　法律案及豫算決算案

二　外國條約及重要ナル國際條件

三　官制又ハ規則及法律施行ニ係ル勅令

四　諸省ノ間主管權限ノ爭議

五　天皇ヨリ下付セラレ又ハ常國議會ヨリ送致スル人民ノ請願

六　豫算外ノ支出

七　勅任官及地方長官ノ任命及進退

其ノ他各省主任ノ事務ニ就キ高等行政ニ關係シ事體稍重キ者ハ總テ閣議ヲ經ヘシ

第六條　主任大臣ハ其ノ所見ニ由リ何等ノ件ヲ問ハス内閣總理大臣ニ提出シ閣議ヲ求ムルコトヲ得

第七條　事ノ軍機軍令ニ係リ奏上スルモノハ天皇ノ旨ニ依リ之ヲ内閣ニ下付セラルルノ件ヲ除ク外陸軍大臣海軍大臣ヨリ内閣總理大臣ニ報告スヘシ

第八條　内閣總理大臣故障アルトキハ他ノ大臣臨時命ヲ承ケ其ノ事務ヲ代理スヘシ

第九條　各省大臣故障アルトキハ他ノ大臣臨時掌任シ又ハ命ヲ承ケ其ノ事務ヲ管理スヘシ

第十條　各省大臣ノ外特旨ニ依リ國務大臣トシテ内閣員

第八類　官制　官規

第一章　官制

●內閣組織（明治十八年十二月太政官第六十九號達）

今般太政大臣左右大臣參議各省卿ノ職制ヲ廢シ更ニ內閣總理大臣及宮內外務內務大藏陸軍海軍司法文部農商務逓信ノ諸大臣ヲ設ク

內閣總理大臣及外務內務大藏陸軍海軍司法文部農商務逓信ノ諸大臣ヲ以テ內閣ヲ組織ス

●內閣官制（明治二十二年十二月勅令第百三十五號）

第一條　內閣ハ國務各大臣ヲ以テ組織ス

第二條　內閣總理大臣ハ各大臣ノ首班トシテ機務ヲ奏宣シ旨ヲ承ケテ行政各部ノ統一ヲ保持ス

第三條　內閣總理大臣ハ須要ト認ムルトキハ行政各部ノ處分又ハ命令ヲ中止セシメ勅裁ヲ待ツコトヲ得

第四條　凡ソ法律及一般ノ行政ニ係ル勅令ハ內閣總理大臣及主任大臣之ニ副署スヘシ勅令ノ各省專任ノ行政事務ニ關スル者ハ主任ノ各省大臣之ニ副署スヘシ

第五條　左ノ各件ハ閣議ヲ經ヘシ

一　法律案及豫算決算案

二　外國條約及重要ナル國際條件

三　官制又ハ規則及法律施行ニ係ル勅令

四　諸省ノ間主管權限ノ爭議

五　天皇ヨリ下付セラレ又ハ帝國議會ヨリ送致スル人民ノ請願

六　豫算外ノ支出

七　勅任官及地方長官ノ任命及進退

其ノ他各省主任ノ事務ニ就キ高等行政ニ關係シ事體稍重キ者ハ總テ閣議ヲ經ヘシ

第六條　主任大臣ハ其ノ所見ニ由リ何等ノ件ヲ問ハス內閣總理大臣ニ提出シ閣議ヲ求ムルコトヲ得

第七條　事ノ軍機軍令ニ係リ奏上スルモノハ天皇ノ旨ニ依リ之ヲ內閣ニ下付セラルルノ件ヲ除ク外陸軍大臣海軍大臣ヨリ內閣總理大臣ニ報告スヘシ

第八條　內閣總理大臣故障アルトキハ他ノ大臣臨時命ヲ承ケ其ノ事務ヲ代理スヘシ

第九條　各省大臣故障アルトキハ他ノ大臣臨時攝任シ又ハ命ヲ承ケ其ノ事務ヲ管理スヘシ

第十條　各省大臣ノ外特旨ニ依リ國務大臣トシテ內閣員

ニ列セシメラルルコトアルヘシ

●賞勲局官制（明治二十六年十月勅令第百十六號）

第一條　賞勲局ハ内閣ニ隷シ左ノ事務ヲ掌ル
一　勲位、勲章及年金ニ關スル事項
二　記章、褒章其ノ他賞件ニ關スル事項
三　外國ノ勲章、記章ノ受領及佩用ニ關スル事項

第二條　賞勲局ニ左ノ職員ヲ置ク（三十一年勅令第二百五十二號ヲ以テ改正）

總裁	一人	勅任
書記官	專任二人	奏任
屬	六人	判任

第三條　總裁ハ局中一切ノ事務ヲ管理シ所部ノ官吏ヲ監督ス

第四條　（同上勅令ヲ以テ削除）

第五條　奏任官ノ進退ハ總裁之ヲ内閣總理大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第六條　書記官ハ總裁ノ命ヲ承ケ局中ノ事務ヲ掌理ス

第七條　屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附則

第八條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

●法制局官制（明治二十六年十月勅令第百十八號）

第一條　法制局ハ内閣ニ隷シ左ノ事務ヲ掌ル
一　内閣總理大臣ノ命ニ依リ法律命令案ヲ起草シ理由ヲ具ヘテ上申スルコト
二　法律命令ノ制定、廢止、改正ニ付意見アルトキハ案ヲ具ヘテ内閣ニ上申スルコト
三　各省大臣ヨリ閣議ニ提出スル所ノ法律命令案ヲ審査シ意見ヲ具ヘ又ハ修正ヲ加ヘテ内閣ニ上申スルコト
四　前諸項ニ掲クルモノノ外内閣總理大臣ヨリ諮詢アルトキハ意見ヲ具ヘテ上申スルコト

第二條　法制局ニ左ノ職員ヲ置ク（三十一年勅令第二百五十四號三十六年勅令第二十一號及同年同令第二百六號ヲ以テ改正）

長官	一人	勅任
參事官	專任八人	奏任（同二人ヲ勅任トスコトヲ得）
書記官	一人	奏任（參事官ヲシテ之ヲ兼ネシム）
屬	專任九人	判任（三十五年勅令第五十七號ヲ以テ改正）

第三條　長官ハ局中一切ノ事務ヲ管理シ所部ノ官吏ヲ監督ス

第四條　奏任官ノ進退ハ長官之ヲ内閣總理大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第五條　長官事故アルトキハ上席參事官其ノ職務ヲ代理ス

第六條　參事官ハ長官ノ命ヲ承ケ審議立案ヲ掌ル

第七條　書記官ハ長官ノ命ヲ承ケ局中ノ事務ヲ掌理ス

第八條　屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附則

第九條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

●樞密院官制及事務章程（明治二十一年四月勅令第二十二號）

第一章　組織

第一條　樞密院ハ天皇親臨シテ重要ノ國務ヲ諮詢スル所トス

第二條　樞密院ハ議長一人副議長一人顧問官二十八人書記官長一人書記官三人ヲ以テ組織ス（二十三年勅令第二百十六號二十六年同第百二十號、三十六年同第百十七號ヲ以テ本條改正）

第三條　樞密院ノ議長副議長顧問官ハ親任書記官長ハ勅任書記官ハ奏任トス

第四條　何人タリトモ年齡四十歲ニ達シタルモノニ非サレハ議長副議長及顧問官ニ任スルコトヲ得ス

第五條　議長ハ書記官ノ内ヲ以テ祕書官ヲ兼ネシムルコトヲ得

第二章　職掌

第六條　樞密院ハ左ノ事項ニ付諮詢ヲ待テ會議ヲ開キ意見ヲ上奏ス（同上ヲ以テ本條並ニ各項共改正）
一　皇室典範ニ於テ其權限ニ屬セシメタル事項
二　憲法ノ條項又ハ憲法ニ附屬スル法律勅令ニ關スル草案及疑義
三　憲法第十四條戒嚴ノ宣告同第八條及第七十條ノ勅令及其他制則ノ規定アル勅令
四　列國交涉ノ條約及約束
五　樞密院ノ官制及事務規程ノ改正ニ關スル事項
六　前諸項ニ掲クルモノノ外臨時ニ諮詢セラレタル事項

第七條　前條第三項ニ掲ケタル勅令ニハ樞密院ノ諮詢ヲ

經タル旨ヲ記載スヘシ

第八條　樞密院ハ行政及立法ノ事ニ關シ天皇ノ至高ノ顧問タリト雖モ施政ニ干與スルコトナシ

第三章　會議及事務

第九條　樞密院ノ會議ハ顧問官十名以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

第十條　樞密院ノ會議ハ議長之ニ首席シ議長事故アルトキハ副議長之ニ首席ス議長副議長共ニ事故アルトキハ顧問官其席次ニ依リ首席スヘシ

第十一條　各大臣ハ其職權上ヨリ樞密院ニ於テ顧問官タルノ地位ヲ有シ議席ニ列シ表決ノ權ヲ有ス又各大臣ハ委員ヲ差シテ會議ニ出席シ演述及說明ヲ爲サシムルコトヲ得但表決ノ數ニ加ラス

第十二條　樞密院ノ議事ハ多數ニ依リ之ヲ決ス但可否平等ノ場合ニ於テハ會議首席ノ決スル所ニ依ル

第十三條　議長ハ樞密院ニ屬スル一切ノ事務ヲ總管シ樞密院ヨリ發スル一切ノ公文ニ署名ス

副議長ハ議長ノ職務ヲ輔佐ス

第十四條　書記官長ハ議長ノ監督ヲ受ケ樞密院ノ常務ヲ管理シ一切ノ公文ニ副署シ會議ニ付スヘキ事項ヲ審査シテ報告書ヲ調製シ會議ニ列シ辯明ノ任ニ當ル但表決ノ數ニ加ラス

書記官ハ會議ニ於テ議事ヲ筆記シ及書記官長ノ職務ヲ輔佐シ書記官長事故アルトキハ書記官之ヲ代理ス

前項ノ筆記ハ出席員ノ姓名會議ノ事件質問答辯及議決ノ要旨ヲ記載スルモノトス

第十五條　特別ノ場合ヲ除クノ外豫メ審査報告書ヲ調製シ其會議ニ必要ナル書類ト共ニ之ヲ各員ニ配達シタル後ニ非レハ會議ヲ開クコトヲ得ス

議事日程及報告ハ豫メ各大臣ニ通報スヘシ

樞密院事務規程

第一條　樞密院ハ勅命ニ由リ會議ニ下付セラレタル事項ニ意見ヲ述フ

第二條　樞密院ハ帝國議會若クハ其一院又ハ官署又ハ臣民ヨリ請願上書其他通信ヲ受領スルコトヲ得ス

第三條　樞密院ハ內閣及各省大臣トノミ公務上ノ交涉ヲ有シ其他ノ官署帝國議會又ハ臣民トノ間ニ文書ヲ往復シ又ハ其他ノ交涉ヲ有スルコトヲ得ス

第四條　議長ハ樞密院ニ到達スルノ事項ハ書記官長ニ下付シテ之ヲ審査セシメ及會議ニ付スヘキ事項ノ報告ヲ調製セシム

議長ハ必要ナリト認ムル場合ニ於テ親ラ報告ノ任ニ當リ又ハ顧問官一人若クハ數人ニ之ヲ任スルコトヲ得ヘシ

第五條　審査報告書ハ報告員ヨリ之ヲ議長ニ提出スヘシ

臨時緊急ノ場合ニ於テハ口頭ヲ以テ報告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ其要領ヲ簡短ニ第八條ニ載スル件名簿ニ記入スヘシ

第六條　議長ハ審査報告書ヲ整頓スヘキ期日ヲ限定スルコトヲ得報告ハ成ルヘク速ニ之ヲ調製シテ遷延スルコトヲ許サス

內閣ハ至急ヲ要スル事件ニ付其由ヲ通知シ及其會議ノ期日ヲ限定スルコトヲ得

第七條　審査報告書ハ附屬文書ト共ニ其會議ヲ開クノ日ヨリ少クモ三日以前ニ之ヲ各員ニ配達スヘシ

第八條　件名簿ハ會議ノ期日ノ順序ニ從ヒ之ヲ記入スヘシ件名簿ニ登載スヘキ事項ハ第一事件ノ性質第二會議ノ前文書配達ノ日時第三其會議ノ期日等トス

會議ニ付スヘキ各件ニ就テハ前項ニ同シキ議事日程ヲ調製シ其會議ヲ開クノ日ヨリ三日以前ニ各員ニ通報スヘシ此通報ハ會議ノ招狀ヲ兼スルモノトス

第九條　樞密院ノ會議ノ日時ハ議長之ヲ定ム但各大臣ハ其日時ノ變更ヲ求ムルコトヲ得

第十條　樞密院ノ會議ハ左ノ規程ニ循由シ議長若クハ副議長之ヲ整理スヘシ

議長ハ書記官長ヲシテ其事件ヲ辯明セシメ次テ各員ヲシテ自由ニ討論セシム何人タリト雖モ議長ノ許可ヲ受クルニ非レハ發言スルコトヲ得ス

議長ノ討論ニ參與スルハ其自由ニ屬スルモノトス討論既ニ盡クル後ハ議長ヨリ問題ヲ定メ表決ヲ爲サシム（同上ヲ以テ本項改正）

議決ノ結果ハ議長之ヲ言明スヘシ

第十一條　議事日程ニ掲載シタル事件ノ會議其當日ニ結了セサルトキハ之ヲ他日ニ延會スルコトヲ得此場合ニ於テハ更ニ常例ノ定式ヲ踐行スルコトヲ要セス

第十二條　樞密院ノ會議ノ意見ハ書記官長又ハ書記官表決ノ結果ニ依リ之ヲ起草シ議長ノ檢閱ヲ請フヘシ此意見ニハ理由ヲ附シ重要ノ事件ニ就テハ討論ノ要領書ヲ附屬スヘシ

反對ノ議論ヲ主持シタル出席員ハ其表決ト其理由トヲ議事筆記埋由書又ハ要領書ニ記入セラレンコトヲ求ムルコトヲ得

第十三條　前條ノ意見ハ議長ヨリ天皇ニ上奏シ同時ニ內閣總理大臣ニ通報スヘシ

第十四條　樞密院ノ會議ノ議事筆記ハ議長及書記官長又ハ出席書記官之ニ署名シ其正確ヲ表明スヘシ

宮內省官制（明治四十年十月 皇室令第三號）

第一條　宮內大臣ハ親任トス皇室一切ノ事務ニ付キ輔弼ノ責ニ任ス

第二條　宮內大臣ハ所部ノ職員ヲ統督シ兼テ華族ヲ監督ス

第三條　宮內大臣ハ皇室令ノ制定改正又ハ廢止ヲ要スルモノアルトキハ案ヲ具ヘテ上奏スヘシ其ノ國務大臣ノ關連スルモノニ付テハ內閣總理大臣又ハ內閣總理大臣及主任ノ國務大臣ト俱ニ上奏スヘシ

第四條　宮內大臣ハ皇室令ノ施行其ノ他主管ノ事務ニ關シ必要ノ規程ヲ定ムルコトヲ得其ノ國務大臣ノ職務ニ關連スルモノニ付テハ內閣總理大臣又ハ內閣總理大臣及主任ノ國務大臣ト協定ヲ經ヘシ

第五條　宮內大臣ハ主管ノ事務ニ關シ省令ヲ發スルコトヲ得

第六條　宮內大臣ハ主管ノ事務ニ關シ警視總監及地方長官ニ指令又ハ訓令ヲ下スコトヲ得

第七條　宮內大臣ハ勅旨ヲ奉シ救恤褒賞及贈賜ノ事ヲ施行ス

第八條　宮內大臣ハ宮內奏任官及勅任待遇奏任待遇宮內職員ノ進退ハ之ヲ上奏シ宮內判任官及准判任官待遇等外宮內職員ノ進退ハ之ヲ專行ス

第九條　宮內大臣ハ宮內職員及華族ノ敍位ヲ上奏シ其ノ敍勳ハ內閣總理大臣ヲ經テ上奏ス

第十條　宮內大臣ハ主管ノ事務ニ關シ勅裁ヲ經テ顧問委員又ハ評議員ヲ置クコトヲ得

第十一條　宮內大臣ハ事故アルトキハ臨時其ノ職務ヲ次官ニ代理セシムルコトヲ得但シ皇室典範又ハ皇室令ニ依リ公告ヲ爲シ公式令ニ依リ副署ヲ爲シ省令ヲ發シ及重要ノ省務ヲ奏上スルハ此ノ限ニ在ラス

第十二條　宮內大臣ハ次官及所管各部局長官ニ其ノ職務ノ一部ヲ委任スルコトヲ得

第十三條　宮內大臣ハ會計ノ審査ニ干涉スルコトヲ得

第十四條　宮內省ニ大臣官房ヲ置ク

大臣官房ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル但シ便宜ニ從ヒ大臣官房ノ事務ヲ所管各部局ニ於テ處理セシムルコトヲ得

一　機密ニ屬スル事項
二　職員ノ進退身分ニ關スル事項
三　大臣ノ官印及省印ノ管守ニ關スル事項
四　行幸啓ニ關スル事項
五　皇族ニ關スル事項
六　救恤褒賞及贈賜ニ關スル事項
七　進獻ニ關スル事項
八　法規其ノ他重要ナル公文ノ起草及審査ニ關スル事項
九　皇族會議ニ關スル事項
十　帝室經濟會議ニ關スル事項
十一　公文書類及成案文書ノ接受發送ニ關スル事項
十二　統計報告ノ調製ニ關スル事項
十三　恩給扶助料等ニ關スル事項
十四　所管各部局ノ主管ニ屬セサル財產ノ管理ニ關スル事項
十五　前各號ノ外所管各部局ノ主管ニ屬セサル事項

第十五條　宮內省ニ左ノ職員ヲ置ク

次官
祕書官
書記官
翻譯官

屬

第十六條　次官ハ一人勅任トス大臣ヲ輔ケ省務ヲ整理ス

第十七條　祕書官ハ專任二人奏任トス大臣ニ專屬シテ第十四條第二項第一號乃至第三號ノ事務ヲ分掌ス但シ省務ノ現況ニ依リ臨時大臣ノ命ヲ承ケ他ノ事務ヲ助ク

第十八條　書記官ハ專任四人奏任トス第十四條第二項第四號乃至第十五號ノ事務ヲ分掌ス但シ省務ノ現況ニ依リ臨時大臣ノ命ヲ承ケ他ノ事務ヲ助ク

第十九條　翻譯官ハ專任三人奏任トス翻譯及通譯ノ事ヲ分掌ス

第二十條　屬ハ二百七十人判任トス大臣官房各職及各寮ニ分屬シテ庶務ニ從事ス

第二十一條　宮內省ニ宮中顧問官二十五人ヲ置ク勅任名譽官トス大臣ノ諮詢ニ應シ又ハ臨時大臣ノ命ヲ承ケ省務ヲ輔ク

第二十二條　宮內省ニ左ノ各職及各寮ヲ置キ省務ヲ分掌セシム

侍從職
式部職
內藏寮

圖書寮
爵位寮
侍醫寮
大膳寮
諸陵寮
主殿寮
內匠寮
內苑寮
主馬寮
主獵寮
調度寮

第二十三條　侍從職ニ於テハ側近ノ事ヲ掌ル

第二十四條　侍從長
侍從職ニ左ノ職員ヲ置ク
侍從職幹事
侍從
次侍從

第二十五條　侍從長ハ親任又ハ勅任トス常侍奉仕シ侍從職ヲ統轄シ使宣事ヲ奏シ旨ヲ宣ス

第二十六條　侍從職幹事ハ一人勅任トス侍從長ヲ輔ケ侍從長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

第二十七條　侍從ハ十六人奏任トス側近ノ事ヲ分掌ス

第二十八條　次侍從ハ奏任トス侍從ノ定員內ヲ以テ之ヲ置ク侍從ヲ助ク

第二十九條　式部職ニ於テハ典式及交際ノ事ヲ掌ル

第三十條　式部職ニ左ノ職員ヲ置ク
式部長官
式部次官
式部官

第三十一條　式部長官ハ親任又ハ勅任トス典式ニ奉仕シ式部職ヲ統轄ス

第三十二條　式部次官ハ一人勅任トス式部長官ヲ輔ケ式部長官事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

第三十三條　式部官ハ二十八人內八人ヲ勅任二十人ヲ奏任トシ名譽官ト爲スコトヲ得典式及接待ノ事ヲ分掌ス

第三十四條　式部職ニ掌典部及樂部ヲ置ク
掌典部ニ於テハ祭事ヲ掌リ樂部ニ於テハ樂事ヲ掌ル

第三十五條　掌典部ニ左ノ職員ヲ置ク
掌典長
掌典次長
掌典
內掌典

掌典補
掌典長ハ一人勅任トス部務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス
掌典次長ハ一人勅任又ハ奏任トス掌典長ヲ助ケ掌典長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス
掌典ハ八人奏任トシ名譽官ト爲スコトヲ得祭事ヲ分掌ス
內掌典ハ六人掌典補ハ八人共ニ判任トス祭典ニ從事ス

第三十六條　樂部ニ左ノ職員ヲ置ク
部長
樂長
樂師
部長ハ奏長トス部務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス
樂長ハ二人奏任トス樂事ヲ分掌ス
樂師ハ四十人判任トス奏樂ニ從事ス

第三十七條　內藏寮ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
一　御資ノ保管運用及出納ニ關スル事項
二　豫算決算ニ關スル事項
三　金錢ノ保管出納ニ關スル事項
四　諸計算書ノ下檢査ニ關スル事項
五　特別會計ニ屬スル資金又ハ基金ノ保管出納ニ關スル事項

第三十八條　圖書寮ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
一　皇統譜ニ關スル事項
二　皇室典範ノ正本保藏ニ關スル事項
三　詔書勅書及皇室令ノ正本尙藏ニ關スル事項
四　世傳御料臺帳ニ關スル事項
五　天皇及皇族實錄ノ編修ニ關スル事項
六　圖書ノ保管出納ニ關スル事項
七　公文書類ノ編纂及保管ニ關スル事項

第三十九條　爵位寮ニ於テハ爵位華族及有位者ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十條　侍醫寮ニ於テハ診候進藥調劑及衞生ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十一條　大膳寮ニ於テハ供御及饗宴ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十二條　諸陵寮ニ於テハ陵墓ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十三條　主殿寮ニ於テハ宮殿廳舍及其ノ附屬建物ノ管守並警察ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十四條　內匠寮ニ於テハ建築及土木ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十五條　內苑寮ニ於テハ庭苑及園藝ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十六條　主馬寮ニ於テハ馬匹車輛及牧場ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十七條　主獵寮ニ於テハ狩獵及獵場ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十八條　調度寮ニ於テハ物品ノ購入整備及雜役ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十九條　各寮ニ左ノ職員ヲ置ク

頭

主事

第五十條　頭ハ各一人勅任トス寮務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

第五十一條　主事ハ各一人內藏寮主事及主殿寮主事ハ各二人侍醫寮主事ハ三人共ニ奏任トス寮務ヲ掌ル

侍醫寮主事ハ侍醫ヲシテ之ヲ兼ネシム

第五十二條　圖書寮ニ編修官專任三人ヲ置ク奏任トス編修ノ事ヲ分掌ス

第五十三條　侍醫寮ニ左ノ職員ヲ置ク

侍醫

侍醫補

醫員

藥劑師長

藥劑師

藥劑員

侍醫ハ二十五人勅任又ハ奏任トス診候進藥及衛生ノ事ヲ分掌ス

侍醫補ハ奏任トス侍醫ノ定員內ヲ以テ之ヲ置ク侍醫ヲ助ク

醫員ハ十人判任トス醫務ニ從事ス

藥劑師長ハ一人奏任トス藥品ノ製造試驗及調劑ノ事ヲ掌ル

藥劑師ハ三人奏任トス藥劑師長ヲ助ク

藥劑員ハ八人判任トス藥品ノ製造試驗及調劑ニ從事ス

第五十四條　大膳寮ニ左ノ職員ヲ置ク

主膳長

主膳

主膳長ハ一人奏任トス膳羞ノ事ヲ掌ル

主膳ハ專任五人判任トス膳羞ニ從事ス

第五十五條　主殿寮ニ警察部ヲ置ク

警察部ニ於テハ宮殿及廳舍ノ警察ヲ掌ル

第五十六條　警察部ニ左ノ職員ヲ置ク

皇宮警視長

皇宮警視

皇宮警部

皇宮警視長ハ一人奏任トス部務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

皇宮警視ハ一人奏任トス皇宮警視長ヲ助ク

皇宮警部ハ三十人判任トス警察ニ從事ス

第五十七條　內匠寮及內苑寮ニ技師及技手ヲ置ク

內匠寮技師ハ六人內苑寮技師ハ四人共ニ奏任トス各主務ニ屬スル技術ノ事ヲ分掌ス

內匠寮技師一人ハ之ヲ勅任ト爲スコトヲ得

內匠寮技手ハ五十五人內苑寮技手ハ十二人共ニ判任トス技術ニ從事ス

第五十八條　主馬寮ニ左ノ職員ヲ置ク

車馬監

調馬師

馬醫師

馬醫

技師

技手

車馬監ハ一人奏任トス車馬裝具ノ管守及馬匹ノ飼養調習ニ關スル事務ヲ掌ル

調馬師ハ三人奏任トス馬匹調習ノ事ヲ分掌ス

馬醫師ハ二人奏任トス馬匹醫療ノ事ヲ分掌ス

馬醫ハ四人判任トス馬匹ノ醫療ニ從事ス

技師ハ六人奏任トス牧場ニ關スル技術ノ事ヲ分掌ス

技手ハ五十人判任トス牧場ノ技術ニ從事ス

第五十九條　主獵寮ニ主獵官ヲ置ク

主獵官ハ十五人內二人ヲ勅任十三人ヲ奏任トシ共ニ名譽官トス狩獵ノ事ヲ掌ル

第六十條　宮內大臣ハ大臣官房及所管各部局ノ分課ヲ廢置シ及其ノ處務規程ヲ定ムルコトヲ得

各分課ニ課長ヲ置ク大臣官房分課ノ課長ニハ祕書官又ハ書記官ヲ以テ之ニ充テ所管各部局分課ノ課長ニハ奏任官又ハ判任官ヲ以テ之ニ充ツ

第六十一條　宮內大臣ハ須要ニ從ヒ勅任待遇奏任待遇准判任判任待遇及等外ノ職ヲ置キ其ノ職制ヲ定ムルコトヲ得但シ奏任待遇以上ニ係ル者ノ職制ハ勅裁ヲ經ヘシ

附則

第六十二條　本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治二十二年宮內省達第十號明治二十三年宮內省達第十八號明治三十七年宮內省達甲第三號及明治三十九年宮內省達甲第十四號ハ之ヲ廢止ス

第六十三條　本令施行ノ際別ニ官記ヲ交付セス內藏主事ハ內藏寮主事ニ爵位局長ハ爵位頭ニ爵位局主事ハ爵位寮主事ニ侍醫局長ハ侍醫頭ニ侍醫局主事ハ侍醫寮主事ニ大膳大夫ハ大膳頭ニ大膳亮ハ大膳寮主事ニ主殿助ハ主殿寮主事ニ內匠助ハ內匠寮主事ニ內苑局長ハ內苑頭ニ內苑局技師ハ內苑寮技師ニ內苑局技手ハ內苑寮技手ニ主馬助ハ主馬寮主事ニ主獵局長ハ主獵頭ニ主獵局主事ハ主獵寮主事ニ調度局長ハ調度頭ニ調度局主事ハ調度寮主事ニ各職事及局ノ屬ハ宮內屬ニ任セラレタルモノトス

本令施行ノ際宮中顧問官タル者ハ別ニ官記ヲ交付セス

本令ノ宮中顧問官ニ任セラレタルモノトス

●內大臣府官制（明治四十年皇室令第四號）

第一條　內大臣府ニ於テハ御璽國璽ヲ尙藏シ及詔書勅書其ノ他內廷ノ文書ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條　內大臣ハ親任トス常侍輔弼シ內大臣府ヲ統轄ス

第三條　內大臣ハ所部職員ノ敍位叙勳其ノ他進退ニ關スル事項ニ付テハ之ヲ宮內大臣ニ移牒スヘシ

第四條　內大臣府ニ左ノ職員ヲ置ク

秘書官長
秘書官
屬

第五條　秘書官長ハ一人勅任トス文書ノ事ヲ掌理ス

第六條　秘書官ハ專任三人奏任トス文書ノ事及庶務ヲ分掌ス

第七條　屬ハ六人判任トス庶務ニ從事ス

附　則

本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治十八年太政官達第六十八號及明治二十三年宮內省達第二十三號ハ之ヲ廢止ス

●皇后宮職官制（明治四十年皇室令第五號）

第一條　皇后宮職ハ宮內大臣ノ管理ニ屬シ皇后宮ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條　皇后宮職ニ左ノ職員ヲ置ク

大夫
主事
屬

第三條　大夫ハ一人勅任トス宮事ヲ掌理シ所部職員ヲ監督シ便宜事ヲ啓シ旨ヲ宣ス

第四條　主事ハ二人奏任トス庶務ヲ分掌ス

第五條　屬ハ九人判任トス庶務ニ從事ス

第六條　皇后宮職ニ女官ヲ置ク

女官ノ官制ハ別ニ之ヲ定ム

附　則

本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

●東宮職官制（明治四十年十月皇室令第六號）

第一條　東宮職ハ宮內大臣ノ管理ニ屬シ東宮ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條　東宮職ニ左ノ職員ヲ置ク

大夫
侍從長
侍從
侍講
主事
屬

第三條　大夫ハ一人勅任トス宮事ヲ掌理シ所部職員ヲ監督シ便宜事ヲ啓シ旨ヲ宣ス

第四條　侍從長ハ一人勅任トス常侍奉仕シ大夫非故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

第五條　侍從ハ五人奏任トス侍側ノ事ヲ分掌ス

第六條　侍講ハ三人勅任又ハ奏任トス進講ノ事ヲ分掌ス

第七條　主事ハ三人奏任トス庶務ヲ分掌ス

第八條　屬ハ三十人判任トス庶務ニ從事ス

第九條　東宮職ニ女官ヲ置ク

女官ノ官制ハ別ニ之ヲ定ム

附　則

本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治二十二年宮內省達二十一號ハ之ヲ廢止ス

●皇族附職員官制（明治四十年十月皇室令第七號）

第一條　宮號ヲ賜リタル皇族ニハ左ノ職員ヲ附屬セシム

家令
家扶
家從

第二條　家令ハ各一人奏任トス所屬ノ皇族ニ關スル事務ヲ掌理シ家扶家從ヲ監督ス

第三條　家扶ハ各專任一人判任トス家令ヲ助ク

第四條　家從ハ各專任六人判任トス庶務ニ從事ス

第五條　宮號ヲ賜ハリタリ親王ニハ別當ヲ附屬セシムルコトヲ得

別當ハ各一人勅任トス所屬親王ヲ輔翼シ家令以下ノ職員ヲ監督ス

第六條　皇族附職員ハ宮內大臣之ヲ統督ス

附　則

本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治二十三年宮內省達第一號ハ之ヲ廢止ス

●帝室會計審査局官制

第一條　帝室會計審査局ハ宮內大臣ノ管理ニ屬シ會計審査ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條　帝室會計審査局ニ左ノ職員ヲ置ク

長官

主事

審査官

審査官補

屬

第三條　長官ハ勅任トス局務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

第四條　主事ハ一人奏任トシ審査官ヲシテ之ヲ兼ネシム庶務ヲ掌ル

第五條　審査官ハ六人奏任トス會計審査ノ事ヲ分掌ス

第六條　審査官補ハ奏任トシ審査官ノ定員內ヲ以テ之ヲ置ク審査官ヲ助ク

第七條　屬ハ十五人判任トス庶務ニ從事ス

第八條　長官ハ主管ノ部局長官ニ會計ノ審査上必要ナル書類ノ提出ヲ求メ又ハ樣式ヲ示シテ必要ノ報告ヲ求ムルコトヲ得

第九條　長官ハ會計上不明瞭又ハ不合規ノ件アルコトヲ認メタルトキハ主管ノ部局長官ニ推問書ヲ發シ辯明ヲ求ムルコトヲ得

第十條　主管ノ部局長官ニ於テ前二條ノ求ニ應スルコトヲ怠リタルトキハ長官ハ之ヲ宮內大臣ニ具申スルコトヲ得

第十一條　長官ハ審査官又ハ審査官補ヲシテ主管ノ部局ニ就キ會計書類帳簿計表及現金物件ノ現在額其ノ他土木工事ノ實況等ヲ檢査セシムルコトヲ得

第十二條　長官ハ宮內大臣ヲ經テ每年審査ノ成蹟ヲ上奏シ及會計ニ關シ改正ヲ必要トスル事項アルコトヲ認メタルトキハ併セテ意見ヲ上奏スルコトヲ得

第十三條　會計審査ニ關スル規程ハ本令ニ定ムルモノヲ除クノ外勅裁ヲ經テ宮內大臣之ヲ定ム

附　則

第十四條　本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

第十五條　本令施行ノ際別ニ官記ヲ交付セス帝室會計審査局長ハ帝室會計審査局長官ニ任セラレタルモノトス

●各省官制通則（明治二十六年十月勅令第百二十二號）

第一條　本則ハ外務、內務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、遞信ノ各省ニ適用ス

第二條　各省大臣ハ主任ノ事務ニ付其ノ責ニ任ス

主任ノ明瞭ナラサル事務ニシテ兩省以上ニ關涉スルモノアルトキハ閣議ニ提出シテ其ノ主任ヲ定ム

第三條　各省大臣ハ主任ノ事務ニ付法律勅令ノ制定、廢止及改正ヲ要スルコトアルトキハ案ヲ具ヘ閣議ニ提出スヘシ

第四條　各省大臣ハ主任ノ事務ニ付其ノ職權若クハ特別ノ委任ニ依リ省令ヲ發スルコトヲ得

第五條　各省大臣ハ主任ノ事務ニ付警視總監、北海道廳長官、府縣知事ニ指令又ハ訓令ヲ下スコトヲ得

第六條　各省大臣ハ主任ノ事務ニ付警視總監、北海道廳長官、府縣知事ヲ監督ス若シ警視總監、北海道廳長官、府縣知事ノ命令又ハ處分ノ成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ命令又ハ處分ヲ停止シ又ハ取消スコトヲ得

第七條　各省大臣ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任官ノ進退ハ內閣總理大臣ヲ經テ之ヲ上奏シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

地方官廳奏任官ノ進退ハ內閣總理大臣ヲ經テ內務大臣之ヲ上奏ス但シ視學官ノ進退ハ內閣總理大臣ヲ經テ內務大臣及文部大臣之ヲ上奏ス（二十九年勅令第三百三十七號ヲ以テ收稅長ノ進退ニ關スル但書廢止シ三十二年同第二百五十四號ヲ以テ更ニ但書ヲ追加ス）

第八條　各省大臣ハ內閣總理大臣ヲ經テ所部ノ官吏ノ敍位叙勳ヲ上奏ス

地方官廳官吏ノ敍位敍勳ハ前條第二項ノ例ニ依ル

第九條　各省大臣事故アルトキハ法律勅令ニ副署シ省務ヲ敎奏シ內閣ノ議ニ列シ及省令ヲ發スルコトヲ除クノ外其ノ職務ヲ臨時次官ニ代理セシムルコトヲ得（三十三年勅令第百六十一號及三十六年同令第二百八號ヲ以テ本條改正）

第十條　各省ニ大臣官房ヲ置ク（同上ヲ以テ本條改正）

大臣官房ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　機密ニ屬スル事項

二　官吏ノ進退身分ニ關スル事項

三　大臣ノ官印及省印ノ管守ニ關スル事項

四　公文書類及成案文書ノ接受發送ニ關スル事項

五　統計報告ノ調製ニ關スル事項

六　公文書類ノ編纂保存ニ關スル事項

七　本省所管ノ經費及諸收入ノ豫算決算竝會計ニ關スル事項

八　會社ノ監督ニ關スル事項

九　本省所管ノ官有財産及物品ニ關スル事項

十　其ノ他ノ各省官制ニ依リ特ニ大臣官房ノ所掌ニ屬セシムル事項

各省ノ便宜ニ從ヒ大臣官房ノ事務ヲ各局ニ於テ處理セシムルコトヲ得

陸軍省海軍省ニ於テハ第二項第二號及第七號乃至第九號ノ事務遞信省ニ於テハ第七號乃至第九號ノ事務ヲ掌ラシムル爲特ニ局ヲ置クコトヲ得

第十一條　（三十六年勅令第二百八號ヲ以テ削除）

第十二條　各省中省務ヲ分掌スル爲局ヲ置ク其ノ分掌事務ハ各省官制ニ於テ之ヲ定ム

第十三條　大臣官房及各局ノ分課ハ各省大臣ノ定ムル所ニ依ル

陸軍省海軍省中ノ分課ハ各其ノ省官制ニ於テ之ヲ定ム

第十四條　各省ニ左ノ職員ヲ置ク（三十三年勅令第百六十一號及三十六年同令第二百八號ヲ以テ全條改正）

次官
局長
參事官
祕書官
書記官
屬

第十五條　各省次官ハ一人勅任トス（同上）

第十六條　次官ハ大臣ヲ佐ケ省務ヲ整理シ各局部ノ事務ヲ監督ス（同上）

第十七條　（三十六年勅令第二百八號ヲ以テ削除）

第十八條　各局局長ハ一人勅任トス大臣ノ命ヲ承ケ其ノ主務ヲ掌理シ及局中各課ノ事務ヲ指揮監督ス（三十一年勅令第三百五十七號ヲ以テ改正）

第十九條　參事官ハ奏任トス大臣ノ命ヲ承ケ審議立案ヲ掌ル但シ其ノ中一人ハ勅任ト爲スコトヲ得（三十一年勅令第三百五十七號及三十三年勅令第百六十一號ヲ以テ條中改正）

第二十條　參事官ハ其ノ省ノ便宜ニ從ヒ局課ニ兼勤シ若クハ臨時命ヲ承ケ其事務ヲ助ク

第二十一條　祕書官ハ奏任トス大臣ノ命ヲ承ケ機密事務ヲ掌リ又ハ臨時命ヲ承ケ各局課ノ事務ヲ助ク

第二十二條　書記官ハ奏任トス大臣ノ命ヲ承ケ大臣官房ノ事務ヲ掌リ又ハ各局ノ事務ヲ助ク（同上勅令ヲ以テ本條中削除）

第二十三條　各省專任祕書官ハ一人トス但外務省ニ於テハ專任二人ヲ置クコトヲ得

各省專任參事官專任書記官ハ併セテ九人以下トシ其ノ定員ハ各省官制ニ於テ之ヲ定ム但シ外務省內務省大藏省及遞信省ニ於テハ十四人以下ヲ置クコトヲ得（三十一年勅令第二百五十七號三十三年勅令第百六十一號三十五年勅令第六十號ヲ以テ條中改正）

第二十四條　大臣官房及局中各課ニ課長一人ヲ置キ奏任官又ハ判任官ヲ以テ之ニ充ツ課長ハ命ヲ上官ニ承ケ課務ヲ掌理ス

陸軍省海軍省中ノ課長ハ各其ノ省官制ノ定ムルニ所ニ依ル

第二十五條　屬ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第二十六條　各省判任官ノ定員ハ各省官制ニ於テ之ヲ定ム

第二十七條　本則ニ掲クルモノノ外各省特別ノ職員ヲ置クコトヲ要スルモノハ各省官制ニ於テ之ヲ定ム

附則

第二十八條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

●外務省官制（明治三十一年十月勅令第二百五十八號）

第一條　外務大臣ハ外國ニ關スル政務ノ施行、外國ニ於ケル帝國商事ノ保護及外國在留帝國臣民ニ關スル事務ヲ管理シ外交官及領事官ヲ指揮監督ス（三十三年勅令第百九十號ヲ以テ條中改正）

第二條　大臣官房ニ於テハ通則ニ掲クルモノノ外帝國ニ駐在スル各國外交官、領事官、外國人叙勲、條約書保管及文書翻譯ニ關スル事務ヲ掌ル（同上及三十六年同令第二百九號ヲ以テ本條改正）

第三條　外務省專任參事官ハ二人專任外務大臣祕書官ハ二人專任書記官ハ七人ヲ以テ定員トス（三十三年勅令第百九十號三十五年同令第六十一號、三十六年同令第二百九號及三十九年同令第百九十五號ヲ以テ本條改正）

第四條　外務省ニ左ノ二局ヲ置ク

政務局

通商局

第五條　政務局ニ於テハ外交ニ關スル事務ヲ掌ル

第六條　通商局ニ於テハ通商航海及移民ニ關スル事務ヲ掌ル

第七條　外務省ニ翻譯官四人ヲ置ク奏任トス文書翻譯ニ從事ス

第八條　外務省屬ハ五十二人ヲ以テ定員トス（三十五年勅令第六十一號及三十六年同令第二百九號及三十九年同令百九十五號ヲ以テ條中改正）

第九條　外務省ニ翻譯官補六人ヲ置ク判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ文書翻譯及通辯ニ從事ス

第十條　外務省ニ技手三人ヲ置ク上官ノ指揮ヲ承ケ電信及禁錮事務ニ從事ス（三十三年勅令第五十九號ヲ以テ全條改正）

附　則

第十一條　本令ハ明治三十一年十一月一日ヨリ施行ス

●内務省官制（明治三十一年十月勅令第二百五十九號）

第一條　内務大臣ハ神社、地方行政、議員選擧、警察、土木、衛生、地理、宗教、出版、著作權、賑恤及救濟ニ關スル事務ヲ管理シ臺灣總督、警視總監、北海道廳長官樺太廳長官及府縣知事ヲ監督ス（三十三年勅令第百六十三號同年同令第百六十六號及四十年同令第百六十六號ヲ以テ條中改正）

第二條　大臣官房ニ於テハ通則ニ揭クルモノノ外褒賞並臺灣及樺太ニ關スル事務ヲ掌ル（三十五年勅令第六十二號及三十六年同令第二十五號同年同令第二百十一號及四十年同令第百六十六號ヲ以テ全條改正）

第三條　内務省專任參事官ハ四人專任書記官ハ七人ヲ以テ定員トス（三十三年勅令第百九十一號及三十六年同令第二百十一號ヲ以テ人員改正）

第四條　内務省ニ左ノ六局ヲ置ク（三十三年勅令第百六十三號及第百六十六號ヲ以テ條中改正）

神社局

地方局

警保局

土木局

衛生局

宗教局

第四條ノ二　神社局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル（三十三年勅令第百六十三號ヲ以テ追加）

一　神宮、官國幣社、府縣鄕村社、招魂社其ノ他總テ神社ニ關スル事項

二　神官及神職ニ關スル事項

第五條　地方局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　議員選擧ニ關スル事項

二　府縣會、府縣經濟其ノ他總テ府縣行政ニ關スル事項

三　郡會、郡經濟其ノ他總テ郡ノ行政ニ關スル事項

四　市町村會、公共組合及市町村公共組合ノ經濟其ノ他總テ市町村公共組合ノ行政ニ關スル事項

五　（三十三年勅令第百九十一號ヲ以テ削除）

六　賑恤及救濟ニ關スル事項

七　府縣立以下ノ貧院、盲啞院、瘋癲院及育兒院其ノ他慈惠ノ用ニ供スル營造物ニ關スル事項

八　徵兵及徵發ニ關スル事項

九　北海道ニ於ケル林野及拓殖ニ關スル事項ニシテ他局ノ所掌ニ屬セサルモノ（三十六年勅令二十五號ヲ以テ本號追加三十八年同令第八十七號ヲ以テ本號改正）

第六條　警保局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　行政警察ニ關スル事項

二　高等警察ニ關スル事項

三　圖書出版及著作權ニ關スル事項（三十三年勅令第百六十三號ヲ以テ本號中改正）

第七條　土木局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　本省直轄ノ土木工事ニ關スル事項

二　府縣經營ノ土木工事其ノ他公共ノ土木工事ニ關スル事項

三　直轄工費及府縣工費補助ノ調査ニ關スル事項

四　水面埋立ニ關スル事項

五　土地收用ニ關スル事項

六　河川、道路、港灣及砂防ニ係ル事業調査ニ關スル事項（三十八年勅令第八十七號ヲ以テ本號改正）

第八條　衛生局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　傳染病及地方病ノ豫防、種痘其ノ他總テ公衆衛生ニ關スル事項

二　檢疫停船ニ關スル事項

三　醫師及藥劑師ノ業務並藥品賣藥取締ニ關スル事項

四　衛生會及地方病院ニ關スル事項

第九條　宗教局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル（三十三年勅令第百六十三號ヲ以テ改正）

一　神佛各派、寺院、宗教ノ用ニ供スル堂宇其ノ他總テ宗教ニ關スル事項

二　僧侶及教師ニ關スル事項

第十條　（三十三年勅令第百六十六號ヲ以テ削除）

第十一條　（同上）

第十二條　内務省ニ專任技師六十一人ヲ置ク内六人以内ヲ勅任トス

内務省ニ專任技手百七十五人ヲ置ク（三十五年勅令第六十二號ヲ以テ人員改正）

内務省屬ハ百九十九人ヲ以テ定員トス（同上三十六年勅令第二百十一號三十八年勅令第百八十七號三十九年同令第六十九號及四十年同令第百六十六號ヲ以テ本條追加）

附則

第十二條ノ二　内務大臣ハ必要ニ應シ地方ニ出張所ヲ置キ直轄土木工事並河川、道路、港灣及砂防ノ調査ニ關スル事務ヲ分掌セシムルコトヲ得

出張所ニ所長ヲ置キ技師ヲ以テ之ニ充ツ（三十八年勅令第八十七號ヲ以テ本條追加）

第十三條　本令ハ明治三十一年十一月一日ヨリ施行ス

臺灣事務局官制及明治二十七年勅令第六十六號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

三十八年勅令第八十七號附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

土木監督署官制、明治二十七年勅令第八十四號及同年勅令第八十五號ハ之ヲ廢止ス

四十年勅令第百六十六號附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●大藏省官制（明治三十一年十月勅令第二百六十九號）

第一條　大藏大臣ハ政府ノ財務ヲ總轄シ會計出納、租稅、樟腦、樟腦油及鹽專賣、國債、貨幣、預金、保管物、信託及銀行ニ關スル事務ヲ管理シ府縣郡市町村及公共組合ノ財務ヲ監督ス（三十六年勅令第百三十七號三十八年同令第五十號及同年同令第八十二號ヲ以テ本條改正）

第二條　大藏省專任參事官ハ二人專任書記官ハ九人ヲ以テ定員トス（三十六年勅令第二百十五號及三十八年同令第八十二號ヲ以テ本條改正）

第三條　大藏省ニ左ノ三局ヲ置ク

主計局

主稅局

理財局

第四條　主計局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　總豫算總決算ニ關スル事項

二　特別會計ノ豫算決算ニ關スル事項

三　仕佛豫算ニ關スル事項

四　主計簿ノ登記ニ關スル事項

五　歲入歲出現計書ノ調製ニ關スル事項

六　諸計算書ノ下檢査ニ關スル事項

七　出納官吏ノ監督及身元保證ニ關スル事項

八　豫備金支出ニ關スル事項

九　定額繰越ノ承認及定額戻入年度開始前支出ニ關スル事項

十　收入支出ノ科目ニ關スル事項

十一　金錢及物品會計ノ統一ニ關スル事項

十二　府縣郡市町村其ノ他公共組合ノ歲計ニ關スル事項

第五條　主稅局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　國稅ノ賦課徵收ニ關スル事項

二　稅務ノ管理監督ニ關スル事項

三　民有地地種目變換ニ關スル事項

四　土地臺帳ニ關スル事項

五　稅關輸出輸入ノ調査ニ關スル事項

六　外國貿易ノ船舶及輸出入品ノ監督ニ關スル事項

七　保稅倉庫ニ關スル事項

八　大藏省所管稅外諸收入ニ關スル事項

九　府縣郡市町村其ノ他公共組合ノ諸收入ニ關スル事項

十　樟腦、樟腦油ノ製造、收納、賣渡、輸出及取締ニ關スル事項（三十六年勅令第百三十七號ヲ以テ本號追加）

十一　鹽ノ製造、收納、賣渡、輸出入及取締ニ關スル事項（三十八年勅令第八十二號ヲ以テ本號追加）

第六條　理財局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　國費ノ運用出納ニ關スル事項

二　國庫ノ出納管理ニ關スル事項

三　國庫ノ出納計算書ニ關スル事項

四　國債ノ募集借入償還及利拂ニ關スル事項

五　國債簿及國庫簿ノ登記ニ關スル事項

六　貨幣ニ關スル事項

七　紙幣、國債證券、大藏省證券及借入證書ノ取扱ニ關スル事項

八　國債計算書ノ調製ニ關スル事項

九　年金恩給及諸祿ノ給與ニ關スル事項

十　罹災救助基金ニ關スル事項（三十六年勅令第二百十五號ヲ以テ本號以下改正）

十一　金庫ノ監督ニ關スル事項

十二　銀行ノ監督ニ關スル事項
十三　銀行ニ對スル補給金及補助ニ關スル事項
十四　銀行債券ニ關スル事項
十五　國立銀行紙幣ノ處分ニ關スル事項
十六　預金保管物及供託物ニ關スル事項
十七　地方財務ノ監督ニ關スル事項
十八　一般金融ニ關スル事項
十九　府縣郡市町村其他共公組合ノ公債ニ關スル事項
二十　信託ニ關スル事項（三十八年勅令第五十號ヲ以テ本號追加）

第七條　大藏省ニ專任技師七人ヲ置ク技師ハ上官ノ指揮ヲ受ケ技術ニ關スル事務ヲ掌ル（三十五年勅令第七十八號及三十七年同令第九十五號ヲ以テ條中改正、更ニ三十八年同令第三十二號ヲ以テ全條改正）

第八條　大藏省ニ專任技手十七人ヲ置ク技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ關スル事務ニ從事ス（三十三年勅令第六十五號ヲ以テ全條改正、三十五年同令第七十八號及三十七年同令第九十五號ヲ以テ條中改正、更ニ三十八年同令第八十二號ヲ以テ全條改正）

第九條　大藏省專任屬ハ二百十六人ヲ以テ定員トス（三十五年勅令第七十八號三十六年同令第二百十五號三十七年同令第九十五號三十八年同令第八十二號及四十年同令第七十八號ヲ以テ人員改正）

第十條　本令ハ明治三十一年十一月一日ヨリ施行ス

附則

明治二十七年勅令第百九十八號ヲ廢止ス

三十八年勅令八十二號附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十八年勅令第十一號ハ之ヲ廢止ス

四十年勅令第七十八號附則

本令ハ明治四十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●陸軍省官制（明治三十六年勅令第七十五號）

第一條　陸軍大臣ハ陸軍軍政ヲ管理シ陸軍軍人軍屬ヲ統督シ及所轄諸部ヲ監督ス

第二條　陸軍省ニ副官ヲ置ク

副官ハ陸軍大臣ノ命ヲ承ケ大臣官房ノ事務ヲ掌ル

第三條　大臣官房ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　機密ニ關スル事項
二　大臣ノ官印及省印ノ管守ニ關スル事項
三　公文書類及成案文書ノ接受發送及編纂保存ニ關スル事項
四　印刷及飜譯ニ關スル事項

五　徵發物件表、報告及統計ニ關スル事項
六　軍旗及靖國神社ニ關スル事項
七　圖書保管ニ關スル事項
八　省內風紀ニ關スル事項
九　省屬判任文官ノ人事ニ關スル事項
十　本省ノ諸給與及用度ニ關スル事項
十一　例規ニ依リ取扱フヘキ庶務及各局課ニ屬セサル事項

第四條　陸軍省ニ左ノ五局ヲ置ク

人事局
軍務局
經理局
醫務局
法務局

第五條　人事局ニ補任課及恩賞課ヲ置ク

第六條　補任課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　將校、同相等官准士官及文官ノ進退、任免、補職、命課、增俸及增給ニ關スル事項
二　將校、同相當官及准士官ノ兵籍、陸軍文官名簿及停年名簿ニ關スル事項
三　將校、同相當官及高等文官ノ戰時職員表ニ關スル事項
四　退職將校、同相當官准士官ノ人事及名簿ニ關スル事項

第七條　恩賞課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　恩給ニ關スル事項
二　叙位、叙勳、記章、褒章及賞與ニ關スル事項
三　准士官、下士ノ文官採用ニ關スル事項
四　賜暇ニ關スル事項
五　結婚ニ關スル事項

第八條　軍務局ニ軍事課、步兵課、騎兵課、砲兵課及工兵課ヲ置ク

第九條　軍事課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　建制及編制ニ關スル事項
二　動員計畫、戒嚴及徵發ニ關スル事項
三　演習及檢閱ニ關スル事項
四　團隊配置ニ關スル事項
五　戰時ノ諸規則ニ關スル事項
六　外國駐在員及留學將校、同相當官ニ關スル事項
七　儀式、禮式、服制及徽章ニ關スル事項
八　軍紀風紀ニ關スル事項
九　參謀本部、教育總監部、陸軍大學校、士官學校、

中央幼年學校及地方幼年學校ニ關スル事項

第十條　歩兵課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　憲兵、歩兵、屯田兵及軍樂隊ノ本務ニ關スル事項

二　各兵科將校及憲兵科、歩兵科、屯田兵、軍樂部下士以下ノ補充ニ關スル事項

三　將校、同相當官以下補充ノ規定ニ關スル事項

四　兵役、召集及解兵ニ關スル事項

五　現役、豫備役、後備役軍人及國民軍ニ關スル事項

六　軍隊ノ內務、衛戍勤務及軍事警察ニ關スル事項

七　練兵場及小銃射擊場ニ關スル事項（築設、維持及管理ヲ除ク）

八　軍馬補充部、騎兵實施學校及獸醫學校ニ關スル事項

第十一條　騎兵課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　騎兵ノ本務ニ關スル事項

二　獸醫部勤務及教育ニ關スル事項

三　獸醫部ノ人事及其ノ人員ニ關スル事項

四　騎兵科下士以下及各兵科蹄鐵工長ノ補充ニ關スル事項

五　軍馬ノ供給、飼養、保續及徵發ニ關スル事項

六　蹄鐵術ノ教育及蹄鐵ニ關スル事項

七　獸醫材料ニ關スル事項

八　軍馬補充部、騎兵實施學校及獸醫學校ニ關スル事項

第十二條　砲兵課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　砲兵及輜重兵ノ本務ニ關スル事項

二　砲兵科及輜重兵科下士以下ノ補充ニ關スル事項

三　砲兵射擊場ニ關スル事項（築設、維持及管理ヲ除ク）

四　兵器一切ノ經理及其ノ檢査ニ關スル事項

五　要塞兵備ニ關スル事項

六　技術審査部、兵器廠、砲兵工廠、火藥研究所、野戰及要塞砲兵射擊學校並砲兵工科學校ニ關スル事項

七　國防上砲兵ニ關スル事項

八　陸軍職工ニ關スル事項

第十三條　工兵課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　工兵ノ本務ニ關スル事項

二　工兵科下士以下ノ補充ニ關スル事項

三　運輸、通信、電氣術、電信術、電燈輕氣球及使鴿ニ關スル事項

四　水陸交通路ニ關スル事項

五　要塞ノ築城及其ノ用地並要塞地帶ニ關スル事項

六　鐵道大隊、要塞司令部、對馬警備隊司令部、陸地測量部、築城部、臺灣補給廠、砲工學校及電信教導大隊ニ關スル事項

第十四條　經理局ニ主計課、衣糧課ヲ置ク

第十五條　主計課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　陸軍總豫算、決算報告及動員計畫ニ係ル豫算纂輯ニ關スル事項

二　依給、諸手當及旅費ノ規定ニ關スル事項

三　諸給與及經理規定ノ審査ニ關スル事項

四　經理部ノ勤務及教育ニ關スル事項

五　經理部ノ人事及其ノ人員補充ニ關スル事項

六　金錢ニ係ル出納官吏ニ關スル事項

七　經理學校ニ關スル事項

第十六條　衣糧課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　被服一切ノ經理及其ノ檢査ニ關スル事項

二　被服、糧秣及馬匹ニ係ル給與ノ規定ニ關スル事項

三　平時及戰時ノ糧秣諸給與、野戰軍及要塞ノ給養準備ニ關スル事項

四　經理部ノ野戰給養勤務ノ規定ニ關スル事項

五　戰用炊具馬匹手入具ニ關スル事項

六　被服廠、糧秣廠及千住製絨所ニ關スル事項

第十七條　建築課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　陸軍用地及諸建築（砲兵課及工兵課所管ニ屬スルモノヲ除ク）ニ關スル事項

二　宅料、陣營具及其ノ永續料、消耗品料、埋葬料並諸調度ノ規定ニ關スル事項

三　物品會計及出納官吏ニ關スル事項

四　官有財產ニ關スル事項

五　金櫃、公用行李ニ關スル事項

第十八條　醫務局ニ衛生課及醫事課ヲ置ク

第十九條　衛生課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　衛生部ノ勤務及教育ニ關スル事項

二　衛生部ノ人事及教育ニ關スル事項

三　衣食住、給水、排水等ノ衛生ニ關スル事項

四　防疫及治病上ノ審案ニ關スル事項

五　衛生報告、統計及衛生部員學術上ノ業績ニ關スル事項

第二十條　醫事課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　病院、休養室及轉地療養所ニ關スル事項

二　衛生材料ニ關スル事項

三　身體檢査ニ關スル事項

四　恩給診斷及傷病ニ因ル除役ニ關スル事項

五　衛生材料廠及恤兵團體ニ關スル事項

第三十一條　法務局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
一　軍事司法ニ關スル事項
二　監獄ニ關スル事項
三　特赦及罪人引渡ニ關スル事項
四　理事、錄事及監獄職員ノ人事及其ノ補充ニ關スル事項

第三十二條　法務局ノ職員ハ高等軍法會議ノ事務ニ服ス

附　則

第三十三條　陸軍省職員ハ附表ノ如シ

本令ハ明治三十六年五月一日ヨリ之ヲ施行ス

（別　表）

陸軍省職員表

局・課	官	員數
大臣	（大中將）	
次官	（中少將）	
大臣官房　秘書官	中少佐大尉	一
大臣官房　參事官		二
大臣官房　副官	大中佐　中少佐大尉	一四
大臣官房　副官	一等主計	一
人事局	長　少將	一
人事局　補任課	長　大中佐	一
人事局　恩賞課	長　大中佐	一
人事局　課員	中少佐	二
人事局　課員	大尉	二
軍務局	長　中少將	一
軍務局　軍事課	長　大中佐	一
軍務局　步兵課	長　步兵大中佐	一
軍務局　騎兵課	長　騎兵大中佐	一
軍務局　砲兵課	長　砲兵大中佐	一
軍務局　工兵課	長　工兵大中佐	一
軍務局　課員	中少佐	八
軍務局　課員	三等獸醫正	一
軍務局　課員	大尉	九
軍務局　課員	一等主計	一
經理局	長　主計總監　主計監	一
經理局　主計課	長　一二等主計正	一
經理局　衣糧課	長　一二等主計正	一
經理局　課員	三等主計正	四
經理局　課員	一等主計	七
醫務局	長　軍醫總監　軍醫監	一
醫務局　衛生課	長　一二等軍醫正	一
醫務局　醫事課	長　一二等軍醫正	一
醫務局　課員	三等軍醫正　一二等軍醫	二
局　建築課	長　一二等監督主計正	一
局　技師		一
法務局	長　理事（勅任）	一
法務局	局員　理事（三等以下）	四
屬　技手　錄事		一二　三八五

備考
一、大臣及次官ニ任セラルルモノハ現役將官ヲ以テス
二、本表定員ノ外兼務者ヲ置キ又出仕トシテ大中尉八名ヲ置クコトヲ得
三、副官又ハ課員ニ缺員アルトキハ之ニ代フルニ出仕タル將校ヲ増員スルコトヲ得
四、秘書官ハ副官ノ兼務トス

●海軍省官制（明治三十三年五月勅令第百九十四號）

第一條　海軍大臣ハ海軍軍政ヲ管理シ海軍軍人軍屬ヲ統督シ所轄諸部ヲ監督ス

第二條　海軍省ニ副官ヲ置ク
副官ハ海軍大臣ノ命ヲ承ケ大臣官房ノ事務ヲ掌ル（三十六年勅令第二百二十三號ヲ以テ本條改正）

第二條ノ二　海軍省ニ海軍文庫主管ヲ置ク
海軍文庫主管ハ上官ノ命ヲ受ケ圖書保管ニ關スル事務ヲ掌ル（三十六年勅令第百五十八號ヲ以テ追加）

第三條　海軍省ニ編修ヲ置ク
編修ハ上官ノ命ヲ承ケ飜譯編纂ノ事務ニ服ス

第四條（三十六年勅令第二百二十三號ヲ以テ削除）

第五條　海軍省ニ軍務局人事局醫務局經理局及司法局ヲ置ク

第六條　軍務局ニ第一課及第二課ヲ置キ左ノ事項ヲ管掌セシム
一　建制、編制及役務ニ關スル事項
二　軍紀風紀ニ關スル事項
三　戒嚴及徵發ニ關スル事項
四　儀式、禮式、服制及旗章ニ關スル事項
五　水路、望樓及測器ニ關スル事項
六　海上保安及運輸通信ニ關スル事項
七　艦政ニ關スル事項
八　教育、演習及檢閱ニ關スル事項

第七條　人事局ニ第一課及第二課ヲ置キ左ノ事項ヲ管掌セシム

一　高等武官、候補生、准士官及文官ノ補充、服務、進退、任免、補職、命課、增俸ニ關スル事項
二　下士卒ノ任用、徵募、進級、補充、服役、召集、簡閲點呼ニ關スル事項
三　軍人軍屬ノ叙位、叙勳、記章、褒章、賞與、恩給其ノ他身上ニ關スル事項

第八條　醫務局ニ第一課及第二課ヲ置キ左ノ事項ヲ管掌セシム
一　醫務、衞生、恩給診斷、軍人體格ニ關スル事項
二　病院及治療品ニ關スル事項
三　軍醫官及藥劑官ノ教育ニ關スル事項

第九條　經理局ニ於テハ左ノ事項ヲ管掌ス（三十六年勅令第百五十八號ヲ以テ改正）
一　豫算、決算、出納、給與、被服、糧食、通常物品、官有財產、建築及用度ニ關スル事項
二　金錢及物品會計ノ監査ニ關スル事項
三　主計官ノ教育ニ關スル事項

第十條　司法局ニ於テハ左ノ事項ヲ管掌ス
一　軍事司法、懲罰、監獄ニ關スル事項
二　主事、錄事並監獄ノ人員ニ關スル事項

第十一條　各局ニ局長及局員ヲ置ク（三十六年勅令第百五十八號ヲ以テ改正）
軍務局、人事局、醫務局及經理局ノ各課ニ課長及課員ヲ置キ司法局ニ局員ヲ置ク

第十二條　各局長ハ海軍大臣ノ命ヲ承ケ各其ノ主務ヲ掌理ス

第十三條　各局員ハ局長ノ命ヲ承ケ各其ノ事務ニ服ス（三十六年勅令第百五十八號ヲ以テ改正）

第十四條　（同上ヲ以テ削除）

第十五條　海軍省ニ編輯書記、技手及錄事ヲ置キ各上官ノ命ヲ承ケ事務ニ服セシム（同上ヲ以テ本條改正）

第十六條　司法局ノ職員ハ海軍高等軍法會議ノ事務ニ服ス

第十七條　海軍省ノ定員ハ別表ニ依ル

附則

本令ハ明治三十三年五月二十日ヨリ之ヲ施行ス

海軍省定員表

（別表）（三十五年勅令第八十八號三十六年同令第百五十八號及同年同令第二百二十三號ヲ以テ改正）

等級	官職	編修	員數
二	大臣（大中將）	一	
	次官（中少將）		
	大臣官房		
	秘書官	中少佐	二
	副官	大佐 中少佐	一
	文庫主官	少佐	一
	軍務局		四五
	局員	大佐 中少佐 機關中少監	一 五
	局長	中少將	一
	人事局		二
	局員	大佐 中少佐 機關中少監	一 四
	局長	少將	一
	醫務局		二
	局員	軍醫大監 軍醫中少監、大軍醫藥劑監	一 三
	局長	軍醫總監	一
	經理局		一
	局員	主計大監 主計中少監、大主計技師	一 七
	局長	主計總監	一
	司法局		一
	局員	主理（奏任）	二
	局長	主理（勅任）	一
	合計		九四
			內兼務二人

備考
一、大臣及次官ニ任セラルルモノハ現役將官ヲ以テス
二、本表ノ定員外兼務者ヲ置キ又出仕トシテ將校同相當官三人ヲ置クコトヲ得
三、秘書官ハ副官ノ兼務トス

●司法省官制（明治二十六年十月勅令第百四十三號）

第一條　司法大臣ハ裁判所及檢事局ヲ監督シ檢察事務ヲ指揮シ民事、刑事、非訟事件、戸籍、監獄及出獄人保護ニ關スル事項其ノ他諸般ノ司法行政事務ヲ管理ス（三十三年勅令第百六十七號ヲ以テ改正）

第二條　大臣官房ニ於テハ通則ニ掲クルモノノ外裁判所所屬吏員及辯護士ノ身分ニ關スル事務ヲ掌ル（三十三年勅令第二百七號及三十六年同令第二百二十四號ヲ以テ條中改正）

第三條　司法省專任參事官ハ三人專任書記官ハ二人ヲ以テ定員トス（三十三年勅令第百六十七號同第二百七號及三十六年同令第二百二十四號ヲ以テ改正）

第四條　司法省ニ左ノ二局ヲ置ク（三十三年勅令第百六十七號ヲ以テ改正）

民刑局

監獄局

第五條　民刑局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル（同上及三十六年同令第二百二十四號ヲ以テ本條改正）

一　裁判所ノ設立、廢止並管轄區域及其ノ變更ニ關スル事項

二　民事、刑事及非訟事件ニ關スル事項

三　裁判及檢察ノ事務ニ關スル事項

四　恩赦、復權及死刑執行ニ關スル事項

五　戸籍ニ關スル事項

第六條　監獄局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル（同上及二十六年同令第二百二十四號ヲ以テ本條改正）

一　監獄ニ關スル事項

二　假出獄、免幽閉、監視假免及出獄人保護ニ關スル事項

第七條　司法省ニ專任監獄事務官二人ヲ置キ奏任トシ監獄局ニ屬シ監獄ノ事務ヲ掌ル（三十三年勅令第百六十七號、三十四年同令第百二十九號及三十六年同令第二百二十四號ヲ以テ改正）

第八條　司法省屬ハ八十一人ヲ以テ定員トス（三十五年勅令第百六十七號ヲ以テ追加、三十五年同令第九十二號及三十六年同令第二百二十四號ヲ以テ條中改正）

第九條　司法省ニ專任技師二人專任技手五人ヲ置ク（同上）

●文部省官制（明治三十一年十月勅令第二百七十九號）

第一條　文部大臣ハ教育學藝ニ關スル事務ヲ管理ス

第二條　大臣官房ニ於テハ通則ニ掲クルモノノ外左ノ事務ヲ掌ル（三十三年勅令第百六號同令第二百八號及三十六年同令第二百二十七號ヲ以テ改正）

一　（三十六年勅令第二百二十七號ヲ以テ本號削除）

二　公立學校職員ニ關スル事項

三　（三十六年勅令第二百二十七號ヲ以テ本號削除）

四　圖書ニ關スル事項

五　建築營繕ニ關スル事項

六　高等教育會議ニ關スル事項

七　學校衛生ニ關スル事項

八　博覽會ニ關スル事項

九　褒賞ニ關スル事項

第三條　文部省專任參事官ハ三人專任書記官ハ二人ヲ以テ定員トス（三十三年勅令第二百八號及三十六年同令第二百二十七號ヲ以テ改正）

第四條　文部省ニ左ノ三局ヲ置ク（三十三年勅令第百六號ヲ以テ條中改正）

專門學務局

普通學務局

實業學務局

第五條　專門學務局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル（同上ヲ以テ改正）

一　帝國大學及高等學校ニ關スル事項

二　專門學校ニ關スル事項

三　以上ノ學校ニ準スヘキ各種學校ニ關スル事項

四　海外留學生及教員ノ海外派遣ニ關スル事項

五　圖書館及博物館ニ關スル事項

六　天文氣象臺及測候所ニ關スル事項

七　學術技藝ノ奬勵及調査ニ關スル事項

八　測地學委員會及震災豫防調査會ニ關スル事項

九　學士會院ニ關スル事項

十　學術會ニ關スル事項

十一　學位及之ニ類スル稱號ニ關スル事項

十二　醫術開業試驗及藥劑師試驗ニ關スル事項（三十六年勅令第五十九號ヲ以テ本號追加）

第六條　普通學務局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　師範教育ニ關スル事項

二　中學校ニ關スル事項（同上ヲ以テ本號追加）

三　小學校及幼稚園ニ關スル事項

四　高等女學校ニ關スル事項

五　盲啞學校ニ關スル事項

六　以上ノ學校ニ準スヘキ各種學校ニ關スル事項

七　教育博物館ニ關スル事項

八　通俗教育及教育會ニ關スル事項
九　學齢兒童ノ就學ニ關スル事項
第六條ノ二　實業學務局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル（同上ヲ以テ追加）
一　工業學校ニ關スル事項
二　農業學校ニ關スル事項
三　商業學校ニ關スル事項
四　公立及私立商船學校ニ關スル事項
五　徒弟學校及實業補習學校ニ關スル事項
六　以上ノ學校ニ準スベキ各種學校ニ關スル事項
七　實業教育費國庫補助ニ關スル事項
八　實業學校教員ノ養成ニ關スル事項
第七條　文部省ニ專任視學官十一人ヲ置ク奏任トス學事ノ視察ヲ掌リ又各局ニ屬シ其ノ事務ヲ掌ル（四十一年勅令第六十七號ヲ以テ定員改正）
第八條　文部省ニ專任圖書審査官二人ヲ置ク奏任トス圖書ノ審査ヲ掌ル（三十六年勅令第二百二十七號ヲ以テ本條改正）
第八條ノ二　文部省ニ專任編修五人ヲ置ク奏任トス教科用圖書ノ編修ヲ掌ル（三十七年勅令第四十九號ヲ以テ本條追加、三十八年同令第九十二號ヲ以テ人員改正）
第九條　文部省ニ專任技師三人ヲ置ク建築ニ關スル事務ヲ掌ル（三十二年勅令第百四十一號三十五年同令第九十五號及三十六年同令第二百二十七號ヲ以テ本項改正）
文部省ニ專任技手八人ヲ置ク技師ノ事務ヲ助ク
第十條（三十六年勅令第二百三十七號ヲ以テ削除）
第十一條　文部省屬ハ五十五人ヲ以テ定員トス（三十五年勅令第九十五號、三十六年同令第二百二十七號、三十七年同令第四十九號及三十八年同令第九十二號ヲ以テ人員改正）

附則

第十二條　本令ハ明治三十一年十一月一日ヨリ施行ス
三十八年勅令第九十二號附則
本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス
四十一年勅令第六十七號附則
本令ハ明治四十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●農商務省官制（明治三十一年十月勅令第二百八十二號）

第一條　農商務大臣ハ農、商、工、水産、林野、鑛山及地質ニ關スル事務ヲ管理ス（三十六年勅令第二百三十三號ヲ以テ改正）
第二條　大臣官房ニ於テハ通則ニ掲クルモノノ外內外博覽會ニ關スル事務ヲ掌ル（三十三年勅令第二百九號及三十二年同令第二百三十三號ヲ以テ改正）
第三條　農商務省專任參事官ハ四人專任書記官ハ四人ヲ以テ定員トス（三十三年勅令第二百九號、三十五年勅令第百六十七號及三十六年同令第二百三十三號ヲ以テ改正）
第四條　農商務省ニ左ノ五局ヲ置ク（三十六年勅令第二百三十三號及三十八年同令第百九十七號ヲ以テ本條改正）
農務局
商工局
山林局
鑛山局
水産局
第五條　農務局ニ於テハ農事、蠶、茶、畜産、家畜衛生及狩獵ニ關スル事務ヲ掌ル
第六條　商工局ニ於テハ商事、工業及度量衡ニ關スル事務ヲ掌ル
商工局ニ商品陳列館ヲ置キ內外ノ商品見本及參考物品ヲ蒐輯陳列シ衆庶ノ觀覽參考ニ供シ且內外貿易ニ關スル通信事務ヲ掌ラシム（三十九年勅令第九十四號ヲ以テ本項改正）
第七條　山林局ニ於テハ森林原野ニ關スル事務ヲ掌ル
第八條　鑛山局ニ於テハ鑛業ニ關スル事務ヲ掌ル
鑛山局ニ地質調査所ヲ置キ地質調査ニ關スル事項ヲ掌ラシム（三十八年勅令第百九十七號ヲ以テ本項追加）
地質調査所長ハ農商務技師ヲ以テ之ニ充ツ（同上）
第九條（三十六年勅令第二百三十三號ヲ以テ削除）
第十條　水産局ニ於テハ水産ニ關スル事務ヲ掌ル
商工局ニ中央度量衡器檢定所ヲ置キ度量衡器ノ甲種檢定及檢査調査ニ關スル事項ヲ掌ラシム（三十六年勅令第二百八十八號ヲ以テ本項追加）
中央度量衡器檢定所ニ支所ヲ置ク支所ハ之ヲ大阪ニ置ク（同上）
中央度量衡器檢定所長及支所長ハ農商務技師ヲ以テ之ニ充ツ（同上）
第十一條　商工局ニ保險事務官專任二人保險事務官補專任四人ヲ置ク
保險事務官ハ奏任トス保險ニ關スル事務ヲ掌ル
保險事務官補ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ保險ニ關スル事務ニ從事ス（四十年勅令第百八十一號ヲ以テ全條改正）
第十二條　農商務省ニ統計事務官專任一人ヲ置ク
統計事務官ハ奏任トス產業ニ關スル諸般ノ統計事務ヲ掌ル（同上）
第十三條　商品陳列館ニ技師二人ヲ置ク（三十五年勅令第百

二號及三十九年同令第九十四號ヲ以テ條中削除）

第十四條　農商務省ニ專任技師四十二人專任技手六十八人ヲ置ク（三十二年勅令第二百三十六號、三十五年同令第百六十七條、三十六年同令第二百三十三號、同年同令第二百八十九號、三十八年同令第九十八號、三十九年同令第九十四號及四十年同令第二百八十三號ヲ以テ條中改正）

第十五條　農商務屬ハ九十七人ヲ以テ定員トス（三十二年勅令第二百三十六號、三十五年同令第百六十七條、三十六年同令第二百三十三號、同年同令第二百八十九號、三十八年同令第九十八號、三十九年同令第九十四號及四十年同令第百八十一號ヲ以テ條中改正）

附　則

第十六條　本令ハ明治三十一年十一月一日ヨリ施行ス

三十六年勅令第二百三十三號附則

明治三十七年三月三十一日迄ハ第四條ニ定ムル定員ノ外臨時農商務省ニ技師二人及技手五人ヲ置キ地質調査所ニ屬シ油田調査ニ關スル事務ニ從事セシム

三十八年勅令第九十八號附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

四十年勅令第百八十一號附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●遞信省官制（明治三十一年十月勅令第二百九十五號）

第一條　遞信大臣ハ官設鐵道、郵便、小包郵便、郵便爲替、郵便貯金、電信、電話及航路標識ヲ管理シ私設鐵道、電氣、造船、水陸運輸ニ關スル事業及航路、船舶、海員ヲ監督ス（三十八年勅令第百一號ヲ以テ條中改正）

第二條　遞信省專任參事官ハ三人專任書記官ハ八十人ヲ以テ定員トス（三十三年勅令第百七十七號、三十六年同令第二百四十六號、三十八年同令第百一號及三十九年同令第七十九號ヲ以テ定員改正）

第三條　遞信省ニ左ノ局所ヲ置ク（三十六年勅令第二百四十六號ヲ以テ改正）

鐵道局
通信局
管船局
經理局
電信燈臺用品製造所

第四條　鐵道局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　鐵道ノ監督ニ關スル事項
二　私設鐵道ノ免許ニ關スル事項
三　鐵道補助金ニ關スル事項

第五條　通信局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　郵便、小包郵便、郵便爲替、郵便貯金、電信及電話ニ關スル事項
二　陸運及電氣事業ノ監督ニ關スル事項
三　（三十六年勅令第二百四十六號ヲ以テ削除）

第六條　管船局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　航路標識ニ關スル事項
二　航路、船舶、海員、水運及保護海事會社ノ監督ニ關スル事項

第六條ノ二　經理局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル（三十六年勅令第二百四十六號ヲ以テ本條追加）

一　本省所管ノ經費及諸收入ノ豫算決算並會計ニ關スル事項
二　會計ノ監査ニ關スル事項
三　本省所管ノ官有財産及物品ニ關スル事項

第七條　電信燈臺用品製造所ニ於テハ電信燈臺用品ノ作業ニ關スル事務ヲ掌ル

所長ハ遞信省高等官ヲシテ之ヲ兼ネシム

第七條ノ二　遞信省ニ鐵道事務官專任一人及鐵道書記專任二人ヲ置キ鐵道局ニ屬セシム（三十六年勅令第二百四十六號ヲ以テ本條追加）

鐵道事務官ハ奏任トス鐵道營業ノ監視ニ關スル事務ヲ掌ル

鐵道書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ鐵道營業ノ監視ニ關スル事務ニ從事ス（三十四年勅令第百號ヲ以テ全條追加、三十五年勅令第百十四號ヲ以テ定員改正）

第七條ノ三　遞信省ニ電氣事務官專任二人ヲ置キ通信局ニ屬セシム

電氣事務官ハ奏任トス電氣事業監督ニ關スル事務ヲ掌ル（四十年勅令第二百號ヲ以テ改正）

第八條　遞信省ニ專任技師四十五人ヲ置ク但シ內三人以內ヲ勅任トス（三十五年勅令第百十四號、三十六年同令第二百四十六號、三十八年同令第百一號、三十九年同令第七十五號及四十年同令第二百號ヲ以テ定員改正）

第九條　遞信省屬ハ專任二百八十二人ヲ以テ定員トス（同上）

第十條　遞信省ニ專任技手百四人ヲ置ク（同上）

附　則

第十一條　本令ハ明治三十一年十一月一日ヨリ施行ス

三十八年勅令第百一號附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●會計檢査院法（明治二十二年五月法律第十五號）

第一章　組織

第一條　會計檢査院ハ天皇ニ直隷シ國務大臣ニ對シ特立ノ地位ヲ有ス

第二條　會計檢査院ハ院長一員部長三員檢査官十二員ヲ置キ之ヲ會計檢査官トシ別ニ書記官二員檢査官補二十員及屬若干員ヲ置ク（二十九年法律第九十號、三十三年法律第八十一號ヲ以テ檢査官補ノ定員ヲ改ム）

第三條　院長ハ勅任トシ部長ハ勅任又ハ奏任トシ檢査官書記官及檢査官補ハ奏任トシ屬ハ判任トス

第四條　院長ハ院務ヲ總理シ部長ハ部務ヲ掌理ス

院長事故アルトキハ上席ノ部長ヲシテ代理セシムルコトヲ得

第五條　會計檢査院ニ三部ヲ設ケ各部部長一員檢査官四員ヲ以テ檢査ノ事務ヲ分掌ス

第六條　會計檢査官ハ勅令ニ定メタル資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ任ス

會計檢査官ハ刑事裁判若ハ懲戒裁判ニ依ルニアラサレハ其ノ意ニ反シテ退官轉官又ハ非職ヲ命セラルルコトナシ

會計檢査官ニ關ル懲戒ノ條規ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第七條　父子兄弟ハ同時ニ會計檢査官トナルコトヲ得ス

第八條　會計檢査官ハ他ノ官職ヲ兼ネ及帝國議會又ハ地方議會ノ議員トナルコトヲ得ス

第九條　會計檢査院ノ議事ハ總會議又ハ部會議ヲ以テ決ス總會議ハ院長ヲ以テ議長トシ部會議ハ部長ヲ以テ議長トス

議事ハ多數ヲ以テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第十條　左ノ場合ニ於テハ總會議ヲ以テ議決ス

一　第十五條ニ依リ上奏ヲ爲シ又ハ天皇ノ下問ニ奉答スルトキ

二　第十四條ニ依リ報告書ヲ確定スルトキ

三　第十七條ニ依リ意見ヲ陳述スルトキ

四　檢査事務ノ規程計算證明ノ樣式及提出ノ期限ヲ定メ又ハ之ヲ改正スルトキ

五　其ノ他院長ニ於テ總會議ニ付スルノ必要アリト認メタルトキ

第十一條　計算檢査ノ判決ハ凡テ會議ニ於テス其ノ總會議ニ於テスルト部會議ニ於テスルトハ會計檢査院長ノ定ムル所ニ依ル

第二章　職權

第十二條　會計檢査院ハ官金ノ收支官有物及國債ニ關ル計算ヲ檢査確定シテ會計ヲ監督ス

第十三條　會計檢査院ノ檢査ヲ要スルモノ左ノ如シ

一　總決算

二　各官廳及官立諸營造ノ收支及官有物ニ關ル決算

三　政府ヨリ補助金又ハ特約保證ヲ與フル團體及公立私立諸營造ノ收支ニ關ル決算

四　法律勅令ニ依リ特ニ會計檢査院ノ檢査ニ屬セラレタル決算

第十四條　會計檢査院ハ憲法第七十二條ニ依リ決算ヲ檢査確定スルト同時ニ左ノ諸項ニ付報告書ヲ作ルヘシ

一　總決算及各省決算報告書ノ金額ト各出納官吏ノ提出シタル計算書ノ金額ト符合スルヤ否ヤ

二　歳入ノ賦課徴收歳出ノ使用官有物ノ得有沽賣讓與及利用ハ各々其ノ豫算ノ規程又ハ法律勅令ニ違フコトナキヤ否ヤ

三　豫算超過又ハ豫算外ノ支出ニシテ議會ノ承諾ヲ受ケサルモノナキヤ否ヤ

第十五條　會計檢査院ハ各年度ノ會計檢査ノ成績ヲ上奏シ其ノ成績ニ就テ法律又ハ行政上ノ改正ヲ必要トスヘキ事項アリト認ムルトキハ併セテ意見ヲ上奏スルコトヲ得

第十六條　會計檢査院ハ各官廳中一部ニ屬スル計算ノ檢査及責任解除ヲ其ノ廳ニ委託スルコトヲ得但シ其ノ檢査ノ成績ハ該廳ヲシテ之ヲ會計檢査院ニ報告セシムヘシ

前項ノ委託ニ拘ラス會計檢査院ハ時宜ニ依リ其ノ所管ノ官廳ヲシテ計算書ヲ送付セシメ之カ檢査ヲ行フコトアルヘシ

第十三條第三項團體及公立私立諸營造ノ決算ニ就テモ亦本條ヲ適用スルコトヲ得

第十七條　金庫ノ出納及簿記上ニ關ル各省ノ命令ニ付會計檢査院ハ其ノ發布ノ前通知ヲ受ケ意見アルトキハ之ヲ陳述スルコトヲ得

會計檢査院ハ收入及支出ニ關ル規則ヲ定メ及既定ノ規則ヲ改正スル各省ノ命令ニ付其ノ發布ノ前通知ヲ受ク

第十八條　會計檢査院ハ計算書及計算證明ノ樣式並ニ其ノ提出及推問ニ對スル答辯ノ期限ヲ定ム

第十九條　會計檢査院ハ各官廳ヲシテ檢査上必要ナル簿書及報告ヲ提出セシメ及主任官吏ノ辯明書ヲ求ムルコ

トヲ得

會計檢査院長ハ檢査上必要ト認ムルトキハ主任官吏ヲ派遣シ實地檢査ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ豫メ本屬長官ニ通知シ該長官ハ主任官吏ヲシテ檢査ニ立會ヲ爲サシムルコトヲ得

第二十條　會計檢査院ハ出納官吏ノ計算書及證憑書類ヲ檢査シ正當ナリト判決シタルトキハ該官ニ對シ認可狀ヲ付シ其ノ責任ヲ解除ス若必要ナル場合ニ於テハ之ヲ推問シ辯明又ハ正誤ヲ爲サシメ仍正當ナラスト判決シタルトキハ本屬長官ニ移牒シテ處分ヲ爲サシム

第二十一條　會計檢査院ノ判決ニ據リ辨償ノ責ヲ負フ者ハ天皇ノ恩赦ニ由ルノ外本屬長官之ヲ減免スルコトヲ得ス

第二十二條　出納官吏計算書及證憑書ノ提出ヲ怠リ又ハ樣式ヲ守ラサルトキハ會計檢査院ハ本屬長官ニ移牒シテ懲戒處分ヲ要求スルコトヲ得

第二十三條　政府ノ機密費ニ關ル計算ハ會計檢査院ニ於テ檢査ヲ行フ限ニ在ラス

第二十四條　會計檢査院ハ認可狀ヲ付スルノ後ト雖モ其ノ付シタル日ヨリ五箇年以內ニ於テハ出納官吏ヨリ之ヲ請求スルカ又ハ計算書ノ誤謬脫漏二重記載アルコトヲ發見シタルトキハ再審ヲ爲スコトヲ得但シ詐僞ノ證憑ヲ發見シタルトキハ五箇年後ト雖モ再審ヲ爲スコトヲ得

出納官吏ハ會計檢査院再審ノ判決ニ對シテ再ヒ審判ヲ請求スルコトヲ得ス

第三章　附則

第二十五條　會計檢査院ノ事務章程ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

●行政裁判所處務規程

（明治二十三年八月勅令第百九十二號）

第一條　行政裁判所部長故障アルトキハ其部ノ評定官行政裁判法第七條第二項ノ順序ニ從ヒ之ヲ代理ス（三十四年勅令第七十三號ヲ以テ全條改正）

行政裁判所評定官故障アルトキノ代理順序ハ行政裁判所長官之ヲ定ム

第二條　部長ハ一事件毎ニ審判準備ノ爲メ其部ノ評定官中ノ一名若ハ二名ニ專理員ヲ指命スルコトヲ得（同上）

專理員ハ合議ノ際先ツ事實、證憑及爭點ニ付說明ヲ爲スヘシ

第三條　判決ハ審問終結シタル期日又ハ其期日ヨリ十四日以內ニ之ヲ言渡スヘシ（同上）

第四條　裁判長行政裁判法第三十八條第二項ノ場合ニ於テ科罰ヲ言渡シタルトキハ書記ヲシテ訴訟ノ記錄ニ之ヲ記入セシム

第五條　每年七月十一日ヨリ九月十日マテノ間ハ行政裁判所ニ於テ緊急ノ事項ト認ムルモノノ外既ニ著手シタル訴訟ヲ中止シ並ニ新ナル訴訟ニ著手セス

第六條　行政裁判所ノ總會議ハ評定官總員三分ノ二以上列席スルニ非サレハ議決ヲ爲スコトヲ得ス

第七條　總會議ノ議事ハ長官之ヲ整理ス若シ長官故障アルトキハ評定官中官等最モ高キ者之ヲ代理ス

第七條ノ二　法規ノ解釋ニ付判例ヲ變更セムトスルトキ又ハ法規ノ解釋ヲ一定スルノ必要アルトキハ長官ハ之ヲ總會議ノ議ニ付ス（三十四年勅令第七十三號ヲ以テ追加）

第八條　行政裁判所ハ訴訟ノ呼出狀及其他ノ書類ヲ使丁若ハ郵便ヲ以テ送達シ又ハ通常裁判所ニ囑託シテ送達セシムルコトヲ得

第九條　行政裁判所ハ法律命令ノ範圍內ニ於テ其職權ニ屬スル事件ニ付告示ヲ發スルコトヲ得

第十條　行政裁判所長官ハ法律命令ノ範圍內ニ於テ事務取扱ノ順序方法ニ關スル規定ヲ設クルコトヲ得

書記ノ職務ニ關スル規程ハ行政裁判所之ヲ定ム

●地方官官制

（明治三十八年四月勅令第百四十號）

第一條　各府縣ニ左ノ職員ヲ置ク（四十年勅令第二百六十六號ヲ以テ條中改正）

知事、事務官、事務官補、警視、技師、屬、視學、警部、技手、通譯

第二條　知事ハ勅任トス

第三條　事務官ハ東京府ハ二人其ノ他ノ府縣ハ三人奏任トス但シ內務大臣ノ指定スル府縣ニ於テハ四人ヲ置クコトヲ得

事務官補ハ奏任トス

警視ハ奏任トス（四十年勅令第二百六十六號ヲ以テ本條改正）

第四條　屬、視學、警部及通譯ハ判任トス

屬及警部ハ各府縣ヲ通シテ四千九百五十一人ヲ以テ定員トシ其ノ每府縣ノ定員ハ內務大臣之ヲ定メ其ノ各官ノ定員ハ內務大臣ノ認可ヲ經テ知事之ヲ定ム（同上ヲ以テ本項中定員改正）

視學ハ各府縣ヲ通シテ九十二人ヲ以テ定員トシ其ノ每府縣ノ定員ハ內務大臣之ヲ定ム

第五條　事務官補、警視、技師、技手及通譯ハ府縣ノ須要ニ依リ俸給豫算定額內ニ於テ之ヲ置ク但シ事務官補ハ二人、警視ハ警察部ニ屬スル者ハ大阪府ハ二人、其ノ他ノ府縣ハ一人、警察署長ニ充ツル者ハ各府縣ヲ通シテ八十人ヲ超ユルコトヲ得ス（四十年勅令第二百六十六號ヲ以テ本條改正）

第六條　知事ハ內務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ各省ノ主務ニ付テハ各省大臣ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ執行シ部內ノ行政事務ヲ管理ス

第七條　知事ハ部內ノ行政事務ニ付其ノ職權又ハ特別ノ委任ニ依リ管內一般又ハ其一部ニ府縣令ヲ發スルコトヲ得

第八條　知事ハ非常急變ノ場合ニ臨ミ兵力ヲ要シ又ハ警護ノ爲兵備ヲ要スルトキハ師團長又ハ旅團長ニ移牒シテ出兵ヲ請フコトヲ得

第九條　知事ハ所部ノ官吏ヲ指揮監督シ奏任官ノ功過ハ內務大臣ニ具狀シ判任官以下ノ進退ハ之ヲ行フ

第十條　知事ハ所部ノ奏任官ノ懲戒ヲ內務大臣ニ具狀シ判任官以下ニ付テハ之ヲ行フ

第十一條　知事ハ郡長島司ノ處分又ハ命令ノ成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ處分又ハ命令ヲ取消シ又ハ停止スルコトヲ得知事ハ行政事務ニ付其ノ內部ノ市長ヲ指揮監督シ其ノ處分ニ付テハ前項ノ例ニ依ル

第十二條　知事ハ廳中處務ノ細則ヲ設クルコトヲ得

第十三條　知事事故アルトキハ內務部長タル事務官其ノ職務ヲ代理ス

知事及內務部長タル事務官共ニ事故アルトキハ內務大臣ニ於テ他ノ事務官ノ一人ヲシテ知事ノ職務ヲ代理セシム知事ハ府縣ノ官吏ヲシテ其ノ事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得（四十年勅令第二百六十六號ヲ以テ改正）

第十四條　知事ハ其ノ職權ニ屬スル事務ノ一部ヲ郡長、島司又ハ市長ニ委任スルコトヲ得

第十五條　各府縣ニ知事官房ヲ置キ左ノ事務ヲ掌ラシム

一　官吏ノ進退及身分ニ關スル事項

二　文書ノ往復及記錄編纂ニ關スル事項

三　官印府縣印ノ管守ニ關スル事項

四　褒賞ニ關スル事項

第十六條　各府縣ニ部ヲ置キ事務ヲ分掌セシムルコト左ノ如シ（四十年勅令第二百六十六號ヲ以テ本條改正）

內務部

一　議員選擧ニ關スル事項

二　府縣行政及郡市町村ノ他公共團體ノ行政ノ監督ニ關スル事項

三　賑恤救濟ニ關スル事項

四　土木ニ關スル事項

五　會計ニ關スル事項

六　教育ニ關スル事項

七　社寺及宗教ニ關スル事項

八　農工商森林水產ニ關スル事項

九　兵事ニ關スル事項

十　他ノ主掌ニ屬セサル事項

東京府ニ於テハ右ノ外衛生ニ關スル事項

警察部

一　警察ニ關スル事項

二　衛生ニ關スル事項

第十七條　郡長ハ事務官ヲ以テ之ニ充ツ知事ノ命ヲ受ケ部下ノ官吏ヲ指揮監督シ所部ノ事務ヲ掌理ス

第十八條　郡長事故アルトキハ知事ニ於テ府縣官吏ノ一人ヲシテ其ノ事務ヲ代理セシム

第十九條　部長ニ充テラレサル事務官ハ知事ノ命ヲ受ケ事務ヲ分掌ス

知事ハ事務官ノ一人ヲシテ齋議立案ヲ掌ラシムルコトヲ得

第二十條　各府縣ニ警務長ヲ置キ警察部長タル事務官ヲ以テ之ニ充ツ（四十年勅令第二百六十六號ヲ以テ本條中改正）

警務長ハ警察事務ノ執行ニ關シ知事ノ命ヲ承ケ警視警部及巡査ヲ指揮監督ス

第二十條ノ二　事務官補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ事務ヲ分掌ス（四十年勅令第二百六十六號ヲ以テ本條追加）

第二十一條　警視ハ警察部ニ屬シ又ハ內務大臣ノ指定シタル警察署ノ署長ト爲リ上官ノ指揮ヲ承ケ其ノ部署ノ事務ヲ掌理ス（同上ヲ以テ本項中改正）

第二十二條　各部ニ分課ヲ設クルコトヲ要スルトキハ知事之ヲ定メ內務大臣ニ報告スヘシ

第二十三條　屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第二十四條　視學ハ上官ノ指揮ヲ承ケ學事ノ視察其ノ他學事ニ關スル庶務ニ從事ス

第二十五條　警部ハ上官ノ指揮ヲ承ケ警察事務ヲ分掌シ部下ノ巡査ヲ指揮監督ス

第二十六條　通譯ハ上官ノ指揮ヲ承ケ飜譯通辯ニ從事ス

第二十七條　各郡市ニ警察署ヲ置ク但シ內務大臣ハ地方

ノ必要ニ應シ別ニ區域ヲ定メテ警察署ヲ置クコトヲ得
知事必要アリト認ムルトキハ警察署ノ下ニ警察分署ヲ置クコトヲ得

第二十八條　警察署長ハ警視ヲ以テ充ツル場合ヲ除クノ外警部ヲ以テ之ニ充テ警察分署長ハ警部ヲ以テ之ニ充ツ

警察署長及警察分署長ハ上官ノ指揮ヲ受ケ其ノ署主管ノ事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ指揮監督ス

第二十九條　各府縣ニ巡査ヲ置ク判任官ノ待遇トス

巡査ニ關スル規定ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第三十條　府縣ニ警察醫ヲ置クコトヲ得

警察醫ハ判任官ノ待遇トス上官ノ指揮ヲ承ケ警察ニ關スル醫務ニ從事ス

第三十一條　東京府ノ警察ニ關スル事項ハ警視廳官制ニ依ル

第三十二條　各郡ニ左ノ職員ヲ置ク

郡長　郡書記　郡視學

第三十三條　郡長ハ奏任トス知事ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ部內ニ執行シ部內ノ行政事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ指揮監督ス

第三十四條　郡長ハ行政事務ニ付其ノ部內ノ町村長ヲ指揮監督ス

第三十五條　郡長ハ町村長ノ處分成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ處分ヲ取消シ又ハ停止スルコトヲ得

第三十六條　郡長ハ部下ノ判任官ノ進退ヲ知事ニ具申スルコトヲ得

第三十七條　郡長ハ法律命令ニ依リ又ハ知事ヨリ委任セラレタル事件ニ付郡令ヲ發スルコトヲ得

第三十八條　郡長事故アル時ハ上席郡書記其ノ職務ヲ代理ス

第三十九條　郡長ハ郡ノ官吏ヲシテ其ノ事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得

第四十條　郡書記ハ判任トス其ノ定員ハ內務大臣ノ認可ヲ經テ知事之ヲ定ム

郡書記ハ郡長ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第四十一條　郡視學ハ一人判任トス郡長ノ命ヲ承ケ學事ノ視察其ノ他學事ニ關スル庶務ニ從事ス

第四十二條　知事ハ須要ニ依リ郡ニ技手ヲ置クコトヲ得

第四十三條　勅令ヲ以テ指定スル島地ニ島廳ヲ置ク

知事必要アリト認ムルトキハ內務大臣ノ認可ヲ經テ島廳出張所ヲ置クコトヲ得

第四十四條　各島廳ニ左ノ職員ヲ置ク

島司　島廳書記　島廳視學

第四十五條　島司ハ奏任トス知事ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ部內ニ執行シ部內ノ行政事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ指揮監督ス

第四十六條　島司ハ法律命令ニ依リ又ハ知事ヨリ委任セラレタル事件ニ付島廳令ヲ發スルコトヲ得

第四十七條　島司ハ部下ノ判任官ノ進退ヲ知事ニ具申スルコトヲ得

第四十八條　島司ハ行政事務ニ付其ノ部內ノ町村長ヲ指揮監督ス

第四十九條　島司ハ町村長ノ處分成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ處分ヲ取消シ又ハ停止スルコトヲ得

第五十條　島司事故アル時ハ上席島廳書記其職務ヲ代理ス

第五十一條　島司ハ島廳ノ官吏ヲシテ其ノ事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得

第五十二條　島廳出張所長ハ島廳書記ヲ以テ之ニ充ツ島廳出張所長ハ上官ノ指揮ヲ承ケ知事ノ定ムル所ニ依リ出張所主管ノ事務ヲ處理シ部下ノ官吏ヲ指揮監督ス

第五十三條　島廳書記ハ判任トス其ノ定員ハ其ノ府縣判任官ノ定員內ニ於テ知事之ヲ定ム

島廳書記ハ島司ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第五十四條　島廳視學ハ一人判任トシ當分ノ內島廳書記ヲシテ之ヲ兼ネシム島司ノ命ヲ承ケ學事ノ視察其ノ他學事ニ關スル庶務ニ從事ス

第五十五條　知事ハ須要ニ依リ島廳ニ技手ヲ置クコトヲ得

第五十六條　本令中市長トアルハ東京市、京都市、大阪市其ノ他人口二十萬以上ノ市ノ區長、町村長トアルハ戶長其ノ他之ニ準スヘキモノヲ包含ス

附則

明治三十三年勅令第二百四十三號ハ之ヲ廢止ス

四十年勅令第二百六十六號附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●北海道廳官制（明治三十八年四月勅令第三十九號）

第一條　北海道廳ニ左ノ職員ヲ置ク

長官

事務官

支廳長
警視
技師
屬
視學
警部
技手
通譯

第二條　長官ハ勅任トス

第三條　事務官ハ七人奏任トス但第一部長ニ充ツル事務官ハ勅任トナスコトヲ得

第四條　支廳長ハ奏任トス

第五條　警視ハ專任九人奏任トス

第六條　技師ハ專任二十二人ヲ以テ定員トス（四十年勅令第百五十一號ヲ以テ定員改正）

第七條　屬、視學、警部及通譯ハ判任トス

屬、警部ハ通シテ四百二十人、視學ハ八人、技手ハ二百五人、通譯ハ二人ヲ以テ定員トス（三十九年勅令第八十四號及四十年同令第百五十一號ヲ以テ定員改正）

第八條　前各條ノ定員ノ外農事試驗ニ關スル職員ヲ置ク其ノ定員ハ專任技師四人及專任技手五人トス（同上）

第九條　長官ハ內務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ各省ノ主務ニ付テハ各省大臣ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ執行シ北海道ノ拓地殖民ノ事務及部內ノ行政事務ヲ總理ス

第十條　長官ハ北海道ノ事務ニ付其ノ職權又ハ特別ノ委任ニ依リ管內一般又ハ其ノ一部ニ廳令ヲ發スルコトヲ得

第十一條　長官ハ非常急變ノ場合ニ臨ミ兵力ヲ要シ又ハ警護ノ爲兵備ヲ要スルトキハ師團長ニ移牒シ出兵ヲ請フコトヲ得

第十二條　長官ハ所部ノ官吏ヲ指揮監督シ高等官ノ功過ハ內務大臣ニ具狀シ判任官以下ノ進退ハ之ヲ行フ

第十三條　長官ハ所部ノ高等官ノ懲戒ヲ內務大臣ニ具狀シ判任官以下ニ付テハ之ヲ行フ

第十四條　長官ハ支廳長ノ處分又ハ命令ノ成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ處分又ハ命令ヲ取消シ又ハ停止スルコトヲ得

長官ハ行政事務ニ付其ノ部內ノ區長ヲ指揮監督シ其ノ處分ニ付テハ前項ノ例ニ依ル

第十五條　長官ハ廳中處務ノ細則ヲ設クルコトヲ得

第十六條　長官事故アルトキハ第一部長タル事務官其ノ職務ヲ代理ス

長官及第一部長タル事務官共ニ事故アルトキハ內務大臣ニ於テ他ノ事務官ノ一人ヲシテ長官ノ職務ヲ代理セシム

長官ハ道廳ノ官吏ヲシテ其ノ事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得

第十七條　長官ハ其ノ職權ニ關スル事務ノ一部ヲ支廳長又ハ區長ニ委任スルコトヲ得

第十八條　北海道廳ニ長官々房ヲ置キ左ノ事務ヲ掌ラシム

一　官吏ノ進退及身分ニ關スル事項
二　文書ノ往復及記錄編纂ニ關スル事項
三　官印廳印ノ管守ニ關スル事項
四　褒賞ニ關スル事項

第十九條　道廳ニ部ヲ置キ事務ヲ分掌セシムルコト左ノ如シ

第一部

一　支廳、戶長役場、郡町村總代人及區町村其ノ他公共組合ニ關スル事項
二　議員選擧、北海道廳及地方費ニ關スル事項
三　賑恤救濟ニ關スル事項
四　道廳ニ關スル國庫費ノ會計ニ關スル事項
五　地方費經濟ニ屬スル收支出納ニ關スル事項
六　道廳所管ノ官有財產及物品ニ關スル事項
七　地方費經濟ニ屬スル財產及物品ニ關スル事項
八　外國人ニ關スル事項
九　他ノ主管ニ屬セサル事項

第二部

一　教育學藝ニ關スル事項
二　學事ノ視察ニ關スル事項
三　兵事ニ關スル事項
四　社寺及宗教ニ關スル事項
五　民籍ニ關スル事項

第三部

一　農工商ニ關スル事項
二　水產漁獵ニ關スル事項
三　度量衡ニ關スル事項

第四部

一　高等警察ニ關スル事項
二　行政警察ニ關スル事項
三　衞生ニ關スル事項

第五部

一　殖民地ノ選定計劃其ノ他殖民ニ關スル事項

二　土地ノ處分及開墾ニ關スル事項
三　地籍ニ關スル事項
四　官有地管理ニ關スル事項
五　土地收用ニ關スル事項
六　森林原野ニ關スル事項

第六部
一　土木ニ關スル事項
二　水陸運輸ニ關スル事項
三　水面埋立ニ關スル事項

第二十條　部長ハ事務官ヲ以テ之ニ充ツ長官ノ命ヲ承ケ部下ノ官吏ヲ指揮監督シ所部ノ事務ヲ掌理ス

第二十一條　部長事故アルトキハ長官ニ於テ道廳官吏ノ一人ヲシテ其ノ事務ヲ代理セシム

第二十二條　第一部長タル事務官ハ長官ヲ佐ケ廳務ヲ整理シ官房及各部ノ事務ヲ監督ス（四十年勅令第百五十一號ヲ以テ條中改正）

第二十三條　部長ニ充テラレサル事務官ハ長官ノ命ヲ承ケ事務ヲ分掌ス
長官ハ事務官ノ一人ヲシテ審議立案ヲ掌ラシムルコトヲ得

第二十四條　道廳ニ警務長ヲ置キ第四部長タル事務官ヲ以テ之ニ充ツ
警務長ハ警察事務ノ執行ニ關シ長官ノ命ヲ承ケ警視、警部及巡査ヲ指揮監督ス

第二十五條　支廳長ハ長官ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ部內ニ執行シ部內ノ行政事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ指揮監督ス

第二十六條　支廳長ハ行政事務ニ付其ノ部內ノ町村長及戶長ヲ指揮監督ス

第二十七條　支廳長ハ町村長及戶長ノ處分成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ處分ヲ取消シ又ハ停止スルコトヲ得

第二十八條　支廳長ハ法律命令ニ依リ又ハ長官ヨリ委任セラレタル事件ニ付支廳令ヲ發スルコトヲ得

第二十九條　支廳長事故アルトキハ其ノ廳勤務ノ上席屬其ノ職務ヲ代理ス

第三十條　支廳長ハ其ノ廳ノ官吏ヲシテ其ノ事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得

第三十一條　警視ハ第四部ニ屬シ又ハ警察署長ト爲リ上官ノ指揮ヲ承ケ其ノ部署ノ事務ヲ掌理ス

第三十二條　各部ニ分課ヲ設クルコトヲ要スルトキハ長官之ヲ定メ內務大臣ニ報告スヘシ

第三十三條　屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第三十四條　視學ハ上官ノ指揮ヲ承ケ學事ノ視察其ノ他學事ニ關スル庶務ニ從事ス

第三十五條　警部ハ上官ノ指揮ヲ承ケ警察事務ヲ分掌シ部下ノ巡査ヲ指揮監督ス

第三十六條　通譯ハ上官ノ指揮ヲ承ケ翻譯通辯ニ從事ス

第三十七條　管內須要ノ地ニ道廳支廳ヲ置ク其ノ位置、名稱及管轄區域ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十八條　各郡區ニ警察署ヲ置ク但シ地方ノ必要ニ應シ別ニ區域ヲ定メテ警察署ヲ置クコトヲ得
長官必要アリト認ムルトキハ警察署ノ下ニ警察分署ヲ置クコトヲ得
警察署及警察分署ノ位置、名稱及管轄區域ハ長官之ヲ定ム

第三十九條　警察署長ハ警視ヲ以テ充ツル場合ヲ除クノ外警部ヲ以テ之ニ充テ警察分署長ハ警部ヲ以テ之ニ充ツ
警察署長及警察分署長ハ上官ノ指揮ヲ承ケ其ノ署主管ノ事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ指揮監督ス

第四十條　北海道廳ニ巡査ヲ置ク判任官ノ待遇トス
巡査ニ關スル規程ハ別ニ定ムル所ニ依ル

附則

從前ノ法律命令ニ於テ北海道郡區長ノ管掌ニ屬シタル事項ハ北海道廳支廳長ニ於テ處理スヘキモノトス
從別郡區長ノ兼掌シタル戶長ノ事務ハ支廳長ニ於テ之ヲ其ノ廳在勤屬ニ委任スルコトヲ得
北海道廳支廳長ノ發スル支廳令ニハ明治二十六年第百九十九號中郡令ニ關スル規程ヲ適用ス

●臺灣總督府官制（明治三十年十月勅令第三百六十二號）

第一條　臺灣總督府ニ臺灣總督ヲ置ク
總督ハ臺灣及澎湖列島ヲ管轄ス

第二條　總督ハ親任トス陸海軍大將若ハ中將ヲ以テ之ニ充ツ

第三條　總督ハ委任ノ範圍內ニ於テ陸海軍ヲ統率シ內務大臣ノ監督ヲ承ケ諸般ノ政務ヲ統理ス（三十一年勅令第二十三號ヲ以テ條中改正）

第四條　總督ハ軍政及陸海軍軍人軍屬ノ人事ニ關シテハ陸軍大臣若ハ海軍大臣、防禦作戰竝動員計畫ニ關シテハ參謀總長若ハ海軍軍令部長、陸軍軍隊教育ニ關シテハ教育總監ノ區處ヲ承ク（三十一年勅令第二十三號、三十三年

勅令第二百五十四號ヲ以テ條中改正）

第五條　總督ハ其ノ職權若ハ特別ノ委任ニ依リ總督府令ヲ發シ之ニ禁錮一年以下又ハ罰金二百圓以内ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

第六條　總督ハ其ノ管轄區域内ノ防備ノ事ヲ掌ル

第七條　總督ハ其ノ管轄區域内ノ安寧秩序ヲ保持スル爲ニ必要ト認ムルトキハ兵力ヲ使用スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ直ニ内務大臣陸軍大臣海軍大臣參謀總長及海軍軍令部長ニ之ヲ報告スヘシ（三十一年勅令第二十三號ヲ以テ改正）

第八條　明治二十九年法律第六十三號第二條又ハ第四條ノ勅裁ヲ請フトキハ内務大臣ヲ經由スヘシ（同上）

第九條　總督ハ必要ト認ムル地域内ニ於テ其ノ地ノ守備隊長若ハ駐在武官ヲシテ民政事務ヲ兼掌セシムルコトヲ得

第十條　總督ハ廳長ノ命令又ハ處分ニシテ成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ命令又ハ處分ヲ停止シ又ハ取消スコトヲ得（三十四年勅令第二百一號ヲ以テ條中改正）

第十一條　總督ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任文官ノ進退ハ内務大臣ニ由リ内閣總理大臣ヲ經テ之ヲ上奏シ判任官以下ハ之ヲ專行ス（三十一年勅令第二十三號ヲ以テ條中改正）

第十二條　總督ハ内務大臣ニ由リ内閣總理大臣ヲ經テ所部文官ノ叙位叙勲ヲ上奏ス（同上）

第十三條　總督ハ所部文官ヲ懲戒ス其ノ勅任官ニ係ルモノ並ニ奏任官ノ免官ハ内務大臣ニ由リ内閣總理大臣ヲ經テ上奏シ其ノ他ハ之ヲ專行ス（同上）

第十四條　總督府ニ總督官房ヲ置ク（三十一年勅令第百六號ヲ以テ本條以下第二十三條マテ改正）

總督官房ニ副官二人及專任祕書官二人ヲ置ク機密ニ關スル事務ヲ掌ル

副官ハ陸海軍左尉官ノ内各一人ヲ以テ之ニ充ツ祕書官ハ奏任トス

第十五條　總督府ニ民政部、陸軍部、海軍幕僚ヲ置ク

陸軍部條例海軍幕僚條例ハ別ニ之ヲ定ム（四十一年勅令第四十四號ヲ以テ本條改正）

第十六條　民政部ハ行政司法ニ關スル一切ノ事務ヲ掌ル

第十七條　民政部ニ警察本署及左ノ五局ヲ置ク（三十四年勅令第二百一號ヲ以テ改正）

總務局
財務局
通信局
殖産局
土木局

通信局ニ測候所及燈臺ヲ附屬セシム（三十五年勅令第二百五十七號ヲ以テ追加）

第十八條　總督官房警察本署及各局ノ事務ノ分掌及其ノ分課ハ總督之ヲ定ム（三十四年勅令第二百一號ヲ以テ改正）

第十九條　總督府ニ左ノ職員ヲ置ク（三十四年勅令第二百一號、三十五年同令第二百五十七號、三十八年同令第二百三十二號及四十年同令第百六十七號ヲ以テ改正）

民政長官	一人		勅任
警視總長	一人		勅任又ハ奏任
局長	五人		勅任又ハ奏任
參事官	專任四人		奏任
事務官	專任十五人		奏任
警視	專任三人		奏任
技師	專任二十人		奏任（内二人ヲ勅任トナスコトヲ得）
翻譯官	專任五人		奏任
海事官	專任四人		奏任
屬			
警部	專任三百二十人		判任
技手			
通譯			

各測候所ヲ通シテ技師一人技手二十二人ヲ置キ各燈臺ヲ通シテ看守三十七人ヲ置ク測候所技師ハ奏任測候所技手及燈臺看守ハ判任トス

第二十條　民政長官ハ總督ヲ佐ケ部務ヲ總理シ各局署ノ事務ヲ監督ス（三十四年勅令第二百三十三號ヲ以テ削除）

第二十一條（三十八年勅令第二百一號ヲ以テ改正）

第二十二條　警視總長ハ警察本署ノ長トナリ總督及民政長官ノ命ヲ承ケ其ノ主務ヲ掌理シ事急ナル場合ニ在テハ其ノ主管事務ニ付廳長以下ヲ指揮スルコトヲ得（同上）

第二十二條ノ二（同上勅令ヲ以テ削除）

第二十三條　局長ハ總督及民政長官ノ命ヲ承ケ其ノ主務ヲ掌理シ及局中各課ノ事務ヲ指揮監督ス（同上勅令ヲ以テ改正）

第二十四條　參事官ハ上官ノ命ヲ承ケ審議立案ヲ掌ル（同上）

參事官ハ上官ノ命ヲ承ケ總督官房又ハ各局署ノ事務ヲ助ク

第二十五條　事務官ハ上官ノ命ヲ承ケ總督官房又ハ各局

署ノ事務ヲ承ル（同上）

第二十六條　警視ハ警察本署ニ屬シ上官ノ命ヲ承ケ其ノ事務ヲ掌ル（同上）

第二十七條　技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル（同上）

技師ハ上官ノ命ヲ承ケ各局ノ事務ヲ助ク

第二十七條ノ二　海事官ハ通信局ニ屬シ上官ノ命ヲ承ケ海事ニ關スル事務ヲ掌ル（三十五年勅令第二百五十七號ヲ以テ追加）

第二十七條ノ三　測候所技師ハ上官ノ命ヲ承ケ氣象ニ關スル事務ヲ掌リ測候所技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ氣象ニ關スル事務ニ從事シ燈臺看守ハ上官ノ指揮ヲ承ケ航路標識ノ看守ニ從事ス（同上）

第二十八條　翻譯官ハ上官ノ命ヲ承ケ通譯ヲ掌ル（三十四年勅令第二百一號ヲ以テ改正）

第二十九條　總督官房及同署中各課ニ課長一人ヲ置キ奏任官又ハ判任官ヲ以テ之ニ充ツ（同上）

課長ハ上官ノ命ヲ承ケ課務ヲ掌理ス

第三十條　屬、技手及通譯ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務技術通譯ニ從事ス（同上）

第三十一條　警部ハ警察本署ニ屬シ上官ノ指揮ヲ承ケ其ノ事務ニ從事ス（同上）

第三十一條ノ二　測候所及燈臺ノ名稱及位置ハ總督之ヲ定ム（三十五年勅令第二百五十七號ヲ以テ追加）

四十年勅令第百六十七號附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

四十一年勅令第四十四號附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

樺太廳官制（明治四十年三月勅令第三十三號）

第一條　樺太廳ニ左ノ職員ヲ置ク

長官
事務官
警視
支廳長
技師
通譯官
屬
警部
技手
通譯

第二條　長官ハ勅任トス

長官ハ樺太守備隊司令官タル陸軍將官ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

第三條　事務官ハ專任四人奏任トス但シ其ノ中一人ハ勅任ト爲スコトヲ得

第四條　警視ハ專任一人奏任トス

第五條　支廳長ハ專任三人奏任トス

第六條　技師ハ專任六人ヲ以テ定員トス

第七條　通譯官ハ專任一人奏任トス

第八條　屬、警部及通譯ハ判任トス

屬、警部、技手及通譯ハ通シテ百十六人ヲ以テ定員トシ其ノ各官ノ定員ハ長官之ヲ定ム

第九條　長官ハ內務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ執行シ部內ノ行政事務ヲ管理ス但シ郵便電信及電話ニ關スル事務ニ付テハ逓信大臣、銀行及關稅ニ關スル事務ニ付テハ大藏大臣ノ監督ヲ承ク

第十條　長官ハ其ノ職權又ハ特別ノ委任ニ依リ廳令ヲ發シ之ニ禁錮二十五日以下又ハ罰金二十五圓以內ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

第十一條　長官ハ非常急變ノ場合ニ臨ミ兵力ヲ要シ又ハ警護ノ爲兵備ヲ要スルトキハ樺太守備隊司令官ニ移牒シ出兵ヲ請フコトヲ得

第十二條　長官ハ所部ノ官吏ヲ指揮監督シ高等官ノ功過ハ內務大臣ニ具狀シ判任官以下ノ進退懲戒ハ之ヲ行フ

第十三條　長官ハ所轄官廳ノ處分又ハ命令ニシテ成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ處分又ハ命令ヲ取消シ又ハ停止スルコトヲ得

第十四條　長官事故アルトキハ第一部長タル事務官其ノ職務ヲ代理ス

長官及第一部長タル事務官共ニ事故アルトキハ內務大臣ニ於テ他ノ事務官ノ一人ヲシテ長官ノ職務ヲ代理セシム

長官ハ廳ノ官吏ヲシテ其ノ事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得

第十五條　長官ハ其ノ職權ニ屬スル事務ノ一部ヲ支廳長ニ委任スルコトヲ得

第十六條　樺太廳ニ長官官房及第一部第二部ヲ置キ事務ヲ分掌セシムルコト左ノ如シ

長官官房

一　官吏ノ進退及身分ニ關スル事項
二　文書ノ往復及記錄編纂ニ關スル事項
三　官印廳印ノ管守ニ關スル事項
四　褒賞ニ關スル事項

五　會計ニ關スル事項
六　外國人ニ關スル事項

第一部

一　教育ニ關スル事項
二　商工業水產漁獵ニ關スル事項
三　警察及衛生ニ關スル事項
四　氣象測候ニ關スル事項
五　他部ノ主掌ニ關セサル事項

第二部

一　拓殖ニ關スル事項
二　土木ニ關スル事項
三　鑛山森林農業牧畜ニ關スル事項

長官ハ內務大臣ノ認可ヲ經テ前項事務ノ分掌ヲ變更スルコトヲ得

第十七條　部長ハ事務官ヲ以テ之ニ充ツ長官ノ命ヲ承ケ部下ノ官吏ヲ指揮監督シ所部ノ事務ヲ掌理ス

第十八條　部長事故アルトキハ長官ニ於テ廳官吏ノ一人ヲシテ其ノ事務ヲ代理セシム

第十九條　第一部長タル事務官ハ長官ヲ佐ケ廳務ヲ整理シ官房及各部ノ事務ヲ監督ス

第二十條　部長ニ充テラレサル事務官ハ長官ノ命ヲ承ケ事務ヲ分掌ス

長官ハ事務官ノ一人ヲシテ審議立案ヲ掌ラシムルコトヲ得

第二十一條　支廳長ハ長官ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ部內ニ執行シ部內ノ行政事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ指揮監督ス

第二十二條　支廳長ハ法律命令ニ依リ又ハ長官ヨリ委任セラレタル事件ニ付支廳令ヲ發スルコトヲ得

第二十三條　支廳長事故アルトキハ其ノ廳勤務ノ上席屬又ハ警部其ノ職務ヲ代理ス

第二十四條　支廳長ハ其ノ廳ノ官吏ヲシテ其ノ事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得

第二十五條　警視ハ第一部ニ屬シ上官ノ指揮ヲ承ケ其ノ部ノ事務ヲ分掌ス

第二十六條　通譯官ハ上官ノ命ヲ承ケ飜譯通辯ヲ掌ル

第二十七條　屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ廳務ニ從事ス

第二十八條　警部ハ上官ノ指揮ヲ承ケ警察事務ヲ分掌シ部下ノ巡査ヲ指揮監督ス

第二十九條　通譯ハ上官ノ指揮ヲ承ケ飜譯通辯ニ從事ス

第三十條　樺太廳管內ニ樺太廳支廳ヲ置ク其ノ位置、名稱及管轄區域ハ內務大臣ノ認可ヲ受ケ長官之ヲ定ム

第三十一條　長官必要ト認ムルトキハ支廳ノ下ニ支廳出張所ヲ置クコトヲ得其ノ位置、名稱及管轄區域ハ長官之ヲ定ム

支廳出張所長ハ屬又ハ警部ヲ以テ之ニ充ツ

第三十二條　樺太廳ニ巡査ヲ置ク判任官ノ待遇トス巡査ニ關スル規定ハ別ニ定ムル所ニ依ル

附　則

本令ハ明治四十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●韓國ニ統監府及理事廳ヲ置クノ件（明治三十年十一月勅令第二百四十號）

明治三十八年十一月十七日帝國政府ト韓國政府トノ間ニ締結シタル協約第三條ニ基キ統監府ヲ京城ニ、理事廳ヲ京城、仁川、釜山、元山、鎭南浦、木浦、馬山其ノ他須要ノ地ニ置キ該協約ニ依ル諸般ノ事務ヲ掌ラシム

附　則

本令ニ依ル統監府ノ職務ハ從來ノ帝國公使館、理事廳ノ職務ハ從來ノ帝國領事館ヲシテ當分ノ內之ヲ施行セシム

●統監府及理事廳官制（明治三十八年十二月勅令第二百六十七號）

第一條　韓國京城ニ統監府ヲ置ク

第二條　統監府ニ統監ヲ置ク

統監ハ親任トス

統監ハ天皇ニ直隸シ外交ニ關シテハ外務大臣ニ由リ內閣總理大臣ヲ經其ノ他ノ事務ニ關シテハ內閣總理大臣ヲ經テ上奏ヲ爲シ及制可ヲ受ク

第三條　統監ハ韓國ニ於テ帝國政府ヲ代表シ條約及法令ニ基キ諸般ノ政務ヲ統轄ス（四十年勅令第二百九十五號ヲ以テ本條改正）

第四條　統監ハ韓國ノ安寧秩序ヲ保持スル爲必要ト認ムルトキハ韓國守備軍ノ司令官ニ對シ兵力ノ使用ヲ命スルコトヲ得

第五條（四十年勅令第二百九十五號ヲ以テ本條削除）

第六條（同上）

第七條　統監ハ統監府令ヲ發シ之ニ禁錮一年以下又ハ罰金二百圓以內ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

第八條　統監ハ所轄官廳ノ命令又ハ處分ニシテ條約若ハ法令ニ違ヒ、公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認

ムルトキハ其ノ命令又ハ處分ヲ停止シ又ハ取消スコトヲ得

第九條　統監ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任官ノ進退ハ內閣總理大臣ヲ經テ之ヲ上奏シ判任官以下ノ進退ハ之ヲ專行ス

第十條　統監ハ內閣總理大臣ヲ經テ所部官吏ノ叙位叙勳ヲ上奏ス

第十條ノ二　統監府ニ副監監ヲ置ク（四十年勅令第二百九十五號ヲ以テ本條追加）

副統監ハ親任トス

副統監ハ統監ヲ補佐シ統監事故アルトキ其ノ職務ヲ代理ス

第十一條　統監府ニ左ノ職員ヲ置ク（同上ヲ以テ本條改正）

總務長官	勅任	
參與官	專任二人	勅任
祕書官	專任二人	奏任
書記官	專任六人	奏任
技師	專任四人	
通譯官	專任九人	奏任
屬 技手 通譯生	專任四十三人	判任

前項ノ外韓國宮內府及各部ノ次官タル者ハ之ヲ參與官トス

統監府又ハ其所轄官廳ノ事務ヲ囑托セラレタル韓國人ハ高等官又ハ判任官ノ待遇トナスコトヲ得

第十二條　總務長官ハ上官ノ命ヲ承ケ府務ヲ總理ス（四十年勅令第二百九十五號ヲ以テ本條改正）

第十三條　參與官ハ上官ノ命ヲ承ケ府務ヲ掌理ス（同上）

第十三條ノ二　（同上ヲ以テ本條削除）

第十四條　（同上）

第十五條　（同上）

第十六條　祕書官ハ上官ノ命ヲ承ケ機密ニ關スル事務ヲ掌ル

第十七條　書記官ハ上官ノ命ヲ承ケ府務ヲ掌ル

第十八條　技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル

第十九條　通譯官ハ上官ノ命ヲ承ケ文書翻譯及通譯ヲ掌ル

第二十條　技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ從事ス

第二十一條　統監ハ統監府技師、通譯官及技手ヲシテ理事廳ニ在勤セシムルコトヲ得

前項ノ職員ハ其ノ職務ノ執行ニ付當該理事官ノ指揮監督ヲ承クルモノトス

第二十二條　韓國內須要ノ地ニ理事廳ヲ置ク

理事廳ノ位置及管轄區域ハ統監之ヲ定ム

第二十三條　各理事廳ニ左ノ職員ヲ置ク（四十年勅令第二百九十五號ヲ以テ本條中改正）

理事官	奏任
副理事官	奏任
屬	判任
看守長	判任
通譯生	判任

副理事官二人以上ヲ置ク理事廳ニ於テハ其ノ一人ハ主トシテ法律事務ヲ掌ルモノトス

理事廳職員ノ定員ハ別ニ之ヲ定ム

第二十四條　理事官ハ統監ノ指揮監督ヲ承ケ從來韓國在勤領事ニ屬シタル事務竝條約及法令ニ基キ理事官ノ執行スヘキ事務ヲ管掌ス

第二十五條　理事官ハ安寧秩序ヲ保持スル爲緊急ノ必要アリト認ムル場合ニ於テ統監ノ命ヲ請フノ遑ナキトキハ當該地方駐在帝國軍隊ノ司令官ニ移牒シテ出兵ヲ請フコトヲ得

第二十六條　理事官ハ韓國ノ施政事務ニシテ條約ニ基ク義務ノ履行ノ爲必要アルモノニ付事緊急ヲ要シ統監ノ命ヲ請フノ遑ナシト認ムルトキハ直ニ韓國當該地方官憲ニ移牒シ之ヲ執行セシメ後之ヲ統監ニ報告スヘシ

第二十七條　理事官ハ理事廳令ヲ發シ之ニ罰金十圓以內、拘留又ハ科料ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

第二十八條　副理事官ハ理事官ノ命ヲ承ケ廳務ヲ掌リ理事官事故アルトキハ臨時其ノ職務ヲ代理ス

第二十九條　（四十年勅令第二百九十五號ヲ以テ本條削除）

第三十條　統監府及理事廳屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第三十一條　（四十年勅令第二百九十五號ヲ以テ本條削除）

第三十二條　統監府及理事廳通譯生ハ上官ノ指揮ヲ承ケ文書翻譯及通譯ニ從事ス

第三十三條　（四十年勅令第二百九十五號ヲ以テ本條削除）

第三十四條　看守長ハ上官ノ指揮ヲ承ケ監獄事務ヲ掌ル（四十年勅令第十五號ヲ以テ追加、同年同令第二百九十五號ヲ以テ改正）

第三十五條　理事廳ニ看守ヲ置ク判任官ノ待遇トス

看守ニ關スル規定ハ統監之ヲ定ム（同上）

四十年勅令第百九十五號附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス但警察官及看守長ニ關スル規定ハ明治四十年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

第二章　官規

高等官官等俸給給（明治二十五年十一月勅令第九十六號）

三十三年勅令第十九號第百二十六號第百八十四號第百八十六號第百八十九號第三百二十七號第三百八十六號三十四年同第百五十八號三十五年同第百二十三號第二百四十四號ヲ以テ本令中改正

官等及叙任

第一條　親任式ヲ以テ叙任スル官ヲ除ク外高等官ヲ分テ九等トス親任式ヲ以テ叙任スル官及一等官二等官ヲ勅任官トシ三等乃至九等官ヲ奏任官トス

第二條　勅任官中親任式ヲ以テ叙任スル官ノ辭令書ハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ內閣總理大臣又ハ首座ノ大臣之ニ副署ス

第三條　親任式ヲ以テ叙任スル官ヲ除キ其他ノ勅任官ノ辭令書ハ御璽ヲ鈐シ內閣總理大臣之ヲ奉行ス

第四條　奏任官ノ任官及叙等ハ內閣總理大臣之ヲ奏薦シ其各省所屬ノ官廳ニ屬スルモノハ內閣總理大臣ヲ經由シテ主任大臣之ヲ奏薦ス

第五條　奏任官ノ辭令書ハ內閣ノ印ヲ鈐シ內閣總理大臣之ヲ宣行ス

第六條　高等官官等ハ本令定ムル所ノ文武高等官官等表ニ依ル官制上他ノ官ニ在ル者ヲ以テ兼任セシメ又ハ之ニ充ツルノ官ニシテ別ニ官等ヲ定メサルモノハ本官ノ官等ニ依ル

第七條　初メテ高等文官ニ任セラルル者ノ官等ハ六等以下トス

高等文官ヲ勸メ退官シタル者再ヒ高等官ニ任セラルル場合ニ於テハ其官等ハ前官ノ官等以下トス但前官官等在職年數滿二年ヲ踰エタル者ハ前官ノ官等ニ一等ヲ進ムルコトヲ得

前官ノ官等七等以下ナルトキハ前項ノ規定ヲ適用セス陞シテ六等官ニ至ルコトヲ得

第八條　高等官ノ官等ハ別ニ進級ノ例ヲ定メタル者及七等以下ノ者ヲ除ク外在職滿二年ヲ踰ユルニアラサレハ陞叙スルコトヲ得ス

第八條ノ二　親任式ヲ以テ叙任セラルル官特命全權公使、內閣書記官長、各省官房長及辨理公使ニ任セラルル場合ニ於テハ第七條及第八條ヲ文官任用令第一條第四項ニ依リ勅任文官ニ任用セラルル場合ニ於テハ第七條ヲ適用セス

俸給

第九條　高等文官ノ俸給ハ別ニ定ムルモノノ外左ノ如シ（三十八年十一月勅令第二百卅七號ヲ以テ改正）

內閣ノ部	
內閣總理大臣	年俸九千六百圓
內閣所屬職員	
書記官長	年俸三千五百圓
局長	年俸三千圓
書記官	高等文官年俸第一號表ニ依ル
內閣總理大臣秘書官	
統計局審査官	
印刷局事務官	高等文官年俸第二號表ニ依ル
恩給局審査官	
賞勳局	
總裁	年俸三千五百圓
書記官	高等文官年俸第二號表ニ依ル
法制局	
長官	年俸四千圓
參事官	年俸勅任三千圓　奏任高等文官年俸第一表ニ依ル
馬政局（三十九年五月勅令第百廿三號追加）	
馬政長官	年俸五千圓
馬政次長	年俸 一級四千圓　二級三千五百圓　三級三千圓
馬政官	技術官俸給令ニ依ル
書記官	高等文官年俸第一號表ニ依ル
種馬牧場長	
種馬育成所長	
種馬所長	高等文官年俸第二號表ニ依ル
各省ノ部	
大臣	年俸六千圓
總務長官	年俸四千圓
製鐵所長官	年俸四千圓
帝國鐵道廳總裁	一級俸五千圓　二級俸四千五百圓
帝國鐵道廳副總裁	一級俸四千圓　二級俸三千五百圓
煙草專賣局長官	一級俸四千圓　二級俸三千五百圓　三級俸三千圓
官房長	年俸三千五百圓
局長	
造幣局長	
臨時國債整理局長	年俸三千圓

商船學校長	一級俸二千五百圓 二級俸二千二百圓 三級俸二千圓	
航路標識管理所長		
横濱税關長 神戸税關長	一級俸三千圓 二級俸二千五百圓	
大阪税關長	一級俸二千五百圓 二級俸二千圓	
長崎税關長	一級俸二千圓 二級俸千五百圓	
函館税關長	一級俸二千圓 二級俸千八百圓 三級俸千六百圓 四級俸千四百圓	
煙草專賣局部長	勅任三千圓 奏任高等文官年俸第一號表ニ依ル	
東京郵便電信學校長	一級俸二千五百圓 二級俸二千二百圓 三級俸二千圓 四級俸千八百圓	
參事官 秘書官 書記官 税務監督局長 大藏省臨時建築部事務官	高等文官年俸第一號表ニ依ル	
臨時國債整理局書記官 山林局書記 製鐵所書記官 臨時鐵道國有準備局書記官 臨時外務省翻譯官 臨時檢疫事務官 監獄事務官 造神宮主事 大藏省鑑定官 税關事務官 税關監視官 税關鑑定官 專賣局主事 臨時沖繩縣土地整理事務局事務官 視學官 圖書審査官 學校衛生主事 商工局保險事務官 統計事務官 山林事務官		(卅九年三月勅令第六十三號ヲ以テ改正) (卅九年五月勅令第百十八號ヲ以テ改正) (卅九年十一月勅令第二百九十六號ヲ以テ改正) (四十年五月勅令第百八十二號ヲ以テ追加)
	高等文官年俸第二號表ニ依ル	

特許局審判官 特許局審査官 鑛山監督官 製鐵所事務官 水産講習所監事 水産講習所教授 鐵道事務官 臨時鐵道國有準備局事務官 通信事務官 海事局長 海事官 高等海員審判所審判官 高等海員審判所理事官 地方海員審判所審判官 地方海員審判所理事官 税務監督局事務官 專賣局主事補 税務官 山林局監督官補 鐵道事務官補	高等文官年俸第三號表ニ依ル	
通信事務官補 在外各地郵便電信局長 在外各地郵便局長 東京郵便電信學校教授 書記官長 書記官	貴族院及衆議院ノ部 年俸三千圓 高等文官年俸第二號表ニ依ル	

各省勅任參事官ノ官等ハ高等官二等トシ其年俸ハ三千圓トス

航路標證管理所長、横濱税關長、神戸税關長、大阪税關長、長崎税關長、函館税關長、東京郵便電信學校長ニシテ一級俸ヲ受ケ在職五年以上ニ至リ功績アル者ニ限リ五百圓以内ノ年功加俸ヲ給スルコトヲ得又商船學校長ニシテ高等官二等ニ叙セラレタルトキハ其ノ年俸ハ三千圓トス

高等文官年俸第一號表ニ依ル職員ハ一級俸ヲ受ケ在職五年以上ニ至リ功績アル者ニ限リ五百圓以内ノ年功加俸ヲ給シ其ノ第二號表ニ依ル職員ニ在テハ高等官三等ニ陞叙スルコトヲ得

高等文官年俸第三號表ニ依ル職員ハ一級俸ヲ受ケ在職

五年以上ニ至リ功績アル者ニ限リ三百圓以内ノ年功加俸ヲ給シ高等官五等ニ陞叙スルコトヲ得

第十一條　同一ノ官職ニシテ官等ニ依リ其俸給ヲ異ニスルモノハ本令定ムル所ノ高等文官官等相當俸給表ニ依リ各其官等ニ照シテ之ヲ給ス

第十二條　同一官職ノ同一官等内ニ於テ其俸給ニ數級アル場合ニ於テハ其等級ニ依リ事務ノ繁簡ニ從ヒ本屬長官便宜之ヲ增減スルヲ得

第十三條　高等文官死亡シタルトキハ其在職中ナルト非職中ナルトニ拘ハラス在職最終年俸三分ノ一ヲ其遺族ニ給ス但遺族トハ官吏遺族扶助法ニ於テ遺族ト稱スル者ヲ謂フ

終身官ハ其在職中死亡シタル者ニ限リ前項ノ規定ニ依ル

第十四條　年俸ハ十二分シテ毎月之ヲ支給ス

第十五條　俸給ハ新任增俸減俸トモ總テ發令ノ翌日ヨリ計算ス

第十六條　非職廢官退官退職及死亡ノトキハ年俸ヲ月割計算トシ當月分ノ全額ヲ給ス

第十七條　非職廢官退官者事務引繼殘務調理ノ爲特ニ命ヲ承ケ公務ニ從事スルトキハ其間尚從前ノ年俸ヲ給ス

第十八條　病氣ノ爲執務セサルコト九十日ヲ踰ユル者及私事ノ故障ニ由リ執務セサルコト三十日ヲ踰ユル者ハ俸給ノ半額ヲ減ス但公務ノ爲傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リ又ハ服忌ヲ受クル者及特旨ニ由リ賜暇休養スル者ハ此限ニアラス

第十九條　俸給支給ニ關スル細則ハ大藏大臣省令ヲ以テ之ヲ定ム

附　則

第二十條　本令ハ明治二十五年十一月二十日ヨリ施行ス

但第十四條ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行ス

第二十一條　明治二十四年勅令第八十二號高等官任命及俸給令竝ニ同年勅令第二百十五號文武高等官職等級表ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

俸給ニ關スル他ノ勅令ニ於テ明治二十四年勅令第八十二號中第一號表第二號表若ハ第三號表ニ依ルヘキコトヲ規定セルモノハ本令施行ノ後ハ本令中同號ノ高等官年俸各表ニ依ル

第二十二條　現任ノ高等官ニシテ本令施行ノ際別ニ辭令書ヲ交付セサルモノハ左表ニ依リ明治二十四年勅令第二百十五號文武高等官職等級表ニ規定シタル等級ト相對照スル官等ニ叙セラレタルモノトス

現任判事檢事ニシテ本令施行ノ際別ニ辭令書ヲ交付セサルモノハ現ニ受クル所ノ俸給ニ照シ高等文官官等相當俸給表ニ定ムル所ノ相當官等ニ叙セラレタルモノトス

（別表略ス）

●判任官俸給令（明治二十四年七月勅令第八十三號）

第一條　判任文官ノ月俸ヲ別テ十級トシ別表ニ依リ毎月下旬ニ於テ之ヲ支給ス

第二條　陸海軍准士官下士ノ月俸ハ別ニ定ムル所ニ依ル其他特ニ定ムルモノハ前條ノ限ニアラス

第三條　判任官ハ毎級在職一年以上ニ至ラサレハ增給スルコトヲ得ス

但シ六級俸以下ノ者ハ此ノ限ニアラス（三十年勅令第二百二十三號ヲ以テ但書追加三十一年勅令第三百十號ヲ以テ八級ヲ六級ニ改ム）

第四條　判任官最上級俸ヲ受ケ五年ヲ踰ヘ事務練熟優等ナル者ハ特別ヲ以テ別表ノ範圍ニ拘ラス漸次百圓マテ增俸スルコトアルヘシ

（三十一年勅令第三百十號ヲ以テ七十五圓ヲ百圓ニ改ム）

第五條　官ニ在リテ死亡シタル者ハ月俸三箇月分ヲ其遺族ニ給ス「非職」者ニ於テモ　トシ但遺族トハ官吏遺族扶助法ニ於テ遺族ト稱スル者ヲ云フ

（三十五年勅令第九十五號ヲ以テ但書追加）

第六條　前條ノ外俸給支給ニ關シテハ高等官官等俸給令第十五條第十六條第十七條第十八條ノ例ニ依ル

（三十五年勅令第九十七號改正ニ依ル）

第七條　俸給支給ニ關スル細則ハ大藏大臣省令ヲ以テ之ヲ定ム

附　則

第八條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治十九年勅令第三十六號判任官官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

（別表）（三十一年勅令第三百十號ヲ以テ改正）

一級	七十五圓	二級	六十圓	三級	五十圓
四級	四十五圓	五級	四十圓	六級	三十五圓
七級	三十圓	八級	二十五圓	九級	二十圓
十級	十五圓				

●技術官俸級令（明治三十一年十月勅令第三百十二號）

第一條　工藝技術ヲ要スル各廳ニ於テハ特ニ技術官ヲ置クコトヲ得

第二條　技術官ヲ分テ技師及技手トス

第三條　技師ハ奏任トシ技手ハ判任トス
但シ各廳ニ於テ勅任技師ヲ置クコトヲ要スルモノハ官制ニ於テ之ヲ定ム
第四條　技師ノ年俸ハ別ニ定ムルモノノ外別表ニ依ル
但シ奏任技師ニシテ一級俸ヲ受ケ在職五年以上ニ至リ功績アル者ニ限リ特ニ五百圓以内ノ年功加俸ヲ給スルコトヲ得
第五條　技術官ハ各廳事務ノ繁閑ニ依リ俸給最低額以下ヲ給スルコトアルヘシ

附　則

第六條　本令ハ明治三十一年十一月一日ヨリ施行ス
明治三十八年勅令第百八十一號、同年勅令第三百五十二號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

（別表）

技師年俸

勅任	一級	四千圓	二級	三千五百圓
	三級	三千圓		
奏任	一級	二千五百圓	二級	二千二百圓
	三級	二千圓	四級	千八百圓
	五級	千六百圓	六級	千四百圓
	七級	千二百圓	八級	千圓
	九級	九百圓	十級	八百圓
	十一級	七百圓	十二級	六百圓

●陸軍武官官等表（明治三十五年一月勅令第十一號）

陸軍武官官等表

	將官	各兵科佐官（上長官）	各兵科尉官（士官）	各兵科准士官	各兵科下士
	陸軍大將　陸軍中將　陸軍少將				
		陸軍憲兵大佐　陸軍憲兵中佐　陸軍憲兵少佐	陸軍憲兵大尉　陸軍憲兵中尉　陸軍憲兵少尉	陸軍憲兵特務曹長	陸軍憲兵曹長　陸軍憲兵軍曹　陸軍憲兵伍長
		陸軍歩兵大佐　陸軍歩兵中佐　陸軍歩兵少佐	陸軍歩兵大尉　陸軍歩兵中尉　陸軍歩兵少尉	陸軍歩兵特務曹長	陸軍歩兵曹長　陸軍屯田歩兵曹長　陸軍歩兵軍曹　陸軍屯田歩兵軍曹　陸軍歩兵伍長　陸軍屯田歩兵伍長　陸軍歩兵縫工長　陸軍歩兵靴工長
		陸軍騎兵大佐　陸軍騎兵中佐　陸軍騎兵少佐	陸軍騎兵大尉　陸軍騎兵中尉　陸軍騎兵少尉	陸軍騎兵特務曹長	陸軍騎兵曹長　陸軍屯田騎兵曹長　陸軍騎兵一等蹄鐵工長　陸軍騎兵軍曹　陸軍屯田騎兵軍曹　陸軍騎兵二等蹄鐵工長　陸軍騎兵伍長　陸軍屯田騎兵伍長　陸軍騎兵三等蹄鐵工長　陸軍騎兵縫工長　陸軍騎兵靴工長
		陸軍砲兵大佐　陸軍砲兵中佐　陸軍砲兵少佐	陸軍砲兵大尉　陸軍砲兵中尉　陸軍砲兵少尉	陸軍砲兵特務曹長　陸軍砲兵上等工長	陸軍砲兵曹長　陸軍屯田砲兵曹長　陸軍砲兵一等鞍工長　陸軍砲兵一等銃工長　陸軍砲兵一等木工長　陸軍砲兵一等鍛工長　陸軍砲兵一等蹄鐵工長　陸軍砲兵軍曹　陸軍屯田砲兵軍曹　陸軍砲兵二等鞍工長　陸軍砲兵二等銃工長　陸軍砲兵二等木工長　陸軍砲兵二等鍛工長　陸軍砲兵二等蹄鐵工長　陸軍砲兵伍長　陸軍屯田砲兵伍長　陸軍砲兵三等鞍工長　陸軍砲兵三等銃工長　陸軍砲兵三等木工長　陸軍砲兵三等鍛工長　陸軍砲兵三等蹄鐵工長　陸軍砲兵縫工長　陸軍砲兵靴工長
		陸軍工兵大佐　陸軍工兵中佐　陸軍工兵少佐	陸軍工兵大尉　陸軍工兵中尉　陸軍工兵少尉	陸軍工兵特務曹長　陸軍工兵上等工長	陸軍工兵曹長　陸軍屯田工兵曹長　陸軍工兵軍曹　陸軍屯田工兵軍曹　陸軍工兵伍長　陸軍屯田工兵伍長　陸軍工兵縫工長　陸軍工兵靴工長
		陸軍輜重兵大佐　陸軍輜重兵中佐　陸軍輜重兵少佐	陸軍輜重兵大尉　陸軍輜重兵中尉　陸軍輜重兵少尉	陸軍輜重兵特務曹長	陸軍輜重兵曹長　陸軍輜重兵一等蹄鐵工長　陸軍輜重兵軍曹　陸軍輜重兵二等蹄鐵工長　陸軍輜重兵伍長　陸軍輜重兵三等蹄鐵工長　陸軍輜重兵縫工長　陸軍輜重兵靴工長
	經理部將官相當官	經理部上長官	經理部士官	經理部准士官	經理部下士
	陸軍監督總監　陸軍監督監	陸軍一等監督　陸軍二等監督　陸軍三等監督	陸軍一等副監督　陸軍二等副監督　陸軍三等副監督　陸軍一等主計　陸軍二等主計　陸軍三等主計	陸軍上等計手	陸軍一等計手　陸軍二等計手　陸軍三等計手　陸軍一等縫工長　陸軍二等縫工長　陸軍三等縫工長　陸軍一等靴工長　陸軍二等靴工長　陸軍三等靴工長
	衛生部將官相當官	衛生部上長官	衛生部士官		衛生部下士
	陸軍軍醫總監　陸軍軍醫監	陸軍一等軍醫正　陸軍二等軍醫正　陸軍三等軍醫正　陸軍一等藥劑正　陸軍二等藥劑正　陸軍三等藥劑正	陸軍一等軍醫　陸軍二等軍醫　陸軍三等軍醫　陸軍一等藥劑官　陸軍二等藥劑官　陸軍三等藥劑官		陸軍一等看護長　陸軍二等看護長　陸軍三等看護長
		獸醫部上長官	獸醫部士官		
		陸軍一等獸醫正　陸軍二等獸醫正　陸軍三等獸醫正	陸軍一等獸醫　陸軍二等獸醫　陸軍三等獸醫		
			軍樂部士官	軍樂部准士官	軍樂部下士
			陸軍樂長	陸軍樂長補	陸軍一等樂手　陸軍二等樂手　陸軍三等樂手

附　則

本令ハ明治三十五年二月一日ヨリ之ヲ施行ス
從來ノ陸軍監督補ハ本令施行ノ際辭令書ヲ用キス陸軍一等副監督ニ任セラレタルモノトス
（別表）（三十五年勅令第百八十四號同第二百二十二號ヲ以テ表中改正）

●海軍武官官階（明治三十年九月勅令第三百十號）

海軍武官官階左ノ如ク改ム
（三十二年勅令第十九號ヲ以テ表中改正）

海軍武官官階表

上長官	准士官	下士
大將		
中將		
少將		
大佐		
中佐		
少佐		
大尉		
中尉		
少尉		
	上等兵曹	一等兵曹
		二等兵曹
		三等兵曹
兵曹長	上等信號兵曹	一等信號兵曹
		二等信號兵曹
		三等信號兵曹
軍樂長	軍樂師	一等軍樂手
		二等軍樂手
		三等軍樂手
船匠長	船匠師	一等船匠手
		二等船匠手
		三等船匠手
機關士	少機關士	中機關士
大機關士	機關少監	機關中監
機關大監	機關中監	機關少監
機關總監	機關總監	機關大監
軍醫總監	軍醫總監	軍醫大監
軍醫中監	軍醫少監	大軍醫
軍醫少軍醫	軍醫	
藥劑監	藥劑正	大藥劑士
中藥劑士	少藥劑士	
看護長	看護師	一等看護手
		二等看護手
		三等看護手
機關兵曹長	上等機關兵曹	一等機關兵曹
		二等機關兵曹
		三等機關兵曹
		一等鍛冶手
		二等鍛冶手
		三等鍛冶手
主計總監	主計大監	主計中監
主計少監	大主計	中主計
少主計		
造船總監	造船總監	造船大監
造船中監	造船少監	造船大技士
造船中技士	造船少技士	
軍記長	上等軍記	一等軍記
		二等軍記
		三等軍記
一等厨宰	二等厨宰	三等厨宰
造兵總監	造兵總監	造兵大監
造兵中監	造兵少監	造兵大技士
造兵中技士	造兵少技士	
水路監	水路正	水路大技士
水路中技士	水路少技士	

支廳長警視（警察署長タル警視ヲ除ク）	警（警察署長）視
一級 八百圓	一級 千二百圓
二級 千六百圓	二級 千九百圓
三級 千四百圓	三級 八百圓
四級 二百圓	四級 七百圓
五級 千百圓	五級 六百圓
六級 九百圓	
七級 八百圓	

附則

本令ハ明治三十一年十二月一日ヨリ施行ス

本令施行ニ際シ從來ノ高等官四等ノ大佐及其ノ相當官ハ大佐及其ノ相當官ニ同七等ノ大尉及其ノ相當官ハ大尉及其ノ相當官ニ藥劑監ハ藥劑正ニ大藥劑官ハ大藥劑士ニ少藥劑士ハ少藥劑士ニ水路監ハ水路正ニ各辭令害ヲ用ヰスシレタルモノトステ任セラ

附則（三十二年勅令第十九號）

本令發布ノ際機關總監、軍醫總監、主計總監、造船總監、造兵總監タル者ハ高等官二等トス

●北海道廳高等官俸給令（明治三十八年四月勅令第百四十三號）

第一條　北海道廳高等官ノ年俸ハ左ノ如シ

長官	一級	四千五百圓
	二級	四千圓
勅任事務官	一級	三千三百圓
	二級	三千圓
奏任事務官	一級	二千二百圓
	二級	二千圓
	三級	千八百圓
	四級	千六百圓
	五級	千四百圓
	六級	千二百圓
	七級	千圓

第二條　函館支廳長ノ年俸ハ特ニ二千二百圓迄ヲ給スルコトヲ得

第三條　奏任事務官以下ノ高等文官ニシテ最高俸ヲ受ケ在職五年以上ニ至リ功績アル者ニ限リ事務官ニ在リテハ五百圓以内其ノ他ニ在リテハ三百圓以内ノ年功加俸ヲ給スルコトヲ得

附則

明治三十二年勅令第二百五十六號ハ之ヲ廢止ス

當分ノ内支廳長ノ年俸ハ最下級以下六百圓迄ヲ給スルコトヲ得

本令施行ノ際別ニ辭令書ヲ交付セラレサル者ハ現ニ受クル俸給額ニ相當スル等級俸又ハ前項ノ俸給額ヲ受クルモノトス

●地方高等官俸給令（明治三十八年二月勅令第百四十四號）

第一條　地方高等官ノ年俸左表ノ如シ
（四十年七月勅令第二百七十二號ヲ以テ改正）

官名＼等級	一級	二級	三級	四級	五級	六級
知事	三千六百円	三千三百円	三千円			
事務官	二千円	千八百円	千六百円	千四百円	千二百円	千円
視（警視庁ノ警視ヲ除ク）	千四百円	千二百円	千円	九百円	八百円	七百円
島司	千二百円	千円	九百円	八百円	七百円	六百円
郡長	千二百円	千円	九百円	八百円	七百円	六百円
事務官補	千円	九百円	八百円	七百円	六百円	五百円
視（警察署長）	千円	九百円	八百円	七百円	六百円	五百円
千葉縣、靜岡縣、青森縣、石川縣、山口縣、香川縣、鹿兒島縣、愛媛縣	二百円	百円	百円	百円	百円	百円

第二條　東京府、京都府、大阪府、神奈川縣、兵庫縣、長崎縣、新潟縣、愛知縣、宮城縣、廣島縣、福岡縣、熊本縣、千葉縣、靜岡縣、青森縣、石川縣、山口縣、香川縣、鹿兒島縣及愛媛縣ノ知事及事務官ハ別ニ左表ノ加俸ヲ受ク（三十九年七月勅令第百九十三號ヲ以テ改正）

府縣官名	知事	事務官 第一部長	事務官 其ノ他
東京府、京都府、大阪府、神奈川縣、兵庫縣	六百円	五百円	三百円
長崎縣、新潟縣、愛知縣、宮城縣、廣島縣、福岡縣、熊本縣	四百円	三百円	二百円

●文官試驗規則（明治二十六年十月勅令第百九十七號）

第一章　總則

第一條　文官試驗ハ別ニ規程ヲ設クルモノノ外本令ニ依リ之ヲ行フ

第二條　文官試驗ヲ分チテ文官高等試驗及文官普通試驗ノ二種トス

第三條　文官試驗ヲ行フヘキ期日及場所ハ豫メ官報ヲ以テ之ヲ公告シ東京以外ノ地ニ於テ行フ試驗ニ在リテハ仍其ノ地方ノ新聞紙一種以上ニ公告スヘシ

第四條　年齡滿二十年以上ノ男子ニシテ左ノ諸項ノ一ニ該當セサル者ハ文官試驗ヲ受クルコトヲ得

一　重罪ヲ犯シタル者但國事犯ニシテ復權シタル者ハ此ノ限ニアラス

二　定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

三　破產若クハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者

第五條　文官試驗ヲ受ケテ合格シタル者ニハ合格證書ヲ付與ス

第六條　不正ノ方法ニ因リ試驗ヲ受ケント企テタル者及試驗ニ關スル規程ニ違背シタル者ハ其ノ期ノ試驗ヲ受クルコトヲ得ス試驗合格證書ヲ受領シタル後是等ノ事實發覺シタルトキハ其ノ合格證書ヲ無効トス

第七條　文官試驗ヲ出願スル者ニハ手數料トシテ高等試驗ニ在リテハ金十圓、普通試驗ニ在リテハ金二圓ヲ納メシム

第二章　文官高等試驗

第八條　文官高等試驗ハ毎年一回東京ニ於テ文官高等試驗委員之ヲ行フ

第八條ノ二　左ノ各號ノ一ニ該當スル者ニ非サレハ文官高等試驗ヲ受クルコトヲ得ス

一　中學校ヲ卒業シタル者

二　專門學校令ニ基キ一般ノ專門學校入學ニ關シ試驗檢定合格證書ヲ有シ又ハ無試驗檢定ヲ受クル資格ヲ有スル者

三　文官高等試驗委員ニ於テ普通教育ニ關シ中學校ト同等以上ト認ムル外國ノ學校ヲ卒業シタル者

（卅八年六月勅令第百九十一號改正）

第九條　文官高等試驗ヲ分チテ豫備試驗及本試驗トス豫備試驗ニ合格シタル者ニアラサレハ本試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第十條　豫備試驗ハ受驗人本試驗ヲ受クルニ相當ナル學識ヲ有スル者ト認ムヘキヤ否ヲ考試スルヲ以テ目的トス

（同上改正）

第十一條　豫備試驗ハ論文試驗竝ニ迅速作文及外國語試驗ノ二次トシ迅速作文及外國語試驗ハ論文試驗ニ合格シタル者ニ就キ之ヲ行フ

迅速作文ハ論文ニ關聯スル文題ヲ以テ之ヲ試驗シ外國語ハ英語佛語及獨語ノ中ニ就キ豫メ一種ヲ選擇セシメ之ヲ試驗ス（同上改正）

第十二條　帝國大學法科大學、舊東京大學法學部、文學部及舊司法省法學校正則部ノ卒業證書ヲ有スル者及學習院大學科四學年ノ課程ヲ卒業シタル者ハ豫備試驗ヲ免ス（三十四年勅令第百四十六號ヲ以テ條中追加）

第十三條　本試驗ハ受驗人學理上ノ原則及現行法令ニ通曉シ竝ニ其ノ修得シタル學術ヲ實務ニ應用スルノ能力アルヤ否ヲ考試スルヲ以テ目的トス

第十四條　本試驗ハ左ノ科目ヲ用ヰ之ヲ行フ

一　憲法
二　刑法
三　民法
四　行政法
五　經濟學
六　國際法

以上ノ科目ハ試驗ノ際撰擇取捨スルコトヲ得ス

一　財政學
二　商法
三　刑事訴訟法
四　民事訴訟法

以上ノ科目ハ受驗者ヲシテ其ノ中ニ就キ豫メ一科目ヲ選擇セシメ之ヲ試驗ス

第十五條　本試驗ハ分チテ筆記試驗及口述試驗トス筆記試驗ニ合格シタル者ニアラサレハ口述試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第十六條　豫備試驗及本試驗ノ合格者ヲ定ムル方法ハ試驗委員ノ議定スル所ニ依ル

第十七條　文官高等試驗ニ關スル細則ハ閣令ヲ以テ之ヲ定ム

第三章　文官普通試驗

第十八條　文官普通試驗ハ各官廳ノ須要ニ應シ其ノ廳ノ文官普通試驗委員之ヲ行フ

第十九條　文官普通試驗ノ科目ハ尋常中學校ノ科程ヲ標準トシ各官廳所掌ノ事務ヲ斟酌シテ文官普通試驗委員之ヲ定メ文官高等試驗委員ノ承認ヲ經ヘシ

第二十條　文官普通試驗ニ關スル細則ハ文官普通試驗委員之ヲ定メ文官高等試驗委員ニ報告スヘシ

附則

第二十一條　本令ハ明治二十七年一月一日ヨリ施行ス

第八條ノ二　及第十條ノ規定ハ明治四十二年以後第十一條ノ規定ハ第十一條ノ規定ハ明治卅九年以後施行スヘキ文官高等試驗ニ之ヲ適用ス

（三十八年六月勅令第百九十一號ヲ以テ本項追加）

●文官高等試驗細則（明治二十七年五月閣令第二號）

第一條　文官高等試驗ヲ受ケムトスル者ハ書式ニ照シ試驗願書ニ左ノ書面ヲ添付シ公告シタル期日迄ニ文官高等試驗委員ニ差出ス可シ但シ文官試驗規則第十二條ニ該當スル者ハ第二號第三號ノ書面及第四號中外國語ノ種類ヲ選定シタル書面ヲ要セス別ニ同條ニ掲クル學校ノ卒業證書ヲ添付スヘシ

一　履歷書
二　文官試驗規則第八條ノ二ニ掲クル資格ヲ證明スヘキ卒業證書、試驗合格證書又ハ之ニ準スヘキ證明書且ツ外國ノ學校ヲ卒業シタル者ニアリテハ當該學校ノ學科程度ヲ認知スルニ足ルヘキ書面
三　試驗論文
四　文官試驗規則第十一條ニ掲クル外國語ノ種類及同第十四條ニ掲クル選擇科目ヲ選定シタル書面（明治三十八年七月閣令第一號ヲ以テ本條改正）

第二條　試驗論文ハ公告シタル文題ニ就キ其ノ一ヲ擇ミ漢字交リ文ヲ用ヰ自ラ楷書ヲ以テ之ヲ書スヘシ

第三條　試驗手數料ハ收入印紙ヲ用ヰ試驗願書ニ貼付スヘシ但試驗ヲ受ケサルコトアルモ之ヲ還付セス（同上改正）

第四條　試驗願書及證書又ハ證明書ヲ除ク外添付書類ハ出願ノ取消ヲ求ムルモ之ヲ還付セス

第五條　論文試驗ニ合格シタル者ニハ文官高等試驗委員長ヨリ迅速作文及外國語試驗ヲ行フヘキコト竝ニ其ノ期日及場所ヲ二十日前ニ官報ヲ以テ公告シ仍之ヲ本人ニ通知スヘシ（同上改正）

第六條　本試驗ノ筆記試驗ハ二日前ニ其ノ科目及期日ヲ定メテ之ヲ行ヒ其ノ口述試驗ハ筆記試驗全ク終リタル後更ニ期日ヲ定メテ之ヲ行フ

前項筆記試驗ノ期日ハ豫備試驗ニ合格シタル者及文官試驗規則第十二條ニ該當スル試驗出願者ニ通知シ口述試驗ノ期日ハ筆記試驗ニ合格シタル者ニ通知シ仍官報ヲ以テ公告スヘシ

第七條　論文試驗ヲ除クノ外筆答ヲ以テ試驗スヘキ場合ニ於テハ受驗人總員ヲ一室又ハ數室ニ入レ問題ヲ付シ文官高等試驗委員監視シテ之ヲ行フ但受驗人一人ナルトキハ文官高等試驗委員二人以上監視ス（同上改正）

第八條　口答ヲ以テ試驗スヘキ場合ニ於テハ文官高等試驗委員二人以上列席シテ受驗人一人毎ニ試問シテ即時答辯ヲ爲サシム（三十三年閣令第二號ヲ以テ條中改正三十八年七月閣令第一號改正）

第九條　受驗人ハ試驗室內ニ於テ互ニ語話シ又ハ喧騷スルコトヲ得ス

第十條　受驗人ハ書類其ノ他受驗ノ材料トナルヘキモノヲ携帶シテ試驗室內ニ入ルコトヲ得ス

第十一條　受驗人ハ問題ニ付質問シ又ハ試驗場ニ於テ書籍ノ借覽ヲ求ムルコトヲ得ス

第十二條　受驗人ハ文官高等試驗委員長ノ掲示其ノ他試

驗委員ノ命令ヲ遵守スヘシ

第十三條　受驗人試驗期日ニ出席セス又ハ試驗半途ニ退室シタルトキハ其ノ期ノ試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第十四條　文官高等試驗委員長ハ文官高等試驗委員會議表決ノ數ニ入ラス但可否同數ナルトキハ文官高等試驗委員長之ヲ決ス

第十五條　文官高等試驗委員試驗ノ成績ヲ査定シタルトキハ之ヲ文官高等試驗委員長ニ報告スヘシ其ノ報告期限ハ文官高等試驗委員長豫メ之ヲ定ム

第十六條　文官高等試驗合格者ノ氏名ハ官報ヲ以テ公告ス

第十七條　文官高等試驗ニ關シ必要ナル手續ハ文官高等試驗委員長之ヲ定ム

附則

本令中文官試驗規則第八條ノ二ニ關スル事項ニ付テハ明治三十九年以後施行スヘキ文官高等試驗ニ之ヲ適用ス

（三十八年七月閣令第一號ヲ以テ追加）

文官高等試驗出願書式（用紙美濃紙用）

印紙

族籍

氏名

生年月

私儀文官高等試驗相受度別紙何々（添付書類）相添此段奉願候也（同上改正）

年月日　現住所

氏名　印

文官高等試驗委員長氏名宛

（試驗委員ヨリ發スル通知書ヲ送付スヘキ宿所ヲ便宜ノ爲メ豫メ其ノ現住所外ニ定メ置カントスル者ハ左ノ書式ニ依リ追記スヘシ）

追テ貴委員ヨリ發スル通知書ハ左ノ所ニ御發送被成下度候

何府何縣何郡市何町村何番地（何某方）

履歴書式（用紙美濃紙）

族籍

氏名

生年月

本籍

一何府縣何國何郡市何町村何番地戸主又ハ何某男兄弟伯叔父等

現住所

一何府縣何國何郡市何町村何番地（何某方）（試驗出願中現住地ヲ轉シタルトキハ其ノ時々屆出ヘシ）

學事

一何年何月ヨリ何地何某ニ就キ又ハ官公私立何學校ニ於テ何學ヲ修メ所修ノ科目大略何々

一何年何月ヨリ何地官公私立何學校ニ入リ何學科ヲ修業シ何年何月卒業ス

職業

一何年何月何官廳ニ於テ何々拜命何々歷任等

●文官任用令（明治三十二年三月勅令第六十一號）

第一條　勅任文官ハ左ノ試格ノ一ヲ有スル者ノ中ヨリ之ヲ任用ス但シ親任式ヲ以テ叙任スル官及別ニ任用ノ規程ヲ設クルモノハ此ノ限ニ在ラス

一　奏任文官（特別ノ規程ニ依リ任用セラレタル者及教官、技術官ヲ除ク）ノ職ニ在ル者及在リタル者ニシテ高等官三等ノ文官ノ職ニ在ル者及在リタル者

二　滿一年以上勅任文官ノ職ニ在リタル者但シ特別任用ノ規程ニ依リ在職シタル者並ニ教官、技術官ノ在職年數ヲ除ク

三　勅任文官（特別ノ規程ニ依リ任用セラレタル者及教官、技術官ヲ除ク）ノ職ニ在リタル者ニシテ本令第二條第一項ノ資格ヲ有スル者

四　滿二年以上勅任檢事ノ職ニ在ル者及在リタル者

滿二年以上勅任判事ノ職ニ在ル者及在リタル者ハ司法省ノ勅任文官ニ任用スルコトヲ得

滿二年以上帝國大學及文部省直轄諸學校ノ勅任文官ノ職ニ在ル者及在リタル者ハ文部省部內ノ勅任文官ニ任用スルコトヲ得

陸海軍將官ハ別ニ任用ノ規程アルモノノ外各其ノ部內ノ勅任文官ニ任用スルコトヲ得

第二條　奏任文官ハ別ニ任用ノ規程ヲ設クルモノノ外左ノ資格ノ一ヲ有スル者ノ中ヨリ之ヲ任用ス

一　文官高等試驗ヲ經テ其ノ合格證書ヲ有スル者

二　滿二年以上高等文官ノ職ニ在リタル者但シ特別任用ノ規程ニ依リ在職シタル者並ニ教官、技術官ノ在職年數ヲ除ク

三　滿二年以上檢事ノ職ニ在ル者及在リタル者

滿二年以上判事ノ職ニ在ル者及在リタル者ハ司法省ノ奏任文官ニ任用スルコトヲ得

第三條　判任文官ハ別ニ任用ノ規程ヲ設クルモノノ外左ノ資格ノ一ヲ有スル者ノ中ヨリ之ヲ任用ス

一　文官普通試驗ヲ經テ其ノ合格證書ヲ有スル者

二　文官高等試驗ヲ經テ其ノ合格證書ヲ有スル者

三　官立公立中學校又ハ文部大臣ニ於テ之ト同等以

上ト認メタル官立公立學校ノ卒業證書ヲ有スル者

四　高等商業學校舊附屬主計學校及舊主計專修科ノ卒業證書ヲ有スル者竝ニ文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學、政治學又ハ經濟學ヲ教授スル私立學校ニ於テ明治二十六年十一月十日以前ニ卒業證書ヲ得タル者

五　滿二年以上文官ノ職ニ在リタル者但シ特別任用ノ規程ニ依リ在職シタル者竝ニ教官、技術官ノ在財年數ヲ除ク

第四條　教官及技術官ハ別ニ任用ノ規程ヲ設クルモノノ外高等官ニ在リテハ文官高等試驗委員、判任官ニ在リテハ文官普通試驗委員ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任用ス

第五條　特別ノ學術技藝ヲ要スル行政官ハ高等官ニ在リテハ文官普通試驗委員、判任官ニ在リテハ文官普通試驗委員ノ銓衡ヲ經テ教官、技術官ノ中若ハ試驗委員ニ於テ教官、技術官タルノ資格アリト認ムル者ノ中ヨリ之ヲ任用スルコトヲ得

第六條　滿五年以上雇員トシテ同一官廳ニ勤續シタル者ハ文官普通試驗委員ノ銓衡ヲ經テ直ニ其ノ官廳ノ判任文官ニ任用スルコトヲ得

第七條　本令第一條第二項第三項第四項、第二條第二項、第四條、第五條及第六條其ノ他特別ノ規程ニ依リ任用セラレタル者ハ文官試驗ヲ經ルニ非サレハ其ノ各條項又ハ其ノ規程ニ指定シタル以外ノ文官ニ任用スルコトヲ得ス

第八條　文官任用及銓衡ニ關スル細則ハ閣令ヲ以テ之ヲ定ム

附　則

第九條　本令ハ明治三十二年四月十日ヨリ施行ス

●文官試補及見習規程（明治二十六年十月勅令第百八十六號）

第一條　本年勅令第百八十三號文官任用令及同年勅令第百八十四號ニ依リ奏任文官ニ任用セラルヘキ資格ヲ有スル者ハ試補トシ本年勅令第百八十三號文官任用令ニ依リ判任文官ニ任用セラルヘキ資格ヲ有スル者ハ見習トシテ各官廳ノ事務ヲ練習セシムルコトヲ得

第二條　試補ハ奏任官見習ハ判任官ノ待遇トス但俸給ヲ支給セス

附　則

第三條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

明治二十年勅令第五十七號及明治二十一年閣令第二號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

●文官分限令（明治三十二年三月勅令第六十二號）

第一條　本令ハ親任式ヲ以テ敍任スル官、公使、祕書官及法令ニ別段ノ規定アルモノヲ除クノ外一般ノ文官ニ適用ス

第二條　官吏ハ刑法ノ宣告、懲戒ノ處分又ハ本令ニ依ルニ非サレハ其ノ官ヲ免セラルルコトナシ

第三條　官吏左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ官ヲ免スルコトヲ得

一　不具、廢疾ニ因リ又ハ身體若ハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルニ堪ヘサルトキ

二　傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リ其ノ職ニ堪ヘサルニ因リ又ハ自己ノ便宜ニ因リ免官ヲ願出タルトキ

三　官制又ハ定員ノ改正ニ因リ過員ヲ生シタルトキ

前項第一號ニ依リ其ノ官ヲ免スルトキハ高等官ニ在テハ文官高等懲戒委員會、判任官ニ在テハ文官普通懲戒委員會ノ審査ニ付ス

第四條　官吏ハ廢官若ハ廢廳ノ場合ニ於テハ當然退官者トス

第五條　第十一條第一項第三號及第四號ニ依リ休職ヲ命セラレ滿期ニ至リタルトキハ當然退官者トス

第六條　官吏ハ其ノ意ニ反シテ同等官以下ニ轉官セラルルコトナシ

第七條　文官高等懲戒委員會ニ顧問醫二人ヲ置ク審査上必要ノ場合ニ於テハ臨時顧問醫ヲ加フルコトヲ得

第八條　文官普通懲戒委員會ニ臨時顧問醫ヲ置ク

第九條　懲戒委員會ハ本令ニ依ル審査ヲ爲ス前豫メ顧問醫ノ意見ヲ徵スヘシ

第十條　第三條第二項ニ依ル懲戒委員會ノ審査ニ關シテハ文官懲戒令第十二條第十三條第二十四條第二十五條第二十九條乃至第三十四條ノ規定ヲ準用ス

第十一條　官吏左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ休職ヲ命スルコトヲ得

一　懲戒令ノ規定ニ依リ懲戒委員會ノ審査ニ付セラレタルトキ

二　刑事事件ニ關シ告訴若ハ告發セラレタルトキ

三　官制又ハ定員ノ改正ニ因リ過員ヲ生シタルトキ

四　官廳事務都合ニ依リ必要ナルトキ

前項休職ノ期間ハ第一號及第二號ノ場合ニ在テハ其ノ事件ノ懲戒委員會又ハ裁判所ニ繫屬中トシ第三號及第四號ノ場合ニ在テハ高等官ニ付テハ滿二年判任官ニ付テハ滿一年トス（卅六年十一月勅令第百五十六號ヲ以

テ改正）

第十二條　休職者ハ其ノ本官ヲ奉シテ職務ニ從事セス其ノ他總テ在職官吏ト異ナルコトナシ

前條第一項第三號及第四號ニ依リ休職ヲ命セラレタル者ニハ本屬長官ハ事務ノ繁合ニ依リ何時ニテモ復職ヲ命スルコトヲ得

第十三條　第十一條ニ依リ休職ヲ命セラレタル者ニハ休職中俸給ノ三分ノ一ヲ給ス

第十四條　免官ハ勅任官ニ在テハ內閣總理大臣、奏任官ニ在テハ內閣總理大臣ヲ經テ本屬長官奏請シ裁可ニ依リ之ヲ行フ

休職ハ勅任官ニ在テハ內閣總理大臣奏請シ裁可ニ依リ之ヲ行ヒ奏任官ニ在テハ內閣總理大臣ノ認可ヲ經テ本屬長官之ヲ命ス其ノ復職ヲ命スルトキ亦同シ

附　則

第十五條　本令ハ明治三十二年四月十日ヨリ施行ス

官吏非職條例、明治二十三年勅令第二百八十六號其ノ他從前ノ命令ニシテ本令ノ規定ニ抵觸スルモノハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

第十六條　本令施行前官吏非職條例又ハ明治二十三年勅令第二百八十六號ニ依リ非職又ハ休職ヲ命セラレ未タ滿期ニ至ラサル者ハ本令第十一條第一項第四號ノ休職者ニ關スル規定ヲ適用ス但シ本令第十三條ハ此ノ限ニ在ラス

第十七條　本令中休職トアルハ他ノ法令ニ於テ規定スル非職ト看做ス

附　則（卅六年十一月勅令第百五十六號追加）

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

從前ノ規定ニ依リ休職ヲ命セラレタル者ノ休職期間ハ仍其ノ規定ニ依ル但シ本令施行ノ日ヨリ起算シ本令規定ノ年限以上ノ殘期間アルモノニ付テハ其ノ日ヨリ起算シテ本令ノ規定ヲ適用ス

●官吏服務規律（明治二十年七月勅令第三十九號）

第一條　凡ソ官吏ハ天皇陛下及天皇陛下ノ政府ニ對シテ忠順勤勉ヲ主トシ法律命令ニ從ヒ各其職務ヲ盡スヘシ

第二條　官吏ハ其職務ニ付本屬長官ノ命令ヲ遵守スヘシ但其命令ニ對シ意見ヲ述ルコトヲ得

第三條　官吏ハ職務ノ內外ヲ問ハス廉耻ヲ重シ貪汚ノ所爲アルヘカラス

官吏ハ職務ノ內外ヲ問ハス威權ヲ濫用セス謹愼懇切ナルコトヲ務ムヘシ

第四條　官吏ハ己ノ職務ニ關スルト又ハ他ノ官吏ヨリ聞知シタルトヲ問ハス官ノ機密ヲ漏洩スルコトヲ禁ス其職ヲ退ク後ニ於テモ亦同樣トス

裁判所ノ召喚ニ依リ證人又ハ鑑定人ト爲リ職務上ノ秘密ニ就キ訊問ヲ受クルトキハ本屬長官ノ許可ヲ得タル件ニ限リ供述スルコトヲ得

第五條　官吏ハ私ニ職務上未發ノ文書ヲ關係人ニ漏示スルコトヲ禁ス

第六條　官吏ハ本屬長官ノ許可ナクシテ擅ニ職務ヲ離レ及職務上居住ノ地ヲ離ルルコトヲ得ス

第七條　官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ營業會社ノ社長又ハ役員トナルコトヲ得ス

第八條　官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ其財務ニ關シ懇勞又ハ謝儀又ハ何等ノ名義ヲ以テスルモ直接ト間接トヲ問ハス總テ他人ノ贈遺ヲ受クルコトヲ得ス

官吏外國ノ君主又ハ政府ヨリ授與セントスル所ノ勳章榮賜俸給並贈遺ヲ受クルニハ天皇陛下ノ裁可ヲ要ス

第九條　左ニ揭ケタル者ト直接ニ關係ノ職務ニ居ルノ官吏ハ其饗燕ヲ受クルコトヲ得ス

一　官廳ノ工事ヲ受負フ者

一　官廳ノ爲替方又ハ出納ヲ引受クル者

一　官廳ノ補助金ヲ受クル起業者

一　官廳ノ用品ヲ調達スル者

一　官廳ト諸般ノ契約ヲ結フ者

第十條　凡ソ上官タル者ハ職務ノ內外ヲ問ハス所屬官吏ヨリ贈遺ヲ受クルコトヲ得ス

第十一條　官吏並ニ其家族ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ直接ト間接トヲ問ハス商業ヲ營ムコトヲ得ス

第十二條　官吏ハ取引相場會社ノ社員タルコトヲ得ス及間接ニ相場商業ニ關係スルコトヲ得ス

第十三條　官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ本職ノ外ニ給料ヲ得テ他ノ事務ヲ行フコトヲ得ス

第十四條　浪費シテ產ヲ破リ其分ニ應セサル負債ヲ爲ス者ハ過失ノ一タルヘシ

第十五條　官吏ハ私立郵船會社又ハ私立鐵道會社ヨリ無賃乘船無賃乘車切符ヲ受クルコトヲ得ス

第十六條　凡ソ局長所長其他一部ノ長ハ各所屬官吏ヲ監督シ其過失若シ懲戒處分ヲ行フノ區域ノ內ニ在ラサル者ハ之ヲ訓告スルコトヲ務ムヘシ若シ懲戒處分ヲ要スト認ルトキハ事狀ヲ具ヘテ之ヲ本屬長官ニ稟告スヘシ其情ヲ知リ隱蔽シテ稟告セサル者亦過失タルコトヲ免レス

第十七條　本紀律ハ高等官判任官及俸給ヲ得テ公務ヲ奉

スル者ニ適用ス

●文官懲戒令（明治三十二年三月勅令第六十三號）

第一章　總則

第一條　親任式ヲ以テ敍任スル官及法令ニ別段ノ規定アルモノヲ除クノ外官吏ハ本令ニ依ルニ非サレハ懲戒ヲ受クルコトナシ

第二條　官吏ノ懲戒ヲ受クヘキ場合左ノ如シ

一　職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ

二　職務ノ内外ヲ問ハス官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタルトキ

第三條　懲戒ハ左ノ如シ

一　免官

二　減俸

三　譴責

第四條　免官ノ處分ヲ受ケタル者ハ其ノ官職ヲ失ヒタル日ヨリ二年間官職ニ就クコトヲ得ス

免官ノ處分ヲ受ケ其ノ情重キ者ハ位記ヲ返上セシム

第五條　減俸ハ一月以上一年以下年俸月割額若ハ月俸ノ三分一以下ヲ減ス

第六條　勅任官ノ免官及減俸ハ懲戒委員會ノ議決ヲ具シ内閣總理大臣之ヲ奏請シ奏任官ノ免官ハ懲戒委員會ノ議決ヲ具シ内閣總理大臣ヲ經テ本屬長官之ヲ奏請シ裁可ニ依リ之ヲ行フ

奏任官ノ減俸及判任官ノ免官及減俸ハ懲戒委員會ノ議決ニ依リ本屬長官之ヲ行フ

譴責ハ本屬長官之ヲ行フ

第七條　懲戒ニ付セラルヘキ事件刑事裁判所ニ繫屬スル間ハ同一事件ニ對シ懲戒委員會ヲ開クコトヲ得ス

懲戒委員會ノ議決前懲戒ニ付スヘキ者ニ對シ刑事訴追ノ始マリタルトキハ事件ノ判決ヲ終ハルマテ懲戒委員會ノ開會ヲ停止ス

第二章　懲戒委員會

第一款　總則

第八條　懲戒委員會ヲ分テ文官高等懲戒委員會及文官普通懲戒委員會トス

第九條　文官高等懲戒委員會ハ高等官ノ懲戒ヲ議決シ文官普通懲戒委員會ハ判任官ノ懲戒ヲ議決ス

第二款　文官高戒懲戒委員會

第十條　文官高等懲戒委員會ハ委員長一人委員六人ヲ以テ組織ス

第十一條　委員長ハ樞密顧問官ノ中ヨリ委員ハ行政裁判所長官、勅任行政裁判所評定官、勅任判事及其ノ他ノ勅任文官ノ中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス

委員會ニ豫備委員六人ヲ置キ前項ノ例ニ依リ之ヲ命ス

第十二條　委員會ハ委員長及委員ヲ併セ五人以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

委員會ノ議事ハ多數ニ依リ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ委員長之ヲ決ス

第十三條　委員長事故アルトキハ上席ノ委員之ヲ代理ス

委員中事故アルトキ又ハ闕員アルトキハ委員長ハ豫備委員ノ中ヨリ代理ヲ命ス

第十四條　委員及豫備委員ノ任期ハ三年トス

委員及豫備委員中闕員アリテ補闕ノ爲任命セラレタル者ハ前任者殘任期間在任ス

第十五條　委員長及委員ハ左ノ事項ニ該當スルトキハ之ヲ免ス

一　其ノ官職ヲ失ヒタルトキ

二　委員會所在地以外ニ任所ヲ轉シタルトキ

第十六條　委員會ニ幹事一人ヲ置ク

第十七條　幹事ハ高等官ノ中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス

第十八條　幹事ハ委員ノ命ヲ承ケ委員會ノ議事ヲ準備シ庶務ヲ統理ス

第十九條　委員會ニ書記三人ヲ置ク

第二十條　書記ハ判任官ノ中ヨリ委員長之ヲ命ス

第二十一條　書記ハ幹事ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第三款　文官普通懲戒委員會

第二十二條　文官普通懲戒委員會ハ左ノ各官廳ニ之ヲ置ク（三十四年勅令第二百十六號ヲ以テ臺灣ノ縣及廳ヲ削除）

一　内閣

一　樞密院

一　各省

一　統監府（三十八年十二月勅令第二百七十九號ヲ以テ追加）

一　臺灣總督府

一　關東都督府（三十九年四月勅令第百七號ヲ以テ追加）

一　會計檢査院

一　行政裁判所

一　警視廳

一　北海道廳

一　樺太廳（同上追加）

一　府縣

一　貴族院事務局

一　衆議院事務局

前項ノ外各省大臣ニ於テ必要アリト認ムルトキハ其ノ所轄官廳ニ文官普通懲戒委員會ヲ置クコトヲ得

第二十三條　委員長ハ各官廳ノ長官ヲ以テ之ニ充ツ但シ內閣ニ在テハ法制局長官、樞密院ニ在テハ書記官長、各省ニ在テハ次官統監府ニ在リテハ總務長官、臺灣總督府關東都督府ニ在テハ民政長官ヲ以テ之ニ充ツ

（三十三年勅令第二百十一號三十四年勅令第二百十六號ヲ以條中改正）

（三十八年十二月四令第二百七十九號改正）

委員ハ二人乃至六人トシ當該官廳高等官ノ中ヨリ本屬長官之ヲ命ス但シ內閣ニ在テハ賞勳局、法制局及內閣所屬高等官ノ中ヨリ之ヲ命ス

特別ノ事情アルトキハ上級官廳ノ高等官ヲ以テ下級官廳ノ委員ニ充ツルコトヲ得

第二十四條　委員會ハ委員長及委員二人以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

第二十五條　委員長事故アルトキハ上席ノ委員之ヲ代理ス

第二十六條　委員會ハ書記二人ヲ置ク

第二十七條　書記ハ委員長所屬官廳ノ判任官ノ中ヨリ委員長之ヲ命ス

第二十八條　書記ハ委員長ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第三章　懲執手續

第二十九條　本屬長官ハ所部ノ官吏ニシテ懲戒ニ當ルヘキ所爲アリト思料スルトキハ證憑ヲ具ヘ書面ヲ以テ懲戒委員ノ審査ヲ要求スヘシ

第三十條　前條ノ要求アリタルトキハ委員長ハ期日ヲ定メテ委員會ヲ招集スヘシ

委員ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ本人ノ出頭ヲ命スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ本人所屬官廳ヨリ本官相當ノ旅費ヲ給スヘシ（同上改正）

第三十一條　委員會ニ於テ議決ヲ爲シタルトキハ其ノ理由ヲ具シ本屬長官ニ復申スヘシ

第三十二條　委員長及委員ハ自己又ハ其ノ親族ニ關スル事件ノ會議ニ參與スルコトヲ得ス

第三十三條　委員會ノ審査手續ハ委員會之ヲ定ム

附則

第三十四條　高等官試補ハ高等官ニ準シ判任官見習ハ判任官ニ準シ本令ヲ適用ス

第三十五條　本令ハ明治三十二年四月十日ヨリ施行ス官吏懲戒例ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

●各廳執務時間（明治二十五年十一月閣令第六號）

各官廳執務時間自今左ノ通改正ス（二十八年閣令第六號ヲ以テ第一項改正）

九月十一日ヨリ十月三十一日迄
午前八時ヨリ午後四時ニ至ル
十一月一日ヨリ翌年二月末日迄
午前九時ヨリ午後四時ニ至ル
三月一日ヨリ七月十日迄
午前八時ヨリ午後四時ニ至ル
七月十一日ヨリ九月十日迄
午前八時ヨリ午十二時ニ至ル

但土曜日日曜日ハ從前ノ通

地方ノ狀況又ハ廳務ノ性質上止ムヲ得サルモノニ限リ主務大臣ハ閣議ヲ經テ右ノ時間ノ繰替ヲ爲スコトヲ得（二十六年閣令第一號ヲ以テ追加）

事務繁劇ノ場合ニ於テハ上官ノ指揮ニ依リ晝夜ニ拘ハラス執務スヘシ

●郵便局所執務時限ノ件（明治三十三年九月逓信省告第三百六十八號）

來十月一日ヨリ郵便局所ニ於テハ毎日左ノ時間內郵便爲替郵便貯金及郵便取立金受拂事務ヲ取扱フ

九月十一日ヨリ十月三十一日迄
午前八時ヨリ午後四時ニ至ル
十一月一日ヨリ翌年二月末日迄
午前九時ヨリ午後四時ニ至ル
三月一日ヨリ七月十日迄
午前八時ヨリ午後四時ニ至ル
七月十一日ヨリ九月十日迄
午前八時ヨリ午十二時ニ至ル

●官吏恩給法（明治二十三年六月法律第四十三號）

第一條　文官判任以上ノ者退官シタルトキハ此法律ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第二條　在官滿十五年以上ノ者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ終身恩給ヲ給ス

一　年齡六十歲ヲ超エ退官ヲ許シタルトキ

二　傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職ニ堪ヘス退官ヲ許シタルトキ

三　廢官廢廳若クハ官廳事務ノ伸縮又ハ非職滿期ニ依リ退官シタルトキ

第三條　左ノ掲クル事項ノ一ニ當ル者ハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身恩給ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテノ增加恩給ヲ給ス

一　公務ニ因リ傷痍ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若ク

ハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘス退官シタルトキ

二　公務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顧ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲メニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘス退官シタルトキ

第四條　滿五年以上國務大臣ノ職ニ在ル者退官シタルトキハ第二條ノ制限ニ拘ハラス恩給ヲ給ス

第五條　恩給ノ年額ハ退官現時ノ俸給ト在官年數トニ依リ之ヲ定ム即チ在官滿十五年以上十六年未滿ニシテ退官シタル者ノ恩給年額ハ俸給年額ノ二百四十分ノ六十トシ十五年以後滿一年毎ニ二百四十分ノ一ヲ加ヘ滿四十年ニ至テ止ム但在官四十年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ四十年ノ額又十五年未滿ノ者ニ給スヘキ恩給ハ十五年ノ額トス

非職滿期ニ由テ退官シタル者ノ恩給ハ其在職最終ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス

交際官及領事貿易事務官等ノ俸給ハ其官等ニ對スル普通文官ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス

兼官ニ依テ受クル加俸ハ恩給年額ヲ算定スルニ當リ之ヲ除算スヘシ

恩給年額圓位未滿ノ數ハ圓位ニ滿タシム

第六條　恩給ヲ受ケ又ハ恩給ヲ受ケスシテ退官シタル者在官中ノ公務ニ起因スル傷痍疾病引續キ重症ニ趨キタルトキ其事由ヲ詳悉シ左ノ期限內ニ申出レハ査覈ノ上相當ノ恩給ヲ給ス

一　一肢ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後二個年

二　一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ又ハ兩眼ヲ盲シ若クハ二肢ヲ亡シ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後三個年

第七條　在官年數ハ判任官以上初任ノ月ヨリ起算シ退官ノ月ヲ以テ終リトス

明治四年八月以前ヨリ任官セラレタル者ハ同年同月ヨリ起算ス但本項ニ掲クル者退官スルトキハ明治四年七月以前ノ勤務ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スル月俸ノ半額ヲ以テ在官年數ノ一個年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス

第八條　左ニ掲クル月數及日數ハ在官年數中ニ算入スヘシ

一　判任以上出仕官ニ在ルノ月數

二　武官ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ軍人恩給ヲ受ケスシテ現役ヲ退キタル後文官ニ任シタル者ハ其現役中ノ日數

三　從軍年加算ノ年月

四　非職及休職中ノ日數

五　退官ノ後再ヒ任官シタル者ハ前在官ノ月數

六　宮內官ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ恩給ヲ受ケスシテ宮內官ヲ退キタル後文官ニ任シタル者ハ宮內判任官以上在官中ノ月數

第九條　左ニ掲クル月數及日數ノ在官年數中ヨリ除算スヘシ

一　年齡二十歲未滿者ノ在官月數

二　高等官試補及判任官見習中ノ月數

三　郡區判任官ヲ除クノ外政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官職ニ在ル月數及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ル月數（三十三年法律第十號ヲ以テ本號中改正）

四　御用掛雇等外出仕勤仕ノ月數

五　第八條第二ニ掲クル者ニ在テハ軍人恩給法ニ依リ除算スヘキ日數

六　自己ノ便宜ニ依リ退官シタル後又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官シタル後再ヒ任官シタル者ニ在テハ其前官ノ月數

第十條　文官ニシテ從軍シタル者ハ軍人恩給法ノ算則ニ照シテ其從軍年ヲ加算ス

第十一條　恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ滿一年以上在官シタル後退官シタルトキハ左ノ區別ニ依リ恩給ヲ給ス

一　退官現時ノ俸給前後相同シカラサルトキハ前官年數ヲ後官ノ年數ニ通算シ後官ニ對スル恩給額ト前ノ恩給額トヲ比較シ其多キ方ヲ給ス

二　退官現時ノ俸給前後相同シキトキハ在官年數ニ依リ恩給ヲ增加ス但前官十五年未滿ニシテ恩給ヲ受ケタル者ニ在テハ前後通算シテ十六年以上ニ至ラサレハ增加セス

第十二條　恩給ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ恩給ヲ剝奪ス左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其間恩給ヲ停止ス

一　判任以上ノ官ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルトキ但商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ルトキハ此限ニアラス

二　公權ヲ停止セラレタルトキ

第十三條　年齡未タ六十歲ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退官シタル者又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免

官シタル者ハ恩給ヲ受クルノ資格ヲ失フ

法令ヲ以テ設立シタル議會ノ議員並市町村長助役收入役名譽職參事會員及東京市京都市大阪市北海道ノ區長ト爲リタルノ故ヲ以テ退官シタル者ハ恩給ヲ受クルノ資格ヲ失ハス（三十三年法律第十號ヲ以テ本項改正）

第十四條　郡區判任官ヲ除クノ外政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官吏及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並高等官試補判任官見習ハ恩給ヲ受クルノ權ナキモノトス（同上）

商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並ニ高等官試補判任官見習ニシテ公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ此法律第三條ニ該當スル者ニ限リ退官又ハ罷官現時ノ恩給四分ノ一ヲ終身支給スルコトヲ得

第十五條　恩給支給ノ期ハ退官ノ翌月ヨリ始マリ死亡ノ月ヲ以テ終ルモノトス

第十六條　恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三個年內ニ請求セサレハ其權利ヲ拋棄シタルモノトス

第十七條　恩給ノ支給ハ本屬長官ノ證明ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ內閣總理大臣之ヲ裁定ス

行政上ノ處分ニ因リ恩給ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ六個月以內ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フコトヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一個年以內ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但左ノ事件ニ關シテハ恩給ノ裁決ハ終審確定ノモノトス

一　傷痍疾病ノ原因及其輕重

二　職務ニ堪エルト否ラサルト

第十八條　恩給ハ賣買讓與質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ抵償トシテ差押フルコトヲ得ス

第十九條　明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受ケタル者ハ總テ其恩給令ニ依ルヘシ但其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル

第二十條　此法律施行前ニ退官シタル者ノ恩給ハ明治十七年達官吏恩給令ニ依ルヘシ但法律施行ノ日ヨリ三個年內ニ請求セサレハ之ヲ受クヘキ權利ヲ拋棄シタルモノトス

第二十一條　此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス從前ノ命令ニシテ此法律ニ抵觸スルモノハ總テ廢止ス

●官吏恩給法施行規則（明治二十三年七月閣令第三號）

第一章　恩給ノ請求

第一條　官吏恩給法第二條第三條第六條及ヒ第七條第二項第十四條第二項ニ依リ恩給ヲ受クヘキ者ハ、恩給請求書ヲ退官當時ノ本屬廳ノ長官ニ差出スヘシ但シ廢官廳ニ當リタルトキハ其事務ノ引繼ヲ受ケタル官廳ノ長官ニ差出スヘシ

第二條　官吏恩給法第四條ニ依リ恩給ヲ受クヘキ者ハ恩給請求書ヲ內閣總理大臣ニ差出スヘシ

第三條　恩給請求書ニハ左ノ書類ヲ添附スヘシ

一　在官中履歷書

二　市町村長ノ證明シタル戶籍謄書

但官吏恩給法第十四條第二項ニ掲ケタルハ之ヲ添附スルニ及ハス

第四條　公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ恩給ヲ請求スル者ハ前條ニ掲クル書類ノ外左ノ書類ヲ以テ其事實ヲ證明スヘシ官吏恩給法第六條ニ依リ恩給ヲ請求スル者亦同シ

一　現認證書又ハ之ヲ證スル公文ノ寫若クハ口供書

二　醫師ノ診斷證書

第五條　恩給ノ請求ヲ受ケタル各廳長官ハ查覈ノ上請求ノ理由アリト認ムルトキハ請求者ノ在官年數及恩給額計算書ヲ作リ證據書類ヲ添ヘ內閣總理大臣ニ差出スヘシ

第六條　內閣ニ於テ前條ノ請求ヲ許可シタルトキハ恩給證書ヲ作リ本屬廳ヲ經テ本人居住地ノ地方廳ヲシテ之ヲ下付セシム但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ユ

恩給證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ內閣ハ其旨ヲ大藏省ニ通報スヘシ

第二章　恩給ノ支給

第七條　恩給ハ其年額ヲ四分シ四月七月十月一月ニ於テ其前三個月分ヲ大藏省ヨリ本人居住地ノ地方廳ヲ經テ支給ス但權利消滅若クハ停止ノトキ及一時支給ノ金額ハ期月ニ拘ハラス之ヲ支給ス（二十七年閣令第五號ヲ以テ條中追加）

第八條　恩給ヲ受クル者其金額ヲ受領セントスルトキハ恩給證書ヲ以テ其受領權アルコトヲ證明スヘシ

第九條　恩給ヲ受クル者他ノ地方ニ居住ヲ轉スルトキハ恩給支給ノ月ヨリ三十日以前其ノ其旨ヲ新舊居住地ノ地方廳ニ屆出ヘシ若シ此ノ期日ヲ過キ屆出タルトキハ其ノ一期ノ金額ハ尙ホ從前ノ地方廳ニ於テ支給ス（二十七年閣令第五號ヲ以テ全號改正）

地方廳ニ於テ前項ノ屆出ヲ受ケタルトキハ各廳間互ニ其ノ者ニ係ル恩給支給ノ受繼ヲ爲シ其ノ引繼ヲ受ケタル地方廳ヨリ大藏省ニ通知スヘシ

第十條　官吏恩給法第十二條ニ當リタル者ノ恩給支給ノ

終始ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

一　重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日、日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日ヲ以テ支給ヲ終ル

二　判任官以上ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルトキハ俸給ノ支給ヲ始ムル日ノ前日ヲ以テ支給ヲ終リ其退官シタルトキハ俸給ノ支給ヲ終リタル日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム

三　公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付セラルヘキ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日ヲ以テ支給ヲ終リ刑期滿限ノ日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム

第十一條　官吏恩法第七條第二項ニ掲クル月俸トハ明治四年六月東京淺草米廩ノ平均相場ニ依リ當時ノ官祿一個月分ニ相當スル金額トス

第十二條　官吏恩給法第三條ニ掲クル最下金額十分ノ七マテノ增加恩給ノ等差ハ左ノ如シ

第一項　兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ　十分ノ七

第二項　前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ　十分ノ六

第三項　一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ　十分ノ五

第四項　前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ　十分ノ四

第五項　一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ　十分ノ三

第六項　前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ　十分ノ二

傷痍疾病ノ等差ハ明治十八年達文官傷痍疾病等差例ニ依ル

第三章　恩給ノ停止

第十三條　恩給ヲ受クル者重罪若クハ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレタルトキハ其確定裁判ノ宣告ヲ爲シタル裁判所ヨリ之ヲ大藏省ニ通知スヘシ

第十四條　官吏恩給法第十二條第二項ノ第一ニ當ル者アルトキハ其任用シタル官廳ヨリ大藏省ニ通知スヘシ解任シタルトキモ亦同シ但此通知書ニハ本人恩給ノ支給ヲ受ケタル地方廳名及俸給ノ支給ヲ始ムル日（解任ノトキハ支給ヲ終リタル日）ヲ付記スヘシ

第十五條　恩給ヲ受クル者死去シタルトキハ其遺族ヨリ地方廳ニ屆出ヘシ其遺族ニシテ扶助料ヲ受クヘキ權利ナキトキハ死去ノ屆出ヲ爲スト同時ニ恩給證書ヲ返納スヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ屆出ヲ受ケタルトキハ直ニ大藏省ニ通知シ其恩給證書ハ內閣恩給局ニ送付スヘシ

第十六條　大藏省ニ於テ第十三條第十四條第十五條ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ內閣恩給局ニ通知シ且第十三條第十四條ノ場合ニ於テハ地方廳ニ通知シテ其恩給ノ支給ヲ停止シ又ハ復給セシムヘシ

地方廳ニ於テ此通知ヲ受ケタルトキ其恩給ヲ剝奪スヘキモノハ恩給證書ヲ收メテ內閣恩給局ニ送付スヘシ

第四章　雜則

第十七條　水火災盜難等ニ由リ恩給證書ヲ亡失シタル者ハ居住地ノ地方廳ニ屆出ヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ屆出ヲ受ケタルトキハ其事實ヲ調査シ亡失ノ事由ヲ具シテ內閣恩給局ニ申出ヘシ此場合ニ於テ恩給局ハ恩給證書ノ謄本ヲ作リ地方廳ヲ經テ本人ニ下付スヘシ

前項恩給證書ノ謄本ハ恩給證書ト同一ノ効力アルモノトス

第十八條　恩給ヲ受クル者改氏名シタルトキハ居住地ノ地方廳ニ屆出（シ地方廳ハ恩給證書ノ裏面ニ其事實ヲ記載シ長官署名捺印ノ上本人ニ下付シ其旨ヲ內閣恩給局及大藏省ニ通知スヘシ

第十九條　明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受クル者左ノ場合ニ於テハ本則ニ依ル

一　死去又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ

二　恩給證書ヲ亡失シタルトキ

三　改氏名又ハ居住地ヲ轉シタルトキ（二十七年閣令第五號ヲ以テ改正）

第二十條　官吏恩給法第二十條ニ依リ恩給ヲ請求スル者ハ本則ニ依ルヘシ

第二十一條　市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本規則ニ依リ市町村長ノ爲スヘキ職務ハ區戶長ニ於テ之ヲ行フヘシ

官吏遺族扶助法（明治二十三年六月法律第四十四號）

第一條　文官判任以上ノ者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定スル所ニ依リ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス但第二條ノ納金ヲナスヘキ義務ナキ者ノ遺族ハ此ノ限ニ在ラス

一　在官十五年以上ノ者在官中死去シタルトキ

二　在官十五年未滿ノ者公務ノ爲メ死去シタルトキ
三　恩給ヲ受クル者死去シタルトキ

第二條　文官判任以上ノ者ハ其俸給百分ノ一ヲ國庫ニ納ムヘシ

第三條　交際官及領事貿易事務官等其俸給普通文官ヨリ多額ナルトキハ普通文官ノ俸給ニ依リ少額ナルトキハ現ニ受クル所ノ俸給ニ依リ第二條ノ納金ヲ爲スヘシ

郡判任官ヲ除クノ外政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官吏及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏ハ第二條ノ納金ヲ要セス

（三十二年法律第十六號三十三年法律第十一號ヲ以テ改正）

第四條　寡婦扶助料年額ハ亡夫ノ受ケタル若クハ受クヘキ恩給年額三分ノ一トス

公務ノ爲メ受ケタル傷痍ニ原因シテ死去シ又ハ非常ノ勞動及困苦ヲ忍ヒ勤務ニ從事シ爲メニ發病死去シ又ハ公務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病毒ニ感染シテ死去シ又ハ職地ニ於テ若クハ公務旅行中流行病ニ罹リ死去シタル者ノ寡婦扶助料ハ亡夫ノ俸給ニ對シ官吏恩給法第五條ニ依リ算出シタル恩給年額三分ノ二トス

扶助料年額四位未滿ノ數ハ四位ニ滿タシム

第五條　寡婦ナキトキ又ハ扶助料ヲ受クル寡婦死去シ若クハ權利消滅シタルトキハ其扶助料ヲ孤兒ニ給ス

第六條　孤兒扶助料ハ數子アルトキハ家名繼襲者ニ給シ戸主ニ非サル者ノ孤兒ニ在テハ長子ニ給ス其繼襲者及長子ノ死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿ツルトキハ順次年少者ニ轉給スルモノトス但家名繼襲者ヲ除クノ外男子ヲ先ニシ女子ヲ後ニス

第七條　恩給ヲ受ケタル者ノ寡婦ニシテ其夫退官後結婚シタル者ハ扶助料ヲ受クルコトヲ得ス

第八條　此法律ニ於テ孤兒トハ年齡二十歲未滿ノ男女子ニシテ未タ結婚セサル者ヲ云フ但男女子ノ家名繼襲者ニ限ル

第九條　扶助料ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル月ノ翌月ヨリ之ヲ給ス

第十條　扶助料ヲ受クヘキ寡婦及孤兒ナク若クハ扶助料ヲ受ケタル寡婦及孤兒戸籍ヲ去リ若クハ死去シ若クハ權利消滅シタルトキ父母又ハ祖父母アルトキハ寡婦ニ相當スル扶助料ノ全額ヲ其父母又ハ祖父母ニ終身給スルコトヲ得

其扶助料ハ先ツ父ニ給シ其ノ父存在セサルトキ若クハ權利消滅シタルトキハ母ニ給ス母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ轉給スルハ順次此例ニ依ル

第十一條　扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戸籍內ニ在ル二十歲未滿又ハ癈疾若クハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリ之ヲ給養スル者ナキトキハ寡婦ニ相當スル扶助料一個年分ヨリ少カラス五個年分ヨリ多カラサル金額ヲ人員ニ拘ハラス一時限リ其兄弟姉妹ニ給スルコトヲ得

第十二條　扶助料ハ之ヲ受クヘキ權利ノ生シタル日ヨリ三個年內ニ請求セサレハ其權利ヲ拋棄シタルモノトス

第十三條　扶助料ハ賣買讓與質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ抵償トシテ差押フルコトヲ得ス

第十四條　扶助料ヲ受クルノ權利ハ左ノ時ヨリ消滅ス

一　寡婦死去又ハ婚嫁シ若クハ戸籍ヲ去リタル月ノ翌月
二　孤兒死去又ハ婚嫁シ又ハ他家ノ養子女トナリ又ハ年齡二十歲ニ滿チタル月ノ翌月
三　父母祖父母死去シ又ハ戸籍ヲ去リタル月ノ翌月

第十五條　孤兒二十歲ニ滿ツルモ癈疾若クハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハス他ニ給養スル者ナキトキハ寡婦扶助料ノ三分ノ一ヲ其孤兒ニ各終身給スルコトヲ得但一戸籍內ニ寡婦ト同額ノ扶助料ヲ受クル者アルトキハ其間之ヲ給セス

第十六條　扶助料ヲ受クル者日本臣民タルノ分限ヲ失ヒ若クハ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ扶助料ノ支給ヲ廢ス

公權ヲ停止セラレタルトキハ其間支給ヲ停止ス

扶助料ヲ受クル者公權停止中ハ其轉給ヲ受クヘキ者ニ之ヲ給ス

第十七條　在官十五年未滿ノ者在官中公務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス

前項ノ扶助金ハ在職最終ノ俸給年額百分ノ一ヲ在官年數ニ乘シタル額トス但一年未滿ノ在官月數ハ計算セス

第十八條　扶助料ノ支給ハ地方長官ノ申牒ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ內閣總理大臣之ヲ裁定ス

行政上ノ處分ニ因リ扶助料ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ六個月以內ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フコトヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一個年以內ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第十九條　明治十七年達官吏恩給令ニ依リ扶助料ヲ受ケタル者及恩給ヲ受ケタル者ノ遺族扶助料ハ總テ其恩給令ニ依ルヘシ但其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル

第二十條　此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

●官吏遺族扶助法施行規則（明治二十三年七月閣令第四號）

第一章　扶助料ノ請求

第一條　官吏遺族扶助法第一條第一第二及第十七條ニ當ル者アリタルトキハ本屬廳ヨリ死者ノ履歴書ヲ其遺族ニ下付スヘシ遺族ハ之ヲ以テ扶助料又ハ一時扶助金請求ノ證ト爲スヘシ

第二條　官吏遺族扶助法第一條第三ニ當ル者ノ遺族ハ其恩給證書ヲ以テ扶助料請求ノ證ト爲スヘシ

第三條　官吏遺族扶助法第四條第二項ニ當ル者アリタルトキハ本屬廳ニ於テ事實ヲ査覈シ其傷痍若クハ疾病ノ公務ニ起因シタル證據トナルヘキ書類及醫師ノ診察ヲ爲サシメタル場合ニ於テハ其診斷書ヲ併セテ其遺族ニ下付スヘシ遺族ハ之ヲ以テ扶助料請求ノ證ト爲スヘシ

第四條　扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿チタルトキ其扶助料ノ轉給ヲ請フ者ハ前者ノ扶助料證書ヲ以テ請求ノ證ト爲スヘシ

第五條　公權停止ニ因リ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ハ確定裁判ノ宣告書寫ヲ以テ請求ノ證ト爲スヘシ

第六條　官吏遺族扶助法第十一條及第十五條ニ當ル者ハ其事由ヲ詳記シ痍疾不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル者ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ扶助料ヲ請求スヘシ

第七條　扶助料ノ請求書ハ請求者署名シ（後見人アレハ其後見人連署スヘシ）親族二名親族ナキトキハ居住地ノ戸主二名連署シ市町村長ノ奥印ヲ受ケ第一條乃至第六條ニ掲クル書類ノ外市町村長ノ證明シタル戸籍謄書ヲ添附シ地方長官ニ差出スシ

第八條　扶助料ノ請求ヲ受ケタル地方長官ハ査覈ノ上扶助料年額ノ計算書ヲ作リ證據書類ヲ添ヘ內閣總理大臣ニ差出スヘシ

內閣ニ於テ之ヲ許可シタルトキハ扶助料證書ヲ作リ地方廳ヲシテ之ヲ本人ニ下付セシム但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ユ

扶助料證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ內閣ハ其旨ヲ大藏省ヘ通報スヘシ

第二章　納金ノ徵收

第九條　官吏遺族扶助法第二條ニ掲クル納金ハ俸給支給ノトキ各廳ニ於テ之ヲ徵收シテ國庫ニ納ムヘシ

第三章　扶助料ノ支給及停止

第十條　扶助料ノ支給ハ官吏恩給法施行規則第七條第八條第九條及第十條第一第三ノ例ニ依ル

第十一條　扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ權利消滅若クハ支給期限ノ滿チタルトキハ地方廳ニ於テ扶助料ノ支給ヲ廢シ其旨ヲ大藏省ニ通知スヘシ

前項ノ場合ニ於テ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ナルトキハ地方廳ニ於テ其扶助料證書ヲ收メテ內閣恩給局ニ送付スヘシ

第十二條　扶助料ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ公權ヲ停止セラレタルトキハ官吏恩給法施行規則第十三條ノ例ニ依ル

第十三條　大藏省ニ於テ第十一條第十二條ノ通知ヲ受ケタルトキハ官吏恩給法施行規則第十六條ノ例ニ依ル

雜則

第十四條　水火災盜難等ニ依リ扶助料證書ヲ亡失シタルトキ及扶助料ヲ受クル者改氏名ヲ爲シタルトキハ官吏恩給法施行規則第十七條及第十八條ノ例ニ依ル

第十五條　明治十七年達官吏恩給令ニ依リ扶助料ヲ請求スル者ハ本則ニ依ルヘシ同令ニ依リ扶助料ヲ受クル者ハ左ノ場合ニ於テ本則ニ依ル

一　死去又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ

二　恩給證書ヲ亡失シタルトキ

三　改氏名又ハ居住地ヲ轉シタルトキ　（二十七年閣令第六號ヲ以テ改正）

第十六條　市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本規則ニ依リ市町村長ノ爲スベキ職務ハ區戸長ニ於テ之ヲ行フヘシ

官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則

（明治二十九年三月法律第三十六號）

第一條　地方稅支辨ノ俸給ヲ受ケタル郡區長ノ在官月數ハ官吏ノ恩給及遺族扶助ニ關スル在官年數中ニ算入ス

第二條　明治二十三年七月一日以後ニ退官シタル文官判任以上ノ者ニシテ地方稅支辨ノ俸給ヲ受ケタル郡區長在官中ノ月數ヲ除算シ恩給ヲ受ケ若ハ之カ爲恩給ヲ受ケサリシ者ニハ其ノ月數ヲ算入シ恩給ヲ增加シ又ハ新ニ之ヲ給スルコトヲ得

第三條　第二條ニ相當スル者在官中又ハ退官ノ後死去シ其遺族ニシテ扶助料若ハ一時扶助金ヲ受ケ又ハ之ヲ受ケサリシ者ニハ第一條ニ依リ算定シタル恩給年額若ハ在官年數ニ依リ其ノ扶助料若ハ一時扶助金ヲ增加シ又ハ新ニ之ヲ給スルコトヲ得

第四條　第二條、第三條ニ依リ新ニ恩給又ハ扶助料ヲ受クル者ハ左ノ方法ニ依リ最後ニ受ケタル退官賜金又ハ一時扶助金ノ一部ヲ返納セシム

新ニ受クヘキ恩給又ハ扶助料年額ニ其ノ退官又ハ死去以後新ニ恩給又ハ扶助料ヲ受クル日ニ至ルマテノ年數ヲ乘シ月數ハ其ノ月割額ヲ加ヘ退官賜金一時扶助金ヲ

其ノ總額ニ對照シ若超過アルトキハ其ノ超過額ヲ新ニ受クヘキ恩給又ハ扶助料中ヨリ控除ス

第五條　恩給ヲ受クル者郡判任官ニ任用セラレタルトキハ其ノ間恩給ヲ停止ス（三十三年法律第十二號ヲ以テ條中改正）

第六條　第二條、第三條ニ依リ給スル恩給及扶助料ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ起算シテ之ヲ給ス

第七條　第二條、第三條ニ依リ受クヘキ恩給、扶助料又ハ一時扶助金ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ一箇年內ニ請求セサレハ其ノ權利ヲ拋棄シタルモノトス

第八條　此ノ法律ニ於テ特別ノ規定ヲ設ケサルモノハ總テ官吏遺族扶助法ノ例ニ依ル

第九條　此ノ法律ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

●官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則施行規則（明治二十九年三月閣令第二號）

第一條　官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則第二條ニ依リ恩給ノ增加ヲ受ケ若クハ新ニ恩給ヲ受ケントスル者ハ恩給請求書ヲ退官當時ノ本屬廳ノ長官ニ差出スヘシ但廢官廳ニ當リタルトキハ其ノ事務ノ引繼ヲ受ケタル官廳ノ長官ニ差出スヘシ

第二條　官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則第三條ニ依リ扶助料又ハ一時扶助金ノ增加ヲ受ケ若クハ新ニ之レヲ受ケントスル者ハ其ノ請求書ヲ居住地ノ地方長官ニ差出スヘシ

第三條　恩給又ハ扶助料若クハ一時扶助金ノ請求書ニハ左ノ書類ヲ添附スヘシ

一　在官中ノ履歷書

二　市町村長ノ證明シタル戶籍寫

但恩給ヲ請求スル者ニ在リテハ其ノ退官當時ノ戶籍寫扶助料若クハ一時扶助金ヲ請求スル者ニ在リテハ元官吏タリシ者死亡當時ノ戶籍寫及明治二十九年四月一日現在ノ戶籍トス

三　官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則施行前ニ恩給又ハ扶助料若クハ一時扶助金ヲ受ケタル者ニ在リテハ證書若クハ辭令書

第四條　第一條ニ依リ新ニ恩給ノ請求ヲ受ケタル各廳長官ハ官吏恩給法施行規則第五條ニ掲クル計算書ノ外退官當時給與シタル退官賜金ノ調書ヲ添附スヘシ

第五條　恩給ヲ受ケタル者ヲ郡區書記ニ任用シ若クハ解任シタルトキハ官吏恩給法施行規則第十條第十四條及第十六條ヲ準用ス但從來任用シタル者ハ直ニ本條ノ手續ヲ爲スヘシ

第六條　本規則ニ於テ特別ノ規程ヲ設ケサルモノハ總テ官吏恩給法施行規則及官吏遺族扶助法施行規則ノ例ニ依ル

其ノ總額ニ對照シ若超過アルトキハ其ノ超過額ヲ新ニ受クヘキ恩給又ハ扶助料中ヨリ控除ス

第五條　恩給ヲ受クル者郡制任官ニ任用セラレタルトキハ其ノ間恩給ヲ停止ス（三十三年法律第十二號ヲ以テ條中改正）

第六條　第二條、第三條ニ依リ給スル恩給及扶助料ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ起算シテ之ヲ給ス

第七條　第二條、第三條ニ依リ受クヘキ恩給、扶助料又ハ一時扶助金ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ一箇年内ニ請求セサレハ其ノ權利ヲ拋棄シタルモノトス

第八條　此ノ法律ニ於テ特別ノ規定ヲ設ケサルモノハ總テ官吏遺族扶助法ノ例ニ依ル

第九條　此ノ法律ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

●官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則施行規則（明治三十九年三月閣令第二號）

第一條　官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則第二條ニ依リ恩給ノ增加ヲ受ケ若クハ新ニ恩給ヲ受ケントスル者ハ恩給請求書ヲ退官當時ノ本屬廳ノ長官ニ差出スヘシ但廢官廢廳ニ當リタルトキハ其ノ事務ノ引繼ヲ受ケタル官廳ノ長官ニ差出スヘシ

第二條　官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則第三條ニ依リ扶助料又ハ一時扶助金ノ增加ヲ受ケ若クハ新ニ之レヲ受ケントスル者ハ其ノ請求書ヲ居住地ノ地方長官ニ差出スヘシ

第三條　恩給又ハ扶助料若クハ一時扶助金ノ請求書ニハ左ノ書類ヲ添附スヘシ

一　在官中ノ履歷書

二　市町村長ノ證明シタル戸籍寫

但恩給ヲ請求スル者ニ在リテハ其ノ退官當時ノ戸籍寫扶助料若クハ一時扶助金ヲ請求スル者ニ在リテハ元官吏タリシ者死亡當時ノ戸籍寫及明治二十九年四月一日現在ノ戸籍トス

三　官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則施行前ニ恩給又ハ扶助料若クハ一時扶助金ヲ受ケタル者ニ在リテハ證書若クハ辭令書

第四條　第一條ニ依リ新ニ恩給ノ請求ヲ受ケタル各廳長官ハ官吏恩給法施行規則第五條ニ掲クル計算書ノ外退官當時給與シタル退官賜金ノ調書ヲ添附スヘシ

第五條　恩給ヲ受ケタル者ヲ郡區書記ニ任用シ若クハ解任シタルトキハ官吏恩給法施行規則第十條第十四條及第十六條ヲ準用ス但從來任用シタル者ハ直ニ本條ノ手續ヲ爲スヘシ

第六條　本規則ニ於テ特別ノ規程ヲ設ケサルモノハ總テ官吏恩給法施行規則及官吏遺族扶助法施行規則ノ例ニ依ル

○第九類　地方制度　賑恤

第一章　府縣

●府縣制……一
●府縣會議員選擧投票ニ關スル件……一〇
●府縣制郡制ノ直接稅ノ種類……二
●府縣郡吏員服務紀律……二
●府縣稅家屋稅ニ關スル件……三
●府縣ニ於テ市町村ニ分賦スルヲ得ヘキ費用ノ限度……三
●府縣郡市町村ノ人口及議員配當ノ件……三
●地方稅經濟ニ於テ起債及地租制限外賦課ノ件……四
●地方稅制限ニ關スル法律……二四
●災害土木費國庫補助規定……二六
●災害土木費國庫補助規定施行細則……二六

第二章　郡

●郡制……二九
●郡會議員選擧ニ關スル件……四七
●郡費分賦ノ件……四七

第三章　市町村

●市制……四八
●町村制……七〇
●市町村會議員選擧罰則……九二
●市制町村制中直接稅間接稅ノ區別……九四
●市町村歲入出豫算表式……九四
●區町村會法……九八

第四章　賑恤

●恤救規則……九九
●罹災救助基金法……一〇〇
●罹災救助基金法施行手續……一〇三

第九類　地方制度　賑恤

第一章　府縣

●府縣制（明治三十二年三月法律第六十四號）

第一章　總則
第二章　府縣會
　第一款　組織及選擧
　第二款　職務權限及處務規程
第三章　府縣參事會
　第一款　組織及選擧
　第二款　職務權限及處務規程
第四章　府縣行政
　第一款　府縣吏員ノ組織及任免
　第二款　府縣官吏府縣吏員ノ職務權限及處務規程
　第三款　給料及給與
第五章　府縣ノ財務
　第一款　財產營造物及府縣稅
　第二款　歲入出豫算及決算
第六章　府縣行政ノ監督
第七章　附則

第一章　總則

第一條　府縣ハ從來ノ區域ニ依リ郡市及島嶼ヲ包括ス

第二條　府縣ハ法人トシ官ノ監督ヲ承ケ法律命令ノ範圍內ニ於テ其ノ公共事務竝從來法律命令又ハ慣例ニ依リ及將來法律勅令ニ依リ府縣ニ屬スル事務ヲ處理ス

第三條　府縣ノ廢置分合又ハ境界變更ヲ要スルトキハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

府縣ノ境界ニ涉リテ郡市町村境界ノ變更アリタルトキハ府縣ノ境界モ亦自ラ變更ス所屬未定地ヲ市町村ノ區域ニ編入シタルトキ亦同シ

本條ノ處分ニ付財產處分ヲ要スルトキハ內務大臣ハ關係アル府縣郡市參事會及町村會ノ意見ヲ徵シテ之ヲ定ム但シ特ニ法律ノ規定アルモノハ此ノ限ニ在ラス

第二章　府縣會

第一款　組織及選擧

第四條　府縣會議員ハ各選擧區ニ於テ之ヲ選擧ス

選擧區ハ郡市ノ區域ニ依ル但シ東京市京都市大阪市其ノ他勅令ヲ以テ指定シタル市ニ於テハ區ノ區域ニ依ル

第五條　府縣會議員ハ府縣ノ人口七十萬未滿ハ議員三十人ヲ以テ定員トシ七十萬以上百萬未滿ハ五萬ヲ加フル毎ニ一人ヲ增シ百萬以上ハ七萬ヲ加フル毎ニ一人ヲ增

ス

各選擧區ニ於テ選擧スヘキ府縣會議員ノ數ハ府縣會ノ議決ヲ經内務大臣ノ許可ヲ得テ府縣知事之ヲ定ム

前項議員ノ配當方法ニ關スル必要ナル事項ハ内務大臣之ヲ定ム

第六條　府縣内ノ市町村公民ニシテ市町村會議員ノ選擧權ヲ有シ且其ノ府縣内ニ於テ一年以來直接國稅年額三圓以上ヲ納ムル者ハ府縣會議員ノ選擧權ヲ有ス

府縣内ノ市町村公民ニシテ市町村會議員ノ選擧權ヲ有シ且其ノ府縣内ニ於テ一年以來直接國稅年額十圓以上ヲ納ムル者ハ府縣會議員ノ被選擧權ヲ有ス

家督相續ニ依リ財産ヲ取得シタル者ハ其ノ財産ニ付被相續人ノ爲シタル納稅ヲ以テ其ノ者ノ納稅シタルモノト看做ス

府縣會議員ハ住所ヲ移シタル爲市町村ノ公民權ヲ失フコトアルモ其ノ住所同府縣内ニ在ルトキハ之カ爲其ノ職ヲ失フコトナシ

府縣會議員ノ選擧權及被選擧權ノ要件中其ノ年限ニ關スルモノハ府縣郡市町村ノ廢置分合若ハ境界變更ノ爲中斷セラルルコトナシ

左ニ掲クル者ハ府縣會議員ノ被選擧權ヲ有セス其ノ之ヲ罷メタル後一箇月ヲ經過セサル者亦同シ

一　其ノ府縣ノ官吏及有給吏員

二　檢事警察官吏及收稅官吏

三　神官僧侶其ノ他諸宗教師

四　小學校教員

前項ノ外ノ官吏ニシテ當選シ之ニ應セントスルトキハ所屬長官ノ許可ヲ受クヘシ

選擧事務ニ關係アル官吏吏員ハ其ノ關係區域内ニ於テ被選擧權ヲ有セス其ノ之ヲ罷メタル後一箇月ヲ經過セサル者亦同シ

府縣ノ爲請負ヲ爲ス者又ハ府縣ノ爲請負ヲ爲ス法人ノ役員ハ其ノ府縣ノ府縣會議員ノ被選擧權ヲ有セス

府縣會議員ハ衆議院議員ト相兼ヌルコトヲ得ス

第七條　府縣會議員ハ名譽職トス

縣會議員ノ任期ハ四年トス

議員ノ定數ニ異動ヲ生シタル爲又ハ議員ノ配當ヲ更正シタル爲解任ヲ要スル者ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

第八條　府縣會議員中闕員アルトキ及府縣會議員ノ定數ニ異動ヲ生シタル爲又ハ議員ノ配當ヲ更正シタル爲議員ノ選擧ヲ要スルトキハ三箇月以内ニ之ヲ行フヘシ

補闕議員ハ其ノ前任者ノ殘任期間在任ス

補闕議員ヲ除ク外本條第一項ニ依リ選擧セラレタル議員ハ次ノ改選期マテ在任ス

第九條　町村長ハ毎年九月十五日ヲ期トシ其ノ日ノ現在ニ依リ其ノ町村内ノ選擧人名簿二本ヲ調製シ其ノ一本ヲ十月一日マテニ郡長ニ送付スヘシ

郡長ハ町村長ヨリ送付シタル名簿ヲ合シ毎年十月十五日マテニ其ノ選擧區ノ選擧人名簿ヲ調製スヘシ

第十條　市長ハ毎年九月十五日ヲ期トシ其ノ日ノ現在ニ依リ十月十五日マテニ其ノ選擧區ノ選擧人名簿ヲ調製スヘシ

第十一條　選擧人其ノ住所ヲ有スル市町村外ニ於テ直接國稅ヲ納ムルトキハ九月十五日マテニ當該行政廳ノ證明ヲ得テ其ノ住所地ノ市町村長ニ屆出ツヘシ其期限内ニ屆出ヲ爲ササルトキハ其ノ納稅ハ選擧人名簿ニ記載セラルヘキ要件ニ算入セス

第十二條　郡市長ハ十月二十五日ヨリ十五日間其ノ郡市役所ニ於テ選擧人名簿ヲ關係者ノ縱覽ニ供スヘシ若關係者ニ於テ異議アルトキ又ハ正當ノ事故ニ依リ前條ノ手續ヲ爲スコト能ハスシテ名簿ニ登錄セラレサルトキハ縱覽期限内ニ之ヲ郡市長ニ申立ルコトヲ得此場合ニ於テハ郡市長ハ其ノ申立ヲ受ケタル日ヨリ十日以内ニ之ヲ決定スヘシ

前項郡市長ノ決定ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項ノ裁決ニ關シテハ府縣知事郡市長ヨリモ亦訴訟ヲ提起スルコトヲ得

選擧人名簿ハ十二月十五日ヲ以テ確定期限トシ確定名簿ハ次年ノ十二月十四日マテ之ヲ據置クヘシ

府縣參事會ノ裁決確定シ又ハ訴訟ノ判決ニ依リ名簿ノ修正ヲ要スルトキハ郡市長ニ於テ直ニ之ヲ修正スヘシ

本條ニ依リ郡市長ニ於テ名簿ヲ修正シタルトキハ其ノ要領ヲ告示シ郡長ハ本人住所地ノ町村長ニ通知シ町村長ハ之ヲ告示スヘシ

確定名簿ニ登錄セラレサル者ハ選擧ニ參與スルコトヲ得ス但シ選擧人名簿ニ記載セラルヘキ確定裁決書若ハ判決書ヲ所持シ選擧ノ當日投票所ニ到ル者ハ此ノ限ニ在ラス

確定名簿ニ登錄セラレタル者選擧權ヲ有セサルトキハ選擧ニ參與スルコトヲ得ス但シ名簿ハ之ヲ修正スル限ニ在ラス

異議ノ決定若ハ訴願ノ裁決確定シ又ハ訴訟ノ判決アリ

タルニ依リ名簿無效トナリタルトキハ九月十五日ノ現在ニ依リ更ニ名簿ヲ調製スヘシ但シ名簿調製ノ期日マテニ選擧權ヲ失ヒタル者ハ名簿ニ登錄スル限ニ在ラス

前項名簿調製ノ期日縱覽修正及確定ニ關スル期限等ハ府縣知事ノ定ムル所ニ依ル

第十三條　府縣會議員ノ選擧ハ府縣知事ノ告示ニ依リ之ヲ行フ其ノ告示ニハ選擧ヲ行フヘキ選擧區投票ヲ行フヘキ日時及選擧スヘキ議員ノ員數ヲ記載シ選擧ノ日ヨリ少クトモ二十日前ニ之ヲ發スヘシ

第十四條　府縣會議員ノ選擧ハ郡市長之ヲ管理ス

第十五條　投票所ハ市役所町村役場又ハ市町村長ノ指定シタル場所ニ於テ之ヲ設ケ市町村長其ノ事務ヲ管理ス

前項投票所ハ市町村長ニ於テ選擧ノ日ヨリ少クトモ五日前ニ之ヲ告示スヘシ

特別ノ事情アル地ニ於テハ命令ヲ於テ二箇以上ノ投票所ヲ設ケ其ノ投票ニ關シ特別ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第十六條　市町村長ハ臨時ニ其ノ管理スル投票區域內ニ於ケル選擧人中ヨリ投票立會人二名乃至四名ヲ選任スヘシ

投票立會人ハ名譽職トス

第十七條　選擧人ノ外投票所ニ入ルコトヲ得ス但シ投票所ノ事務ニ從事スル者投票所ヲ監視スル職權ヲ有スル者ハ此ノ限ニ在ラス

選擧人ハ投票所ニ於テ協議又ハ勸誘ヲ爲スコトヲ得ス

第十八條　選擧ハ投票ニ依リ之ヲ行フ

投票ハ一人一票ニ限ル

選擧人ハ選擧ノ當日自ラ投票所ニ到リ選擧人名簿ノ對照ヲ經投票簿ニ捺印シ投票スヘシ

選擧人ハ投票所ニ於テ投票用紙ニ自ラ被選擧人一名ノ氏名ヲ記載シテ投函スヘシ

投票用紙ニハ選擧人ノ氏名ヲ記載スルコトヲ得ス

自ラ被選擧人ノ氏名ヲ書スルコト能ハサル者ハ投票ヲ爲スコトヲ得ス

投票用紙ハ府縣知事ノ定ムル所ニ依リ一定ノ式ヲ用ウヘシ

第十九條　投票ノ拒否ハ投票立會人之ヲ議決ス可否同數ナルトキハ市町村長之ヲ決スヘシ

第二十條　市町村長ハ投票錄ヲ製シ投票ニ關スル顚末ヲ記載シ投票立會人ト共ニ之ニ署名スヘシ

第二十一條　投票ヲ終リタルトキハ町村長ハ其ノ指定シタル投票立會人ト共ニ直ニ投票函及投票錄ヲ選擧會場ニ送致スヘシ

第二十二條　島嶼其ノ他交通不便ノ地ニ對シテハ府縣知事ハ適宜ニ其ノ投票期日ヲ定メ選擧會ノ期日マテニ其ノ投票函ヲ送致セシムルコトヲ得

第二十三條　選擧會ハ郡役所市役所ハ郡市長ノ指定シタル場所ニ於テ之ヲ開クヘシ

前項選擧會ノ場所ハ郡市長豫メ之ヲ告示スヘシ

第二十四條　郡長ハ各投票所ヨリ參會シタル投票立會人ノ中ヨリ抽籤ヲ以テ選擧立會人二名乃至六名ヲ定ムヘシ

市長ハ選擧人中ヨリ選擧立會人二名乃至六名ヲ選任スヘシ

選擧立會人ハ名譽職トス

第二十五條　郡市長ハ選擧長ト爲リ郡ニ於テハ投票函ノ總テ到達シタル翌日市ニ於テハ投票ノ翌日選擧立會人立會ノ上投票函ヲ開キ投票ノ總數ト投票人ノ總數トヲ計算スヘシ若投票ト投票人トノ總數ニ差異ヲ生シタルトキハ其ノ由ヲ選擧錄ニ記載スヘシ但シ場合ニ依リ選擧會ハ郡ニ於テハ投票函到達ノ日市ニ於テハ投票ノ日之ヲ開クコトヲ得

前項ノ計算終リタルトキハ選擧長ハ選擧立會人ト共ニ投票ヲ點檢スヘシ

第二十六條　選擧人ハ其ノ選擧會ニ參觀ヲ求ムルコトヲ得

第二十七條　左ノ投票ハ之ヲ無效トス

一　成規ノ用紙ヲ用ヰサルモノ

二　一投票中二人以上ノ被選擧人ヲ記載シタルモノ

三　被選擧人ノ何人タルヲ確認シ難キモノ

四　被選擧權ナキ者ノ氏名ヲ記載シタルモノ

五　被選擧人ノ氏名ノ外他事ヲ記入シタルモノ

但シ爵位職業身分住所又ハ敬稱ノ類ヲ記入シタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第二十八條　投票ノ效力ハ選擧立會人之ヲ議決ス可否同數ナルトキハ選擧長之ヲ決スヘシ

第二十九條　府縣會議員ノ選擧ハ有效投票ノ最多數ヲ得タル者ヲ以テ當選トス投票ノ數相同キトキハ年長者ヲ取リ同年月ナルトキハ選擧長抽籤シテ其ノ當選者ヲ定ム

同時ニ補闕員數名ヲ選擧スルトキハ投票ノ數多キ者、投票ノ數相同キトキハ年長者ヲ以テ殘任期ノ長キ前任者ノ補闕ト爲シ同年月ナルトキハ選擧長抽籤シテ之ヲ

定ム

第三十條　選舉長ハ選舉錄ヲ製シテ選舉ノ顛末ヲ記載シ選舉ヲ終リタル後之ヲ朗讀シ選舉立會人二名以上ト共ニ之ニ署名シ投票選舉人名簿其ノ他關係書類ト共ニ選舉ノ效力確定スルニ至ルマテ之ヲ保存スヘシ

第三十一條　選舉ヲ終リタルトキハ選舉長ハ直ニ當選ノ旨ヲ告知シ同時ニ選舉錄ノ寫ヲ添ヘ當選者ノ住所氏名ヲ府縣知事ニ報告スヘシ

當選者當選ノ告知ヲ受ケタルトキハ十日以內ニ其ノ當選ヲ承諾スルヤ否ヲ府縣知事ニ申立ツヘシ

一人ニシテ數選舉區ノ選舉ニ當リタルトキハ最終ニ當選ノ告知ヲ受ケタル日ヨリ十日以內ニ何レノ選舉ニ應スヘキカヲ府縣知事ニ申立ツヘシ

定期改選增員選舉補闕選舉等ヲ同時ニ行ヒタル場合ニ於テ一人ニシテ其ノ數選舉ニ當リタルトキハ前項ノ例ニ依ル

前三項ノ申立ヲ其ノ期限內ニ爲ササルトキハ當選ヲ辭シタルモノト看做ス

第六條第七項ノ官吏ニシテ當選シタル者ニ關シテハ本條ニ定ムル期間ヲ二十日以內トス

第三十二條　府縣會議員ノ當選ヲ辭シタル者アルトキハ更ニ選舉ヲ行フヘシ

二人以上投票同數ニシテ年長ニ由テ當選シタル者其ノ當選ヲ辭シタルトキハ年少ニ由テ當選セサリシ者ヲ以テ當選トス但シ年少ニ由テ當選セサリシ者二人以上アルトキハ年長者ヲ取リ同年月ナルトキハ選舉長抽籤シテ其ノ當選者ヲ定ム

二人以上投票同數ニシテ抽籤ニ依テ當籤シタル者其ノ當選ヲ辭シタルトキハ抽籤ノ爲當選セサリシ者ヲ以テ當選トス但シ抽籤ノ爲當選セサリシ者二人以上アルトキハ選舉長抽籤シテ其ノ當選者ヲ定ム

第三十三條　當選者其ノ當選ヲ承諾シタルトキハ府縣知事ハ直ニ當選證書ヲ付與シ及其ノ住所氏名ヲ告示スヘシ

第三十四條　選舉人選舉若ハ當選ノ效力ニ關シ異議アルトキハ選舉ノ日ヨリ十四日以內ニ之ヲ府縣知事ニ申立ツルコトヲ得

前項ノ異議ハ之ヲ府縣參事會ノ決定ニ付スヘシ

府縣知事ニ於テ選舉若ハ當選ノ效力ニ關シ異議アルトキト第一項申立ノ有無ニ拘ラス第三十一條第一項ノ報告ヲ受ケタル日ヨリ三十日以內ニ府縣參事會ノ決定ニ付スルコトヲ得

本條府縣參事會ノ決定ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項ノ決定ニ關シテハ府縣知事郡市長ヨリモ亦訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第三十五條　選舉ノ規定ニ違背スルコトアルトキハ其ノ選舉ヲ無效トス但シ選舉ノ結果ニ異動ヲ生スルノ虞ナキモノハ此ノ限ニ在ラス

當選者ニシテ被選舉權ヲ有セサルトキハ其ノ當選ヲ無效トス

第三十六條　選舉若ハ當選無效ト確定シタルトキハ更ニ選舉ヲ行フヘシ但シ得票數ノ査定ニ錯誤アリタル爲又ハ選舉ノ際被選舉權ヲ有セサル爲當選無效ト確定シタルトキハ第二十九條及第三十一條ノ例ニ依ル

第三十七條　府縣會議員ニシテ被選舉權ヲ有セサル者ハ其ノ職ヲ失フ其ノ被選舉權ニ關スル異議ハ府縣參事會之ヲ決定ス

府縣會ニ於テ其ノ議員中被選舉權ヲ有セサル者アリト認ムルトキハ之ヲ府縣知事ニ通知スヘシ但シ議員ハ自己ノ資格ニ關スル會議ニ於テ辯明スルコトヲ得ルモ其ノ議決ニ加ハルコトヲ得ス

府縣知事ハ前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ府縣參事會ノ決定ニ付スヘシ府縣知事ニ於テ被選舉權ヲ有セサル者アリト認ムルトキ亦同シ

本條府縣參事會ノ決定ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項ノ決定ニ關シテハ府縣知事郡市長ヨリモ亦訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第三十八條　本款ニ規定スル異議ノ決定訴願ノ裁決ハ其ノ決定書若ハ裁決書ヲ交付シタルトキ直ニ之ヲ告示スヘシ

第三十九條　第四條第二項但書ノ市ニ於テハ市長トアルハ區長又市トアルハ區、市役所トアルハ區役所ト看做シ本款ノ規定ヲ準用ス

町村組合ニシテ町村ノ事務ノ全部ヲ共同處理スルモノハ之ヲ一町村ト看做シ本款ノ規定ヲ準用ス

第四十條　府縣會議員ノ選舉ニ付テハ衆議院議員選舉ニ關スル罰則ヲ準用ス

第二款　職務權限及處務規程

第四十一條　府縣會ノ議決スヘキ事件左ノ如シ

一　歳入出豫算ヲ定ムル事
二　決算報告ニ關スル事
三　法律命令ニ定ムルモノヲ除ク外使用料手數料府縣稅及夫役現品ノ賦課徵收ニ關スル事
四　不動産ノ處分並買受讓受ニ關スル事
五　積立金穀等ノ設置及處分ニ關スル事
六　歳入出豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除ク外新ニ義務ノ負擔ヲ爲シ及權利ノ抛棄ヲ爲ス事
七　財産及營造物ノ管理方法ヲ定ムル事但シ法律命令中別段ノ規定アルモノハ此ノ限ニ在ラス
八　其ノ他法律命令ニ依リ府縣會ノ權限ニ屬スル事項

第四十二條　府縣會ハ其ノ權限ニ屬スル事項ヲ府縣參事會ニ委任スルコトヲ得

第四十三條　府縣會ハ法律命令ニ依リ選擧ヲ行フヘシ

第四十四條　府縣會ハ府縣ノ公益ニ關スル事件ニ付意見書ヲ府縣知事若ハ内務大臣ニ呈出スルコトヲ得

第四十五條　府縣會ハ官廳ノ諮問アルトキハ意見ヲ答申スヘシ

府縣會ノ意見ヲ徵シテ處分ヲ爲スヘキ場合ニ於テ府縣會招集ニ應セス若ハ成立セス又ハ意見ヲ呈出セサルトキハ當該官廳ハ其ノ意見ヲ俟タスシテ直ニ處分ヲ爲スコトヲ得

第四十六條　府縣會議員ハ選擧人ノ指示若ハ委囑ヲ受クヘカラス

第四十七條　府縣會ハ議員中ヨリ議長副議長各一名ヲ選擧スヘシ

議長副議長ハ議員ノ定期改選毎ニ一ヲ改選スヘシ

第四十八條　議長故障アルトキハ副議長之ニ代リ議長副議長共ニ故障アルトキハ臨時ニ議員中ヨリ假議長ヲ選擧スヘシ

第四十九條　府縣知事及其ノ委任若ハ囑託ヲ受ケタル官吏吏員ハ會議ニ列席シテ議事ニ參與スルコトヲ得但シ議決ニ加ハルコトヲ得ス

前項ノ列席者ニ於テ發言ヲ求ムルトキハ議長ハ直ニ之ヲ許スヘシ但シ之カ爲議員ノ演說ヲ中止セシムルコトヲ得ス

第五十條　府縣會ハ通常會及臨時會トス

通常會ハ毎年一回之ヲ開ク其ノ會期ハ三十日以内トス

臨時會ハ必要アル場合ニ於テ其ノ事件ニ限リ之ヲ開ク其ノ會期ハ七日以内トス

臨時會ニ付スヘキ事件ハ豫メ之ヲ告示スヘシ但シ其ノ開會中急施ヲ要スル事件アルトキハ府縣知事ハ直ニ之ヲ其ノ會議ニ付スルコトヲ得

第五十一條　府縣會ハ府縣知事之ヲ招集ス

招集ハ開會ノ日ヨリ少クトモ十四日前ニ告示スヘシ但シ急施ヲ要スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

府縣會ハ府縣知事之ヲ開閉ス

第五十二條　府縣會ハ議員定員ノ半數以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

第五十三條　府縣會ノ議事ハ過半數ヲ以テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第五十四條　議長及議員ハ自己若ハ父母祖父母妻子孫兄弟姉妹ノ一身上ニ關スル事件ニ付テハ府縣會ノ同意ヲ得ルニ非サレハ其ノ議事ニ參與スルコトヲ得ス

第五十五條　法律命令ノ規定ニ依リ府縣會ニ於テ選擧ヲ行フトキハ一名毎ニ匿名投票ヲ爲シ有效投票ノ過半數ヲ得タル者ヲ以テ當選トス若過半數ヲ得タル者ナキトキハ最多數ヲ得タル者二名ヲ取リ之ニ就キ決選投票ヲ爲サシム其ノ二名ヲ取ルニ當リ同數者アルトキハ年長者ヲ取リ同年月ナルトキハ議長抽籤シテ之ヲ定ム此ノ決選投票ニ於テハ最多數ヲ得タル者ヲ以テ當選トス若同數ナルトキハ年長者ヲ取リ同年月ナルトキハ議長抽籤シテ之ヲ定ム其ノ他ハ第十八條第二十七條及第二十八條ノ規定ヲ準用ス

前項ノ選擧ニ付テハ府縣會ハ其ノ議決ヲ以テ指名推選若ハ連名投票ノ法ヲ用ウルコトヲ得其ノ連名投票ノ法ヲ用ウル場合ニ於テハ前項ノ例ニ依ル

第五十六條　府縣會ノ會議ハ公開ス但シ左ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス

一　府縣知事ヨリ傍聽禁止ノ要求ヲ受ケタルトキ
二　議長若ハ議員三名以上ノ發議ニ依リ傍聽禁止ヲ可決シタルトキ

前項議長若ハ議員ノ發議ハ討論ヲ須ヒス其ノ可否ヲ決スベシ

第五十七條　議長ハ會議ノ事ヲ總理シ會議ノ順序ヲ定メ其ノ日ノ會議ヲ開閉シ議場ノ秩序ヲ保持ス

第五十八條　府縣會議員ハ會議中無禮ノ語ヲ用ヰ又ハ他人ノ身上ニ涉リ言論スルコトヲ得ス

第五十九條　會議中此ノ法律若ハ會議規則ニ違ヒ其ノ他議場ノ秩序ヲ紊ル議員アルトキハ議長ハ之ヲ制止シ若ハ發言ヲ取消サシメ命ニ從ハサルトキハ議長ハ當日ノ會議ヲ終ルマテ發言ヲ禁止シ又ハ議場ノ外ニ退去セシメ必要ナル場合ニ於テハ警察官吏ノ處分ヲ求ムルコトヲ得

議場騷擾ニシテ整理シ難キトキハ議長ハ當日ノ會議ヲ中止シ又ハ之ヲ閉ツルコトヲ得

第六十條　傍聽人公然可否ヲ表シ又ハ喧騷ニ渉リ其ノ他會議ノ妨害ヲ爲ストキハ議長ハ之ヲ制止シ命ニ從ハサルトキハ之ヲ退場セシメ必要ナル場合ニ於テハ警察官吏ノ處分ヲ求ムルコトヲ得

傍聽席騷擾ナルトキハ議長ハ總テノ傍聽人ヲ退場セシメ必要ナル場合ニ於テハ警察官吏ノ處分ヲ求ムルコトヲ得

第六十一條　議場ノ秩序ヲ紊リ又ハ會議ノ妨害ヲ爲ス者アルトキハ議員若ハ第四十九條ノ列席者ハ議長ノ注意ヲ喚起スルコトヲ得

第六十二條　府縣會ニ書記ヲ置キ議長ニ隷屬シテ庶務ヲ處理セシム

書記ハ議長之ヲ任免ス

第六十三條　議長ハ書記ヲシテ會議錄ヲ製シ會議ノ顚末並出席議員ノ氏名ヲ記載セシムヘシ會議錄ハ議長及議員二名以上之ニ署名スルヲ要ス其ノ議員ハ府縣會ニ於テ之ヲ定ムヘシ

議長ハ會議錄ヲ添ヘ會議ノ結果ヲ府縣知事ニ報告スヘシ

第六十四條　府縣會ハ會議規則及傍聽人取締規則ヲ設ケ內務大臣ノ許可ヲ受クヘシ

會議規則ニハ此ノ法律並會議規則ニ違背シタル議員ニ對シ府縣會ノ議決ニ依リ五日以內出席ヲ停止スル規定ヲ設クルコトヲ得

第三章　府縣參事會

第一款　組織及選擧

第六十五條　府縣ニ府縣參事會ヲ置キ府縣知事府縣高等官二名及名譽職參事會員ヲ以テ之ヲ組織ス

府ノ名譽職參事會員ハ八名トシ縣ノ名譽職參事會員ハ六名トス

府縣高等官ニシテ府縣參事會員タルヘキ者ハ內務大臣之ヲ命ス

第六十六條　名譽職參事會員ハ府縣會ニ於テ議員中ヨリ之ヲ選擧スヘシ

府縣會ハ名譽職參事會員ト同數ノ補充員ヲ選擧スヘシ

名譽職參事會員中闕員アルトキハ府縣知事ハ補充員ノ中ニ就キ之ヲ補闕ス其ノ順序ハ選擧同時ナルトキハ投票數ニ依リ投票同數ナルトキハ年長者ヲ取リ同年月ナルトキハ抽籤ニ依リ選擧ノ時ヲ異ニスルトキハ選擧ノ前後ニ依ル仍闕員ヲ生シタル場合ニ於テハ臨時補闕選

舉ヲ行フヘシ

補闕員ハ前任者ノ殘任期間在任ス

名譽職參事會員及其ノ補充員ハ府縣會議員ノ定期改選毎ニ之ヲ改選スヘシ但シ名譽職參事會員ハ後任者就任ノ日マテ在任ス

第六十七條　府縣參事會ハ府縣知事ヲ以テ議長トス府縣知事故障アルトキハ高等官參事會員議長ノ職務ヲ代理ス

第二款　職務權限及處務規程

第六十八條　府縣參事會ノ職務權限左ノ如シ

一　府縣會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ其ノ委任ヲ受ケタルモノヲ議決スル事

二　府縣會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ臨時會施ヲ要シ府縣知事ニ於テ之ヲ招集スルノ暇ナシト認ムルトキ府縣會ニ代テ議決スル事

三　府縣知事ヨリ府縣會ニ提出スル議案ニ付府縣知事ニ對シ意見ヲ述フル事

四　府縣會ノ議決シタル範圍內ニ於テ財產及營造物ノ管理ニ關シ重要ナル事項ヲ議決スル事

五　府縣費ヲ以テ支辨スヘキ工事ノ執行ニ關スル規定ヲ議決スル事但シ法律命令中別段ノ規定アルモノハ此ノ限ニ在ラス

六　府縣ニ係ル訴願訴訟及和解ニ關スル事項ヲ議決スル事

七　其ノ他法律命令ニ依リ府縣參事會ノ權限ニ屬スル事項

第六十九條　府縣參事會ハ名譽職參事會員中ヨリ委員ヲ選擧シ之ヲシテ府縣ニ係ル出納ヲ檢查セシムルコトヲ得

前項ノ檢查ニハ府縣知事又ハ其ノ指命シタル官吏若ハ吏員之ニ立會フコトヲ要ス

第七十條　第四十四條第四十五條第四十九條及第六十二條ノ規定ハ府縣參事會ニ之ヲ準用ス

第七十一條　府縣參事會ハ府縣知事之ヲ招集ス若名譽職參事會員半數以上ノ請求アル場合ニ於テ相當ノ理由アリト認ムルトキハ府縣知事ハ府縣參事會ヲ招集スヘシ

府縣參事會ノ會期ハ府縣知事之ヲ定ム

第七十二條　府縣參事會ノ會議ニ傍聽ヲ許サス

第七十三條　府縣參事會ハ議長又ハ其ノ代理者及名譽職參事會員定員ノ半數以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

第六十八條第二ノ議決ヲ爲ストキハ府縣知事高等官參

事會員ハ其ノ議決ニ加ハルコトヲ得ス

府縣參事會ノ議事ハ過半數ヲ以テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

會議ノ顚末ハ之ヲ會議錄ニ記載シ議長及參事會員二名以上之ニ署名スヘシ

第七十四條　第五十四條ノ規定ハ府縣參事會員ニ之ヲ準用ス但シ同條ノ規定ニ依リ會員ノ數減少シテ前條第一項ノ數ヲ得サルトキハ府縣知事ハ補充員ニシテ其ノ事件ニ關係ナキ者ヲ以テ第六十六條第三項ノ順序ニ依リ臨時之ニ充テ仍其ノ數ヲ得サルトキハ府縣會議員ニシテ其ノ事件ニ關係ナキ者ヲ臨時ニ指名シ其ノ闕員ヲ補充スヘシ

議長及其ノ代理者共ニ除席セラレタルトキハ年長ノ會員ヲ以テ假議長ト爲スヘシ

第四章　府縣行政

第一款　府縣吏員ノ組織及任免

第七十五條　府縣ニ有給ノ府縣吏員ヲ置クコトヲ得

前項ノ府縣吏員ハ府縣知事之ヲ任免ス

第七十六條　府縣ニ府縣出納吏ヲ置キ官吏吏員ノ中ニ就キ府縣知事之ヲ命ス

第七十七條　府縣ハ府縣會ノ議決ヲ經內務大臣ノ許可ヲ得テ臨時若ハ常設ノ委員ヲ置クコトヲ得

委員ハ名譽職トス

委員ノ組織選任任期等ニ關スル事項ハ府縣會ノ議決ヲ經內務大臣ノ許可ヲ得テ府縣知事之ヲ定ム

第二款　府縣官吏府縣吏員ノ職務權限及處務規程

第七十八條　府縣知事ハ府縣ヲ統轄シ府縣ヲ代表ス

府縣知事ノ擔任スル事務ノ概目左ノ如シ

一　府縣費ヲ以テ支辨スヘキ事件ヲ執行スル事

二　府縣會及府縣參事會ノ議決ヲ經ヘキ事件ニ付其ノ議案ヲ發スル事

三　財產及營造物ヲ管理スル事但シ特ニ之カ管理者アルトキハ其ノ事務ヲ監督スル事

四　收入支出ヲ命令シ及會計ヲ監督スル事

五　證書及公文書類ヲ保管スル事

六　法律命令又ハ府縣會若ハ府縣參事會ノ議決ニ依リ使用料手數料府縣稅及夫役現品ヲ賦課徵收スル事

七　其ノ他法律命令ニ依リ府縣知事ノ職權ニ屬スル事項

第七十九條　府縣知事ハ議案ヲ府縣會ニ提出スル前之ヲ府縣參事會ノ審査ニ付シ若府縣參事會ト其ノ意見ヲ異ニスルトキハ府縣參事會ノ意見ヲ議案ニ添ヘ府縣會ニ提出スヘシ

第八十條　府縣知事ハ府縣ノ行政ニ關シ其ノ職權ニ屬スル事務ノ一部ヲ郡島ノ官吏吏員又ハ市町村吏員ニ補助執行セシメ若ハ委任スルコトヲ得

府縣知事ハ府縣ノ行政ニ關シ其ノ職權ニ屬スル事務ノ一部ヲ府縣吏員ニ臨時代理セシムルコトヲ得

第八十一條　府縣知事ハ府縣吏員ヲ監督シ懲戒處分ヲ行フコトヲ得其ノ懲戒處分ハ譴責二十五圓以下ノ過怠金及解職トス

府縣知事ハ府縣吏員ノ懲戒處分ヲ行ハントスル前其吏員ノ停職ヲ命シ並給料ヲ支給セサルコトヲ得

懲戒ニ依リ解職セラレタル者ハ二年間其ノ府縣ノ公職ニ選擧セラレ若ハ任命セラルルコトヲ得ス

第八十二條　府縣會若ハ府縣參事會ノ議決若ハ選擧其ノ權限ヲ越エ又ハ法律命令ニ背クト認ムルトキハ府縣知事ハ自己ノ意見ニ依リ又ハ內務大臣ノ指揮ニ依リ理由ヲ示シテ直ニ其ノ議決若ハ選擧ヲ取消シ又ハ議決ニ付テハ再議ニ付シタル上仍其ノ議決ヲ改メサルトキハ之ヲ取消スヘシ

前項取消處分ニ不服アル府縣會若ハ府縣參事會ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

府縣會若ハ府縣參事會ノ議決公益ニ害アリト認ムルトキハ府縣知事ハ自己ノ意見ニ依リ又ハ內務大臣ノ指揮ニ依リ理由ヲ示シテ之ヲ再議ニ付シ仍其ノ議決ヲ改メサルトキハ內務大臣ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

第八十三條　府縣會若ハ府縣參事會ニ於テ府縣ノ收支ニ關シ不適法ノ議決ヲ爲シタルトキハ府縣知事ハ自己ノ意見ニ依リ又ハ內務大臣ノ指揮ニ依リ理由ヲ示シテ之ヲ再議ニ付シ仍其ノ議決ヲ改メサルトキハ內務大臣ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ但シ場合ニ依リ再議ニ付セスシテ直ニ內務大臣ノ指揮ヲ請フコトヲ得

第八十四條　府縣知事ハ期日ヲ定メテ府縣會ノ停會ヲ命スルコトヲ得

第八十五條　府縣會若ハ府縣參事會招集ニ應セス又ハ成立セサルトキハ府縣知事ハ內務大臣ニ具狀シテ指揮ヲ請ヒ其ノ議決スヘキ事件ヲ處分スルコトヲ得第五十四條第七十四條ノ場合ニ於テ會議ヲ開クコト能ハサルトキ亦同シ

府縣會若ハ府縣參事會ニ於テ其ノ議決スヘキ事件ヲ議決セス又ハ府縣會ニ於テ其ノ招集前告示セラレタル事件ニ關シ議案ヲ議了セサルトキハ前項ノ例ニ依ル

府縣參事會ノ決定若ハ裁決スヘキ事項ニ關シテハ本條第一項第二項ノ例ニ依ル此ノ場合ニ於ケル府縣知事ノ處分ニ關シテハ各本條ノ規定ニ準シ訴願及訴訟ヲ提起スルコトヲ得

本條ノ處分ハ次ノ會期ニ於テ之ヲ府縣會若ハ府縣參事會ニ報告スヘシ

第八十六條　府縣參事會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ臨時急施ヲ要シ府縣知事ニ於テ之ヲ招集スルノ暇ナシト認ムルトキハ府縣知事ハ專決處分シ次ノ會期ニ於テ其ノ處分ヲ府縣參事會ニ報告スヘシ

第八十七條　府縣參事會ノ權限ニ屬スル事項ハ其ノ議決ニ依リ府縣知事ニ於テ專決處分スルコトヲ得

第八十八條　官吏ノ府縣行政ニ關スル職務關係ハ此ノ法律中規定アルモノヲ除ク外國ノ行政ニ關スル其ノ職務關係ノ例ニ依ル

第八十九條　府縣出納吏ハ出納事務ヲ掌ル

第九十條　府縣吏員ハ府縣知事ノ命ヲ受ケ事務ニ從事ス

第九十一條　委員ハ府縣知事ノ指揮監督ヲ受ケ財產若ハ營造物ヲ管理シ其ノ他府縣行政事務ノ一部ヲ調査シ又ハ一時ノ委託ニ依リ事務ヲ處辨ス

第九十二條　府縣ノ事務ニ關スル處務規程ハ府縣知事之ヲ定ム

第三款　給料及給與

第九十三條　有給府縣吏員ノ給料額並旅費額及其ノ支給方法ハ府縣知事之ヲ定ム

第九十四條　府縣會議員名譽職參事會員其ノ他名譽職員ハ職務ノ爲要スル費用ノ辨償ヲ受クルコトヲ得

費用辨償額及其ノ支給方法ハ府縣會ノ議決ヲ經內務大臣ノ許可ヲ得テ府縣知事之ヲ定ム若シ之ヲ許可スヘカラスト認ムルトキハ內務大臣之ヲ定ム

第九十五條　有給府縣吏員ノ退隱料退職給與金遺族扶助料及其ノ支給方法ハ前條第三項ノ例ニ依リテ之ヲ定ム

第九十六條　退隱料退職給與金遺族扶助料及費用辨償ノ給與ニ關シ異議アルトキハ之ヲ府縣知事ニ申立ツルコトヲ得

前項ノ異議ハ之ヲ府縣參事會ノ決定ニ付スヘシ其ノ決定ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項ノ決定ニ關シテハ府縣知事ヨリモ亦訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第九十七條　給料旅費退隱料退職給與金遺族扶助料費用辨償其ノ他諸給與ハ府縣ノ負擔トス

第五章　府縣ノ財務

第一款　財產營造物及府縣稅

第九十八條　府縣ハ積立金穀等ヲ設クルコトヲ得

第九十九條　府縣ハ營造物若ハ公共ノ用ニ供シタル財產ノ使用ニ付使用料ヲ徵收シ又ハ特ニ一個人ノ爲ニスル事務ニ付手數料ヲ徵收スルコトヲ得

第百條　此ノ法律中別ニ規定アルモノヲ除ク外使用料手數料ニ關スル細則ハ府縣會ノ議決ヲ經內務大臣ノ許可ヲ得テ府縣知事之ヲ定ム其ノ細則ニハ過料二圓以下ノ罰則ヲ設クルコトヲ得

過料ニ處シ及之ヲ徵收スルハ府縣知事之ヲ掌ル其ノ處分ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第百一條　府縣ハ其ノ公益上必要アル場合ニ於テハ寄附若ハ補助ヲ爲スコトヲ得

第百二條　府縣ハ其ノ必要ナル費用及法律勅令又ハ從來ノ慣例ニ依リ府縣ノ負擔ニ屬スル費用ヲ支辨スル義務ヲ負フ

第百三條　府縣稅及其ノ賦課徵收方法ニ關シテハ法律ニ規定アルモノヲ除ク外勅令ノ定ムル所ニ依ル

府縣ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ其ノ費用ヲ市町村ニ分賦スルコトヲ得

第百四條　府縣內ニ住所ヲ有スル者ハ府縣稅ヲ納ムル義務ヲ負フ

第百五條　三箇月以上府縣內ニ滯在スル者ハ其ノ滯在ノ初ニ遡リ府縣稅ヲ納ムル義務ヲ負フ

第百六條　府縣內ニ住所ヲ有セス又ハ三箇月以上滯在スルコトナシト雖府縣內ニ於テ土地家屋物件ヲ所有シ若ハ使用シ又ハ營業所ヲ定メテ營業ヲ爲シ又ハ府縣內ニ於テ特定ノ行爲ヲ爲ス者ハ其ノ土地家屋物件營業若ハ其收入ニ對シ又ハ行爲ニ對シテ賦課スル府縣稅ヲ納ムル義務ヲ負フ其ノ法人タルトキ亦同シ但シ國ノ事業若ハ行爲ニ對シテハ此ノ限ニ在ラス

第百七條　納稅者ノ府縣外ニ於テ所有シ若ハ使用スル土地家屋物件又ハ府縣外ニ於テ營業所ヲ定メタル營業ヨリ生スル收入ニ對シテハ府縣稅ヲ賦課スルコトヲ得ス

住所滯在一府縣以上ニ涉ル者ノ收入ニ對シ府縣稅ヲ賦課スルトキハ其ノ收入ヲ各府縣ニ平分シ其ノ一部ニノミ賦課スヘシ但シ土地家屋物件又ハ營業所ヲ定メタル營業ヨリ生スル收入ハ此ノ限ニ在ラス

第百八條　一府縣以上ニ涉リ營業所ヲ定メテ營業ヲ爲シ且其ノ本稅ヲ分別シテ納メサル者ニ對シ關係府縣ニ於テ營業稅ノ附加稅ヲ賦課スルトキハ關係府縣知事協議ノ上其ノ步合ヲ定メ內務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受ク

ヘシ若協議調ハサルトキハ内務大臣及大藏大臣之ヲ定ム

第百九條　府縣稅賦課ノ細目ニ係ル事項ハ府縣會ノ議決ニ依リ關係市町村會ノ議決ニ付スルコトヲ得

市町村會ニ於テ府縣會ノ議決ニ依リ定マリタル期限内ニ其ノ議決ヲ爲サザルトキ若ハ不適當ノ議決ヲ爲シタルトキハ府縣參事會之ヲ議決スヘシ

第百十條　府縣稅ヲ賦課スルコトヲ得サルモノニ關シテハ法律勅令ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルモノヲ除ク外市町村稅ノ例ニ依ル

第百十一條　府縣内ノ一部ニ對シ特ニ利益アル事件ニ關シテハ勅令ノ定ムル所ニ依リ不均一ノ賦課ヲ爲スコトヲ得

第百十二條　府縣ハ其ノ必要ニ依リ夫役及現品ヲ府縣内一部ノ市町村其ノ他公共團體若ハ一部ノ納稅義務者ニ賦課スルコトヲ得但シ學藝美術及手工ニ關スル勞役ヲ課スルコトヲ得ス

夫役及現品ハ急迫ノ場合ヲ除ク外金額ニ算出シテ賦課スヘシ

夫役ヲ課セラレタル者ハ其ノ便宜ニ從ヒ本人自ラ之ニ當リ又ハ適當ノ代人ヲ出スコトヲ得又夫役及現品ハ急迫ノ場合ヲ除ク外金錢ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

第百十三條　府縣稅ノ減免若ハ納稅ノ延期ハ特別ノ事情アル者ニ限リ府縣知事ハ府縣參事會ノ議決ヲ經テ之ヲ許スコトヲ得

第百十四條　市制施行ノ府縣ニ於テハ郡廳舍建築修繕費及郡役所費ハ郡ニ屬スル部分ノ負擔トス

第百十五條　府縣稅ノ賦課ヲ受ケタル者其ノ賦課ニ付違法若ハ錯誤アリト認ムルトキハ徵稅令書又ハ徵稅傳令書ノ交付後三箇月以内ニ府縣知事ニ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第百三條第二項ノ場合ニ於テ市町村ハ府縣費ノ分賦ニ關シ違法若ハ錯誤アリト認ムルトキハ其ノ告知ヲ受ケタル時ヨリ三箇月以内ニ府縣知事ニ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得

前二項ノ異議ハ之ヲ府縣參事會ノ決定ニ付スヘシ其ノ決定ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

使用料及手數料ノ徵收ニ關シテモ亦第一項及第三項ノ例ニ依ル

本條ノ決定ニ關シテハ府縣知事郡島ノ官吏吏員市町村吏員ヨリモ亦訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第百十六條　府縣稅ノ賦課ニ關シ必要アル場合ニ於テハ

當該行政廳ハ日出ヨリ日沒マテノ間營業者ニ關シテハ仍其ノ營業時間家宅ニ臨檢シ又ハ帳簿物件ノ檢査ヲ爲スコトヲ得

府縣稅使用料手數料夫役現品ニ代フル金錢過料其ノ他府縣ノ收入ヲ定期内ニ納メサル者アルトキハ國稅滯納處分ノ例ニ依リ之ヲ處分スヘシ

本條ニ記載スル徵收金ハ國ノ徵收金ニ次テ先取特權ヲ有シ其ノ追徵還付及時效ニ付テハ國稅ノ例ニ依ル

本條第二項ノ場合ニ於テ郡島ノ官吏吏員市町村吏員ノ處分ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其ノ裁決又ハ府縣知事ノ處分ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項ノ裁決ニ關シテハ府縣知事郡島ノ官吏吏員市町村吏員ヨリモ亦訴訟ヲ提起スルコトヲ得

本條第二項ノ處分ハ其ノ確定ニ至ルマテ執行ヲ停止ス

第百十七條　府縣ハ其ノ負債ヲ償還スル爲又ハ府縣ノ永久ノ利益ト爲ルヘキ支出ヲ要スル爲又ハ天災事變等ノ爲必要アル場合ニ限リ府縣會ノ議決ヲ經テ府縣債ヲ起スコトヲ得

府縣債ヲ起スニ付府縣會ノ議決ヲ經ルトキハ併セテ起債ノ方法利息ノ定率及償還ノ方法ニ付議決ヲ經ヘシ

府縣ハ豫算内ノ支出ヲ爲ス爲本條ノ例ニ依ラス府縣參事會ノ議決ヲ經テ一時ノ借入金ヲ爲スコトヲ得

第二款　歲入出豫算及決算

第百十八條　府縣知事ハ毎會計年度歲入出豫算ヲ調製シ年度開始前府縣會ノ議決ヲ經ヘシ

府縣ノ會計年度ハ政府ノ會計年度ニ同シ

豫算ヲ府縣會ニ提出スルトキハ府縣知事ハ併セテ財產表ヲ提出スヘシ

第百十九條　府縣知事ハ府縣會ノ議決ヲ經テ既定豫算ノ追加若ハ更正ヲ爲スコトヲ得

第百二十條　府縣費ヲ以テ支辨スル事件ニシテ數年ヲ期シテ施行スヘキモノ又ハ數年ヲ期シテ其ノ費用ヲ支出スヘキモノハ府縣會ノ議決ヲ經テ其ノ年期間各年度ノ支出額ヲ定メ繼續費ト爲スコトヲ得

第百二十一條　豫算外ノ支出若ハ豫算超過ノ支出ニ充ツル爲豫備費ヲ設クヘシ但シ府縣會ノ否決シタル費途ニ充ツルコトヲ得ス

第百二十二條　豫算ハ議決ヲ經タル後直ニ之ヲ内務大臣ニ報告シ並其ノ要領ヲ告示スヘシ

第百二十三條　府縣知事ハ府縣會ノ議決ヲ經テ特別會計ヲ設クルコトヲ得

第百二十四條　決算ハ翌翌年ノ通常會ニ於テ之ヲ府縣會ニ報告スヘシ

府縣知事ハ決算ヲ府縣會ニ報告スル前府縣參事會ノ審査ニ付スヘシ若府縣知事ト府縣參事會ト意見ヲ異ニスルトキハ府縣知事ハ府縣參事會ノ意見ヲ決算ニ添ヘ府縣會ニ提出スヘシ

決算ハ之ヲ內務大臣ニ報告シ並其ノ要領ヲ告示スヘシ

第百二十五條　豫算調製ノ式並費目流用其ノ他財務ニ關スル必要ナル規定ハ內務大臣之ヲ定ム

第百二十六條　府縣吏員ノ身元保證及賠償責任ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第六章　府縣行政ノ監督

第百二十七條　府縣ノ行政ハ內務大臣之ヲ監督ス

第百二十八條　此ノ法律ニ規定スル異議若ハ訴願ハ處分ヲ爲シ又ハ決定書若ハ裁決書ノ交付ヲ受ケタル翌日ヨリ起算シ十四日以內ニ之ヲ提起スヘシ但シ此ノ法律中別ニ期限ヲ定メタルモノハ此ノ限ニ在ラス

此ノ法律ニ規定スル行政訴訟ハ處分ヲ爲シ決定書若ハ裁決書ノ交付ヲ受ケタル翌日ヨリ起算シ二十一日以內ニ之ヲ提起スヘシ

決定書若ハ裁決書ノ交付ヲ受ケサル者ニ關シテハ前二項ノ期間ハ告示ノ翌日ヨリ起算ス

此ノ法律ニ規定スル異議ノ決定ハ文書ヲ以テ之ヲ爲シ其ノ理由ヲ付スヘシ

前項異議ノ決定書ハ之ヲ申立人ニ交付スヘシ

此ノ法律ニ規定スル異議ノ申立若ハ訴願ノ提起ニ關スル期間ノ計算並天災事變ノ場合ニ於ケル特例ニ付テハ民事訴訟法ノ規定ヲ準用ス

異議ヲ申立又ハ訴願訴訟ヲ提起スル者アルトキハ行政廳及行政裁判所ハ其ノ職權ニ依リ又ハ關係者ノ請求ニ依リ必要ト認ムル場合ニ限リ處分ノ執行ヲ停止スルコトヲ得

第百二十九條　內務大臣ハ府縣行政ノ法律命令ニ背戾セサルヤ又ハ公益ヲ害セサルヤ否ヲ監視スヘシ內務大臣ハ之カ爲行政事務ニ關シテ報告ヲ爲サシメ書類帳簿ヲ徵シ並實地ニ就キ事務ヲ視察シ出納ヲ檢閱スルノ權ヲ有ス

內務大臣ハ府縣行政ノ監督上必要ナル命令ヲ發シ處分ヲ爲スノ權ヲ有ス

第百三十條　內務大臣ハ府縣ノ豫算中不適當ト認ムルモノアルトキハ之ヲ削減スルコトヲ得

第百三十一條　內務大臣ハ勅裁ヲ經テ府縣會ノ解散ヲ命スルコトヲ得

府縣會解散ノ場合ニ於テハ三箇月以內ニ議員ヲ選擧スヘシ

解散後始メテ府縣會ヲ招集スルトキハ府縣知事ハ第五十條第二項ノ規定ニ拘ラス內務大臣ノ許可ヲ得テ別ニ會期ヲ定ムルコトヲ得

第百三十二條　府縣吏員ノ服務規律ハ內務大臣之ヲ定ム

第百三十三條　左ニ揭クル事件ハ內務大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一　學藝美術又ハ歷史上貴重ナル物件ヲ處分シ若ハ大ナル變更ヲ爲ス事

二　使用料手數料ヲ新設シ增額シ又ハ變更スル事

三　寄附若ハ補助ヲ爲ス事

四　不動產ノ處分ニ關スル事

五　第百十二條ニ依リ夫役及現品ヲ賦課スル事但シ急迫ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス

六　繼續費ヲ定メ若ハ變更スル事

七　特別會計ヲ設クル事

第百三十四條　左ニ揭クル事件ハ內務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一　府縣債ヲ起シ並起債ノ方法利息ノ定率及償還ノ方法ヲ定メ若ハ變更スル事但シ第百十七條末項ノ借入金ハ此ノ限ニ在ラス

二　地租三分ノ一ヲ超過スル附加稅ヲ賦課スル事但シ法律勅令中別段ノ規定アル場合ハ此ノ限ニ在ラス

三　法律勅令ノ規定ニ依リ官廳ヨリ下渡ス步合金ニ對シ支出金額ヲ定ムル事

第百三十五條　府縣ノ行政ニ關シ主務大臣ノ許可ヲ要スヘキ事項ニ付テハ主務大臣ハ許可申請ノ趣旨ニ反セスト認ムル範圍內ニ於テ更正シテ許可ヲ與フルコトヲ得

第百三十六條　府縣ノ行政ニ關シ主務大臣ノ許可ヲ要スヘキ事項中其ノ輕易ナルモノハ勅令ノ規定ニ依リ許可ヲ經スシテ處分スルコトヲ得

第七章　附則

第百三十七條　此ノ法律ハ明治二十三年法律第三十五號府縣制ヲ施行シタル府縣ニハ明治三十二年七月一日ヨリ之ヲ施行シ其ノ他ノ府縣ニ關スル施行ノ時期ハ府縣知事ノ具申ニ依リ內務大臣之ヲ定ム

第百三十八條　島嶼ニ關スル府縣ノ行政ニ付テハ勅令ヲ以テ特例ヲ設クルコトヲ得

町村制ヲ施行セサル島嶼ヨリ選出スヘキ府縣會議員ノ選擧ニ關スル事項ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

沖繩縣ニ關シテハ特別ノ規定ヲ設クルコトヲ得（四十一年法律第二號ヲ以テ本項追加）

第百三十九條　法律命令中別段ノ規定アルモノヲ除ク外此ノ法律ニ規定スル郡長ノ職務ハ島司ヲ置ケル島嶼ニ於テハ島司之ヲ行ヒ町村長ノ職務ハ町村制ヲ施行セサル地ニ於テハ戸長又ハ之ニ準スヘキ者之ヲ行フ

第百四十條　從前郡市經濟ヲ異ニシタル府縣ノ財產處分ニ關スル規定ハ內務大臣之ヲ定ム

特別ノ事情アル府縣ニ於テハ勅令ノ定ムル所ニ依リ市部郡部ノ經濟ヲ分別シ市部會郡部會市部參事會郡部參事會ヲ置キ其ノ他必要ナル事項ニ關シ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第百四十一條　明治二十三年法律第八十八號府縣稅徵收法及地方稅ニ關スル從前ノ規定ハ此ノ法律ニ依リ變更シタルモノヲ除ク外勅令ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルマテ其ノ效力ヲ有ス

第百四十二條　明治二十三年法律第三十五號府縣制ノ規定ニ依リ選擧セラレタル府縣會議員府縣參事會員ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ其ノ職ヲ失フ

本法發布後施行ノ日ニ至ルマテノ間ニ明治二十三年法律第三十五號府縣制ヲ施行シタル府縣ニ於テハ府縣會議員ノ改選ヲ要スルコトアルモ其ノ改選ヲ行ハス議員ハ本法施行ノ日マテ在任ス

第百四十三條　此ノ法律施行ノ際府縣會及府縣參事會ノ職務ニ屬スル事項ニシテ急施ヲ要スルモノハ其ノ成立ニ至ルマテノ間府縣知事之ヲ行フ

第百四十四條　此ノ法律施行ノ際議員ヲ選擧スルニ必要ナル選擧人名簿ノ調製ニ限リ第九條乃至第十二條ノ期日及期間ハ勅令ヲ以テ別ニ之ヲ定ムルコトヲ得但シ其ノ選擧人名簿ハ翌年調製スル選擧人名簿確定ノ日マテ其ノ效力ヲ有ス

第百四十五條　此ノ法律ニ定ムル直接稅ノ種類ハ內務大臣及大藏大臣之ヲ告示ス

第百四十六條　明治十三年第十五號布告府縣會規則明治十四年第八號布告區郡部會規則明治二十二年法律第六號府縣會議員選擧規則其ノ他此ノ法律ニ牴觸スル法規ハ此ノ法律施行ノ府縣ニ於テハ其ノ效力ヲ失フ

第百四十七條　此ノ法律ヲ施行スル爲必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

●府縣會議員選擧投票ニ關スル件（明治三十二年五月內務省令十九號）

第一條　府縣制第十五條第三項ニ依リ二箇以上ノ投票所ヲ設クルコトヲ要スルトキハ府縣知事之ヲ定ム

第二條　前條ノ場合ニ於テハ市町村長ハ投票所ノ一ヲ管理シ他ノ投票所ハ市町村長ノ指名シタル市町村吏員之ヲ管理ス

第三條　市町村長ノ指名シタル市町村吏員ノ管理スル投票所ニ關シテハ府縣制第十六條第十九條及第二十條ノ規定ヲ準用ス

第四條　投票ヲ終リタルトキハ市町村長ノ指名シタル管理者ハ其ノ指定シタル投票立會人ト共ニ直ニ投票函及投票錄ヲ市町村長ノ管理スル投票所ニ送致スヘシ

町村長ニ於テ前項ノ送致ヲ受ケタルトキハ其ノ管理ニ係ル投票函及投票錄ト共ニ之ヲ選擧會場ニ送致スヘシ

第五條　二箇以上ノ投票所ヲ設ケタル市（東京市京都市大阪市ニ在テハ區）ニ於テハ投票函ノ總テ到達スルニ非サレハ選擧會ヲ開クコトヲ得ス

第六條　本令ニ規定スル市長ノ職務ハ東京市京都市大阪市ニ在テハ區長之ヲ行ヒ町村長ノ職務ハ町村制ヲ施行セサル地ニ於テハ戸長之ヲ行フ

第七條　本令ニ規定スルモノノ外必要ナル事項ハ府縣知事之ヲ定ム

●府縣制郡制ノ直接稅ノ種類（明治三十二年六月內務省告示第六十九號）

本年法律第六十四號府縣制第百四十五條本年法律第六十五號郡制第百二十七條直接稅ノ種類左ノ如シ（三十二年內務省告示第七十四號第九十七號ヲ以テ本告示中追加）

國稅

地租　所得稅（所得稅法第三條第一項第二種ノ所得中無記名債券ノ所得ニ係ル所得稅ヲ除ク）

營業稅

府縣稅

地租割　戸數割

營業稅　雜種稅　家屋稅　營業稅附加稅

所得稅附加稅

●府縣郡吏員服務紀律（明治三十五年二月內務省令第三號）

第一條　府縣郡吏員ハ法令ニ從ヒ忠實ニ其ノ職務ヲ盡スヘシ

府縣郡吏員ハ其ノ職務ニ付指揮監督者ノ命令ヲ遵守スヘシ

第二條　府縣郡吏員ハ職務ノ內外ヲ問ハス職權ヲ濫用シ廉恥ヲ破リ其ノ他品位ヲ傷フノ所爲アルヘカラス

第三條　府縣郡吏員ハ總テ公務ニ關スル機密ヲ私ニ漏洩シ又ハ未發ノ事件若ハ文書ヲ私ニ漏示スルコトヲ得ス其ノ職ヲ退クノ後ニ於テモ亦同シ但裁判所ノ召喚ニ依リ職務上ノ祕密ニ付訊問ヲ受ケタル場合ニ於テ指揮監督者ノ許可ヲ得タル事件ニ付テハ此限ニ在ラス

第四條　府縣郡吏員ハ職務ノ爲出張ヲ命セラレタル場合ヲ除ク外指揮監督者ノ許可ヲ受クルニ非サレハ其ノ職務ノ地ヲ離ルルコトヲ得ス

第五條　府縣郡吏員ハ其ノ職務ニ關シ直接ト間接トヲ問ハス自己若ハ其ノ他ノモノノ爲ニ贈與其ノ他ノ利益ヲ供給セシムルノ約束ヲ爲スコトヲ得ス

府縣郡吏員ハ指揮監督者ノ許可ヲ受クルニ非サレハ其ノ職務ニ關シ直接ト間接トヲ問ハス自己若ハ其ノ他ノモノノ爲ニ贈與其ノ他ノ利益ヲ受クルコトヲ得ス

第六條　左ニ掲クル者ト直接ニ關係ノ職務ニ在ル府縣郡吏員ハ其ノ者又ハ其ノ者ノ爲ニスルモノノ饗應ヲ受クルコトヲ得ス

一　府縣郡ノ爲ニ工事又ハ物件調達ノ請負ヲ爲ス者

二　府縣郡ニ屬スル金錢ノ出納保管ヲ擔任スル者

三　府縣郡ヨリ補助金又ハ利益ノ保證ヲ受クル起業者

四　府縣郡ト土地物件ノ賣買贈與貸借若ハ交換ノ契約ヲ爲ス者

五　其ノ他府縣郡ヨリ現ニ利益ヲ得又ハ得ントスル者

第七條　有給ノ府縣郡吏員ハ指揮監督者ノ許可ヲ受クルニ非サレハ營業ヲ爲シ若ハ家族ヲシテ營業ヲ爲サシメ又ハ給料若ハ報酬ヲ受クヘキ他ノ事務ヲ行フコトヲ得ス

第八條　本令ニ於テ指揮監督者ト稱スルハ府縣吏員ニ付テハ府縣知事、郡吏員ニ付テハ郡長ヲ謂フ

第九條　郡組合ノ吏員ニ關シテハ郡吏員ニ關スル規定ヲ準用ス

●府縣稅家屋稅ニ關スル件（明治三十二年六月勅令第二百七十六號）

府縣ハ其ノ府縣ノ全部若ハ一部ノ地ニ於ケル家屋ニ對シ家屋稅ヲ賦課スルコトヲ得但シ家屋稅賦課ノ地ニ於テハ戶數割ヲ賦課スルコトヲ得ス

前項ニ依リ新ニ家屋稅ヲ賦課セントスルトキハ府縣會ノ議決ヲ經內務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受クヘシ

附　則

本令ハ明治三十二年七月一日ヨリ施行ス

●府縣ニ於テ市町村ニ分賦スルヲ得ヘキ費用ノ限度（明治三十二年六月內務省令第二十九號）

本年勅令第三百十六號第一條ニ依リ府縣ニ於テ市町村ニ分賦スルコトヲ得ヘキ費用ノ限度ハ當該年度ノ府縣稅既定豫算額ノ十分ノ一トス

●府縣郡市町村ノ人口及議員配當ノ件（內務省令第二十二號　明治四十年八月三十一日）

第一條　府縣制市制町村制ニ規定セル府縣市町村ノ人口ハ內閣統計局ニ於テ官報ヲ以テ報告スル最近ノ人口ニ依ル

前項人口調査ノ期日後市（府縣制第四條第二項但書ノ區ト雖モ以下同シ）町村ヲ廢置分合シ又ハ其ノ境界ヲ變更シタルトキハ關係市町村ノ人口ハ府縣知事ニ於テ之ヲ調査シ管內ニ告示スヘシ此ノ場合ニ於テ其ノ處分市町村全部ノ區域ニ係ルモノノ人口ハ內閣統計局ニ於テ官ヲ以テ報告シ若ハ府縣知事ニ於テ最近ニ告示シタルモノニ依ル其ノ分割ヲ爲シテ新タニ市町村ヲ置キタルトキ及市町村ノ一部ヲ割キテ他ノ市町村ニ併合シ又ハ境界變更ヲ爲シタルトキハ其ノ分割シタル各部ノ人口ハ處分ヲ爲シタル當時ノ現在ニ依ル

第二條　前條第二項ノ場合ニ於テ二箇以上ノ府縣郡ノ境界ニ涉ルトキハ其ノ府縣郡ノ人口モ之ヲ告示スヘシ其ノ人口ハ前條第二項告示ノ市町村人口ト內閣統計局ニ於テ官報ヲ以テ報告シ若ハ府縣知事ニ於テ最近ニ告示シタル郡市町村ノ人口トヲ集計シタルモノニ依ル

第三條　町村ヲ變シテ市ト爲シタルトキハ府縣知事ニ於テ其ノ市及郡ノ人口ヲ告示スヘシ其ノ人口ハ內閣統計局ニ於テ官報ヲ以テ報告シ若ハ府縣知事ニ於テ最近ニ告示シタル舊町村ノ人口ヲ以テ市ノ人口トシ其ノ他ノ町村人口ヲ集計シタルモノヲ以テ郡ノ人口トス

第四條　府縣郡ヲ廢置分合シ若ハ其ノ境界ヲ變更シタルトキハ前三條ノ例ニ依ル

第五條　府縣制第五條郡制第五條ニ依リ各選擧區ニ於テ選擧スヘキ府縣會員郡會議員ノ數ハ人口ヲ標準トシテ之ヲ定ムヘシ但シ特別ノ事情アルトキハ府縣ニ付テハ內務大臣郡ニ付テハ府縣知事ハ別ニ配當標準ヲ加フルコトヲ得

前項ノ人口ハ第一條乃至第四條ノ例ニ依ル

第六條　府縣會議員郡會議員ノ配當更正ヲ要スルトキハ改選ノ際ヲ俟テ之ヲ行フ但シ議員ノ定數ニ異動ヲ生シ若ハ選擧區ノ增減アリタル場合ハ此ノ限ニ在ラス

附　則

第七條　本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第八條　明治三十二年內務省令第十七號同第十八號及同第五十八號ハ之ヲ廢止ス

〔參　照〕明治三十二年五月二十日內務省令第十七號ハ府縣會議員ノ配當ニ關スル件同第十八號ハ郡會議員ノ配當ニ關スル件同十二月二十六日同第五十八號ハ市町村制規定ノ人口調査告示ノ件ナリ

●地方稅經濟ニ於テ起債及地租制限外賦課ノ件

（明治二十九年三月　法律第六十二號）

第一條　府縣制ヲ施行セサル府縣ニ於テ臨時土木費ヲ要シ地方稅ノ負擔ニ堪ヘ難キ場合ニ於テ府縣知事ハ府縣會ノ議決ヲ取リ內務大臣大藏大臣ノ認可ヲ得三十箇年以內ノ償還期限ヲ定メ公債ヲ起シ又ハ借入金ヲ爲スコトヲ得但シ償還ノ初期ハ三年以內トスヘシ

第二條　府縣制ヲ施行セサル府縣ニ於テ臨時土木費ヲ要スル場合ニ於テ府縣知事必要ナリト認ムルトキハ府縣會ノ議決ヲ取リ內務大臣大藏大臣ノ認可ヲ得テ地租三分一ヲ超過スル地方稅ヲ土地ニ賦課スルコトヲ得

第三條　第一條ノ借入金ヲ爲スニ當リ府縣會ノ議決ニ依リ內務大臣大藏大臣ノ認可ヲ得テ其ノ府縣ノ備荒儲蓄金ヨリ其ノ年度初現在高ノ三分一マテ借入ルルコトヲ得但シ本條ノ借入金ニ對シテモ相當ノ利息ヲ拂フヘキモノトス

前項ノ場合ニ於テ臨時急施ヲ要シ府縣知事ニ於テ府縣會ヲ招集スルノ暇ナシト認ムルトキハ常置委員ヲシテ府縣會ニ代テ議決ヲ爲サシムルコトヲ得常置委員ハ其ノ議決ヲ府縣會ニ報告スヘシ

第四條　第一條ノ認可ヲ得ムトスルトキハ府縣會ノ議決ヲ經タル公債募集ノ方法又ハ借入ノ方法、利息ノ定率及償還ノ方法ヲモ併セテ內務大臣大藏大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第五條　此ノ法律ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

第六條　明治二十三年法律第三號及法律第七十四號ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

●地方稅制限ニ關スル法律

（明治四十一年三月三十日法律第三十七號）

第一條　北海道、府縣其ノ他ノ公共團體ハ左ノ制限以內ノ地租附加稅又ハ段別割ヲ課スルノ外土地ニ對シテ課稅スルコトヲ得ス

一　北海道、府縣、北海道ノ區、一級町村及二級町村、沖繩縣ノ區及町村

附加稅ノミヲ課スルトキ　地租百分ノ六十

段別割ノミヲ課スルトキ　一段歩ニ付　每地目平均金四十錢

附加稅及段別割ヲ併課スル場合ニ於テハ段別割ノ總額ハ其ノ地目ノ地租額百分ノ六十ト附加稅額トノ差額ヲ超ユルコトヲ得ス

二　其ノ他ノ公共團體

附加稅ノミヲ課スルトキ　地租百分ノ四十

段別割ノミヲ課スルトキ　一段歩ニ付　每地目平均金四十錢

附加稅及段別割ヲ併課スル場合ニ於テハ段別割ノ總額ハ其ノ地目ノ地租額百分ノ四十ト附加稅額トノ差額ヲ超ユルコトヲ得ス

第二條　北海道、府縣其ノ他ノ公共團體ハ左ノ制限以內ノ營業稅附加稅ヲ課スルノ外營業稅ヲ納ムル者ノ營業ニ對シ課稅スルコトヲ得ス

一　北海道、府縣　營業稅百分ノ二十五

二　其ノ他ノ公共團體　營業稅百分ノ三十五

第三條　北海道、府縣其ノ他ノ公共團體ハ左ノ制限以內ノ所得稅附加稅ヲ課スルノ外所得稅ヲ納ムル者ノ所得ニ對シ課稅スルコトヲ得ス

一　北海道、府縣　所得稅百分ノ十

二　其ノ他ノ公共團體　所得稅百分ノ三十五

第四條　府縣費ノ全部ヲ市ニ分賦シタル場合ニ於テハ市ハ前三條ノ市稅制限ノ外其ノ分賦金額以內ニ限リ府縣稅制限ニ達スル迄課稅スルコトヲ得

府縣費ノ一部ヲ市町村ニ分賦シタル場合ニ於テハ市町村ハ前三條ノ市町村稅制限ノ外其ノ分賦金額以內ニ限リ課稅スルコトヲ得但シ府縣ノ賦課額ト市町村ノ賦課額トノ合算額ハ府縣稅ノ制限ヲ超過スルコトヲ得ス

第五條　特別ノ必要アル場合ニ於テハ內務大臣ノ許可ヲ受ケ第一條乃至第三條ノ制限ヲ超過シ其ノ百分ノ十二以內ニ於テ課稅スルコトヲ得

左ニ揭クル場合ニ於テハ特ニ內務大臣ノ許可ヲ受ケ前項ノ制限ヲ超過シテ課稅スルコトヲ得

一　內務大藏兩大臣ノ許可ヲ受ケテ起シタル負債ノ元利償還ノ爲費用ヲ要スルトキ

二　非常ノ災害ニ因リ復舊工事ノ爲費用ヲ要スルトキ

三　水利ノ爲費用ヲ要スルトキ

四　傳染病豫防ノ爲費用ヲ要スルトキ

前二項ニ依リ制限ヲ超過シテ課稅スルハ第一條乃至第三條ニ定メタル各稅目ニ對スル賦課カ各其ノ制限ニ達

シタルトキニ限ル

前三項ノ規定ハ前條ノ場合ニ之ヲ準用ス

第六條　本法ノ附加税ハ非常特別税法ニ依ル増徴額ニ對シテハ之ヲ課スルコトヲ得ス

第七條　本法ノ規定ハ特ニ賦課率ヲ定メタル特別法合ノ適用ヲ妨ケス

附則

本法ハ明治四十一年度ヨリ之ヲ施行ス

非常特別税法中地租、營業税及所得税ノ地方税制限ニ關スル規定ハ之ヲ廢止ス

●災害土木費國庫補助規定

（明治三十二年四月勅令第百六十號）

第一條　府縣ノ災害土木費ニシテ其ノ地租年額ノ十分ノ三ヲ超過スルトキハ國庫ハ其ノ超過額ノ地租額ニ等シキ額ニ達スル迄ハ十分ノ四以内地租額ヲ超過スルトキハ其ノ超過ノ部分ニ對シテハ十分ノ五以内ヲ補助スルコトヲ得

第二條　二箇年以上引續キ地租額以上ノ災害土木費ヲ要スル災害アリタル府縣ニ對シテハ前條補助ノ歩合ニ依リ算出シタル補助額ノ十分ノ三以内ヲ増加スルコトヲ得

第三條　前二條ノ地租額ハ其ノ年一月一日ニ於ケル土地臺帳面記載ノ地租額ニ依ル

第四條　災害土木費ノ範圍及計算方法並郡市町村其ノ他公共團體ノ災害土木費負擔ニ關スル方法等ハ内務大臣之ヲ定ム

●災害土木費國庫補助規定施行細則

（明治三十二年四月内務省令第九號）

第一條　災害ニ因リテ必要ヲ生シタル土木工事ニシテ國庫ヨリ補助スヘキモノハ府縣、郡、市、町、村、町村組合、水利組合、水利土功會及市町村ノ一部ノ負擔ニ屬スル工事ナルコトヲ要ス

第二條　災害ニ因リテ必要ヲ生シタル土木工事ニシテ國庫ヨリ補助スヘキモノハ大體ニ於テ被害工事ノ原形ニ復スルヲ以テ目的トス但シ原形ニ復シ難キ場合其ノ他特別ノ理由アル場合ニ於テハ増築又ハ改築又ハ之ニ代ルヘキ必要ノ施設ヲ爲スコトヲ妨ケス（卅八年一月内務省令第一號ヲ以テ改正）

第三條　左ノ各號ニ該當スル工事ニ付キテハ特別ノ理由アル場合ヲ除ク外國庫ヨリ補助ヲ與ヘサルモノトス

一　河川港灣ノ埋塞ニ基因スル工事但シ川成變更ノ場合ヲ除ク

二　幅六尺未滿ノ道路及其附屬物ノ工事

三　車馬ノ交通ニ妨ケナキ道路ノ上流レ又ハ崩土堆積ニ基因スル工事

四　投架橋及飛石渡ノ工事

五　直高三尺以下ノ小堤ノ工事

六　溪流ニ於ケル直高六尺以下ノ石垣板柵類ノ工事

七　溜池用惡水路並其ノ附屬物ノ工事

八　砂防工事

九　直チニ破壞スルノ虞ナク又他ニ危害ヲ及ホスヘキ恐ナキ石張石垣等ノ差狂又ハ缺脱ニ基因スル工事

十　一箇所ノ工費五拾圓未滿ノ工事

十一　利害關係ノ小ナリト認ムル工事

十二　後年ニ讓リテ害ナシト認ムル工事

第四條　災害ニ因リテ必要ヲ生シタル土木工事ノ所屬ハ國庫ノ補助ニ關シテハ災害ノ當時定リタル所屬ニ依ル

第五條　郡、市、町村、町村組合、水利組合及水利土功會ハ左ノ割合ヲ以テ其ノ工費ヲ負擔スルモノトシテ計算ス

郡、町村組合、水利組合及水利土功會ハ其ノ地租年額十分ノ二

町村ハ其ノ地租年額十分ノ四

市ハ其ノ地租年額十分ノ七但シ東京市京都市大阪市ハ其ノ地租年額ニ等シキ額

郡、市、町村、町村組合、水利組合及水利土功會ハ其ノ工費ヨリ前項負擔額ヲ控除シタル殘額ノ十分ノ三ヲ負擔スルモノトシテ計算ス

水利組合又ハ水利土功會ニシテ其ノ區域一市町村内ニ止マルモノ及市町村ノ一部ノ負擔スヘキ工費ハ其ノ市町村ノ工費ニ算入ス

本條ノ地租額ハ其ノ年一月一日ニ於ケル土地臺帳記載ノ地租額ニ依ル

第六條　郡、市、町、村、町村組合、水利組合及水利土功會ニ於テ前條ニ依リ負擔ヲ爲シ其ノ不足スル金額ハ府縣ヨリ補助スルモノトシテ計算ス

第七條　府縣ノ負擔ニ屬スル工事ノ費用及前條ニ依レル補助費ニ雜費ヲ加ヘタル金額ヲ以テ府縣災害土木費トス

雜費ハ府縣ノ負擔ニ屬スル工事ノ費用及前條ニ依レル補助費ヲ合セタル金額ニシテ貳拾萬圓マテハ其ノ百分ノ五以内、其ノ以上五拾萬圓マテハ貳拾萬圓ヲ超過ス

ル部分ノ百分ノ三以内、五拾萬圓ヲ超過スル部分ハ總テ百分ノ二以内ヲ以テ算出ス

第八條　府縣ニ於テ同一年度内二回以上災害ニ遭遇シタルトキハ其ノ災害ニ因リテ必要ヲ生シタル未著手工事ノ費用ハ之ヲ併算スルコトヲ得

前項ニヨリ併算スヘキ工事ノ種類及其ノ工費額並併算スヘキ工事ノ原因タル災害ノ程度等ハ内務大臣ノ認定ニヨリ之ヲ定ム

第九條　府縣ニ於テ國庫ノ補助ヲ受ケタル災害工事ノ經營中更ニ國庫ノ補助ヲ受クル災害ニ遭遇シタル場合ニ於テ前災害工事ニシテ後ノ災害ニ罹ラサルモノハ前災害工事ノ經營ニ屬スルモノトシ其ノ後ノ災害ニ罹リタルモノハ之ヲ後ノ災害工事ノ經營ニ屬スルモノトス

前項ニ依リ前災害工事ニシテ後ノ災害工事ノ經營ニ屬スル場合ニ於テハ其ノ未成工事ニ付キテハ災害前ノ出來形ニ依リ既成工費ト未成工費トヲ區分シ其未成工費ヲ後ノ災害工事設計額ヨリ控除シ未著手工事ニ付キテハ其未著手工費ヲ後ノ災害工事設計額ヨリ控除ス

第十條　府縣知事ニ於テ災害土木費ニ對シ國庫ノ補助ヲ請ハントスルトキハ災害工事ノ目論見帳ヲ調製シ内務大臣ニ檢査ヲ申請スヘシ

府縣知事ニ於テ前項檢査ノ請求ヲ爲シタルトキハ目論見總額並其請求ヲ爲シタル旨ヲ土木局長ニ通知スヘシ

第十一條　府縣知事ニ於テ前條檢査ノ結果ニ付通知ヲ受ケタルトキハ補助申請見込額ノ上申ヲ爲シ補助内定額ノ通知ヲ受クヘシ（三十八年三月内務省令第七號ヲ以テ改正）

府縣知事ハ前項ノ通知ニ依リ豫算ヲ調製シ府縣會ノ決議ヲ經テ國庫補助ノ申請ヲ爲スヘシ

第十二條　國庫ノ補助ヲ受ケタル府縣災害土木費ニ關スル會計ノ事務ハ府縣ニ於テ分別シテ之ヲ整理スヘシ

第十三條　府縣ハ檢査ヲ受ケタル災害工事ノ實施ニ際シテ河川法ニ關スル規程及明治三十年（十月）内務省訓第九七六號訓令ノ手續ヲ經ルコトヲ要ス

府縣ハ災害工事ノ實施ニ際シ必要アリト認ムルトキハ檢査ヲ受ケタル工事ノ設計ヲ變更シ又ハ施工箇所ノ變更ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テモ亦前項ニ同シ

前項ノ變更ニシテ河川法ニ關スル規程及明治三十八年（三月）内務省訓令第五號ノ手續ヲ經ルコトヲ要セサルモノハ其ノ都度土木局長ニ通知スヘシ（卅八年三月内務省令第七號ヲ以テ改正）

第十四條　府縣ニ於テ國庫ノ補助ヲ受ケタル災害工事ノ經營ヲ完了シタルトキハ内務大臣ニ其ノ經營完了ノ認定ヲ申請スヘシ

前項ノ場合ニ於テ災害土木費ニ剩餘ヲ生シタルトキハ府縣ハ其ノ處分方法ヲ定メ内務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

府縣ニ於テ國庫ノ補助ヲ受ケタル災害土木費ニ對シ特別ノ增加ヲ爲シタルトキハ前項ノ剩餘金ハ其ノ步合ニ依リ之ヲ定ム（卅八年三月内務省令第七號ヲ以テ本條中改正）

第二章　郡

郡制

（明治三十二年三月法律第六十五號）

第一章　總則
第二章　郡會
　第一款　組織及選擧
　第二款　職務權限及處務規程
第三章　郡參事會
　第一款　組織及選擧
　第二款　職務權限及處務規程
第四章　郡行政
　第一款　郡吏員ノ組織及任免
　第二款　郡官吏郡吏員ノ職務權限及處分規程
　第三款　給料及給與
第五章　郡ノ財務
　第一款　財産營造物及郡費
　第二款　歲入出豫算及決算
第六章　郡組合
第七章　郡行政ノ監督
第八章　附則

第一章　總則

第一條　郡ハ從來ノ區域ニ依リ町村ヲ包括ス

第二條　郡ハ法人トシテ官ノ監督ヲ承ケ法律命令ノ範圍内ニ於テ其ノ公共事務並法律勅令ニ依リ郡ニ屬スル事務ヲ處理ス

第三條　郡ノ廢置分合又ハ境界變更ヲ要スルトキハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

郡ノ境界ニ涉リテ市町村境界ノ變更アリタルトキハ郡ノ境界モ亦自ラ變更ス町村ヲ變シテ市ト爲シ若ハ市ヲ變シテ町村ト爲シ又ハ所屬未定地ヲ町村ノ區域ニ編入シタルトキ亦同シ

本條ノ處分ニ付財産處分ヲ要スルトキハ内務大臣ハ關係アル府縣郡市參事會及町村會ノ意見ヲ徵シテ之ヲ定ム但シ特ニ法律ノ規定アルモノハ此ノ限ニ在ラス

第二章　郡會

第一款　組織及選擧

第四條　郡會議員ハ各選擧區ニ於テ之ヲ選擧ス

選擧區ハ町村ノ區域ニ依ル但シ事情ニ依リ郡長ハ郡會ノ決議ヲ經府縣知事ノ許可ヲ得テ數町村ノ區域ニ依リ選擧區ヲ設クルコトヲ得

町村組合ニシテ町村ノ事務ノ全部ヲ共同處理スルモノハ之ヲ一町村ト看做ス

第五條　郡會議員ノ員數ハ十五人以上三十人以下トス

郡ノ狀況ニ依リ內務大臣ノ許可ヲ得テ前項ノ員數ヲ四十人マテ增加スルコトヲ得

郡會議員ノ定數及各選擧區ニ於テ選擧スヘキ郡會議員ノ數ハ郡會ノ議決ヲ經府縣知事ノ許可ヲ得テ郡長之ヲ定ム

前項議員ノ配當方法ニ關スル必要ナル事項ハ內務大臣之ヲ定ム

第六條　郡內ノ町村公民ニシテ町村會議員ノ選擧權ヲ有シ且其ノ郡內ニ於テ一年以來直接國稅年額三圓以上ヲ納ムル者ハ郡會議員ノ選擧權ヲ有ス

郡內ノ町村公民ニシテ町村會議員ノ選擧權ヲ有シ且其ノ郡內ニ於テ一年以來直接國稅年額五圓以上ヲ納ムル者ハ郡會議員ノ被選擧權ヲ有ス

家督相續ニ依リ財產ヲ取得シタル者ハ其ノ財產ニ付被相續人ノ爲シタル納稅ヲ以テ其ノ者ノ納稅シタルモノト看做ス

郡會議員ハ住所ヲ移シタル爲町村ノ公民權ヲ失フコトアルモ其ノ住所同郡內ニ在ルトキハ之カ爲其ノ職ヲ失フコトナシ

郡會議員ノ選擧權及被選擧權ノ要件中其ノ年限ニ關スルモノハ府縣郡市町村ノ廢置分合若ハ境界變更ノ爲中斷セラルコトナシ

左ニ揭クル者ハ郡會議員ノ被選擧權ヲ有セス其ノ之ヲ罷メタル後一箇月ヲ經過セサル者亦同シ

一　所屬府縣ノ官吏及有給吏員

二　其ノ郡ノ官吏及有給吏員

三　檢事警察官吏及收稅官吏

四　神官僧侶其ノ他諸宗敎師

五　小學校敎員

前項ノ外ノ官吏ニシテ當選シ之ニ應セントスルトキハ所屬長官ノ許可ヲ受クヘシ

選擧事務ニ關係アル吏員ハ其ノ選擧區ニ於テ被選擧權ヲ有セス其ノ之ヲ罷メタル後一箇月ヲ經過セサル者亦同シ

郡ノ爲請負ヲ爲ス者又ハ郡ノ爲請負ヲ爲ス法人ノ役員ハ其ノ郡ノ郡會議員被選擧權ヲ有セス

第七條　郡會議員ハ名譽職トス

郡會議員ノ任期ハ四年トス

議員ノ定數ニ異動ヲ生シタル爲又ハ議員ノ配當ヲ更正シタル爲解任ヲ要スル者ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

第八條　郡會議員中闕員アルトキハ郡會議員ノ定數ニ異動ヲ生シタル爲又ハ議員ノ配當ヲ更正シタル爲議員ノ選擧ヲ要スルトキハ三箇月以內ニ之ヲ行フヘシ

補闕議員ハ其ノ前任者ノ殘任期間在任ス

補闕議員ヲ除ク外本條第一項ニ依リ選擧セラレタル議員ハ次ノ改選期マテ在任ス

第九條　郡會議員ノ選擧ハ郡長ノ告示ニ依リ之ヲ行フ其ノ告示ニハ選擧ヲ行フヘキ選擧區投票ヲ行フヘキ日時及選擧スヘキ議員ノ員數ヲ記載シ新ニ選擧人名簿ヲ調製シテ選擧ヲ行フ場合ニ於テハ少クトモ七十日前其ノ他ノ場合ニ於テハ少クトモ十四日前ニ之ヲ發スヘシ

第十條　郡會議員ノ選擧ハ町村長之ヲ管理ス但シ數町村ヲ以テ一選擧區ト爲シタル場合ニ於テハ郡長ノ指定シタル町村長之ヲ管理ス

第十一條　町村長ハ選擧期日前六十日ヲ期トシ其ノ日ノ現在ニ依リ選擧人名簿ヲ調製スヘシ但シ數町村ノ區域ニ依リ選擧區ヲ設ケタル場合ニ於テハ選擧ヲ管理スル町村長ニ之ヲ送付スベシ

選擧人其ノ住所ヲ有スル町村外ニ於テ直接國稅ヲ納ムルトキハ前項ノ期日マテニ當該行政廳ノ證明ヲ得テ其ノ住所地ノ町村長ニ屆出ツヘシ其ノ期限內ニ屆出ヲ爲サザルトキハ其ノ納稅ハ選擧人名簿ニ記載セラルヘキ要件ニ算入セス

選擧ヲ管理スル町村長ハ選擧前五十日ヲ期トシ其日ヨリ七日間町村役場又ハ其他ノ場所ニ於テ選擧人名簿ヲ關係者ノ縱覽ニ供スヘシ若關係者ニ於テ異議アルトキ又ハ正當ノ事故ニ依リ前項ノ手續ヲ爲スコト能ハスシテ名簿ニ登錄セラレサルトキハ縱覽期限內ニ之ヲ町村長ニ申立ツルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ町村長ハ其申立ヲ受ケタル日ヨリ十日以內ニ之ヲ決定スヘシ

前項町村長ノ決定ニ不服アル者ハ郡參事會ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項ノ裁決ニ關シテハ府縣知事郡長町村長ヨリモ亦訴願及訴訟ヲ提起スルコトヲ得

町村長ハ第三項異議ノ決定ニ依リ又ハ第四項訴願ノ裁決確定シ若ハ訴訟ノ判決ニ依リ名簿ノ修正ヲ要スルトキハ選擧ノ期日前七日マテニ修正ヲ加ヘテ確定名簿ト爲スヘシ

本條ニ依リ確定シタル名簿ハ郡内ノ各選擧區ニ渉リ同時ニ調製シタルモノハ確定シタル日ヨリ一年以内ニ於テ行フ選擧ニ之ヲ適用ス其ノ郡内一部ノ選擧區限リ調製シタルモノハ確定シタル日ヨリ一年以内ニ該選擧區ニ於テノミ行フ選擧ニ之ヲ適用ス但シ名簿確定後訴願ノ裁決若ハ訴訟ノ判決ニ依リ名簿ノ修正ヲ要スルトキハ選擧人名簿ヲ修正シタルトキハ直ニ其ノ要領ヲ告示スヘシ

確定名簿ニ登錄セラレサル者ハ選擧ニ參與スルコトヲ得ス但シ選擧人名簿ニ登錄セラルヘキ確定裁決書若ハ判決書ヲ所持シ選擧ノ當日選擧會場ニ到ル者ハ此ノ限ニ在ラス

確定名簿ニ登錄セラレタル者選擧權ヲ有セサルトキハ選擧ニ參與スルコトヲ得ス但シ名簿ハ之ヲ修正スル限ニ在ラス

異議ノ決定若ハ訴願ノ裁決確定シ又ハ訴訟ノ判決アリタルニ依リ名簿無效ト爲リタルトキハ更ニ名簿ヲ調製スヘシ其ノ名簿調製ノ期日縱覽修正及確定ニ關スル期限等ハ府縣知事ノ許可ヲ得テ郡長之ヲ定ム

第十二條　選擧會ハ町村役場若ハ選擧ヲ管理スル町村長ノ指定シタル場所ニ於テ之ヲ開クヘシ

數町村ヲ以テ一選擧區ト爲シタルトキハ選擧ヲ管理スル町村長ハ選擧ノ日ヨリ少クトモ四日前ニ選擧會ノ場所ヲ定メ關係町村長ニ通知スヘシ

選擧會ノ場所ハ選擧ノ日ヨリ少クトモ三日前町村長ニ於テ之ヲ告示スヘシ

特別ノ事情アル地ニ於テハ命令ヲ以テ選擧分會ヲ設ケ其ノ選擧ニ關シ特別ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第十三條　選擧ヲ管理スル町村長ハ臨時ニ選擧人中ヨリ二名乃至四名ノ選擧立會人ヲ選任シ其ノ町村長ハ選擧長トナル

選擧立會人ハ名譽職トス

第十四條　選擧人ノ外選擧會場ニ入ルコトヲ得ス但シ選擧會場ノ事務ニ從事スル者選擧會場ヲ監視スル職權ヲ有スル者ハ此ノ限ニ在ラス

選擧人ハ選擧會場ニ於テ協議又ハ勸誘ヲ爲スコトヲ得ス

第十五條　選擧ハ投票ニ依リ之ヲ行フ

投票ハ一人一票ニ限ル

選擧人ハ選擧ノ當日自ラ選擧會場ニ到リ選擧人名簿ハ對照ヲ經投票簿ニ捺印シ投票スヘシ

選擧人ハ選擧會場ニ於テ投票用紙ニ自ラ被選擧人一名ノ氏名ヲ記載シテ投函スヘシ

投票用紙ニハ選擧人ノ氏名ヲ記載スルコトヲ得ス

自ラ被選擧人ノ氏名ヲ書スルコト能ハサル者ハ投票ヲ爲スコトヲ得ス

投票用紙ハ郡長ノ定ムル所ニ依リ一定ノ式ヲ用フヘシ

第十六條　左ノ投票ハ之ヲ無效トス

一　成規ノ用紙ヲ用ヰサルモノ

二　一投票中二人以上ノ被選擧人ヲ記載シタルモノ

三　被選擧人ノ何人タルカヲ確認シ難キモノ

四　被選擧權ナキ者ノ氏名ヲ記載シタルモノ

五　被選擧人ノ氏名ノ外他事ヲ記入シタルモノ

但シ爵位職業身分住所又ハ敬稱ノ類ヲ記入シタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第十七條　投票ノ拒否竝效力ハ選擧立會人之ヲ議決ス可否同數ナルトキハ選擧長之ヲ決スヘシ

第十八條　郡會議員ノ選擧ハ有效投票ノ最モ數ヲ得タル者ヲ以テ當選トス投票ノ數相同シキトキハ年長者ヲ取リ同年月ナルトキハ選擧長抽籤シテ其ノ當選者ヲ定ム同時ニ補闕員數名ヲ選擧スルトキハ投票ノ數多キ者ヲ投票ノ數相同キトキハ年長者ヲ以テ殘任期ノ長キ前任者ノ補闕ト爲シ同年月ナルトキハ選擧長抽籤シテ之ヲ定ム

第十九條　選擧長ハ選擧錄ヲ製シテ選擧ノ顚末ヲ記載シ選擧ヲ終リタル後之ヲ朗讀シ選擧立會人二名以上ト共ニ之ニ署名シ投票選擧人名簿其ノ他關係書類ト共ニ選擧ノ效力確定スルニ至ルマテ之ヲ保存スヘシ

第二十條　選擧ヲ終リタルトキハ選擧長ハ直ニ當選者ニ當選ノ旨ヲ告知シ同時ニ選擧錄ノ寫ヲ添ヘ當選者ノ住所氏名ヲ郡長ニ報告スヘシ

當選者當選ノ告知ヲ受ケタルトキハ五日以内ニ其ノ當選ヲ承諾スルヤ否ヲ郡長ニ申立ツヘシ

一人ニシテ數選擧區ノ選擧ニ當リタルトキハ最終ニ當選ノ告知ヲ受ケタル日ヨリ五日以内ニ何レノ選擧ニ應スヘキカヲ郡長ニ申立ツヘシ

定期改選增員選擧補闕選擧等ヲ同時ニ行ヒタル場合ニ於テ一人ニシテ其ノ數選擧ニ當リタルトキハ前項ノ例ニ依ル

前三項ノ申立ヲ其ノ期限内ニ爲サザルトキハ當選ヲ辭シタルモノト看做ス

第六條　第七項ノ官吏ニシテ當選シタル者ニ關シテハ本條ニ定ムル期間ヲ二十日以内トス

第二十一條　郡會議員ノ當選ヲ辭シタル者アルトキハ更ニ選擧ヲ行フヘシ

二人以上投票同數ニシテ年長ニ由テ當選シタル者其ノ當選ヲ辭シタルトキハ年少ニ由テ當選セサリシ者ヲ以テ當選トス但シ年少ニ由テ當選セサリシ者二人以上アルトキハ年長者ヲ取リ同年月ナルトキハ選擧長抽籤シテ其ノ當選者ヲ定ム

二人以上投票同數ニシテ抽籤ニ由テ當選シタル者其ノ當選ヲ辭シタルトキハ抽籤ノ爲當選セサリシ者ヲ以テ當選トス但シ抽籤ノ爲當選セサリシ者二人以上アルトキハ選擧長抽籤シテ其ノ當選者ヲ定ム

第二十二條　當選者其ノ當選ヲ承諾シタルトキハ郡長ハ直ニ當選證書ヲ付與シ及其ノ住所氏名ヲ告示スヘシ

第二十三條　選擧人選擧若ハ當選ノ效力ニ關シ異議アルトキハ選擧ノ日ヨリ十四日以内ニ之ヲ郡長ニ申立ツルコトヲ得

前項ノ異議ハ之ヲ郡參事會ノ決定ニ付スヘシ

郡長ニ於テ選擧若ハ當選ノ效力ニ關シ異議アルトキハ第一項申立ノ有無ニ拘ラス第二十條第一項ノ報告ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ郡參事會ノ決定ニ付スルコトヲ得

本條郡參事會ノ決定ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項ノ決定及裁決ニ關シテハ府縣知事郡長選擧ヲ管理スル町村長ヨリモ亦訴願及訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第二十四條　選擧ノ規定ニ違背スルコトアルトキハ其ノ選擧ヲ無效トス但シ選擧ノ結果ニ異動ヲ生スルノ虞ナキモノハ此ノ限ニ在ラス

當選者ニシテ被選擧權ヲ有セサルトキハ其ノ當選ヲ無效トス

第二十五條　選擧若ハ當選無效ト確定シタルトキハ更ニ選擧ヲ行フヘシ但シ得票數ノ査定ニ錯誤アリタル爲又ハ選擧ノ際被選擧權ヲ有セサル爲當選無效ト確定シタルトキハ第十八條及第二十條ノ例ニ依ル

第二十六條　郡會議員ニシテ被選擧權ヲ有セサル者ハ其ノ職ヲ失フ其ノ被選擧權ニ關スル異議ハ郡參事會之ヲ決定ス

郡會ニ於テ其ノ議員中被選擧權ヲ有セサル者アリト認ムルトキハ之ヲ郡長ニ通知スヘシ但シ議員ハ自己ノ資格ニ關スル會議ニ於テ辯明スルコトヲ得ルモ其ノ議決ニ加ハルコトヲ得ス

郡長ハ前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ郡參事會ノ決定ニ付スヘシ郡長ニ於テ被選擧權ヲ有セサル者アリト認ムルトキ亦同シ

本條郡參事會ノ決定ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項ノ決定及裁決ニ關シテハ府縣知事郡長ヨリモ亦訴願及訴訟ヲ提起スルコトヲ得

郡會議員ハ其ノ被選擧權ヲ有セストスル決定若ハ裁決確定シ又ハ判決アルマテハ會議ニ列席シ及發言スルノ權ヲ失ハス

第二十七條　本款ニ規定スル異議ノ決定及訴願ノ裁決ハ其ノ決定書若ハ裁決書ヲ交付シタルトキ直ニ之ヲ告示スヘシ

第二十八條　郡會議員ノ選擧ニ付テハ市町村會議員選擧ニ關スル罰則ヲ準用ス

第二款　職務權限及處務規程

第二十九條　郡會ノ議決スヘキ事件左ノ如シ

一　歲入出豫算ヲ定ムル事

二　決算報告ニ關スル事

三　法律命令ニ定ムルモノヲ除ク外使用料手數料及夫役現品ノ賦課徵收ニ關スル事

四　不動產ノ處分並買受讓受ニ關スル事

五　積立金穀等ノ設置及處分ニ關スル事

六　歲入出豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除ク外新ニ義務ノ負擔ヲ爲シ及權利ノ拋棄ヲ爲ス事

七　財產及營造物ノ管理方法ヲ定ムル事但シ法律命令中別段ノ規定アルモノハ此ノ限ニ在ラス

八　其ノ他法律命令ニ依リ郡會ノ權限ニ屬スル事項

第三十條　郡會ハ其ノ權限ニ屬スル事項ヲ郡參事會ニ委任スルコトヲ得

第三十一條　郡會ハ法律命令ニ依リ選擧ヲ行フヘシ

第三十二條　郡會ハ郡ノ公益ニ關スル事件ニ付意見書ヲ郡長若ハ監督官廳ニ呈出スルコトヲ得

第三十三條　郡會ハ官廳ノ諮問アルトキハ意見ヲ答申スヘシ

郡會ノ意見ヲ徵シテ處分ヲ爲スヘキ場合ニ於テ郡會招集ニ應セス若ハ成立セズ又ハ意見ヲ呈出セサルトキハ

當該官廳ハ其ノ意見ヲ俟タスシテ直ニ處分ヲ爲スコトヲ得

第三十四條　郡會議員ハ選擧人ノ指示若ハ委囑ヲ受クヘカラス

第三十五條　郡會ハ議員中ヨリ議長副議長各一名ヲ選擧スヘシ

議長副議長ハ議員ノ定期改選毎ニ之ヲ改選スヘシ

第三十六條　議長故障アルトキハ副議長之ニ代リ議長副議長共ニ故障アルトキハ臨時ニ議員中ヨリ假議長ヲ選擧スヘシ

第三十七條　郡長及其ノ委任若ハ囑託ヲ受ケタル官吏吏員ハ會議ニ列席シテ議事ニ參與スルコトヲ得但シ議決ニ加ハルコトヲ得ス

前項ノ列席者ニ於テ發言ヲ求ムルトキハ議長ハ直ニ之ヲ許スヘシ但シ之カ爲議員ノ演說ヲ中止セシムルコトヲ得ス

第三十八條　郡會ハ通常會及臨時會トス

通常會ハ毎年一回之ヲ開ク其ノ會期ハ十四日以內トス

臨時會ハ必要アル場合ニ於テ其ノ事件ニ限リ之ヲ開ク其ノ會期ハ五日以內トス

臨時會ニ付スヘキ事件ハ豫メ之ヲ告示スヘシ但シ其ノ開會中急施ヲ要スル事件アルトキハ郡長ハ直ニ之ヲ其ノ會議ニ付スルコトヲ得

第三十九條　郡會ハ郡長之ヲ招集ス

招集ハ開會ノ日ヨリ少クトモ十日前ニ告示スヘシ但シ急施ヲ要スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

郡會ハ郡長之ヲ開閉ス

第四十條　郡會ハ議員定員ノ半數以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

第四十一條　郡會ノ議事ハ過半數ヲ以テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第四十二條　議長及議員ハ自己若ハ父母祖父母妻子孫兄弟姉妹ノ一身ニ關スル事件ニ付テハ郡會ノ同意ヲ得ルニ非サレハ其議事ニ參與スルコトヲ得ス

第四十三條　法律命令ノ規定ニ依リ郡會ニ於テ選擧ヲ行フトキハ一名毎ニ匿名投票ヲ爲シ有效投票ノ過半數ヲ得タル者ヲ以テ當選トス若過半數ヲ得タル者ナキトキハ最多數ヲ得タル者二名ヲ取リ之ニ就キ決選投票ヲ爲サシム其ノ二名ヲ取ルニ當リ同數者アルトキハ年長者ヲ取リ同年月ナルトキハ議長抽籤シテ之ヲ定ム此ノ決選投票ニ於テハ最多數ヲ得タル者ヲ以テ當選トス若同數ナルトキハ年長者ヲ取リ同年月ナルトキハ議長抽籤シテ之ヲ定ム其ノ他ハ第十五條乃至第十七條ノ規定ヲ準用ス

前項ノ選擧ニ付テハ郡會ハ其ノ議決ヲ以テ指名推選若ハ連名投票ノ法ヲ用ウルコトヲ得其ノ連名投票ノ法ヲ用ウル場合ニ於テハ前項ノ例ニ依ル

第四十四條　郡會ノ會議ハ公開ス但シ左ノ場合ハ此限ニ在ラス

一　郡長ヨリ傍聽禁止ノ要求ヲ受ケタルトキ

二　議長若ハ議員三名以上ノ發議ニ依リ傍聽禁止ヲ可決シタルトキ

前項議長若ハ議員ノ發議ハ討論ヲ須ヒス其可否ヲ決スヘシ

第四十五條　議長ハ會議ノ事ヲ總理シ會議ノ順序ヲ定メ其ノ日ノ會議ヲ開閉シ議場ノ秩序ヲ保持ス

第四十六條　郡會議員ハ會議中無禮ノ語ヲ用ヰ又ハ他人ノ身上ニ涉リ言論スルコトヲ得ス

第四十七條　會議中此ノ法律若ハ會議規則ニ違ヒ其ノ他議場ノ秩序ヲ紊ル議員アルトキハ議長ハ之ヲ制止シ若ハ發言ヲ取消サシメ命ニ從ハサルトキハ議長ハ當日ノ會議ヲ終ルマテ發言ヲ禁止シ又ハ議場ノ外ニ退去セシメ必要ナル場合ニ於テハ警察官吏ノ處分ヲ求ムルコトヲ得

議場騷擾ニシテ整理シ難キトキハ議長ハ當日ノ會議ヲ中止シ又ハ之ヲ閉ツルコトヲ得

第四十八條　傍聽人公然可否ヲ表シ又ハ喧騷ニ涉リ其ノ他會議ノ妨害ヲ爲ストキハ議長ハ之ヲ制止シ命ニ從ハサルトキハ之ヲ退場セシメ必要ナル場合ニ於テハ警察官吏ノ處分ヲ求ムルコトヲ得

傍聽席騷擾ナルトキハ議長ハ總テノ傍聽人ヲ退場セシメ必要ナル場合ニ於テハ警察官吏ノ處分ヲ求ムルコトヲ得

第四十九條　議場ノ秩序ヲ紊リ又ハ會議ノ妨害ヲ爲ス者アルトキハ議員若ハ第三十七條ノ列席者ハ議長ノ注意ヲ喚起スルコトヲ得

第五十條　郡會ニ書記ヲ置キ議会ニ隸屬シテ庶務ヲ處理セシム

書記ハ議長之ヲ任免ス

第五十一條　議長ハ書記ヲシテ會議錄ヲ製シ會議ノ顚末並出席議員ノ氏名ヲ記載セシムヘシ會議錄ハ議長及議員二名以上之ニ署名スルヲ要ス其ノ議員ハ郡會ニ於テ之ヲ定ムヘシ

議長ハ會議錄ヲ添ヘ會議ノ結果ヲ郡長ニ報告スヘシ

第五十二條　郡會ハ會議規則及傍聽人取締規則ヲ設ケ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

會議規則ニハ此ノ法律並會議規則ニ違背シタル議員ニ對シ郡會ノ議決ニ依リ三日以内出席ヲ停止スル規定ヲ設クルコトヲ得

第　章　郡參事會

第一款　組織及選擧

第五十三條　郡ニ郡參事會ヲ置キ左ノ職員ヲ以テ之ヲ組織ス

一　郡長

二　名譽職參事會員　五名

第五十四條　名譽職參事會員ハ郡會ニ於テ議員中ヨリ之ヲ選擧スヘシ

郡會ハ名譽職參事會員ト同數ノ補充員ヲ選擧スヘシ

名譽職參事會員中闕員アルトキハ郡長ハ補充員ノ中ニ就キ之ヲ補闕ス其ノ順序ハ選擧同時ナルトキハ投票數ニ依リ投票同數ナルトキハ年長者ヲ取リ同年月ナルトキハ抽籤ニ依リ選擧ノ時ヲ異ニスルトキハ選擧ノ前後ニ依ル仍闕員ヲ生シタル場合ニ於テハ臨時補闕選擧ヲ行フヘシ

補闕員ハ前任者ノ殘任期間在任ス

名譽職參事會員及其ノ補充員ハ郡會議員ノ定期改選毎ニ之ヲ改選スヘシ但シ名譽職參事會員ハ後任者就任ノ日マテ在任ス

第五十五條　郡參事會ハ郡長ヲ以テ議長トス郡長故障アルトキハ出席會員中ヨリ臨時議長ヲ互選スヘシ

第二款　職務權限及處務規程

第五十六條　郡參事會ノ職務權限左ノ如シ

一　郡會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ其ノ委任ヲ受ケタルモノヲ議決スル事

二　郡會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ臨時急施ヲ要シ郡長ニ於テ之ヲ招集スルノ暇ナシト認ムルトキ郡會ニ代テ議決スル事

三　郡長ヨリ郡會ニ提出スル議案ニ付郡長ニ對シ意見ヲ述フル事

四　郡會ノ議決シタル範圍内ニ於テ財産及營造物ノ管理ニ關シ重要ナル事項ヲ議決スル事

五　郡費ヲ以テ支辨スヘキ工事ノ執行ニ關スル規定ヲ議決スル事但シ法律命令中別段ノ規定アルモノハ此限ニ在ラス

六　郡ニ係ル訴願訴訟及和解ニ關スル事項ヲ議決スル事

七　其ノ他法律命令ニ依リ郡參事會ノ權限ニ屬スル事項

第五十七條　郡參事會ハ名譽職參事會員中ヨリ委員ヲ選擧シ之ヲシテ郡ニ係ル出納ヲ檢査セシムルコトヲ得

前項ノ檢査ニハ郡長又ハ其指命シタル官吏若ハ吏員之ニ立會フコトヲ要ス

第五十八條　第三十二條第三十三條第三十七條及第五十條ノ規定ハ郡參事會ニ之ヲ準用ス

第五十九條　郡參事會ハ郡長之ヲ招集ス若名譽職參事會員半數以上ノ請求アル場合ニ於テ相當ノ理由アリト認ムルトキハ郡長ハ郡參事會ヲ招集スヘシ

郡參事會ノ會期ハ郡長之ヲ定ム

第六十條　郡參事會ノ會議ハ傍聽ヲ許サス

第六十一條　郡參事會ハ議長及名譽職參事會員定員ノ半數以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

第五十六條第二ノ議決ヲ爲ストキハ郡長ハ其ノ議決ニ加ハルコトヲ得ス

郡參事會ノ議事ハ過半數ヲ以テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

會議ノ顚末ハ之ヲ會議錄ニ記載シ議長及名譽職參事會員二名以上之ニ署名スヘシ

第六十二條　第四十三條ノ規定ハ郡參事會員ニ之ヲ準用ス但シ同條ノ規定ニ依リ會員ノ數減少シテ前條第一項ノ數ヲ得サルトキハ郡長ハ補充員ニシテ其ノ事件ニ關係ナキ者ヲ以テ第五十四條第三項ノ順序ニ依リ臨時之ニ充テ仍其ノ數ヲ得サルトキハ郡會議員ニシテ其ノ事件ニ關係ナキ者ヲ臨時ニ指命シ其ノ闕員ヲ補充スヘシ

第四章　郡行政

第一款　郡吏員ノ組織及任免

第六十三條　郡ニ有給ノ郡吏員ヲ置クコトヲ得其ノ定員ハ府縣知事ノ許可ヲ得テ郡長之ヲ定ム

前項ノ郡吏員ハ府縣知事之ヲ任免ス

第六十四條　郡ニ郡出納吏ヲ置キ官吏吏員ノ中ニ就キ郡長之ヲ命ス

第六十五條　郡ハ郡會ノ議決ヲ經府縣知事ノ許可ヲ得テ臨時若ハ常設ノ委員ヲ置クコトヲ得

委員ハ名譽職トス

委員ノ組織選任任期等ニ關スル事項ハ郡會ノ議決ヲ經府縣知事ノ許可ヲ得テ郡長之ヲ定ム

第二款　郡官吏郡吏員ノ職務權限及處務規程

第六十六條　郡長ハ郡ヲ統轄シ郡ヲ代表ス

郡長ノ擔任スル事務ノ概目左ノ如シ

一　郡費ヲ以テ支辨スベキ事件ヲ執行スル事
二　郡會及郡參事會ノ議決ヲ經ヘキ事件ニ付其ノ議案ヲ發スル事
三　財產及營造物ヲ管理スル事但シ特ニ之カ管理者アルトキハ其事務ヲ監督スル事
四　收入支出ヲ命令シ及會計ヲ監督スル事
五　證書及公文書類ヲ保管スル事
六　法律命令又ハ郡會若ハ郡參事會ノ議決ニ依リ使用料手數料會費及夫役現品ヲ賦課徵收スル事
七　其ノ他法律命令ニ依リ郡長ノ職權ニ屬スル事項

第六十七條　郡長ハ議案ヲ郡會ニ提出スル前之ヲ郡參事會ノ審査ニ付シ若郡參事會ト其ノ意見ヲ異ニスルトキハ郡參事會ノ意見ヲ議案ニ添ヘ郡會ニ提出スヘシ

第六十八條　郡長ハ郡ノ行政ニ關シ其ノ職權ニ屬スル事務ノ一部ヲ町村吏員ニ補助執行セシメ若ハ委任スルコトヲ得

郡長ハ郡ノ行政ニ關シ其ノ職權ニ屬スル事務ノ一部ヲ郡吏員ニ臨時代理セシムルコトヲ得

第六十九條　郡會若ハ郡參事會ノ議決若ハ選擧其ノ權限ヲ越エ又ハ法律命令ニ背クト認ムルトキハ郡長ハ自己ノ意見ニ依リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ依リ理由ヲ示シテ直ニ其ノ議決若ハ選擧ヲ取消シ又ハ議決ニ付テハ再議ニ付シタル上仍其ノ議決ヲ改メサルトキハ之ヲ取消スヘシ

前項取消處分ニ不服アル郡會若ハ郡參事會ハ府縣參事會ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アルトキハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項ノ裁決ニ關シテハ府縣知事郡長ヨリモ亦訴訟ヲ提起スルコトヲ得

郡會若ハ郡參事會ノ議決公益ニ害アリト認ムルトキハ郡長ハ自己ノ意見ニ依リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ依リ理由ヲ示シテ之ヲ再議ニ付シ仍其ノ議決ヲ改メサルトキハ府縣知事ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

前項府縣知事ノ處分ニ不服アル郡會若ハ郡參事會ハ內務大臣ニ訴願スルコトヲ得

第七十條　郡會若ハ郡參事會ニ於テ郡ノ收支ニ關シ不適當ノ議決ヲ爲シタルトキハ郡長ハ自己ノ意見ニ依リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ依リ理由ヲ示シテ之ヲ再議ニ付シ仍其ノ議決ヲ改メサルトキハ府縣知事ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ但シ場合ニ依リ再議ニ付セスシテ直ニ府縣知事ノ指揮ヲ請フコトヲ得

前項府縣知事ノ處分ニ不服アル郡會若ハ郡參事會ハ內務大臣ニ訴願スルコトヲ得

第七十一條　郡長ハ期日ヲ定メテ郡會ノ停會ヲ命スルコトヲ得

第七十二條　郡會若ハ郡參事會招集ニ應セス又ハ成立セサルトキハ郡長ハ府縣知事ニ具狀シテ指揮ヲ請ヒ其ノ議決スヘキ事件ヲ處分スルコトヲ得第四十二條第六十二條ノ場合ニ於テ會議ヲ開クコト能ハサルトキ亦同シ

郡會若ハ郡參事會ニ於テ其ノ議決スヘキ事件ヲ議決セス又ハ郡會ニ於テ其ノ招集前告示セラレタル事件ニ關シ議案ヲ議了セサルトキハ前項ノ例ニ依ル

郡參事會ノ決定若ハ裁決スヘキ事項ニ關シテハ本條第一項第二項ノ例ニ依ル此ノ場合ニ於ケル郡長ノ處分ニ關シテハ各本條ノ規定ニ準シ訴願及訴訟ヲ提起スルコトヲ得

本條ノ處分ハ次ノ會期ニ於テ之ヲ郡會若ハ郡參事會ニ報告スヘシ

第七十三條　郡參事會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ臨時急施ヲ要シ郡長ニ於テ之ヲ招集スルノ暇ナシト認ムルトキハ郡長ハ專決處分シ次ノ會期ニ於テ其ノ處分ヲ郡參事會ニ報告スヘシ

第七十四條　郡參事會ノ權限ニ屬スル事項ハ其ノ議決ニ依リ郡長ニ於テ專決處分スルコトヲ得

第七十五條　官吏ノ郡行政ニ關スル職務關係ハ此ノ法律中規定アルモノヲ除ク外國ノ行政ニ關スル其ノ職務關係ノ例ニ依ル

第七十六條　郡出納吏ハ出納事務ヲ掌ル

第七十七條　郡吏員ハ郡長ノ命ヲ承ケ事務ニ從事ス

第七十八條　委員ハ郡長ノ指揮監督ヲ承ケ財產若ハ營造物ヲ管理シ其ノ他郡行政事務ノ一部ヲ調査シ又ハ一時ノ委託ニ依リ事務ヲ處辨ス

第七十九條　郡ノ事務ニ關スル處分規程ハ郡長之ヲ定ム

第三款　給料及給與

第八十條　有給郡吏員ノ給料額並旅費額及其ノ支給方法ハ府縣知事ノ許可ヲ得テ郡長之ヲ定ム

第八十一條　郡會議員名譽職參事會員其ノ他名譽職員ハ職務ノ爲要スル費用ノ辨償ヲ受クルコトヲ得

費用辨償額及其ノ支給方法ハ郡會ノ議決ヲ經府縣知事ノ許可ヲ得テ郡長之ヲ定ム若之ヲ許可スヘカラスト認ムルトキハ府縣知事之ヲ定ム

第八十二條　有給郡吏員ノ退隱料退職給與金遺族扶助料及其ノ支給方法ハ郡會ノ議決ヲ經內務大臣ノ許可ヲ得テ郡長之ヲ定ム若許可スヘカラスト認ムルトキハ內務

大臣ニ訴願スルコトヲ得

大臣之ヲ定ム

第八十三條　退隠料退職給與金遺族扶助料及費用辨償ノ給與ニ關シ異議アルトキハ之ヲ郡長ニ申立ツルコトヲ得

前項ノ異議ハ之ヲ郡參事會ノ決定ニ付スヘシ其ノ決定ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項ノ決定及裁決ニ關シテハ府縣知事郡長ヨリモ亦訴願及訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第八十四條　給料旅費退隠料退職給與金遺族扶助料費用辨償其ノ他諸給與ハ郡ノ負擔トス

第五章　郡ノ財務

第一款　財産營造物及郡費

第八十五條　郡ハ積立金穀等ヲ設クルコトヲ得

第八十六條　郡ハ營造物若ハ公共ノ用ニ供シタル財産ノ使用ニ付使用料ヲ徴收シ又ハ特ニ一個人ノ爲ニスル事務ニ付手數料ヲ徴收スルコトヲ得

第八十七條　此ノ法律中別ニ規定アルモノヲ除ク外使用料手數料ニ關スル細則ハ郡會ノ議決ヲ經府縣知事ノ許可ヲ得テ郡長之ヲ定ム其ノ細則ニハ過料二圓以下ノ罰則ヲ設クルコトヲ得

過料ニ處シ及之ヲ徴收スルハ郡長之ヲ掌ル其ノ處分ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項ノ裁決ニ關シテハ府縣知事郡長ヨリモ亦訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第八十八條　郡ハ其ノ公益上必要アル場合ニ於テハ寄附若ハ補助ヲ爲スコトヲ得

第八十九條　郡ハ其ノ必要ナル費用及法律勅令ニ依リ郡ノ負擔ニ屬スル費用ヲ支辨スル義務ヲ負フ

前項ノ負擔ハ財産ヨリ生スル收入及其ノ他ノ收入ヲ以テ充ツルモノノ外之ヲ郡内各町村ニ分賦スヘシ

第九十條　郡費分賦ノ割合ハ其ノ豫算ノ屬スル年度ノ前前年度ニ於ケル各町村ノ直接國税府縣税ノ徴收額ニ依ル但シ本條ノ分賦方法ニ依リ難キ事情アルトキハ郡長ハ郡會ノ議決ヲ經内務大臣ノ許可ヲ得テ特別ノ分賦方法ヲ設クルコトヲ得

第九十一條　郡内ノ一部ニ對シ特ニ利益アル事件ニ關シテハ内務大臣ノ定ムル所ニ依リ不均一ノ賦課ヲ爲スコトヲ得

第九十二條　郡ハ其ノ必要ニ依リ夫役及現品ヲ郡内一部ノ町村ニ賦課スルコトヲ得但シ學藝美術及手工ニ關スル勞役ヲ課スルコトヲ得ス

夫役及現品ハ急迫ノ場合ヲ除ク外金額ニ算出シテ賦課スヘシ

夫役又ハ現品ヲ賦課セラレタル町村ハ急迫ノ場合ヲ除ク外金錢ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

第九十三條　使用料手數料ノ徴收ニ關シ告知ヲ受ケタル者其ノ告知ニ違法若ハ錯誤アリト認ムルトキハ告知書ノ交付後三箇月以内ニ郡長ニ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得

郡費ノ分賦ニ關シ町村ニ於テ其ノ分賦ニ違法若ハ錯誤アリト認ムルトキハ其ノ告知ヲ受ケタル時ヨリ三箇月以内ニ郡長ニ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得

前二項ノ異議ハ之ヲ郡參事會ノ決定ニ付スヘシ其ノ決定ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項ノ決定及裁決ニ關シテハ府縣知事郡長町村吏員ヨリモ亦訴願及訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第九十四條　使用料手數料過料其ノ他郡ノ收入ヲ定期内ニ納メサル者アルトキハ國税滯納處分ノ例ニ依リ之ヲ處分スヘシ

本條ニ記載スル徴收金ハ府縣ノ徴收金ニ次テ先取特權ヲ有シ其ノ追徴還付及時效ニ付テハ國税ノ例ニ依ル

本條第一項ノ場合ニ於テ町村吏員ノ處分ニ不服アル者ハ郡參事會ニ訴願シ其ノ裁決又ハ郡長ノ處分ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項ノ裁決ニ關シテハ府縣知事郡長町村吏員ヨリモ亦訴願及訴訟ヲ提起スルコトヲ得

本條第一項ノ處分ハ其ノ確定ニ至ルマテ執行ヲ停止ス

第九十五條　郡ハ其ノ負債ヲ償還スル爲又ハ郡ノ永久ノ利益ト爲ルヘキ支出ヲ要スル爲又ハ天災事變等ノ爲必要アル場合ニ限リ郡會ノ議決ヲ經テ郡債ヲ起スコトヲ得

郡債ヲ起スニ付郡會ノ議決ヲ經ルトキハ併セテ起債ノ方法利息ノ定率及償還ノ方法ニ付議決ヲ經ヘシ

郡ハ豫算内ノ支出ヲ爲ス爲本條ノ例ニ依ラス郡參事會ノ議決ヲ經テ一時ノ借入金ヲ爲スコトヲ得

第二款　歳入出豫算及決算

第九十六條　郡長ハ毎會計年度歳入出豫算ヲ調製シ年度開始前郡會ノ議決ヲ經ヘシ

郡ノ會計年度ハ政府ノ會計年度ニ同シ

豫算ヲ郡會ニ提出スルトキハ郡長ハ併セテ財産表ヲ提

出スヘシ

第九十七條　郡長ハ郡會ノ議決ヲ經テ既定豫算ノ追加若ハ更正ヲ爲スコトヲ得

第九十八條　郡費ヲ以テ支辨スル事件ニシテ數年ヲ期シテ施行スヘキモノ又ハ數年ヲ期シテ其ノ費用ヲ支出スヘキモノハ郡會ノ議決ヲ經テ其ノ年期間各年度ノ支出額ヲ定メ繼續費ト爲スコトヲ得

第九十九條　豫算外ノ支出若ハ豫算超過ノ支出ニ充ツル爲豫備費ヲ設クヘシ但シ郡會ノ否決シタル費途ニ充ツルコトヲ得ス

第百條　豫算ハ議決ヲ經タル後直ニ之ヲ府縣知事ニ報告シ並其ノ要領ヲ告示スヘシ

第百一條　郡長ハ郡會ノ議決ヲ經テ特別會計ヲ設クルコトヲ得

第百二條　決算ハ翌翌年ノ通常會ニ於テ之ヲ郡會ニ報告スヘシ

郡長ハ決算ヲ郡會ニ報告スル前郡參事會ノ審査ニ付スヘシ若郡長ト郡參事會ト意見ヲ異ニスルトキハ郡長ハ郡參事會ノ意見ヲ決算ニ添ヘ郡會ニ提出スヘシ

決算ハ之ヲ府縣知事ニ報告シ並其ノ要領ヲ告示スヘシ

第百三條　豫算調製ノ式並費目流用其ノ他財務ニ關スル必要ナル規定ハ內務大臣之ヲ定ム

第百四條　郡吏員ノ身元保證及賠償責任ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第六章　郡組合

第百五條　特定ノ事務ヲ共同處理セシムル必要アル場合ニ於テハ府縣知事ハ關係アル郡參事會ノ意見ヲ徵シ府縣參事會ノ議決ヲ經內務大臣ノ許可ヲ得テ郡組合ヲ設置スルコトヲ得郡組合ノ廢止若ハ變更ニ付テモ亦同シ

第百六條　郡組合ヲ設置スルトキハ府縣知事ハ關係アル郡參事會ノ意見ヲ徵シ府縣參事會ノ議決ヲ經內務大臣ノ許可ヲ得テ郡組合會ノ組織事務ノ管理方法並其ノ費用ノ支辨方法其ノ他必要ナル事項ヲ定ムヘシ

第百七條　郡組合ハ法人トス

郡組合ニ關シテハ本章中規定スルモノヲ除ク外此ノ法律ノ規定ヲ準用ス但シ勅令ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルモノハ此ノ限ニ在ラス

第七章　郡行政ノ監督

第百八條　郡ノ行政ハ第一次ニ於テ府縣知事之ヲ監督シ第二次ニ於テ內務大臣之ヲ監督ス

第百九條　此ノ法律中別段ノ規定アル場合ヲ除ク外郡ノ行政ニ關スル府縣知事ノ處分ニ不服アル者ハ內務大臣ニ訴願スルコトヲ得

此ノ法律ニ規定スル異議若ハ訴願ハ處分ヲ爲シ又ハ決定書若ハ裁決書ノ交付ヲ受ケタル翌日ヨリ起算シ十四日以內ニ之ヲ提起スヘシ但シ此法律中別ニ期限ヲ定メタルモノハ此ノ限ニ在ラス

此ノ法律ニ規定スル行政訴訟ハ裁決書ノ交付ヲ受ケタル翌日ヨリ起算シ二十一日以內ニ之ヲ提起スヘシ

決定書若ハ裁決書ノ交付ヲ受ケサル者ニ關シテハ前二項ノ期間ハ告示ノ翌日ヨリ起算ス

行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得ヘキ場合ニ於テハ內務大臣ニ訴願スルコトヲ得ス

此ノ法律ニ規定スル異議ノ決定ハ文書ヲ以テ之ヲ爲シ其ノ理由ヲ付スヘシ

前項異議ノ決定書ハ之ヲ申立人ニ交付スヘシ

此ノ法律ニ規定スル異議ノ申立若ハ訴願ノ提起ニ關スル期間ノ計算並天災事變ノ場合ニ於ケル特例ニ付テハ民事訴訟法ノ規定ヲ準用ス

異議ヲ申立テ又ハ訴願訴訟ヲ提起スル者アルトキハ行政廳及行政裁判所ハ其ノ職權ニ依リ又ハ關係者ノ請求ニ依リ必要ト認ムル場合ニ限リ處分ノ執行ヲ停止スルコトヲ得

第百十條　監督官廳ハ郡行政ノ法律命令ニ背戾セサルヤ又ハ公益ヲ害セサルヤ否ヲ監視スヘシ監督官廳ハ之カ爲行政事務ニ關シテ報告ヲ爲サシメ書類帳簿ヲ徵シ並實地ニ就キ事務ヲ視察シ出納ヲ檢閱スルノ權ヲ有ス

監督官廳ハ郡行政ノ監督上必要ナル命令ヲ發シ處分ヲ爲スノ權ヲ有ス

第百十一條　監督官廳ハ郡ノ豫算中不適當ト認ムルモノアルトキハ之ヲ削減スルコトヲ得

第百十二條　內務大臣ハ郡會ノ解散ヲ命スルコトヲ得

郡會解散ノ場合ニ於テハ三箇月以內ニ議員ヲ選擧スヘシ

解散後始メテ郡會ヲ招集スルトキハ郡長ハ第三十八條第二項ノ規定ニ拘ラス府縣知事ノ許可ヲ得テ別ニ會期ヲ定ムルコトヲ得

第百十三條　郡吏員ノ服務紀律ハ內務大臣之ヲ定ム

第百十四條　左ニ揭クル事件ハ內務大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一　學藝美術又ハ歷史上貴重ナル物件ヲ處分シ若ハ大ナル變更ヲ爲ス事

二　使用料手數料ヲ新設シ增額シ又ハ變更スル事

第百十五條　郡債ヲ起シ並起債ノ方法利息ノ定率及償還

ノ方法ヲ定メ若ハ之ヲ變更スルトキハ内務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス但シ第九十五條末項ノ借入金ハ此ノ限ニ在ラス

第百十六條　左ニ掲クル事件ハ府縣知事ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一　積立金穀等ノ設置及處分ニ關スル事

二　寄附若ハ補助ヲ爲ス事

三　不動産ノ處分ニ關スル事

四　第九十二條ニ依リ夫役及現品ヲ賦課スル事但シ急迫ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス

五　繼續費ヲ定メ若ハ變更スル事

六　特別會計ヲ設クル事

第百十七條　郡ノ行政ニ關シ監督官廳ノ許可ヲ要スヘキ事項ニ付テハ監督官廳ハ許可申請ノ趣旨ニ反セスト認ムル範圍内ニ於テ更正シテ許可ヲ與フルコトヲ得

第百十八條　郡ノ行政ニ關シ主務大臣ノ許可ヲ要スヘキ事項中其ノ輕易ナルモノハ勅令ノ規定ニ依リ其ノ職權ヲ府縣知事ニ委任スルコトヲ得

第百十九條　府縣知事ハ郡吏員ニ對シ懲戒處分ヲ行フコトヲ得其ノ懲戒處分ハ譴責二十五圓以下ノ過怠金及解職トス

府縣知事ハ郡吏員ノ懲戒處分ヲ行ハントスル前其ノ吏員ノ停職ヲ命シ並給料ヲ支給セサルコトヲ得

懲戒ニ依リ解職セラレタル者ハ二年間其ノ郡ノ公職ニ選擧セラレ若ハ任命セラルルコトヲ得ス

第八章　附則

第百二十條　此ノ法律ハ明治二十三年法律第三十六號郡制ヲ施行シタル府縣ニハ明治三十二年七月一日ヨリ之ヲ施行シ其ノ他ノ府縣ニ關スル施行ノ時期ハ府縣知事ノ具申ニ依リ内務大臣之ヲ定ム

第百二十一條　郡内總町村ニ屬スル事業並其ノ財産營造物ハ小學校ヲ除ク外此ノ法律施行ノ日ヨリ郡ニ移ルモノトス

第百二十二條　此ノ法律ノ規定ニ依リ府縣知事府縣參事會ノ職權ニ屬スル事件ニシテ數府縣ニ涉ルモノアルトキハ關係府縣知事ノ具狀ニ依リ内務大臣ニ於テ其ノ事件ヲ管理スヘキ府縣知事及府縣參事會ヲ指定スヘシ

第百二十三條　島嶼ニ關シテハ別ニ勅令ヲ以テ其ノ制ヲ定ムルコトヲ得

前項ノ島嶼ハ勅令ヲ以テ之ヲ指定ス

第百二十四條　明治二十三年法律第三十六號郡制ノ規定ニ依リ選擧セラレタル郡會議員郡參事會員ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ其ノ職ヲ失フ

本法發布後施行ノ日ニ至ルマテノ間ニ明治二十三年法律第三十六號郡制ヲ施行シタル府縣ニ於テハ郡會議員ノ改選ヲ要スルコトアルモ其ノ改選ヲ行ハス議員ハ本法施行ノ日マテ在任ス

第百二十五條　此ノ法律施行ノ際郡會及郡參事會ノ職務ニ屬スル事項ニシテ急施ヲ要スルモノハ其ノ成立ニ至ルマテノ間郡長之ヲ行フ

第百二十六條　此ノ法律ニ定ムル府縣參事會ノ職務ハ府縣制ヲ施行シ府縣參事會ノ成立ニ至ルマテノ間府縣知事之ヲ行フ

第百二十七條　此ノ法律ニ定ムル直接稅ノ種類ハ内務大臣及大藏大臣之ヲ告示ス

第百二十八條　明治十一年第十七號布告郡區町村編制法其ノ他此ノ法律ニ抵觸スル法規ハ此ノ法律施行ノ地ニ於テハ其ノ效力ヲ失フ

第百二十九條　此ノ法律ヲ施行スル爲必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

●郡會議員選擧ニ關スル件

（明治三十二年五月内務省令第二十號）

第一條　郡制第十二條第四項ニ依リ選擧分會ヲ設クルコトヲ要スルトキハ郡長之ヲ定ム

第二條　選擧分會ハ郡制第十條ニ依リ選擧ヲ管理スル町村長ノ指名シタル町村長其ノ他町村吏員之ヲ管理ス

選擧分會ニ於ケル選擧立會人及投票ノ拒否ニ關シテハ郡制第十三條及第十七條ノ規定ヲ準用ス

第三條　選擧分會ノ管理者ハ選擧錄ヲ製シテ投票ノ顚末ヲ記載シ投票ヲ終リタル後選擧立會人二名以上ト共ニ之ヲ署名スヘシ

第四條　前條ノ手續ヲ終リタルトキハ選擧分會ノ管理者ハ其ノ指定シタル選擧立會人ト共ニ直ニ投票函及選擧錄ヲ選擧本會ニ送致スヘシ

第五條　選擧本會ニ於テハ選擧分會ノ投票函ノ總テ到達スルニ非サレハ投票ノ點檢ヲ爲スコトヲ得ス

第六條　島嶼其ノ他交通不便ノ地ニ於ケル選擧分會ニ付テハ郡長ハ適宜ニ其ノ選擧期日ヲ定メ選擧本會ノ期日マテニ其ノ投票函ヲ送致セシムルコトヲ得

第七條　本令ニ規定スルモノノ外必要ナル事項ハ府縣知事之ヲ定ム

●郡費分賦ノ件

（明治三十五年四月法律第四十號）

制第九十條ニ依リ郡費分賦ノ割合ヲ定ムルニ當リ當該年度ノ直接國稅府縣稅ノ徵收額前前年度ニ比シ四分ノ一以上ヲ增減スヘキ事故ヲ生シタル町村アルトキハ其ノ增減額ヲ加除シタル額ヲ以テ割合ヲ定ムヘシ

第三章　市町村

市制

（明治二十一年四月法律第一號）

第一章　總則
第一款　市及其區域
第二款　市住民及權利義務
第三款　市條例
第二章　市會
第一款　組織及選擧
第二款　職務權限及處務規程
第三章　市行政
第一款　市參事會及市吏員ノ組織選任
第二款　市參事會及市吏員ノ職務權限及處務規程
第三款　給料及給與
第四章　市有財產ノ管理
第一款　市有財產及市稅
第二款　市ノ歲入出豫算及決算
第五章　特別ノ財產ヲ有スル市區ノ行政
第六章　市行政ノ監督
第七章　附則

第一章　總則

第一款　市及其區域

第一條　此法律ハ市街地ニシテ郡ノ區域ニ屬セス別ニ市ト爲スノ地ニ施行スルモノトス

第二條　市ハ法律上一個人ト均ク權利ヲ有シ義務ヲ負擔シ凡市ノ公共事務ハ官ノ監督ヲ受ケテ自ラ之ヲ處理スルモノトス

第三條　凡市ハ從來ノ區域ヲ存シテ之ヲ變更セス但將來其變更ヲ要スルコトアルトキハ此法律ニ準據ス可シ東京市、京都市、大阪市ニ於テハ從來ノ區ヲ存ス其區ハ財產及營造物ニ關スル事務其他法律命令ニ依リ區ニ屬スル事務ヲ處理スルモノトス（三十一年法律第二十九以テ追加）

第四條　市ノ境界ヲ變更シ又ハ町村ヲ市ニ合併シ及市ノ區域ヲ分割スルコトアルトキハ町村制第四條ヲ適用ス東京市、京都市、大阪市ノ區ヲ廢置分合シ又ハ其境界ヲ變更スルコトアルトキ亦同シ（同上）

第五條　市ノ境界ニ關スル爭論ハ府縣參事會之ヲ裁決ス

其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二款　市住民及其權利義務

第六條　凡市內ニ住居ヲ占ムル者ハ總テ其市住民トス

凡市住民タル者ハ此法律ニ從ヒ公共ノ營造物並市有財產ヲ共用スル權利ヲ有シ及市ノ負擔ヲ分任スルノ義務ヲ有スル者トス但特ニ民法上ノ權利及義務ヲ有スル者アルトキハ此限ニ在ラス

第七條　凡帝國臣民ニシテ公權ヲ有スル獨立ノ男子二年以來（一）市ノ住民トナリ（二）其市ノ負擔ヲ分任シ及（三）其市內ニ於テ地租ヲ納メ若クハ直接國稅年額二圓以上ヲ納ムル者ハ其市公民トス其公費ヲ以テ救助ヲ受ケタル後二年ヲ經サル者ハ此限ニ在ラス但場合ニヨリ市會ノ議決ヲ以テ本條ニ定ムル二箇年ノ制限ヲ特免スルコトヲ得

此法律ニ於テ獨立ト稱スルハ滿二十五歲以上ニシテ一戶ヲ構ヘ且治產ノ禁ヲ受ケサル者ヲ云フ

第八條　凡市公民ハ市ノ選擧ニ參與シ市ノ名譽職ニ選擧セラルルノ權利アリ又其名譽職ヲ擔任スルハ市公民ノ義務ナリトス

左ノ理由アルニ非サレハ名譽職ヲ拒辭シ又ハ任期中退職スルコトヲ得ス

一　疾病ニ罹リ公務ニ堪ヘサルモノ
二　營業ノ爲メニ常ニ其市內ニ居ルコトヲ得サル者
三　年齡滿六十歲以上ノ者
四　官職ノ爲メニ市ノ公務ヲ執ルコトヲ得サル者
五　四年間無給ニシテ市吏員ノ職ニ任シ爾後四年ヲ經過セサル者及六年間市會議員ノ職ニ居リ爾後六年ヲ經過セサル者
六　其他市會ノ議決ニ於テ正當ノ理由アリト認ムル者

前項ノ理由ナクシテ名譽職ヲ拒辭シ又ハ任期中退職シ若クハ無任期ノ職務ヲ少クモ三年間擔當セス又ハ其職務ヲ實際ニ執行セサル者ハ市會ノ議決ヲ以テ三年以上六年以下其市公民タルノ權ヲ停止シ且同年期間其負擔スヘキ市費ノ八分一乃至四分一ヲ增課スルコトヲ得

前項市會ノ議決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第九條　市公民タル者第七條ニ揭載スル要件ノ一ヲ失フトキハ其公民タルノ權ヲ失フモノトス

市公民タル者公權停止中又ハ租稅滯納處分中ハ其公民タルノ權ヲ停止ス家資分散若クハ破產ノ宣告ヲ受ケタ

ルトキハ復權ノ決定アルマテ又公權剝奪若クハ停止ヲ附加ス可キ重罪輕罪ノ爲メ公判ニ付セラレタルトキハ其裁判ノ確定ニ至ルマテ亦同シ（二十八年法律第六號ヲ以テ全條改正）

陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ市ノ公務ニ參與セサルモノトス現役以外ノ兵役ニ在ル者ニシテ戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタルトキモ亦同シ

市公民タル者ニ限リテ任ス可キ職務ニ在ル者ニシテ本條第一項乃至第三項ノ場合ニ當ルトキハ自ラ解職スルモノトス職ニ就キタルカ爲メ公民タルノ權ヲ得ヘキ職務ニ在ル者ニシテ本條第二項第三項ノ場合ニ當ルトキモ亦同シ

前項ノ職務ニ在ル市吏員ニシテ公權剝奪若クハ停止ヲ附加ス可キ重罪輕罪ノ爲メ豫審ニ付セラレタルトキハ監督官廳ハ其職ヲ停止スルコトヲ得

第三款　市條例

第十條　市ノ事務及市住民ノ權利義務ニ關シ此法律中ニ明文ナク又ハ特例ヲ設クルコトヲ許セル事項ハ各市ニ於テ特ニ條例ヲ設ケテ之ヲ規定スルコトヲ得

市ニ於テハ其市ノ設置ニ係ル營造物ニ關シ規則ヲ設クルコトヲ得

市條例及規則ハ法律命令ニ抵觸スルコトヲ得ス且之ヲ發行スルトキハ地方慣行ノ公告式ニ依ル可シ

第二章　市會

第一款　組織及選擧

第十一條　市會議員ハ其市ノ選擧人其被選擧權アル者ヨリ之ヲ選擧ス其定員ハ人口五萬未滿ノ市ニ於テハ三十人トシ人口五萬以上ノ市ニ於テハ三十六人トス

人口十萬以上ノ市ニ於テハ人口五萬ヲ加フル毎ニ人口二十萬以上ノ市ニ於テハ人口十萬ヲ加フル毎ニ議員三人ヲ增シ六十人ヲ定限トス

議員ノ定員ハ市條例ヲ以テ特ニ之ヲ增減スルコトヲ得但定限ヲ超ユルコトヲ得ス

第十二條　市公民（第七條）ハ總テ選擧權ヲ有ス但其公民權ヲ停止セラルル者（第八條第三項第九條第二項）及第九條第三項ノ場合ニ當ル者ハ此限ニ在ラス（二十八年法律第六號ヲ以テ本條中改正）

凡內國人ニシテ公權ヲ有シ直接市稅ヲ納ムル者其額市公民ノ最多ク納稅スル者三名中ノ一人ヨリモ多キトキハ第七條ノ要件ニ當ラスト雖モ選擧權ヲ有ス但公民權ヲ停止セラルル者及第九條第三項ニ當ル者ハ此限ニ在ラス

法律ニ從テ設立シタル會社其他法人ニシテ前項ノ場合ニ當ルトキモ亦同シ

第十三條　選擧人ハ分テ三級ト爲ス

選擧人中直接市稅ノ納額最多キ者ヲ合セテ選擧人總員ノ納ムル總額ノ三分一ニ當ル可キ者ヲ一級トス

一級選擧人ノ外直接市稅ノ納額多キ者ヲ合セテ選擧人總員ノ納ムル總額ノ三分一ニ當ル可キ者ヲ二級トシ爾餘ノ選擧人ヲ三級トス

各級ノ間納稅額兩級ニ跨ル者アルトキハ上級ニ入ル可シ又兩級ノ間ニ同額ノ納稅者二名以上アルトキハ其市ニ住居スル年數ノ多キ者ヲ以テ上級ニ入ル若シ住居ノ年數ニ依リ難キトキハ年齡ヲ以テシ年齡ニモ依リ難キトキハ市長抽籤ヲ以テ之ヲ定ム可シ

選擧人每級各別ニ議員ノ三分一ヲ選擧ス其被選擧人ハ同級內ノ者ニ限ラス三級ニ通シテ選擧セラルルコトヲ得

第十四條　區域廣濶又ハ人口稠密ナル市ニ於テハ市條例ヲ以テ選擧區ヲ設クルコトヲ得但特ニ二級若クハ三級選擧ノ爲メ之ヲ設クルモ妨ケナシ

東京市、京都市、大阪市ニ於テハ區ヲ以テ市會議員ノ選擧區トス（三十一年法律第二十號ヲ以テ追加）

選擧區ノ數及其區域並各選擧區ヨリ選出スル議員ノ員數ハ市條例ヲ以テ選擧人ノ員數ニ準シ之ヲ定ム可シ

選擧人ハ其住居ノ地ニ依テ其所屬ノ區ヲ定ム其ノ市內ニ居住ナキ者ハ課稅ヲ受ケタル物件ノ所在ニ依テ之ヲ定ム若シ數選擧區ニ亘リ納稅スル者ハ課稅ノ最多キ物件ノ所在ニ依テ之ヲ定ム可シ

選擧區ヲ設クルトキハ其選擧區ニ於テ選擧人ノ等級ヲ分ツ可シ

被選擧人ハ其選擧區內ノ者ニ限ラサルモノトス

第十五條　選擧權ヲ有スル市公民（第十二條第一項）ハ總テ被選擧權ヲ有ス

左ニ揭クル者ハ市會議員タルコトヲ得ス

一　所屬府縣ノ官吏

二　有給ノ市吏員

三　檢察官及警察官吏

四　神宮僧侶及其他諸宗教師

五　小學校教員

其他官吏ニシテ當選シ之ニ應セントスルトキハ所屬長官ノ許可ヲ受ク可シ

代言人ニ非スシテ他人ノ爲メニ裁判所又ハ其他官廳ニ對シテ事ヲ辨スルヲ以テ業ト爲ス者ハ議員ニ選擧セラ

ルルコトヲ得ス

父子兄弟タルノ緣故アル者ハ同時ニ市會議員タルコトヲ得ズ其同時ニ選擧セラレタルトキハ投票ノ數ニ依テ其多キ者一人ヲ當選トシ若シ同數ナレハ年長者ヲ當選トス其時ヲ異ニシテ選擧セラレタル者ハ後者議員タルコトヲ得ス

市參事會員トノ間父子兄弟タルノ緣故アル者ハ之ト同時ニ市會議員タルコトヲ得ス若シ議員トノ間ニ其緣故アル者市參事會員ノ任ヲ受クルトキハ其緣故アル議員ハ其職ヲ退ク可シ

第十六條　議員ハ名譽職トス其任期ハ六年トシ毎三年各級ニ於テ其半數ヲ改選ス若シ各級ノ議員二分シ難キトキハ初回ニ於テ多數ノ一半ヲ解任セシム初回ニ於テ解任スヘキ者ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

退任ノ議員ハ再選セラルルコトヲ得

第十七條　議員中闕員アルトキハ毎三年定期改選ノ時ニ到リ同時ニ補闕選擧ヲ行フ可シ若シ定員三分ノ一以上闕員アルトキ又ハ市會、市參事會若クハ府縣知事ニ於テ臨時補闕ヲ必要ト認ムルトキハ定期前ト雖モ其補闕選擧ヲ行フ可シ

補闕議員ハ其前任者ノ殘任期間在職スルモノトス

定期改選及補闕選擧トモ前任者ノ選擧セラレタル選擧等級及選擧區ニ從テ之カ選擧ヲ行フ可シ

第十八條　市長ハ選擧ヲ行フ毎ニ其選擧前六十日ヲ限リ選擧原簿ヲ製シ各選擧人ノ資格ヲ記載シ此原簿ニ據リテ選擧人名簿ヲ製ス可シ但選擧區ヲ設クルトキハ毎區各別ニ原簿及名簿ヲ製ス可シ

選擧人名簿ハ七日間市役所又ハ其他ノ場所ニ於テ之ヲ關係者ノ縱覽ニ供ス可シ若シ關係者ニ於テ訴願セントスルコトアルトキハ同期限內ニ之ヲ市長ニ申立ツ可シ市長ハ市會ノ裁決（第三十五條第一項）ニ依リ名簿ヲ修正ス可キトキハ選擧前十日ヲ限リテ之ニ修正ヲ加ヘテ確定名簿ト爲シ之ニ登錄セラレサル者ハ何人タリトモ選擧ニ關スルコトヲ得ス

本條ニ依リ確定シタル名簿ハ當選ヲ辭シ若クハ選擧ノ無效トナリタル場合ニ於テ更ニ選擧ヲ爲ストキモ亦之ヲ適用ス

第十九條　選擧ヲ執行スルトキハ市長ハ選擧ノ場所日時ヲ定メ及選擧ス可キ議員ノ數ヲ各級各區ニ分チ選擧前七日ヲ限リテ之ヲ公告ス可シ

各級ニ於テ選擧ヲ行フノ順序ハ先ツ三級ノ選擧ヲ行ヒ次ニ二級ノ選擧ヲ行ヒ次ニ一級ノ選擧ヲ行フ可シ

第二十條　選擧掛ハ名譽職トシ市長ニ於テ臨時ニ選擧人中ヨリ二名若クハ四名ヲ選任シ市長若クハ其代理者ハ其掛長トナリ選擧會ヲ開閉シ其會場ノ取締ニ任ス但選擧區ヲ設クルトキハ毎區各別ニ選擧掛ヲ設ク可シ

第二十一條　選擧開會中ハ選擧人ノ外何人タリトモ選擧會場ニ入ルコトヲ得ス選擧人ハ選擧會場ニ於テ協議又ハ勸誘ヲ爲スコトヲ得ス

第二十二條　選擧ハ投票ヲ以テ之ヲ行フ投票ニハ被選擧人ノ氏名ヲ記シ封緘ノ上選擧人自ラ掛長ニ差出ス可シ但選擧人ノ氏名ハ投票ニ記入スルコトヲ得ス

選擧人投票ヲ差出ストキハ自己ノ氏名及住所ヲ掛長ニ申立テ掛長ハ選擧人名簿ニ照シテ之ヲ受ケ封緘ノ儘投票函ニ投入ス可シ但投票函ハ投票ヲ終ル迄之ヲ開クコトヲ得ス

第二十三條　投票ニ記載ノ人員其選擧ス可キ定數ニ過キ又ハ不足アルモ其投票ヲ無效トセス其定數ニ過クルモノハ末尾ニ記載シタル人名ヲ順次ニ棄却ス可シ

左ノ投票ハ之ヲ無效トス

一　人名ヲ記載セス又ハ記載セル人名ノ辨ミ難キモノ

二　被選擧人ノ何人タルヲ確認シ難キモノ

三　被選擧權ナキ人名ヲ記載スルモノ

四　被選擧人氏名ノ外他事ヲ記入スルモノ

投票ノ受理並效力ニ關スル事項ハ選擧掛假ニ之ヲ議決ス可否同數ナルトキハ掛長之ヲ決ス

第二十四條　選擧ハ選擧人自ラ之ヲ行フ可シ他人ニ託シテ投票ヲ差出スコトヲ許サス

第十二條第二項ニ依リ選擧權ヲ有スル者ハ代人ヲ出シテ選擧ヲ行フコトヲ得若シ其獨立ノ男子ニ非サル者又ハ會社其他法人ニ係ルトキハ必ス代人ヲ以テス可シ其代人ハ內國人ニシテ公權ヲ有スル獨立ノ男子ニ限ル但一人ニシテ數人ノ代理ヲ爲スコトヲ得ス且代人ハ委任狀ヲ選擧掛ニ示シテ代理ノ證トス可シ

第二十五條　議員ノ選擧ハ有效投票ノ多數ヲ得ル者ヲ以テ當選トス投票ノ數相同キモノハ年長者ヲ取リ同年ナルトキハ掛長自ラ抽籤シテ其當選ヲ定ム

同時ニ補闕員數名ヲ選擧スルトキハ（第十七條）投票數ノ最多キ者ヲ以テ殘任期ノ最長キ前任者ノ補闕ト爲シ其數相同キトキハ抽籤ヲ以テ其順序ヲ定ム

第二十六條　選擧掛ハ選擧錄ヲ製シテ選擧ノ顚末ヲ記錄シ選擧ヲ終リタル後之ヲ朗讀シ選擧人名簿其他關係書類ヲ合綴シテ之ニ署名ス可シ

投票ハ之ヲ選擧錄ニ附屬シ選擧ヲ結了スルニ至ル迄之

ヲ保存ス可シ

第二十七條　選擧ヲ終リタル後選擧掛長ハ直ニ當選者ニ其當選ノ旨ヲ告知ス可シ其當選ヲ辭セントスル者ハ五日以内ニ之ヲ市長ニ申立ツ可シ

一人ニシテ數級又ハ數區ノ選擧ニ當リタルトキハ同期限内何レノ選擧ニ應ス可キコトヲ申立ツベシ其期限内ニ之ヲ申立テサル者ハ總テ其選擧ヲ辭スル者トナシ第八條ノ處分ヲ爲ス可シ

第二十八條　選擧人選擧ノ效力ニ關シテ訴願セントスルトキハ選擧ノ日ヨリ七日以内ニ之ヲ市長ニ申立ツルコトヲ得（第三十五條第一項）

市長ハ選擧ヲ終リタル後之ヲ府縣知事ニ報告シ府縣知事ニ於テ選擧ノ效力ニ關シ異議アルトキハ訴願ノ有無ニ拘ラス府縣參事會ニ付シテ處分ヲ行フコトヲ得

選擧ノ定期ニ違背スルコトアルトキハ其選擧ヲ取消シ又被選擧人中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルトキハ其人ノ當選ヲ取消シ更ニ選擧ヲ行ハシム可シ

第二十九條　當選者中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルコトヲ發見シ又ハ就職後其要件ヲ失フ者アルトキハ其人ノ當選ハ效力ヲ失フモノトス其要件ノ有無ハ市會之ヲ議決ス

第二款　職務權限及處務規程

第三十條　市會ハ其市ヲ代表シ此法律ニ準據シテ市ニ關スル一切ノ事件並從前特ニ委任セラレ又ハ將來法律勅令ニ依テ委任セラルル事件ヲ議決スルモノトス

第三十一條　市會ノ議決ス可キ事件ノ概目左ノ如シ

一　市條例及規則ヲ設ケ並改正スル事

二　市費ヲ以テ支辨ス可キ事業但第七十四條ニ掲クル事務ハ此限ニ在ラス

三　歲入出豫算ヲ定メ豫算外ノ支出及豫算超過ノ支出ヲ認定スル事

四　決算報告ヲ認定スル事

五　法律勅令ニ定ムルモノヲ除クノ外使用料、手數料市稅及夫役現品ノ賦課徵收ノ法ヲ定ムル事

六　市有不動產ノ賣買交換讓受讓渡並賃入書入ヲ爲ス事

七　基本財產ノ處分ニ關スル事

八　歲入出豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除クノ外新ニ義務ノ負擔ヲ爲シ及權利ノ棄却ヲ爲ス事

九　市有ノ財產及營造物ノ管理方法ヲ定ムル事

十　市吏員ノ身元保證金ヲ徵シ並其金額ヲ定ムル事

十一　市ニ係ル訴訟及和解ニ關スル事

第三十二條　市會ハ法律勅令ニ依リ其職權ニ屬スル市吏員ノ選擧ヲ行フ可シ

第三十三條　市會ハ市ノ事務ニ關スル書類及計算書ヲ檢閱シ市長ノ報告ヲ請求シテ事務ノ管理議決ノ施行並收入支出ノ正否ヲ監査スルノ職權ヲ有ス

市會ハ市ノ公益ニ關スル事件ニ付意見書ヲ監督官廳ニ差出スコトヲ得

第三十四條　市會ハ官廳ノ諮問アルトキハ意見ヲ陳述ス可シ

第三十五條　市住民及公民タル權利ノ有無、選擧權及被選擧權ノ有無、選擧人名簿ノ正否並其等級ノ當否、代理ヲ以テ執行スル選擧權（第十二條第二項、及市會議員選擧ノ效力（第二十八條）ニ關スル訴願ハ市會之ヲ裁決ス

市會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

本條ノ事件ニ付テハ市長ヨリモ亦訴願及訴訟ヲ爲スコトヲ得

本條ノ訴願及訴訟ノ爲メニ其執行ヲ停止スルコトヲ得ス但判決確定スルニ非サレハ更ニ選擧ヲ爲スコトヲ得ス

第三十六條　凡議員タル者ハ選擧人ノ指示若クハ委囑ヲ受ク可カラサルモノトス

第三十七條　市會ハ毎曆年ノ初メ一週年ヲ限リ議長及其代理者各一名ヲ互選ス

第三十八條　會議ノ事件議長及其父母兄弟若クハ妻子ノ一身上ニ關スル事アルトキハ議長ニ故障アルモノトシテ其代理者之ニ代ル可シ

議長代理者其ニ故障アルトキハ市會ハ年長ノ議員ヲ以テ議長ト爲ス可シ

第三十九條　市參事會員ハ會議ニ列席シテ議事ヲ辯明スルコトヲ得

第四十條　市會ハ會議ノ必要アル毎ニ議長之ヲ招集ス若シ議員四分ノ一以上ノ請求アルトキ又ハ市長若クハ市參事會ノ請求アルトキハ必ス之ヲ招集ス可シ其招集並會議ノ事件ヲ告知スルハ急施ヲ要スル場合ヲ除クノ外少クモ會議ノ三日前タル可シ但市會ノ議決ヲ以テ豫メ會議日ヲ定ムルモ妨ケナシ

市參事會員ヲ市會ノ會議ニ招集スルトキモ亦前項ノ例ニ依ル

第四十一條　市會ハ議員半數以上出席スルニ非サレハ議

決スルコトヲ得ス但同一ノ議事ニ付招集再回ニ至ルモ議員猶半數ニ滿タサルトキハ此限ニ在ラス（二十八年法律第六號ヲ以テ本條中改正）

第四十二條　市會ノ議決ハ可否ノ多數ニ依リ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ再議議決ス可シ若シ猶同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第四十三條　議員ハ自己及其父母兄弟若クハ妻子ノ一身上ニ關スル事件ニ付テハ市會ノ議決ニ加ハルコトヲ得ス

議員ノ數此除名ノ爲メニ減少シテ會議ヲ開クノ定數ニ滿タサルトキハ府縣參事會市會ニ代テ議決ス

第四十四條　市會ニ於テ市吏員ノ選擧ヲ行フトキハ其一名毎ニ匿名投票ヲ以テ之ヲ爲シ有效投票ノ過半數ヲ得ル者ヲ以テ當選トス若シ過半數ヲ得ル者ナキトキハ最多數ヲ得ル者二名ヲ取リ之ニ就テ更ニ投票セシム若シ最多數ヲ得ル者三名以上同數ナルトキハ議長自ラ抽籤シテ其二名ヲ取リ更ニ投票セシム此再投票ニ於テモ猶過半數ヲ得ル者ナキトキハ抽籤ヲ以テ當選ヲ定ム其他ハ第二十二條第二十三條第二十四條第一項ヲ適用ス

前項ノ選擧ニハ市會ノ議決ヲ以テ指名推選ノ法ヲ用フルコトヲ得

第四十五條　市會ノ會議ハ公開ス但議長ノ意見ヲ以テ傍聽ヲ禁スルコトヲ得

第四十六條　議長ハ各議員ニ事務ヲ分課シ會議及選擧ノ事ヲ總理シ開會閉會並延會ヲ命シ議場ノ秩序ヲ保持ス若シ傍聽者ノ公然贊成又ハ擯斥ヲ表シ又ハ喧擾ヲ起ス者アルトキハ議長ハ之ヲ議場外ニ退出セシムルコトヲ得

第四十七條　市會ハ書記ヲシテ議事錄ヲ製シテ其議決及選擧ノ顚末並出席議員ノ氏名ヲ記錄セシム可シ議事錄ハ會議ノ末之ヲ朗讀シ議長及議員二名以上之ニ署名ス可シ

市會ハ議事ノ謄寫又ハ原書ヲ以テ其議決ヲ市長ニ報告ス可シ

市會ノ書記ハ市會之ヲ選任ス

第四十八條　市會ハ其會議細則ヲ設ク可シ其細則ニ違背シタル議員ニ科ス可キ過怠金二圓以下ノ罰則ヲ設クルコトヲ得

第三章　市行政

第一款　市參事會及市吏員ノ組織選任

第四十九條　市ニ市參事會ヲ置キ左ノ吏員ヲ以テ之ヲ組織ス

一　市長　一名

一　助役　東京ハ三名京都大阪ハ各二名其他ハ一名

三　名譽職參事會員　東京ハ十二名京都大阪ハ各九名其他ハ六名

助役及名譽職參事會員ハ市條例ヲ以テ其定員ヲ增減スルコトヲ得

第五十條　市長ハ有給吏員トス其任期ハ六年トシ內務大臣市會ヲシテ候補者三名ヲ推薦セシメ上奏裁可ヲ請フ可シ若シ其裁可ヲ得サルトキハ再推薦ヲ爲サシム可シ再推薦ニシテ猶裁可ヲ得サルトキハ追テ推薦セシメ裁可ヲ得ルニ至ルノ間內務大臣ハ臨時代理者ヲ選任シ又ハ市費ヲ以テ官吏ヲ派遣シ市長ノ職務ヲ管掌セシム可シ

第五十一條　助役及名譽職參事會員ハ市會之ヲ選擧ス其選擧ハ第四十四條ニ依テ行フ可シ但投票同數ナルトキハ抽籤ノ法ニ依ラス府縣參事會之ヲ決ス可シ

第五十二條　助役ハ有給吏員トシ其任期ハ六年トス

助役ノ選擧ハ府縣知事ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス若シ其認可ヲ得サルトキハ再選擧ヲ爲ス可シ再選擧ニシテ猶其認可ヲ得サルトキハ追テ選擧ヲ行ヒ認可ヲ得ルニ至ルノ間府縣知事ハ臨時代理者ヲ選任シ又ハ市費ヲ以テ官吏ヲ派遣シ助役ノ職務ヲ管掌セシム可シ

第五十三條　市長及助役ハ其市公民タル者ニ限ラス但其任ヲ受クルトキハ其公民タルノ權ヲ得

第五十四條　名譽職參事會員ハ其市公民中年齡滿三十歲以上ニシテ選擧權ヲ有スル者ヨリ之ヲ選擧ス其任期ハ四年トス任期滿限ノ後ト雖モ後任者就職ノ日迄在職スルモノトス

名譽職參事會員ハ每二年其半數ヲ改選ス若シ二分シ難キトキハ初回ニ於テ多數ノ一半ヲ退任セシム初回ノ退任者ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム但退任者ハ再選セラルルコトヲ得

若シ闕員アルトキハ其殘任期ヲ補充スル爲メ直ニ補闕選擧ヲ爲ス可シ

第五十五條　市長及助役其他參事會員ハ第十五條第二項ニ揭載スル職ヲ兼ヌルコトヲ得ス同條第四項ニ揭載スル者ハ名譽職參事會員ニ選擧セラルルコトヲ得ス

父子兄弟タルノ緣故アル者ハ同時ニ市參事會員タルコトヲ得ス若シ其緣故アル者市長ノ任ヲ受クルトキハ其緣故アル市參事會員ハ其職ヲ退ク可シ其他ハ第十五條第五項ヲ適用ス

市長及助役ハ三箇月前ニ申立ツルトキハ隨時退職ヲ求

ムルコトヲ得此場合ニ於テハ退隱料ヲ受クルノ權ヲ失フモノトス

第五十六條　市長及助役ハ他ノ有給ノ職務ヲ兼任シ又ハ株式會社ノ社長及重役トナルコトヲ得ス其他ノ營業ハ府縣知事ノ認許ヲ得ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第五十七條　名譽職參事會員ノ選擧ニ付テハ市參事會員自ラ其效力ノ有無ヲ議決ス

當選者中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルコトヲ發見シ又ハ就職後其要件ヲ失フ者アルトキハ其人ノ當選ハ效力ヲ失フモノトス其要件ノ有無ハ市參事會員之ヲ議決ス其議決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得其他ハ第三十五條末項ヲ適用ス

第五十八條　市ニ收入役一名ヲ置ク收入役ハ市參事會ノ推薦ニ依リ市會之ヲ選任ス

收入役ハ市參事會員ヲ兼ヌルコトヲ得ス

收入役ノ選任ハ府縣知事ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス其他ハ第五十一條、第五十二條、第五十三條、第五十五條及第七十六條ヲ適用ス

收入役ハ身元保證金ヲ出ス可シ

第五十九條　市ニ書記其他必要ノ附屬員並使丁ヲ置キ相當ノ給料ヲ給ス其人員ハ市會ノ議決ヲ以テ之ヲ定メ市參事會之ヲ任用ス

第六十條　凡市ハ處務便宜ノ爲メ市參事會ノ意見ヲ以テ之ヲ數區ニ分チ每區區長及其代理者各一名ヲ置クコトヲ得區長及其代理者ハ名譽職トス但東京京都大阪及人口二十萬以上ノ市ニ於テハ區長ヲ有給吏員ト爲スコトヲ得（三十三年法律第二十號ヲ以テ本項追加）

區長及其代理者ハ市會ニ於テ其區若クハ隣區ノ公民中選擧權ヲ有スル者ヨリ之ヲ選擧ス區會（第百十三條）ヲ設クル區ニ於テハ其區會ニ於テ之ヲ選擧ス但東京京都大阪及人口廿萬以上ノ市ニ於テハ市參事會之ヲ選任ス東京京都大阪及人口二十萬以上ノ市ニ於テハ前條ニ依リ區ニ附屬員並使丁ヲ置クコトヲ得

東京市、京都市、大阪市及人口二十萬以上ノ市ハ市會ノ議決ニ依リ區ニ區收入役ヲ置クコトヲ得（三十一年法律第二十號ヲ以テ本項追加）

前項區收入役ハ區附屬員中ニ就キ市參事會之ヲ命ス（同上）

第六十一條　市ハ市會ノ議決ニ依リ臨時又ハ常設ノ委員ヲ置クコトヲ得其委員ハ名譽職トス

委員ハ市參事會員又ハ市會議員ヲ以テ之ニ充テ又ハ市參事會員及市會議員ヲ以テ之ヲ組織シ又ハ會員議員ト市公民中選擧權ヲ有スル者トヲ以テ之ヲ組織シ市參事會員一名ヲ以テ委員長トス

委員中市會議員ヨリ出ツル者ハ市會之ヲ選擧シ選擧權ヲ有スル公民ヨリ出ツル者ハ市參事會之ヲ選擧シ其他ノ委員ハ市長之ヲ選任ス

常設委員ノ組織ニ關シテハ市條例ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第六十二條　區長及委員ニハ職務取扱ノ爲メニ要スル費費辨償ノ外市會ノ議決ニ依リ勤務ニ相當スル報酬ヲ給スルコトヲ得

第六十三條　市吏員ハ任期滿限ノ後再選セラルルコトヲ得

市吏員及使丁ハ別段ノ規定又ハ規約アルモノヲ除クノ外隨時解職スルコトヲ得

第二款　市參事會及市吏員ノ職務權限及處務規程

第六十四條　市參事會ハ其市ヲ統轄シ其行政事務ヲ擔任ス

市參事會ノ擔任スル事務ノ概目左ノ如シ

一　市會ノ議事ヲ準備シ及其議決ヲ執行スル事若シ市會ノ議決其權限ヲ越エ法律命令ニ背キ又ハ公衆ノ利益ヲ害スト認ムルトキハ市參事會ハ自己ノ意見ニ由リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ由リ理由ヲ示シテ議決ノ執行ヲ停止シ之ヲ再議セシメ猶其議決ヲ更メサルトキハ府縣參事會ノ裁決ヲ請フ可シ其權限ヲ越エ又ハ法律勅令ニ背クニ依テ議決ノ執行ヲ停止シタル場合ニ於テ府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

二　市ノ設置ニ係ル營造物ヲ管理スル事若シ特ニ之カ管理者アルトキハ其事務ヲ監督スル事

三　市ノ歲入ヲ管理シ歲入出豫算表其他市會ノ議決ニ依テ定マリタル收入支出ヲ命令シ會計及出納ヲ監視スル事

四　市ノ權利ヲ保護シ市有財產ヲ管理スル事

五　市吏員及使丁ヲ監督シ市長ヲ除クノ外其他ニ對シ懲戒處分ヲ行フ事其懲戒處分ハ譴責及十圓以下ノ過怠金トス

六　市ノ諸證書及公文書類ヲ保管スル事

七　外部ニ對シテ市ヲ代表シ市ノ名義ヲ以テ其訴訟並ニ和解ニ關シ又ハ他廳若クハ人民ト商議スル事

八　法律勅令ニ依リ又ハ市會ノ議決ニ從テ使用料　手

數料、市稅及夫役現品ヲ賦課徵收スル事

九　其他法律命令又ハ上司ノ指令ニ依テ市參事會ニ委任シタル事務ヲ處理スル事

第六十五條　市參事會ハ議長又ハ其代理者及名譽職會員定員三分ノ一以上出席スルトキハ議決ヲ爲スコトヲ得其議決ハ可否ノ多數ニ依リ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

議決ノ事件ハ之ヲ議事錄ニ登記ス可シ

市參事會ノ議決其權限ヲ越エ法律命令ニ背キ又ハ公衆ノ利益ヲ害スト認ムルトキハ市長ハ自己ノ意見ニ由リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ由リ理由ヲ示シテ議決ノ執行ヲ停止シ府縣參事會ノ裁決ヲ請フ可シ其權限ヲ越エ又ハ法律勅令ニ背クニ依テ議決ノ執行ヲ停止シタル場合ニ於テ府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第六十六條　第四十三條ノ規定ハ市參事會ニモ亦之ヲ適用ス但同條ノ規定ニ從ヒ市參事會正當ノ會議ヲ開クコトヲ得サルトキハ市會之ニ代テ議決スルモノトス

第六十七條　市長ハ市政一切ノ事務ヲ指揮監督シ處務ノ澁滯ナキコトヲ務ム可シ

市長ハ市參事會ヲ召集シ之カ議長トナル市長故障アルトキハ其代理者ヲ以テ之ニ充ツ

市長ハ市參事會ノ議事ヲ準備シ其議決ヲ執行シ市參事會ノ名ヲ以テ文書ノ往復ヲ爲シ及之ニ署名ス

第六十八條　急施ヲ要スル場合ニ於テ市參事會ヲ召集スルノ暇ナキトキハ市長ハ市參事會ノ事務ヲ專決處分シ次回ノ會議ニ於テ其處分ヲ報告ス可シ

第六十九條　市參事會員ハ市長ノ職務ヲ補助シ市長故障アルトキ之ヲ代理ス

市長ハ市會ノ同意ヲ得テ市參事會員ヲシテ市行政事務ノ一部ヲ分掌セシムルコトヲ得此場合ニ於テハ名譽職會員ハ職務取扱ノ爲メニ要スル實費辨償ノ勤務ニ相當スル報酬ヲ受クルコトヲ得

市條例ヲ以テ助役及名譽職員ノ特別ナル職務並市長代理ノ順序ヲ規定ス可シ若シ條例ノ規定ナキトキハ府縣知事ノ定ムル所ニ從ヒ上席者之ヲ代理ス可シ

第七十條　市收入役ハ市ノ收入ヲ受領シ其費用ノ支拂ヲ爲シ其他會計事務ヲ掌ル

第七十一條　書記ハ市長ニ屬シ庶務ヲ分掌ス

第七十二條　區長及其代理者（第六十條）ハ市參事會ノ機關トナリ其指揮命令ヲ受ケテ區內ニ關スル市行政事務ヲ補助執行スルモノトス

東京市、京都市、大阪市ニ於テハ區長ハ市長市參事會又市ハ收入役ノ指揮命令ヲ受ケ、若クハ委任ニ依リ市ノ公共事務及法律命令ヲ以テ市ニ屬シタル事務ニシテ區內ニ關スルモノヲ管掌ス（三十一年法律第二十號ヲ以テ本項以下追加）

前項ノ區長ハ市參事會ノ監督ヲ受ケ區ニ屬スル事務ヲ處理ス

區收入役ハ區ノ收入ヲ受領シ其費用ノ支拂ヲ爲シ其他會計事務ヲ掌ル

區收入役ハ市收入役ノ指揮命令ヲ受ケ若クハ委任ニ依リ區內ニ關スル市收入役ノ事務ヲ管掌ス

第七十三條　委員ハ（第六十一條）市參事會ノ監督ニ屬シ市行政事務ノ一部ヲ分掌シ又ハ營造物ヲ管理シ若クハ監督シ又ハ一時ノ委託ヲ以テ事務ヲ處辨スルモノトス

市長ハ隨時委員會ニ列席シテ議決ニ加ハリ其議長タルノ權ヲ有ス常設委員ノ職務權限ニ關シテハ市條例ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第七十四條　市長ハ法律命令ニ從ヒ左ノ事務ヲ管掌ス

一　司法警察補助官タルノ職務及法律命令ニ依テ其管理ニ屬スル地方警察ノ事務但別ニ官署ヲ設ケテ地方警察事務ヲ管掌セシムルトキハ此限ニ在ラス

二　浦役場ノ事務

三　國ノ行政並府縣ノ行政ニシテ市ニ屬スル事務但別ニ吏員ノ設ケアルトキハ此限ニ在ラス

右三項中ノ事務ハ監督官廳ノ許可ヲ得テ之ヲ市參事會員ノ一名ニ分掌セシムルコトヲ得

本條ニ揭載スル事務ヲ執行スルカ爲メニ要スル費用ハ市ノ負擔トス

東京市、京都市、大阪市ノ市長ハ監督官廳ノ許可ヲ得テ本條ノ事務ヲ區長ニ分掌セシムルコトヲ得（三十一年法律第二十號ヲ以テ追加）

第三款　給料及給與

第七十五條　名譽職員ハ此法律中別ニ規定アルモノヲ除クノ外職務取扱ノ爲メニ要スル實費ノ辨償ヲ受クルコトヲ得

實費辨償額及報酬額ハ市會之ヲ議決ス

第七十六條　市長助役其他有給吏員及使丁ノ給料額ハ市會ノ議決ヲ經テ之ヲ定ム

市會ノ議決ヲ以テ市長ノ給料額ヲ定ムルトキハ內務大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス若シ之ヲ許可ス可カラストト認ムルトキハ內務大臣之ヲ確定ス

市會ノ議決ヲ以テ助役ノ給料額ヲ定ムルトキハ府縣知事ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス府縣知事ニ於テ之ヲ許可ス可カラスト認ムルトキハ府縣參事會ノ議決ニ付シテ之ヲ確定ス

市長助役其他有給吏員ノ給料額ハ市條例ヲ以テ之ヲ規定スルコトヲ得

第七十七條　市條例ノ規定ヲ以テ市長其他有給吏員ノ退隱料ヲ設クルコトヲ得

第七十八條　有給吏員ノ給料、退隱料其他第七十五條ニ定ムル給與ニ關シテ異議アルトキハ關係者ノ申立ニ依リ府縣參事會之ヲ裁決ス其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第七十九條　退隱料ヲ受クル者官職又ハ府縣郡市町村及公共組合ノ職務ニ就キ給料ヲ受クルトキハ其間之ヲ停止シ又ハ更ニ退隱料ヲ受クルノ權ヲ得ルトキ其額舊退隱料ト同額以上ナルトキハ舊退隱料ハ之ヲ廢止ス

第八十條　給料、退隱料、報酬及辨償ハ總テ市ノ負擔トス

第四章　市有財産ノ管理

第一款　市有財産及市税

第八十一條　市ハ其不動産、積立金穀等ヲ以テ基本財産ト爲シ之ヲ維持スルノ義務アリ

臨時ニ收入シタル金穀ハ基本財産ニ加入ス可シ但寄附金等寄附者其使用ノ目的ヲ定ムルモノハ此限ニ在ラス

第八十二條　凡市有財産ハ全市ノ爲メニ之ヲ管理シ及其用スルモノトス但特ニ民法上ノ權利ヲ有スル者アルトキハ此限ニ在ラス

第八十三條　舊來ノ慣行ニ依リ市住民中特ニ其市有ノ土地物件ヲ使用スル權利ヲ有スル者アルトキハ市會ノ議決ヲ經ルニ非サレハ其舊慣ヲ改ムルコトヲ得ス

第八十四條　市住民中特ニ市有ノ土地物件ヲ使用スル權利ヲ得ントスル者アルトキハ市條例ノ規定ニ依リ使用料若クハ一時ノ加入金ヲ徵收シ又ハ使用料加入金ヲ其ニ徵收シテ之ヲ許可スルコトヲ得但特ニ民法上使用ノ權利ヲ有スル者ハ此限ニ在ラス

第八十五條　使用權ヲ有スル者（第八十三條、第八十四條）ハ使用ノ多寡ニ準シテ其土地物件ニ係ル必要ナル費用ヲ分擔ス可キモノトス

第八十六條　市會ハ市ノ爲メニ必要ナル場合ニ於テハ使用權（第八十三條、第八十四條）ヲ取上ケ又ハ制限スルコトヲ得但特ニ民法上使用ノ權利ヲ有スル者ハ此限ニ在ラス

第八十七條　市有財産ノ賣却貸與又ハ建築工事及物品調達ノ請負ハ公ケノ入札ニ付ス可シ但臨時急施ヲ要スルトキ及入札ノ價格其費用ニ比シテ得失相償ハサルトキ又ハ市會ノ認可ヲ得ルトキハ此限ニ在ラス

第八十八條　市ハ其必要ナル支出及從前法律命令ニ依テ賦課セラレ又ハ將來法律勅令ニ依テ賦課セラルル支出ヲ負擔スルノ義務アリ

市ハ其財産ヨリ生スル收入及使用料、手數料、（第八十九條）並科料、過怠金其他法律勅令ニ依リ市ニ屬スル收入ヲ以テ前項ノ支出ニ充テ猶不足アルトキハ市税（第九十條）及夫役現品（第百一條）ヲ賦課徵收スルコトヲ得

第八十九條　市ハ其所有物及營造物ノ使用ニ付又ハ特ニ數個人ノ爲メニスル事業ニ付使用料又ハ手數料ヲ徵收スルコトヲ得

第九十條　市税トシテ賦課スルコトヲ得可キ目左ノ如シ

一　國税府縣税ノ附加税

二　直接又ハ間接ノ特別税

附加税ハ直接ノ國税又ハ府縣税ニ附加シ均一ノ税率ヲ以テ市ノ全部ヨリ徵收スルヲ常例トス特別税ハ附加税ノ外別ニ市限リ税目ヲ起シテ課税スルコトヲ要スルトキ賦課徵收スルモノトス

第九十一條　此法律ニ規定セル條項ヲ除クノ外使用料、手數料（第八十九條）特別税（第九十條第一項第二）及從前ノ區町村費ニ關スル細則ハ市條例ヲ以テ之ヲ規定ス可シ其條例ニハ科料一圓九十五錢以下ノ罰則ヲ設クルコトヲ得

科料ニ處シ及之ヲ徵收スルハ市參事會之ヲ掌ル其處分ニ不服アル者ハ令狀交付後十四日以内ニ司法裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第九十二條　三箇月以上市内ニ滯在スル者ハ其市税ヲ納ムルモノトス但其課税ハ滯在ノ初ニ遡リ徵收ス可シ

第九十三條　市内ニ住居ヲ構ヘス又ハ三箇月以上滯在スルコトナシト雖モ市内ニ土地家屋ヲ所有シ又ハ營業ヲ爲ス者（店舗ヲ定メサル行商ヲ除ク）ハ其土地家屋營業若クハ其所得ニ對シテ賦課スル市税ヲ納ムルモノトス其法人タルトキモ亦同シ但郵便電信及官設鐵道ノ業ハ此限ニ在ラス

第九十四條　所得税ニ附加税ヲ賦課シ及市ニ於テ特別ニ所得税ヲ賦課セントスルトキハ納税者ノ市外ニ於ケル所有ノ土地家屋又ハ營業（店舗ヲ定メサル行商ヲ除ク）ヨリ收入スル所得ハ之ヲ控除ス可キモノトス

第九十五條　數市町村ニ住居ヲ構ヘ又ハ滯在スル者ニ前條ノ市税ヲ賦課スルトキハ其所得ヲ各市町村ニ平分シ其一部分ニノミ課税ス可シ但土地家屋又ハ營業ヨリ收入スル所得ハ此限ニ在ラス

第九十六條　所得税法第三條ニ掲クル所得ハ市税ヲ免除ス

第九十七條　左ニ掲クル物件ハ市税ヲ免除ス

一　政府、府縣郡市町村及公共組合ニ屬シ直接ノ公用ニ供スル土地、營造物及家屋

二　社寺及官立公立ノ學校病院其他學藝、美術及慈善ノ用ニ供スル土地、營造物及家屋

三　官有ノ山林又ハ荒蕪地但官有山林又ハ荒蕪地ノ利益ニ係ル事業ヲ起シ内務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ得テ其費用ヲ徴收スルハ此限ニ在ラス

新開地及開墾地ハ市條例ニ依リ年月ヲ限リ免除スルコトヲ得

第九十八條　前三條ノ外市税ヲ免除ス可キモノハ別段ノ法律勅令ニ定ムル所ニ從フ皇族ニ係ル市税ノ賦課ハ追テ法律勅令ヲ以テ定ムル迄現今ノ例ニ依ル

第九十九條　數個人ニ於テ專ラ使用スル所ノ營造物アルトキハ其修築及保存ノ費用ハ之ヲ其關係者ニ賦課ス可シ

市内ノ一區ニ於テ專ラ使用スル造營物アルトキハ其區内ニ住居シ若クハ滯在シ又ハ土地家屋ヲ所有シ營業（店舗ヲ定メサル行商ヲ除ク）ヲ爲ス者ニ於テ其修築及保存ノ費用ヲ負擔ス可シ但其一區ノ所有財産アルトキハ其收入ヲ以テ先ツ其費用ニ充ツ可シ

第百條　（三十三年法律第四十六號ヲ以テ削除）

第百一條　市公共ノ事業ヲ起シ又ハ公共ノ安寧ヲ維持スルカ爲メニ夫役及現品ヲ以テ納税者ニ賦課スルコトヲ得但學藝、美術及手工ニ關スル勞役ヲ課スルコトヲ得ス

夫役及現品ハ急迫ノ場合ヲ除クノ外直接市税ヲ準率ト爲シ且之ヲ金額ニ算出シテ賦課ス可シ

夫役ヲ課セラレタル者ハ其使宜ニ從ヒ本人自ラ之ニ當リ又ハ適當ノ代人ヲ出スコトヲ得又急迫ノ場合ヲ除クノ外金圓ヲ以テ之ニ代ルコトヲ得

第百二條　市ニ於テ徴收スル使用料、手數料（第八十九條）市税（第九十條）夫役ニ代フル金圓（第百一條）其他市ノ收入ヲ定期内ニ納メサルトキハ市參事會ハ之ヲ督促シ猶之ヲ完納セサルトキハ國税滯納處分法ニ依リ之ヲ徴收ス可シ其督促ヲ爲スニハ市條例ノ規定ニ依リ手數料ヲ徴收スルコトヲ得

納税者中無資力ナル者アルトキハ市參事會ノ意見ヲ以テ會計年度内ニ限リ納税延期ヲ許スコトヲ得其年度ヲ越ユル場合ニ於テハ市會ノ議決ニ依ル

本條ニ記載スル徴收金ノ追徴、期滿得免及先取特權ニ付テハ國税ニ關スル規則ヲ適用ス

第百三條　地租ノ附加税ハ地租ノ納税者ニ賦課シ其他土地ニ對シテ賦課スル市税ハ其所有者又ハ使用者ニ賦課スルコトヲ得

第百四條　市税ノ賦課ニ對スル訴願ハ賦課令狀ノ交付後三箇月以内ニ之ヲ市參事會ニ申立可シ此期限ヲ經過スルトキハ其年度内減税免税及償還ヲ請求スルノ權利ヲ失フモノトス

第百五條　市税ノ賦課及市ノ營造物、市有財産並其所得ヲ使用スル權利ニ關スル訴願ハ市參事會之ヲ裁決ス但民法上ノ權利ニ係ルモノハ此限ニアラス

前項ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

本條ノ訴願及訴訟ノ爲メニ其處分ノ執行ヲ停止スルコトヲ得ス

第百六條　市ニ於テ公債ヲ募集スルハ從前ノ公債元額ヲ償還スル爲メ又ハ天災事變等已ムヲ得サル支出若クハ市ノ永久ノ利益トナル可キ支出ヲ要スルニ方リ通常ノ歳入ヲ增加スルトキハ其市住民ノ負擔ニ堪ヘサルノ場合ニ限ルモノトス

市會ニ於テ公債募集ノ事ヲ議決スルトキハ併セテ其募集ノ方法、利息ノ定率及償還ノ方法ヲ定ム可シ償還ノ初期ハ三年以内ト爲シ年々償還ノ步合ヲ定メ募集ノ時ヨリ三十年以内ニ還了ス可シ

定額豫算内ノ支出ヲ爲スカ爲メ必要ナル一時ノ借入金ハ本條ノ例ニ依ラス其年度内ノ收入ヲ以テ償還ス可キモノトス但此場合ニ於テハ市會ノ議決ヲ要セス

第二款　市ノ歳入出豫算及決算

第百七條　市參事會ハ毎會計年度收入支出ノ豫知シ得可キ金額ヲ見積リ年度前二箇月ヲ限リ歳入出豫算表ヲ調製ス可シ但市ノ會計年度ハ政府ノ會計年度ニ同シ

内務大臣ハ省令ヲ以テ豫算表調製ノ式ヲ定ムルコトヲ得

第百八條　豫算表ハ會計年度前市會ノ議決ヲ收リ之ヲ府縣知事ニ報告シ並地方慣行ノ方式ヲ以テ其要領ヲ公告

ス可シ

豫算表ヲ市會ニ提出スルトキハ市參事會ハ併セテ其市ノ事務報告書及財産明細表ヲ提出ス可シ

第百九條　定額豫算外ノ費用又ハ豫算ノ不足アルトキハ市會ノ認定ヲ得テ之ヲ支出スルコトヲ得

定額豫算中臨時ノ場合ニ支出スルカ爲メニ豫備費ヲ置キ市參事會ハ豫メ市會ノ認定ヲ受ケシテ豫算外ノ費用又ハ豫算超過ノ費用ニ充ツルコトヲ得但市會ノ否決シタル費途ニ充ツルコトヲ得ス

第百十條　市會ニ於テ豫算表ヲ議決シタルトキハ市長ヨリ其謄寫ヲ以テ之ヲ收入役ニ交付ス可シ其豫算表中監督官廳若クハ參事會ノ許可ヲ受ク可キ事項アルトキハ（第百二十一條ヨリ第百二十三條ニ至ル）先ツ其許可ヲ受ク可シ

收入役ハ市參事會（第六十四條第二項第三）又ハ監督官廳ノ命令アルニ非サレハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス又收入役ハ市參事會ノ命令ヲ受クルモ其支出豫算表中ニ豫定ナキカ又ハ其命令第百九條ノ規定ニ據ラサルトキハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス

前項ノ規定ニ背キタル支拂ハ總テ收入役ノ責任ニ歸ス

第百十一條　市ノ出納ハ毎月例日ヲ定メテ檢査シ及毎年少クモ一回臨時檢査ヲ爲ス可シ例月檢査ハ市長又ハ其代理者之ヲ爲シ臨時檢査ハ市長又ハ其代理者ノ外市會ノ互選シタル議員一名以上ノ立會ヲ要ス

第百十二條　決算ハ會計年度ノ終ヨリ三箇月以内ニ之ヲ結了シ證書類ヲ併セテ收入役ヨリ之ヲ市參事會ニ提出シ市參事會ハ之ヲ審査シ意見ヲ附シテ之ヲ市會ノ認定ニ付ス可シ其市會ノ認定ヲ經タルトキハ市長ヨリ之ヲ府縣知事ニ報告ス可シ

決算報告ヲ爲ストキハ第三十八條及第四十三條ノ例ニ準シ市參事會員故障アルモノトス

第五章　特別ノ財産ヲ有スル市區ノ行政

第百十三條　市内ノ一區ニシテ特別ニ財産ヲ所有シ若クハ營造物ヲ設ケ其區限リ特ニ其費用（第九十九條）ヲ負擔スルトキハ府縣參事會ハ其市會ノ意見ヲ聞キ條例ヲ發行シ財産及營造物ニ關スル事務ノ爲メ區會ヲ設クルコトヲ得其會議ハ市會ノ例ヲ適用スルコトヲ得

第百十四條　前條ニ記載スル事務ハ市ノ行政ニ關スル規則ニ依リ市參事會之ヲ管理ス可シ但區ノ出納及會計ノ事務ハ之ヲ分別ス可シ

第六章　市行政ノ監督

第百十五條　市行政ハ第一次ニ於テ府縣知事之ヲ監督シ第二次ニ於テ内務大臣之ヲ監督ス但法律ニ指定シタル場合ニ於テ府縣參事會ノ參與スルハ別段ナリトス

市ノ行政ニ關シ主務大臣ノ許可ヲ要スヘキ事項中其輕易ナルモノハ勅令ノ規定ニ依リ其許可ノ職權ヲ府縣知事ニ委任スルコトヲ得（三十三年法律第四十七號ヲ以テ本項追加）

第百十六條　此法律中別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外凡市ノ行政ニ關スル府縣知事若クハ府縣參事會ノ處分若クハ裁決ニ不服アル者ハ内務大臣ニ訴願スルコトヲ得

市ノ行政ニ關スル訴願ハ處分書若クハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ十四日以内ニ其理由ヲ具シテ之ヲ提出ス可シ但此法律中別ニ期限ヲ定ムルモノハ此限ニ在ラス

此法律中ニ指定スル場合ニ於テ府縣知事若クハ府縣參事會ノ裁決ニ不服アリテ行政裁判所ニ出訴セントスル者ハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ二十一日以内ニ出訴ス可シ

行政裁判所ニ出訴スルコトヲ許シタル場合ニ於テハ内務大臣ニ訴願スルコトヲ得ス

訴願及訴訟ヲ提出スルトキハ處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止ス但シ此法律中別ニ規定アリ又ハ當該官廳ノ意見ニ依リ其停止ノ爲メニ市ノ公益ニ害アリト爲ストキハ此限ニ在ラス

第百十七條　監督官廳ハ市行政ノ法律命令ニ背戻セサルヤ其事務錯亂澁滯セサルヤ否ヲ監視ス可シ監督官廳ハ之カ爲メニ行政事務ニ關シテ報告ヲ爲サシメ豫算及決算等ノ書類帳簿ヲ徵シ並實地ニ就テ事務ノ現況ヲ視察シ出納ヲ檢閲スルノ權ヲ有ス

第百十八條　市ニ於テ法律勅令ニ依テ負擔シ又ハ當該官廳ノ職權ニ依テ命令スル所ノ支出ヲ定額豫算ニ載セス又ハ臨時之ヲ承認セス又ハ實行セサルトキハ府縣知事ハ理由ヲ示シテ其支出額ヲ定額豫算表ニ加ヘ又ハ臨時支出セシム可シ

市ニ於テ前項ノ處分ニ不服アルトキハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第百十九條　凡市會又ハ市參事會ニ於テ議決ス可キ事件ヲ議決セサルトキハ府縣參事會代テ之ヲ議決ス可シ

第百二十條　内務大臣ハ市會ヲ解散セシムルコトヲ得解散ヲ命シタル場合ニ於テハ同時ニ三箇月以内更ニ議員ヲ改選ス可キコトヲ命ス可シ但改選市會ノ集會スル迄

ハ府縣參事會ニ代テ一切ノ事件ヲ議決ス

第百二十一條　左ノ事件ニ關スル市會ノ議決ハ內務大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス（三十三年法律第四十七號ヲ以テ第二項削除）

一　市條例ヲ設ケ並改正スル事

二　學藝、美術ニ關シ又ハ歷史上貴重ナル物品ノ賣却讓與質入書入交換若クハ大ナル變更ヲ爲ス事

第百二十二條　左ノ事件ニ關スル市會ノ議決ハ內務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一　新ニ市ノ負債ヲ起シ又ハ負債額ヲ增加シ及第百六條第二項ノ例ニ違フモノ但償還期限三年以內ノモノハ此限ニ在ラス

二　市特別稅並使用料、手數料ヲ新設シ增額シ又ハ變更スル事

三　地租五分ノ一其他直接國稅百分ノ五十ヲ超過スル附加稅ヲ賦課スル事（三十三年法律第四十八號ヲ以テ本號中改正）

四　間接國稅ニ附加稅ヲ賦課スル事

五　法律勅令ノ規定ニ依リ官廳ヨリ補助スル步合金ニ對シ支出金額ヲ定ムル事

第百二十三條　左ノ事件ニ關スル市會ノ議決ハ府縣參事會ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一　市ノ營造物ニ關スル規則ヲ設ケ並改正スル事

二　基本財產ノ處分ニ關スル事（第八十一條）

三　市有不動產ノ賣却讓與並質入書入ヲ爲ス事

四　各個人特ニ使用スル市有土地使用法ノ變更ヲ爲ス事（第八十六條）

五　各種ノ保證ヲ與フル事

六　法律勅令ニ依テ負擔スル義務ニ非スシテ向五箇年以上ニ亘リ新ニ市住民ニ負擔ヲ課スル事

七　均一ノ稅率ニ據ラスシテ國稅府縣稅ニ附加稅ヲ賦課スル事（第九十條第二項）

八　第九十九條ニ從ヒ數個人又ハ市內ノ一區ニ費用ヲ賦課スル事

九　第百一條ノ準率ニ據ラスシテ夫役及現品ヲ賦課スル事

第百二十四條　府縣知事ハ市長、助役、市參事會員、委員、區長其他市吏員ニ對シ懲戒處分ヲ行フコトヲ得其懲戒處分ハ譴責及過怠金トス其過怠金ハ二十五圓以下トス

追テ市吏員懲戒法ヲ設クル迄ハ左ノ區別ニ從ヒ官員懲戒例ヲ適用ス可シ

一　市參事會ノ懲戒處分（第六十四條第二項第五）ニ不服アル者ハ府縣知事ニ訴願シ府縣知事ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

二　府縣知事ノ懲戒處分ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

三　本條第一項ニ揭載スル市吏員職務ニ違フコト再三ニ及ヒ又ハ其情狀重キ者又ハ行狀ヲ亂リ廉恥ヲ失フ者、財產ヲ浪費シ其分ヲ守ラサル者又ハ職務擧ラサル者ハ懲戒裁判ヲ以テ其職ヲ解クコトヲ得其隨時解職スルコトヲ得可キ者ハ（第六十三條）懲戒裁判ヲ以テスルノ限ニ在ラス

總テ解職セラレタル者ハ自己ノ所爲ニ非スシテ職務ヲ執ルニ堪ヘサルカ爲メ解職セラレタル場合ヲ除クノ外退隱料ヲ受クルノ權ヲ失フモノトス

四　懲戒裁判ハ府縣知事其審問ヲ爲シ府縣參事會之ヲ裁決ス其裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

市長ノ解職ニ係ル裁決ハ上奏シテ之ヲ執行ス

監督官廳ハ懲戒裁判ノ裁決前吏員ノ停職ヲ命シ並給料ヲ停止スルコトヲ得

第百二十五條　市吏員及使丁其職務ヲ盡サス又ハ權限ヲ越エタル事アルカ爲メ市ニ對シテ賠償ス可キコトアルトキハ府縣參事會之ヲ裁決ス其裁決ニ不服アル者ハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ七日以內ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但出訴ヲ爲シタルトキハ府縣參事會ハ假ニ其財產ヲ差押フコトヲ得

第七章　附則

第百二十六條　此法律ハ明治二十二年四月一日ヨリ地方ノ情況ヲ裁酌シ府縣知事ノ具申ニ依リ內務大臣指定スル地ニ之ヲ施行ス

第百二十七條　府縣參事會及行政裁判所ヲ開設スル迄ノ間府縣參事會ノ職務ハ府縣知事行政裁判所ノ職務ハ內閣ニ於テ之ヲ行フ可シ

第百二十八條　此法律ニ依リ初テ議員ヲ選擧スルニ付市參事會及市會ノ職務幷市條例ヲ以テ定ム可キ事項ハ府縣知事又ハ其指命スル官吏ニ於テ之ヲ施行ス可シ

第百二十九條　社寺宗敎ノ組合ニ關シテハ此法律ヲ適用セス現行ノ例規及其地ノ習慣ニ從フ

第百三十條　此法律中ニ記載セル人口ハ最終ノ人口調查ニ依リ現役軍人ヲ除キタル數ヲ云フ

第百三十一條　現行ノ租稅中此法律ニ於テ直接稅又ハ間接稅トス可キ類別ハ內務大臣及大藏大臣之ヲ告示ス

第百三十二條　明治九年十月第百三十號布告各區町村金穀公借其有物取扱土木起功規則、明治十一年七月第十七號布告郡區町村編制法第四條、明治十七年五月第十四號布告區町村會法、明治十七年五月第十五號布告、明治十七年七月第二十三號布告、明治十八年八月第二十五號布告其他此法律ニ牴觸スル成規ハ此法律施行ノ日ヨリ總テ之ヲ廢止ス

第百三十三條　內務大臣ハ此法律實行ノ責ニ任シ之カ爲メ必要ナル命令及訓令ヲ發布ス可シ

此法律中別段ノ規定アルモノヲ除クノ外東京市、京都市、大阪市及人口二十萬以上ノ市ノ區ニ關シ必要ナル一切ノ事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（三十一年法律第二十號ヲ以テ追加三十三年同第四十六號ヲ以テ本項中追加）

町村制（明治廿一年四月法律第一號）

第一章　總則
第一款　町村及其區域
第二款　町村住民及其權利義務
第三款　町村條例
第二章　町村會
第一款　組織及選擧
第二款　職務權限及處務規程
第三章　町村行政
第一款　町村吏員ノ組織選任
第二款　町村吏員ノ職務權限
第三款　給料及給與
第四章　町村有財產ノ管理
第一款　町村有財產及町村稅
第二款　町村ノ歲入出豫算及決算
第五章　町村內各部ノ行政
第六章　町村組合
第七章　町村行政ノ監督
第八章　附則

第一章　總則

第一款　町村及其區域

第一條　此法律ハ市制ヲ施行スル地ヲ除キ總テ町村ニ施行スルモノトス

第二條　町村ハ法律上一個人ト均ク權利ヲ有シ義務ヲ負擔シ凡町村公共ノ事務ハ官ノ監督ヲ受ケテ自ラ之ヲ處理スルモノトス

第三條　凡町村ハ從來ノ區域ヲ存シテ之ヲ變更セス但將來其變更ヲ要スルトキハ此法律ニ準據ス可シ

第四條　町村ノ廢置分合ヲ要スルトキハ關係アル市町村會及郡　事會ノ意見ヲ聞キ府縣參事會之ヲ議決シ內務大臣ノ許可ヲ受ク可シ

町村境界ノ變更ヲ要スルトキハ關係アル町村會及地主ノ意見ヲ聞キ郡參事會之ヲ議決ス其數郡ニ渉リ若クハ市ノ境界ニ渉ルモノハ府縣參事會之ヲ議決ス

町村ノ資力法律上ノ義務ヲ負擔スルニ堪ヘス又ハ公益上ノ必要アルトキハ關係者ノ異議ニ拘ハラス町村ヲ合併シ其境界ヲ變更スルコトアル可シ

本條ノ處分ニ付其町村ノ財產處分ヲ要スルトキハ併セテ之ヲ議決ス可シ

第五條　町村ノ境界ニ關スル爭論ハ郡參事會之ヲ裁決ス其數郡ニ渉リ若クハ市ノ境界ニ渉ルモノハ府縣參事會之ヲ裁決ス其郡參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アルモノハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二款　町村住民及其權利義務

第六條　凡町村內ニ住居ヲ占ムル者ハ總テ其町村住民トス

凡町村住民タル者ハ此法律ニ從ヒ公共ノ營造物並町村有財產ヲ共用スルノ權利ヲ有シ及町村ノ負擔ヲ分任スルノ義務ヲ有スルモノトス但特ニ民法上ノ權利及義務ヲ有スル者アルトキハ此限ニ在ラス

第七條　凡帝國臣民ニシテ公權ヲ有スル獨立ノ男子二年以來(一)町村ノ住民トナリ(二)其町村ノ負擔ヲ分任シ及(三)其町村內ニ於テ地租ヲ納メ若クハ直接國稅年額二圓以上ヲ納ムル者ハ其町村公民トス其公費ヲ以テ救助ヲ受ケタル後二年ヲ經サル者ハ此限ニ在ラス但場合ニ依リ町村會ノ議決ヲ以テ本條ニ定ムル二箇年ノ制限ヲ特免スルコトヲ得

此法律ニ於テ獨立ト稱スルハ滿二十五歲以上ニシテ一戶ヲ構ヘ且治產ノ禁ヲ受ケサル者ヲ云フ

第八條　凡町村公民ハ町村ノ選擧ニ參與シ町村ノ名譽職ニ選擧セラルルノ權利アリ又其名譽職ヲ擔任スルハ町村公民ノ義務ナリトス

左ノ理由アルニ非サレハ名譽職ヲ拒辭シ又ハ任期中退職スルコトヲ得ス

一　疾病ニ罹リ公務ニ堪ヘサル者
二　營業ノ爲メニ常ニ其町村內ニ居ルコトヲ得サル者
三　年齡滿六十歲以上ノ者
四　官職ノ爲メニ町村ノ公務ヲ執ルコトヲ得サル者

五　四年間無給ニシテ町村吏員ノ職ニ任シ爾後四年ヲ經過セサル者及六年間町村議員ノ職ニ居リ爾後六年ヲ經過セサル者

六　其他町村會ノ議決ニ於テ正當ノ理由アリト認ムル者

前項ノ理由ナクシテ名譽職ヲ拒辭シ又ハ任期中退職シ若クハ無任期ノ職務ヲ少クモ三年間擔當セス又ハ其職務ヲ實際ニ執行セサル者ハ町村會ノ議決ヲ以テ三年以上六年以下其町村公民タルノ權ヲ停止シ且同年期間其負擔ス可キ町村費ノ八分一乃至四分一ヲ增課スルコトヲ得

前項町村會ノ議決ニ不服アル者ハ郡參事會ニ訴願シ其郡參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第九條　町村公民タル者第七條ニ掲載スル要件ノ一ヲ失フトキハ其公民タルノ權ヲ失フモノトス　（二十八年法律第七號ヲ以テ全條改正）

町村公民タル者公權停止中又ハ租稅滯納處分中ハ其公民タルノ權ヲ停止ス家資分散若クハ破產ノ宣告ヲ受ケタルトキハ復權ノ決定アルマテ又公判權奪若クハ停止ヲ附加ス可キ重罪輕罪ノ爲メ公判ニ付セラレタルトキハ其裁判ノ確定ニ至ルマテ亦同シ

陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ町村ノ公務ニ參與セサルモノトス現役以外ノ兵役ニ在ル者ニシテ戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタルトキモ亦同シ

町村公民タル者ニ限リテ任ス可キ職務ニ在ル者ニシテ本條第一項乃至第三項ノ場合ニ當ルトキハ自ラ解職スルモノトス職ニ就キタルカ爲メ公民タルノ權ヲ得可キ職務ニ在ル者ニシテ本條第二項第三項ノ場合ニ當ルトキモ亦同シ

前項ノ職務ニ在ル町村吏員ニシテ公權剝奪若クハ停止ヲ附加ス可キ重罪輕罪ノ爲メ豫審ニ付セラレタルトキハ監督官廳ハ其職ヲ停止スルコトヲ得

第三款　町村條例

第十條　町村ノ事務及町村住民ノ權利義務ニ關シ此法律中ニ明文ナク又ハ特例ヲ設クルコトヲ許セル事項ハ各町村ニ於テ特ニ條例ヲ設ケテ之ヲ規定スルコトヲ得

町村ニ於テハ其町村ノ設置ニ係ル營造物ニ關シ規則ヲ設クルコトヲ得

町村條例及規則ハ法律命令ニ抵觸スルコトヲ得ス且之ヲ發行スルトキハ地方慣行ノ公告式ニ依ル可シ

第二章　町村會

第一款　組織及選舉

第十一條　町村會議員ハ其町村ノ選舉人其被選舉權アル者ヨリ之ヲ選舉ス其定員ハ其町村ノ人口ニ準シ左ノ割合ヲ以テ之ヲ定ム但町村條例ヲ以テ特ニ之ヲ增減スルコトヲ得

一　人口千五百未滿ノ町村ニ於テハ　議員　八人

一　人口千五百以上五千未滿ノ町村ニ於テハ　議員　十二人

一　人口五千以上壹萬未滿ノ町村ニ於テハ　議員　十八人

一　人口壹萬以上貳萬未滿ノ町村ニ於テハ　議員　二十四人

一　人口貳萬以上ノ町村ニ於テハ　議員　三十人

第十二條　町村公民（第七條）ハ總テ選舉權ヲ有ス但其公民權ヲ停止セラルル者（第八條第三項、第九條第二項及第九條第三項ノ場合ニ當ル者ハ此限ニ在ラス　（二十八年法律第七號ヲ以テ本條中改正）

凡内國人ニシテ公權ヲ有シ直接町村稅ヲ納ムル者其額町村公民ノ最多ク納稅スル者三名中ノ一人ヨリモ多キトキ第七條ノ要件ニ當ラスト雖モ選舉權ヲ有ス但公民權ヲ停止セラルル者及第九條第三項ノ場合ニ當ル者ハ此限ニ在ラス

法律ニ從テ設立シタル會社其他法人ニシテ前項ノ場合ニ當ルトキモ亦同シ

第十三條　選舉人ハ分テ二級ト爲ス

選舉人中直接町村稅ノ納額多キ者ヲ合セテ選舉人全員ノ納ムル總額ノ半ニ當ル可キ者ヲ一級トシ爾後ノ選舉人ヲ二級トス

一級二級ノ間納稅額兩級ニ跨ル者アルトキハ一級ニ入ル可シ又兩級ノ間ニ同額ノ納稅者二名以上アルトキハ其町村内ニ住居スル年數ノ多キ者ヲ以テ一級ニ入ル若シ住居ノ年數ニ依リ難キトキハ年齡ヲ以テシ年齡ニモ依リ難キトキハ町村長抽籤ヲ以テ之ヲ定ム可シ

選舉人每級各別ニ議員ノ半數ヲ選舉ス其被選舉人ハ同級内ノ者ニ限ラス兩級ニ通シテ選舉セラルルコトヲ得

第十四條　特別ノ事情アリテ前條ノ例ニ依リ難キ町村ニ於テハ町村條例ヲ以テ別ニ選舉ノ特例ヲ設クルコトヲ得

第十五條　選舉權ヲ有スル町村公民（第十二條第一項）ハ總テ被選舉權ヲ有ス

左ニ掲クル者ハ町村會議員タルコトヲ得ス

一　所屬府縣郡ノ官吏

二　有給ノ町村吏員

三　檢察官及警察官吏

四　神官僧侶及其他諸宗教師

五　小學校教員

其他官吏ニシテ當選シ之ニ應セントスルトキハ所屬長官ノ許可ヲ受ク可シ

代言人ニ非スシテ他人ノ爲メニ裁判所又ハ其他ノ官廳ニ對シテ事ヲ辨スルヲ以テ業ト爲ス者ハ議員ニ選舉セラルルコトヲ得ス

父子兄弟タルノ緣故アル者ハ同時ニ町村會議員タルコトヲ得ス其同時ニ選舉セラレタルトキハ投票ノ數ニ依テ其多キ者一人ヲ當選トシ若シ同數ナレハ年長者ヲ當選トス其時ヲ異ニシテ選舉セラレタル者ハ後者議員タルコトヲ得ス

町村長若クハ助役トノ間父子兄弟タルノ緣故アル者ハ之ト同時ニ町村會議員タルコトヲ得ス若シ議員トノ間ニ其緣故アル者町村長若クハ助役ニ選舉セラレ認可ヲ受クルトキハ其緣故アル議員ハ其職ヲ退ク可シ

第十六條　議員ハ名譽職トス其任期ハ六年トシ毎三年各級ニ於テ其半數ヲ改選ス若シ各級ノ議員二分シ難キトキハ初回ニ於テ多數ノ一半ヲ解任セシム初回ニ於テ解任ス可キ者ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

退任ノ議員ハ再選セラルルコトヲ得

第十七條　議員中闕員アルトキハ毎三年定期改選ノ時ニ至リ同時ニ補闕選舉ヲ行フ可シ若シ定員三分ノ一以上闕員アルトキ又ハ町村會町村長若クハ郡長ニ於テ臨時補闕ヲ必要ト認ムルトキハ定期前ト雖モ其補闕選舉ヲ行フ可シ

補闕議員ハ其前任者ノ殘任期間在職スルモノトス

定期改選及補闕選舉トモ前任者ノ選舉セラレタル選舉等級ニ從テ之カ選舉ヲ行フ可シ

第十八條　町村長ハ選舉ヲ行フ毎ニ其選舉前六十日ヲ限リ選舉原簿ヲ製シ各選舉人ノ資格ヲ記載シ此原簿ニ據リテ選舉人名簿ヲ製ス可シ

選舉人名簿ハ七日間町村役場ニ於テ之ヲ關係者ノ縱覽ニ供ス可シ若シ關係者ニ於テ訴願セントスルコトアルトキハ同期限內ニ之ヲ町村長ニ申立ツ可シ町村長ハ町村會ノ裁決（第三十七條第一項）ニ依リ名簿ヲ修正ス

可キトキハ選舉前十日ヲ限リテ之ニ修正ヲ加ヘテ確定名簿トナシ之ニ登錄セラレサル者ハ何人ナリトモ選舉ニ關スルコトヲ得ス

本條ニ依リ確定シタル名簿ハ當選ヲ辭シ若クハ選舉ノ無効トナリタル場合ニ於テ更ニ選舉ヲ爲ストキモ亦之ヲ適用ス

第十九條　選舉ヲ執行スルトキハ町村長ハ選舉ノ場所日時ヲ定メ及選舉ス可キ議員ノ數ヲ各級ニ分チ選舉前七日ヲ限リテ之ヲ公告ス可シ

各級ニ於テ選舉ヲ行フノ順序ハ先ツ二級ノ選舉ヲ行ヒ次ニ一級ノ選舉ヲ行フ可シ

第二十條　選舉掛ハ名譽職トシ町村長ニ於テ臨時ニ選舉人中ヨリ二名若クハ四名ヲ選任シ町村長若クハ其代理者ハ其係長トナリ選舉會ヲ開閉シ其會場ノ取締ニ任ス

第二十一條　選舉開會中ハ選舉人ノ外何人タリトモ選舉會場ニ入ルコトヲ得ス選舉人ハ選舉會場ニ於テ協議又ハ勸誘ヲ爲スコトヲ得ス

第二十二條　選舉ハ投票ヲ以テ之ヲ行フ投票ニハ被選舉人ノ氏名ヲ記シ封緘ノ上選舉人自ラ掛長ニ差出ス可シ但選舉人ノ氏名ハ投票ニ記入スルコトヲ得ス

選舉人投票ヲ差出ストキハ自己ノ氏名及住所ヲ掛長ニ申立テ掛長ハ選舉人名簿ニ照シテ之ヲ受ケ封緘ノ儘投票函ニ投入ス可シ但投票函ハ投票ヲ終ル迄之ヲ開クコトヲ得ス

第二十三條　投票ニ記載ノ人員其選舉ス可キ定數ニ過キ又ハ不足アルモ其投票ヲ無効トセス其定數ニ過クルモノハ末尾ニ記載シタル人名ヲ順次ニ棄却ス可シ

左ノ投票ハ之ヲ無効トス

一　人名ヲ記載セス又ハ記載セル人名ノ讀ミ難キモノ

二　被選舉人ノ何人タルヲ確認シ難キモノ

三　被選舉權ナキ人名ヲ記載スルモノ

四　被選舉人氏名ノ外他事ヲ記入スルモノ

投票ノ受理並ニ効力ニ關スル事項ハ選舉掛假ニ之ヲ議決ス可否同數ナルトキハ掛長之ヲ決ス

第二十四條　選舉ハ選舉人自ラ之ヲ行フ可シ他人ニ託シテ投票ヲ差出スコトヲ許サス

第十二條第二項ニ依リ選舉權ヲ有スル者ハ代人ヲ出シテ選舉ヲ行フコトヲ得若シ其獨立ノ男子ニ非サル者又ハ會社其他法人ニ係ルトキハ必ス代人ヲ以テス可シ其代人ハ內國人ニシテ公權ヲ有スル獨立ノ男子ニ限ル但一人ニシテ數人ノ代理ヲ爲スコトヲ得ス且代人ハ委任

狀ヲ選擧掛ニ示シテ代理ノ證トス可シ

第二十五條　町村ノ區域廣濶ナルトキ又ハ人口稠密ナルトキハ町村會ノ議決ニ依リ區畫ヲ定メテ選擧分會ヲ設クルコトヲ得但特ニ二級選擧人ノミ此分會ヲ設クルモ妨ケナシ

分會ノ選擧掛ハ町村長ノ選任シタル代理者ヲ以テ其長トシ第二十條ノ例ニ依リ掛員二名若クハ四名ヲ選任ス

選擧分會ニ於テ爲シタル投票ハ投票函ノ儘本會ニ集テ之ヲ合算シ總數ヲ以テ當選ヲ定ム

選擧分會ハ本會ト同日時ニ之ヲ開ク可シ其他選擧ノ手續等總テ本會ノ例ニ依ル

第二十六條　議員ノ選擧ハ有效投票ノ多數ヲ得ル者ヲ以テ當選トス投票ノ數相同キモノハ年長者ヲ取リ同年ナルトキハ掛長自ラ抽籤シテ其當選ヲ定ム

同時ニ補闕員數名ヲ選擧スルトキハ（第十七條）投票數ノ最多キ者ヲ以テ殘任期ノ最長キ前任者ノ補闕ト爲シ其數相同キトキハ抽籤ヲ以テ其順序ヲ定ム

第二十七條　選擧掛ハ選擧錄ヲ製シテ選擧ノ顚末ヲ記錄シ選擧ヲ終リタル後之ヲ朗讀シ選擧人名簿其他關係書類ヲ合綴シテ之ニ署名ス可シ

投票ハ之ヲ選擧錄ニ附屬シ選擧ヲ結了スルニ至ル迄之ヲ保存ス可シ

第二十八條　選擧ヲ終リタル後選擧掛長ハ直ニ當選者ニ其當選ノ旨ヲ告知ス可シ其當選ヲ辭セントスル者ハ五日以內ニ之ヲ町村長ニ申立ツ可シ

一人ニシテ兩級ノ選擧ニ當リタルトキハ同期限內何レノ選擧ニ應ス可キコトヲ申立ツ可シ其期限內ニ之ヲ申立テサル者ハ總テ其選擧ヲ辭スル者トナシ第八條ノ處分ヲ爲ス可シ

第二十九條　選擧人選擧ノ效力ニ關シテ訴願セントスルトキハ選擧ノ日ヨリ七日以內ニ之ヲ町村長ニ申立ツルコトヲ得（第二十七條第一項）

町村長ハ選擧ヲ終リタル後之ヲ郡長ニ報告シ郡長ニ於テ選擧ノ效力ニ關シ異議アルトキハ訴願ノ有無ニ拘ラス郡參事會ニ付シテ處分ヲ行フコトヲ得

選擧ノ定規ニ違背スルコトアルトキハ其選擧ヲ取消シ又被選擧人中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルトキハ其人ノ當選ヲ取消シ更ニ選擧ヲ行ハシム可シ

第三十條　當選者中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルコトヲ發見シ又ハ就職後其要件ヲ失フ者アルトキハ其人ノ當選ハ效力ヲ失フモノトス其要件ノ有無ハ町村會之ヲ

議決ス

第三十一條　小町村ニ於テハ郡參事會ノ議決ヲ經町村條例ノ規定ニ依リ町村會ヲ設ケス選擧權ヲ有スル町村公民ノ總會ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

第二款　職務權限及處務規程

第三十二條　町村會ハ其町村ヲ代表シ此法律ニ準據シテ町村一切ノ事件並從前特ニ委任セラレ又ハ將來法律勅令ニ依テ委任セラルル事件ヲ議決スルモノトス

第三十三條　町村會ノ議決ス可キ事件ノ概目左ノ如シ

一　町村條例及規則ヲ設ケ並改正スル事

二　町村費ヲ以テ支辨ス可キ事業但第六　九條ニ揭クル事務ハ此限ニ在ラス

三　歲入出豫算ヲ定メ豫算外ノ支出及豫算超過ノ支出ヲ認定スル事

四　決算報告ヲ認定スル事

五　法律勅令ニ定ムルモノヲ除クノ外使用料、手數料町村稅及夫役現品ノ賦課徵收ノ法ヲ定ムル事

六　町村有不動產ノ賣買交換讓受讓渡並質入書入ヲ爲ス事

七　基本財產ノ處分ニ關スル事

八　歲入出豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除クノ外新ニ義務ノ負擔ヲ爲シ及權利ノ棄却ヲ爲ス事

九　町村有ノ財產及營造物ノ管理方法ヲ定ムル事

十　町村吏員ノ身元保證金ヲ徵シ並其金額ヲ定ムル事

十一　町村ニ係ル訴訟及和解ニ關スル事

第三十四條　町村會ハ法律勅令ニ依リ其職權ニ屬スル町村吏員ノ選擧ヲ行フ可シ

第三十五條　町村會ハ町村ノ事務ニ關スル書類及計算書ヲ檢閱シ町村長ノ報告ヲ請求シテ事務ノ管理、議決ノ施行並收入支出ノ正否ヲ監查スルノ職權ヲ有ス

町村會ハ町村ノ公益ニ關スル事件ニ付意見書ヲ監督官廳ニ差出スコトヲ得

第三十六條　町村會ハ官廳ノ諮問アルトキハ意見ヲ陳述ス可シ

第三十七條　町村住民及公民タル權利ノ有無、選擧權及被選擧權ノ有無、選擧人名簿ノ正否並其等級ノ當否、代理ヲ以テ執行スル選擧權（第十二條第二項）及町村會議員選擧ノ效力（第二十九條）ニ關スル訴願ハ町村會之ヲ裁決ス

前項ノ訴願中町村住民及公民タル權利ノ有無並選擧權ノ有無ニ關スルモノハ町村會ノ設ケナキ町村ニ於テハ町村長之ヲ裁決ス

町村會若クハ町村長ノ裁決ニ不服アル者ハ郡參事會ニ訴願シ其郡參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

本條ノ事件ニ付テハ町村長ヨリモ亦訴願及訴訟ヲ爲スコトヲ得

本條ノ訴願及訴訟ノ爲メニ其執行ヲ停止スルコトヲ得ス但判決確定スルニ非サレハ更ニ選擧ヲ爲スコトヲ得ス

第三十八條　凡議員タル者ハ選擧人ノ指示若クハ委囑ヲ受ク可ラサルモノトス

第三十九條　町村會ハ町村長ヲ以テ其議長トス若シ町村長故障アルトキハ其代理タル町村助役ヲ以テ之ニ充ツ

第四十條　會議ノ事件議長及其父母兄弟若クハ妻子ノ一身上ニ關スル事アルトキハ議長ニ故障アルモノトシテ其代理者之ニ代ル可シ

議長代理者其ニ故障アルトキハ町村會ハ年長ノ議員ヲ以テ議長ト爲ス可シ

第四十一條　町村長及助役ハ會議ニ列席シテ議事ヲ辯明スルコトヲ得

第四十二條　町村會ハ會議ノ必要アル毎ニ議長之ヲ招集ス若シ議員四分ノ一以上ノ請求アルトキハ必ス之ヲ招集ス可シ其招集並會議ノ事件ヲ告知スルハ急施ヲ要スル場合ヲ除クノ外少クモ開會ノ三日前タル可シ但町村會ノ議決ヲ以テ豫メ會議日ヲ定ムルモ妨ケナシ

第四十三條　町村會ハ議員半數以上出席スルニ非サレハ議決スルコトヲ得ス但同一ノ議事ニ付招集再回ニ至ルモ議員猶半數ニ滿タサルトキハ此限ニ在ラス（二十八年法律第七號ヲ以テ本條中改正）

第四十四條　町村會ノ議決ハ可否ノ多數ニ依リ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ再議議決ス可シ若シ猶同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第四十五條　議員ハ自己及其父母兄弟若クハ妻子ノ一身上ニ關スル事件ニ付テハ町村會ノ議決ニ加ハルコトヲ得ス

議員ノ數此除名ノ爲メニ減少シテ會議ヲ開クノ定數ニ滿タサルトキハ郡參事會町村會ニ代テ議決ス

第四十六條　町村會ニ於テ町村吏員ノ選擧ヲ行フトキハ其一名毎ニ匿名投票ヲ以テ之ヲ爲シ有效投票ノ過半數ヲ得ル者ヲ以テ當選トス若シ過半數ヲ得ル者ナキトキハ最多數ヲ得ル者二名ヲ取リ之ニ就テ更ニ投票セシム

若シ最多數ヲ得ル者三名以上同數ナルトキハ議長自ラ抽籤シテ其二名ヲ取リ更ニ投票セシム此再投票ニ於テモ猶過半數ヲ得ル者ナキトキハ抽籤ヲ以テ當選ヲ定ム

其他ハ第二十二條、第二十三條、第二十四條第一項ヲ適用ス

前項ノ選擧ニハ町村會ノ議決ヲ以テ指名推選ノ法ヲ用フルコトヲ得

第四十七條　町村會ノ會議ハ公開ス但議長ノ意見ヲ以テ傍聽ヲ禁スルコトヲ得

第四十八條　議長ハ各議員ニ事務ヲ分課シ會議及選擧ノ事ヲ總理シ開會閉會並延會ヲ命シ議場ノ秩序ヲ保持ス

若シ傍聽者ノ公然贊成又ハ擯斥ヲ表シ又ハ喧擾ヲ起ス者アルトキハ議長ハ之ヲ議場外ニ退出セシムルコトヲ得

第四十九條　町村會ハ書記ヲシテ議事錄ヲ製シテ其議決及選擧ノ顚末並出席議員ノ氏名ヲ記錄セシム可シ議事錄ハ會議ノ末之ヲ朗讀シ及議長議員二名以上之ニ署名ス可シ

町村會ノ書記ハ議長之ヲ選任ス

第五十條　町村會ハ其會議細則ヲ設ク可シ其細則ニ違背シタル議員ニ科ス可キ過怠金二圓以下ノ罰則ヲ設クルコトヲ得

第五十一條　第三十二條ヨリ第四十九條ニ至ルノ規定ハ之ヲ町村總會ニ適用ス

第三章　町村行政

第一款　町村吏員ノ組織選任

第五十二條　町村ニ町村長及町村助役各一名ヲ置ク可シ但町村條例ヲ以テ助役ノ定員ヲ增加スルコトヲ得

第五十三條　町村長及助役ハ町村會ニ於テ其町村公民中年齡滿三十歲以上ニシテ選擧權ヲ有スル者ヨリ之ヲ選擧ス

町村長及助役ハ第十五條第二項ニ揭載スル職ヲ兼ヌルコトヲ得ス

父子兄弟タルノ緣故アル者ハ同時ニ町村長及助役ノ職ニ在ルコトヲ得ス若シ其緣故アル者助役ノ選擧ニ當ルトキハ其當選ヲ取消シ其町村長ノ選擧ニ當リテ認可ヲ得ルトキハ其緣故アル助役ハ其職ヲ退ク可シ

第五十四條　町村長及助役ノ任期ハ四年トス

町村長及助役ノ選擧ハ第四十六條ニ依テ行フ可シ但投票同數ナルトキハ抽籤ノ法ニ依ラス郡參事會之ヲ決ス可シ

第五十五條　町村長及助役ハ名譽職トス但第五十六條ノ

有給町村長及有給助役ハ此限ニ在ラス

町村長ハ職務取扱ノ爲メニ要スル費費辨償ノ外勤務ニ相當スル報酬ヲ受クルコトヲ得助役ニシテ行政事務ノ一部ヲ分掌スル場合（第七十條第二項）ニ於テモ亦同シ

第五十六條　町村ノ情況ニ依リ町村條例ノ規定ヲ以テ町村長ニ給料ヲ給スルコトヲ得又大ナル町村ニ於テハ町村條例ノ規定ヲ以テ助役一名ヲ有給吏員ト爲スコトヲ得

有給町村長有給助役ハ其町村公民タル者ニ限ラス但當選ニ應シ認可ヲ得ルトキハ其公民タルノ權ヲ得

第五十七條　有給町村長及有給助役ハ三箇月前ニ申立ツルトキハ隨時退職ヲ求ムルコトヲ得此場合ニ於テハ退隱料ヲ受クルノ權ヲ失フモノトス

第五十八條　有給町村長及有給助役ハ他ノ有給ノ職務ヲ兼任シ又ハ株式會社ノ社長及重役トナルコトヲ得ス其他ノ營業ハ郡長ノ認許ヲ得ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第五十九條　町村長及助役ノ選擧ハ府縣知事ノ認可ヲ受ク可シ

第六十條　府縣知事前條ノ認可ヲ與ヘサルトキハ府縣參事會同意セサルモ猶府縣知事ニ於テ認可ス可カラストヽ爲ストキハ自己ノ責任ヲ以テ之ニ認可ヲ與ヘサルコトヲ得

府縣知事ノ不認可ニ對シ町村長又ハ町村會ニ於テ不服アルトキハ內務大臣ニ具申シテ認可ヲ請フコトヲ得

第六十一條　町村長及助役ノ選擧其認可ヲ得サルトキハ再選擧ヲ爲ス可シ

再選擧ニシテ猶其認可ヲ得サルトキハ追テ選擧ヲ行ヒ認可ヲ得ルニ至ルノ間認可ノ權アル監督官廳ハ臨時ニ代理者ヲ選任シ又ハ町村費ヲ以テ官吏ヲ派遣シ町村長及助役ノ職務ヲ管掌セシム可シ

第六十二條　町村ニ收入役一名ヲ置ク收入役ハ町村長ノ推薦ニ依リ町村會之ヲ選任ス

收入役ハ有給吏員ト爲シ其任期ハ四年トス

收入役ハ町村長及助役ヲ兼ヌルコトヲ得ス其他第五十六條第二項、第五十七條及第七十六條ヲ適用ス

收入役ノ選任ハ郡長ノ認可ヲ受ク可シ若シ認可ヲ與ヘサルトキハ郡參事會ノ意見ヲ聞クコトヲ要ス郡參事會之ニ同意セサルモ猶郡長ニ於テ認可ス可カラストヽ爲ストキハ自己ノ責任ヲ以テ之ニ認可ヲ與ヘサルコトヲ得其他第六十一條ヲ適用ス

郡長ノ不認可ニ對シ町村長又ハ町村會ニ於テ不服アルトキハ府縣知事ニ具申シテ認可ヲ請フコトヲ得

收入支出ノ寡少ナル町村ニ於テハ郡長ノ許可ヲ得テ町村長又ハ助役ヲシテ收入役ノ事務ヲ兼掌セシムルコトヲ得

第六十三條　町村ニ書記其他必要ノ附屬員並使丁ヲ置キ相當ノ給料ヲ給ス其人員ハ町村會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム但町村長ニ相當ノ書記料ヲ給與シテ書記ノ事務ヲ委任スルコトヲ得

町村附屬員ハ町村長ノ推薦ニ依リ町村會之ヲ選任シ使丁ハ町村長之ヲ任用ス

第六十四條　町村ノ區域廣濶ナルトキ又ハ人口稠密ナルトキハ處務便宜ノ爲メ町村會ノ議決ニ依リ之ヲ數區ニ分チ每區區長及其代理者各一名ヲ置クコトヲ得區長及其代理者ハ名譽職トス

區長及其代理者ハ町村會ニ於テ其町村ノ公民中選擧權ヲ有スル者ヨリ之ヲ選擧ス區會（第百十四條）ヲ設クル區ニ於テハ其區會ニ於テ之ヲ選擧ス

第六十五條　町村ハ町村會ノ議決ニ依リ臨時又ハ常設ノ委員ヲ置クコトヲ得其委員ハ名譽職トス

委員ハ町村會ニ於テ町村會議員又ハ町村公民中選擧權ヲ有スル者ヨリ選擧シ町村長又ハ其委任ヲ受ケタル助役ヲ以テ委員長トス

常設委員ノ組織ニ關シテハ町村條例ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第六十六條　區長及委員ニハ職務取扱ノ爲メニ要スル費費辨償ノ外町村會ノ議決ニ依リ勤務ニ相當スル報酬ヲ給スルコトヲ得

第六十七條　町村吏員及使丁ハ任期滿限ノ後再選セラルルコトヲ得

町村吏員及使丁ハ別段ノ規定又ハ規約アルモノヲ除クノ外隨時解職スルコトヲ得

第二款　町村吏員ノ職務權限

第六十八條　町村長ハ其町村ヲ統轄シ其行政事務ヲ擔任ス

町村長ノ擔任スル事務ノ概目左ノ如シ

一　町村會ノ議事ヲ準備シ及其議決ヲ執行スル事若シ町村會ノ議決其權限ヲ越エ法律命令ニ背キ又ハ公衆ノ利益ヲ害スト認ムルトキハ町村長ハ自己ノ意見ニ依リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ依リ理由ヲ示シテ議決ノ執行ヲ停止シ之ヲ再議セシメ猶其議決ヲ更メサルトキハ郡參事會ノ裁決ヲ請フ可シ其權限ヲ越エ又ハ法ヲ有スル者ヨリ選擧シ町村長又ハ其委任ヲ受ケタル助役ヲ以テ委員長トス

常設委員ノ組織ニ關シテハ町村條例ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第六十六條　區長及委員ニハ職務取扱ノ爲メニ要スル費費辨償ノ外町村會ノ議決ニ依リ勤務ニ相當スル報酬ヲ給スルコトヲ得

第六十七條　町村吏員ハ任期滿限ノ後再選セラルルコトヲ得

町村吏員及使丁ハ別段ノ規定又ハ規約アルモノヲ除クノ外隨時解職スルコトヲ得

第二款　町村吏員ノ職務權限

第六十八條　町村長ハ其町村ヲ統轄シ其行政事務ヲ擔任ス

町村長ノ擔任スル事務ノ概目左ノ如シ

一　町村會ノ議事ヲ準備シ及其議決ヲ執行スル事若シ町村會ノ議決其權限ヲ越エ法律命令ニ背キ又ハ公衆ノ利益ヲ害スト認ムルトキハ町村長ハ自己ノ意見ニ依リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ依リ理由ヲ示シテ議決ノ執行ヲ停止シ之ヲ再議セシメ猶其議決ヲ更メサルトキハ郡參事會ノ裁決ヲ請フ可シ其權限ヲ越エ又ハ法

律勅令ニ背クニ依テ議決ノ執行ヲ停止シタル場合ニ於テ府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

二　町村ノ設置ニ係ル營造物ヲ管理スル事若シ特ニ之カ管理者アルトキハ其事務ヲ監督スル事

三　町村ノ歳入ヲ管理シ歳入出豫算表其他町村會ノ議決ニ依テ定マリタル收入支出ヲ命令シ會計及出納ヲ監視スル事

四　町村ノ權利ヲ保護シ町村有ノ財産ヲ管理スル事

五　町村吏員及使丁ヲ監督シ懲戒處分ヲ行フ事其懲戒處分ハ譴責及五圓以下ノ過怠金トス

六　町村ノ諸證書及公文書類ヲ保管スル事

七　外部ニ對シテ町村ヲ代表シ町村ノ名義ヲ以テ其訴訟並和解ニ關シ又ハ他聽若クハ人民ト商議スル事

八　法律勅令ニ依リ又ハ町村會ノ議決ニ從テ使用料、手數料、町村税及夫役現品ヲ賦課徴收スル事

九　其他法律命令又ハ上司ノ指令ニ依テ町村長ニ委任シタル事務ヲ處理スル事

第六十九條　町村長ハ法律命令ニ從ヒ左ノ事務ヲ管掌ス

一　司法警察補助官タルノ職務及法律命令ニ依テ其管理ニ屬スル地方警察ノ事務但別ニ官署ヲ設ケテ地方警察事務ヲ管掌セシムルトキハ此限ニ在ラス

二　浦役場ノ事務

三　國ノ行政並府縣郡ノ行政ニシテ町村ニ屬スル事務但別ニ吏員ノ設ケアルトキハ此限ニ在ラズ

右三項中ノ事務ハ監督官廳ノ許可ヲ得テ之ヲ助役ニ分掌セシムルコトヲ得

本條ニ掲載スル事務ヲ執行スルカ爲メニ要スル費用ハ町村ノ負擔トス

第七十條　町村助役ハ町村長ノ事務ヲ補助ス

町村長ハ町村會ノ同意ヲ得テ助役ヲシテ町村行政事務ノ一部ヲ分掌セシムルコトヲ得

助役ハ町村長故障アルトキハ之ヲ代理ス助役數名アルトキハ上席者之ヲ代理ス可シ

第七十一條　町村收入役ハ町村ノ收入ヲ受領シ其費用ノ支拂ヲ爲シ其他會計事務ヲ掌ル

第七十二條　書記ハ町村長ニ屬シ庶務ヲ分掌ス

第七十三條　區長及其代理者ハ町村長ノ機關トナリ其指揮命令ヲ受ケテ區内ニ關スル町村長ノ事務ヲ補助執行スルモノトス

第七十四條　委員（第六十五條）ハ町村行政事務ノ一部ヲ分掌シ又ハ營造物ヲ管理シ若クハ監督シ又ハ一時ノ委託ヲ以テ事務ヲ處辨スルモノトス

委員長ハ委員ノ議決ニ加ハルノ權ヲ有ス助役ヲ以テ委員長ト爲ス場合ニ於テモ町村長ハ隨時委員會ニ出席シテ其委員長ト爲リ並其議決ニ加ハルノ權ヲ有ス

常設委員ノ職務權限ニ關シテハ町村條例ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第三款　給料及給與

第七十五條　名譽職員ハ此法律中別ニ規定アル者ヲ除クノ外職務取扱ノ爲ニ要スル實費ノ辨償ヲ受クル事ヲ得實費辨償額、報酬額及書記料ノ額（第六十三條第一項）ハ町村會之ヲ議決ス

第七十六條　有給町村長有給助役其他有給吏員及使丁ノ給料額ハ町村會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

町村會ノ議決ヲ以テ町村長及助役ノ給料額ヲ定ムルトキハ郡長ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス郡長ニ於テ之ヲ許可ス可ラスト認ムルトキハ郡參事會ノ議決ニ付シテ之ヲ確定ス

第七十七條　町村條例ノ規定ヲ以テ有給吏員ノ退隱料ヲ設クルコトヲ得

第七十八條　有給吏員ノ給料、退隱料其他第七十五條ニ定ムル給與ニ關シテ異議アルトキハ關係者ノ申立ニ依リ郡參事會之ヲ裁決ス其郡參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第七十九條　退隱料ヲ受クル者官職又ハ府縣郡市町村及公共組合ノ職務ニ就キ給料ヲ受クルトキハ其間之ヲ停止シ又ハ更ニ退隱料ヲ受クルノ權ヲ得ルトキ其額舊退隱料ト同額以上ナルトキハ舊退隱料ハ之ヲ廢止ス

第八十條　給料、退隱料、報酬及辨償等ハ總テ町村ノ負擔トス

第四章　町村有財産ノ管理

第一款　町村有財産及町村税

第八十一條　町村ハ其不動産、積立金穀等ヲ以テ基本財産ト爲シ之ヲ維持スルノ義務アリ

臨時ニ收入シタル金穀ハ基本財産ニ加入ス可シ但寄附金等寄附者其使用ノ目的ヲ定ムルモノハ此限ニ在ラス

第八十二條　凡町村有財産ハ全町村ノ爲メニ之ヲ管理シ及其用スルモノトス但特ニ民法上ノ權利ヲ有スル者アルトキハ此限ニ在ラス

第八十三條　舊來ノ慣行ニ依リ町村住民中特ニ其町村有ノ土地物件ヲ使用スル權利ヲ有スル者アル時ハ町村會ノ議決ヲ經ルニ非ザレバ其舊慣ヲ改ムルコトヲ得ス

第八十四條　町村住民中特ニ其町村有ノ土地物件ヲ使用スル權利ヲ得ントスル者アルトキハ町村條例ノ規定ニ依リ使用料若クハ一時ノ加入金ヲ徴收シ又ハ使用料加入金ヲ共ニ徴收シテ之ヲ許可スルコトヲ得但特ニ民法上使用ノ權利ヲ有スル者ハ此限ニ在ラス

第八十五條　使用權ヲ有スル者（第八十三條、第八十四條）ハ使用ノ多寡ニ準シテ其土地物件ニ係ル必要ナル費用ヲ分擔ス可キモノトス

第八十六條　町村會ハ町村ノ爲メニ必要ナル場合ニ於テハ使用權（第八十三條、第八十四條）ヲ取上ケ又ハ制限スルコトヲ得但特ニ民法上使用ノ權利ヲ有スル者ハ此限ニ在ラス

第八十七條　町村有財產ノ賣却貸與又ハ建築工事及物品調達ノ請負ハ公ケノ入札ニ付ス可シ但臨時急施ヲ要スルトキ及入札ノ價額其費用ニ比シテ得失相償ハサルトキ又ハ町村會ノ認許ヲ得ルトキハ此限ニ在ラズ

第八十八條　町村ハ其必要ナル支出及從前法律命令ニ依テ賦課セラレ又ハ將來法律勅令ニ依テ賦課セラルル支出ヲ負擔スルノ義務アリ

町村ハ其財產ヨリ生スル收入及使用料、手數料（第八十九條）並科料、過怠金其他法律勅令ニ依リ町村ニ屬スル收入ヲ以テ前項ノ支出ニ充テ猶不足アルトキハ町村稅（第九十條）及夫役現品（第百一條）ヲ賦課徴收スルコトヲ得

第八十九條　町村ハ其所有物及營造物ノ使用ニ付又ハ特ニ數個人ノ爲メニスル事業ニ付使用料又ハ手數料ヲ徴收スルコトヲ得

第九十條　町村稅トシテ賦課スル事ヲ得可キ目左ノ如シ

一　國稅府縣稅ノ附加稅

二　直接又ハ間接ノ特別稅

附加稅ハ直接ノ國稅又ハ府縣稅ニ附加シ均一ノ稅率ヲ以テ町村ノ全部ヨリ徴收スルヲ常例トス特別稅ハ附加稅ノ外別ニ町村限リ稅目ヲ起シテ課稅スルトヲ要スルトキ賦課徴收スルモノトス

第九十一條　此法律ニ規定セル條項ヲ除クノ外使用料、手數料（第八十九條）特別稅（第九十條第一項第二）及從前ノ町村費ニ關スル細則ハ町村條例ヲ以テ之ヲ規定ス可シ其條例ニハ科料一圓九十五錢以下ノ罰則ヲ設クルコトヲ得

科料ニ處シ及ヒ之ヲ徴收スルハ町村長之ヲ掌ル其ノ處分ニ不服アルモノハ令狀交付後十四日以內ニ司法裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第九十二條　三箇月以上町村內ニ滯在スル者ハ其町村稅ヲ納ムルモノトス但其ノ課稅ハ滯在ノ初ニ遡リ徴收ス可シ

第九十三條　町村內ニ住居ヲ構ヘス又ハ三箇月以上滯在スルコトナシト雖モ町村內ニ土地家屋ヲ所有シ又ハ營業ヲ爲ス者（店舗ヲ定メザル行商ヲ除ク）ハ其土地家屋營業若クハ其所得ニ對シテ賦課スル町村稅ヲ納ムルモノトス其法人タルトキモ亦同シ但郵便電信及官設鐵道ノ業ハ此限ニ在ラス

第九十四條　所得稅ニ附加稅ヲ賦課シ及町村ニ於テ特別ニ所得稅ヲ賦課セントスルトキハ納稅者ノ町村外ニ於ケル所有ノ土地家屋又ハ營業（店舗ヲ定メサル行商ヲ除ク）ヨリ收入スル所得ハ之ヲ控除ス可キモノトス

第九十五條　數市町村ニ住居ヲ構ヘ又ハ滯在スル者ニ前條ノ町村稅ヲ賦課スルトキハ其所得ヲ市町村ニ平分シ其一部分ニノミ課稅ス可シ但土地家屋又ハ營業ヨリ收入スル所得ハ此限ニ在ラス

第九十六條　所得稅法第三條ニ揭クル所得ハ町村稅ヲ免除ス

第九十七條　左ニ揭クル物件ハ町村稅ヲ免除ス

一　政府、府縣郡市町村及公共組合ニ屬シ直接ノ公用ニ供スル土地、營造物及家屋

二　社寺及官立公立ノ學校病院其他學藝、美術及慈善ノ用ニ供スル土地、營造物及家屋

三　官有ノ山林又ハ荒蕪地但官有山林又ハ荒蕪地ノ利益ニ係ル事業ヲ起シ內務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ得テ其費用ヲ徴收スルハ此限ニ在ラス

新開地及開墾地ハ町村條例ニ依リ年月ヲ限リ免稅スルコトヲ得

第九十八條　前二條ノ外町村稅ヲ免除ス可キモノハ別段ノ法律勅令ニ定ムル所ニ從フ皇族ニ係ル町村稅ノ賦課ハ追テ法律勅令ヲ以テ定ムル迄現今ノ例ニ依ル

第九十九條　數個人ニ於テ專ラ使用スル所ノ營造物アルトキハ其修築及保存ノ費用ハ之ヲ其關係者ニ賦課ス可シ

町村內ノ一部ニ於テ專ラ使用スル營造物アルトキハ其部內ニ住居シ若クハ滯在シ又ハ土地家屋ヲ所有シ營業（店舗ヲ定メサル行商ヲ除ク）ヲ爲ス者ニ於テ其修築及保存ノ費用ヲ負擔ス可シ但其一部ノ所有財產アルトキハ其收入ヲ以テ先ツ其費用ニ充ツ可シ

第百一條　（三十三年法律第四十七號ヲ以テ削除）

第百一條　町村公共ノ事業ヲ起シ又ハ公共ノ安寧ヲ維持スルカ爲メニ夫役及現品ヲ以テ納稅者ニ賦課スルコトヲ